芋川氏館跡（第４次）・（伝）願生寺跡

――飯綱町芋川田中公会堂建設・中山間地域等直接支払い事業ため池造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

２０１４年３月

長野県上水内郡飯綱町教育委員会

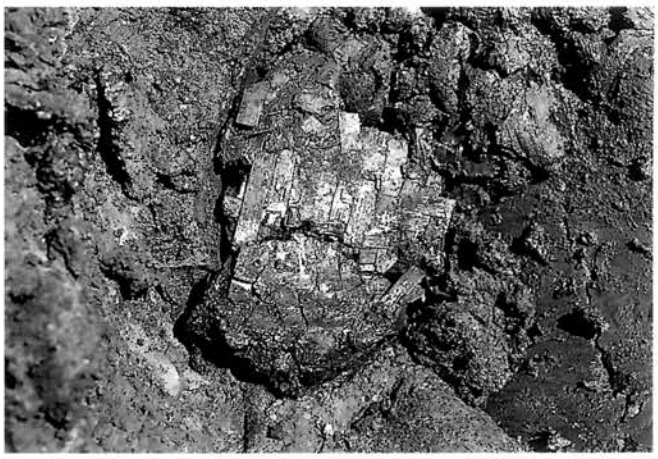
芋川氏館跡柵列・東堀から主郭・町部落と鼻見城山を望む

1. 東堀 SD05・柵列 SA05

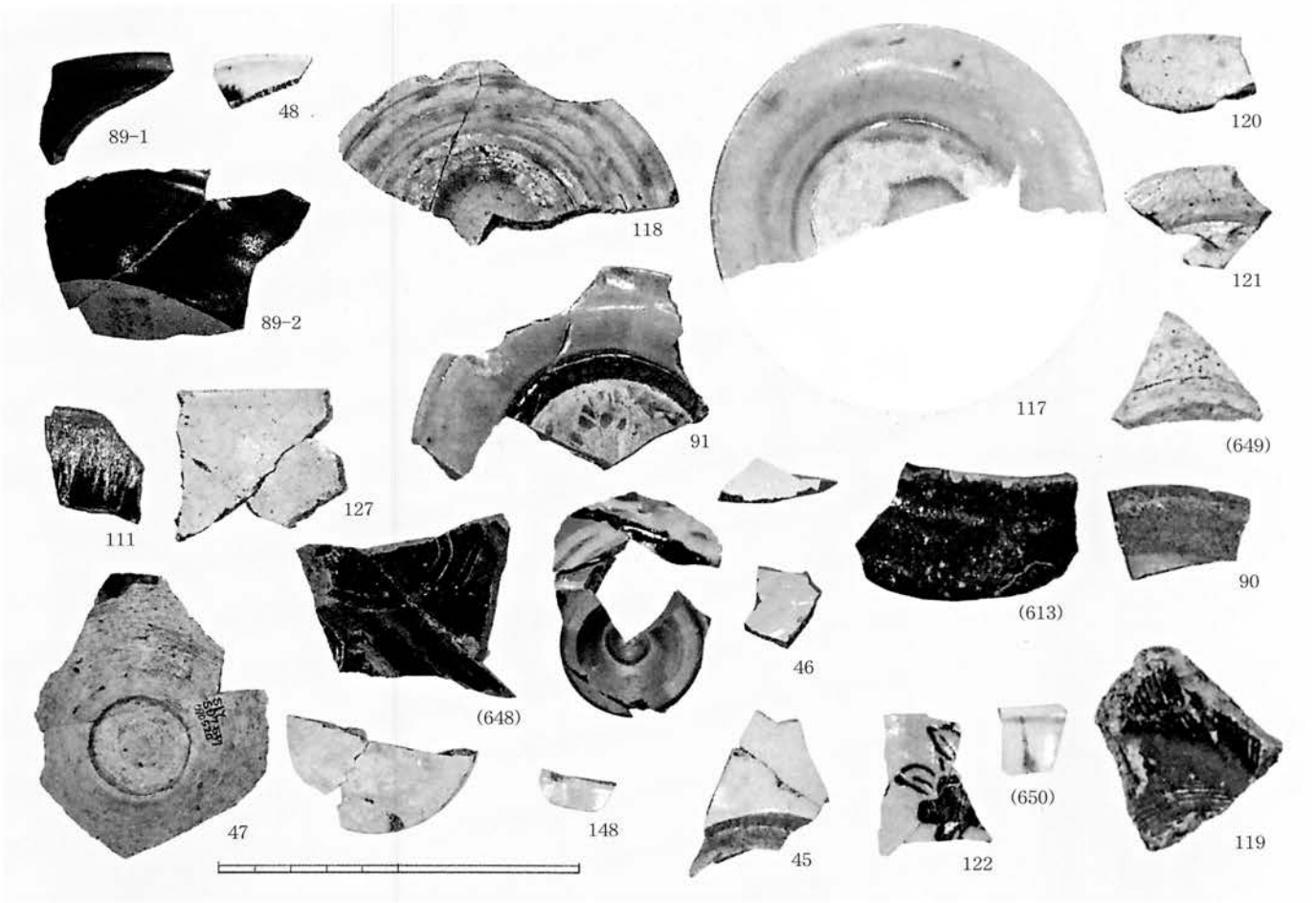
2. 再建福正寺礎石・整地層と下部層

3. 東堀埋土土層（4・14・15・17・18・19 層）

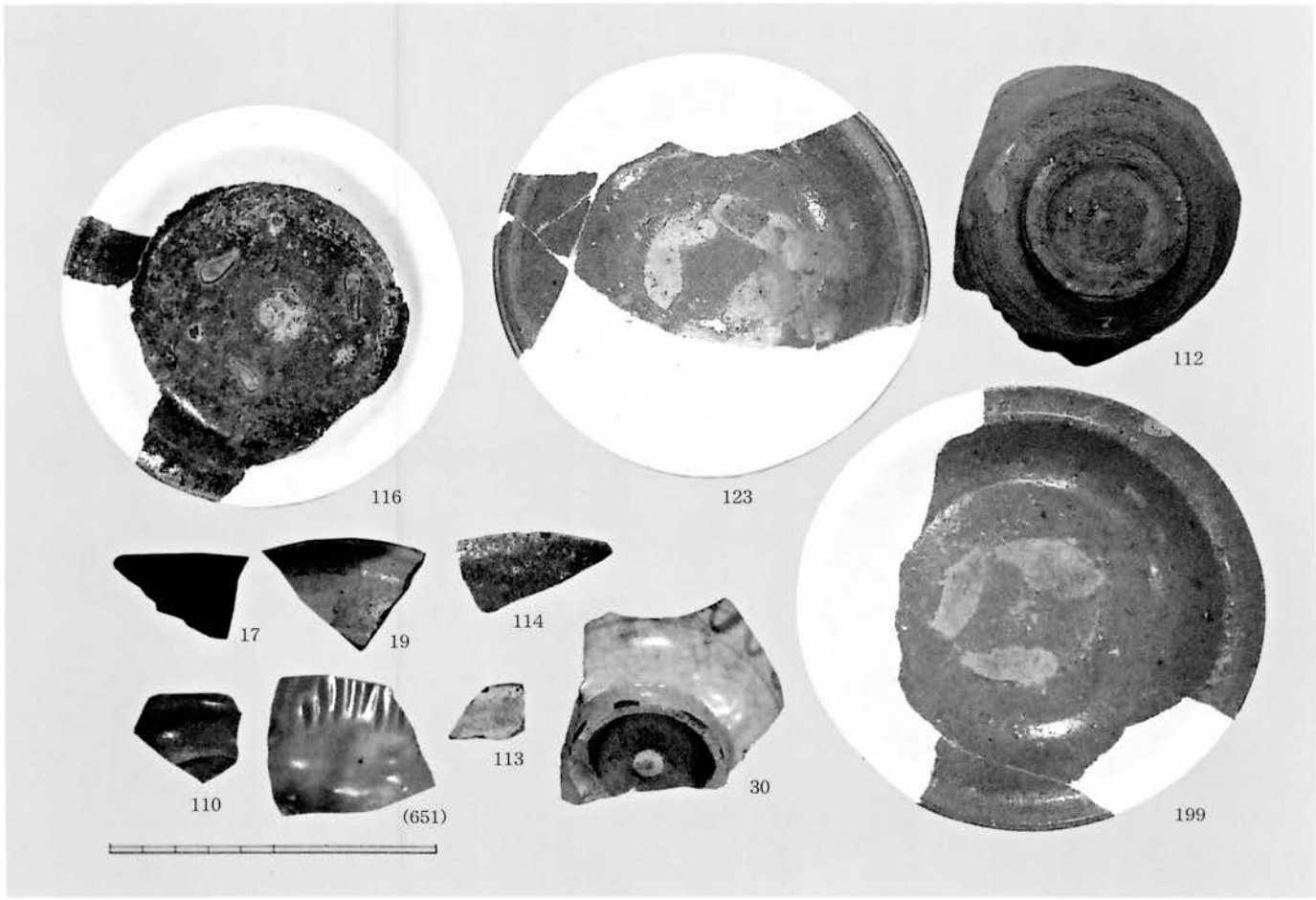
4. 漆器出土状況（4 層）



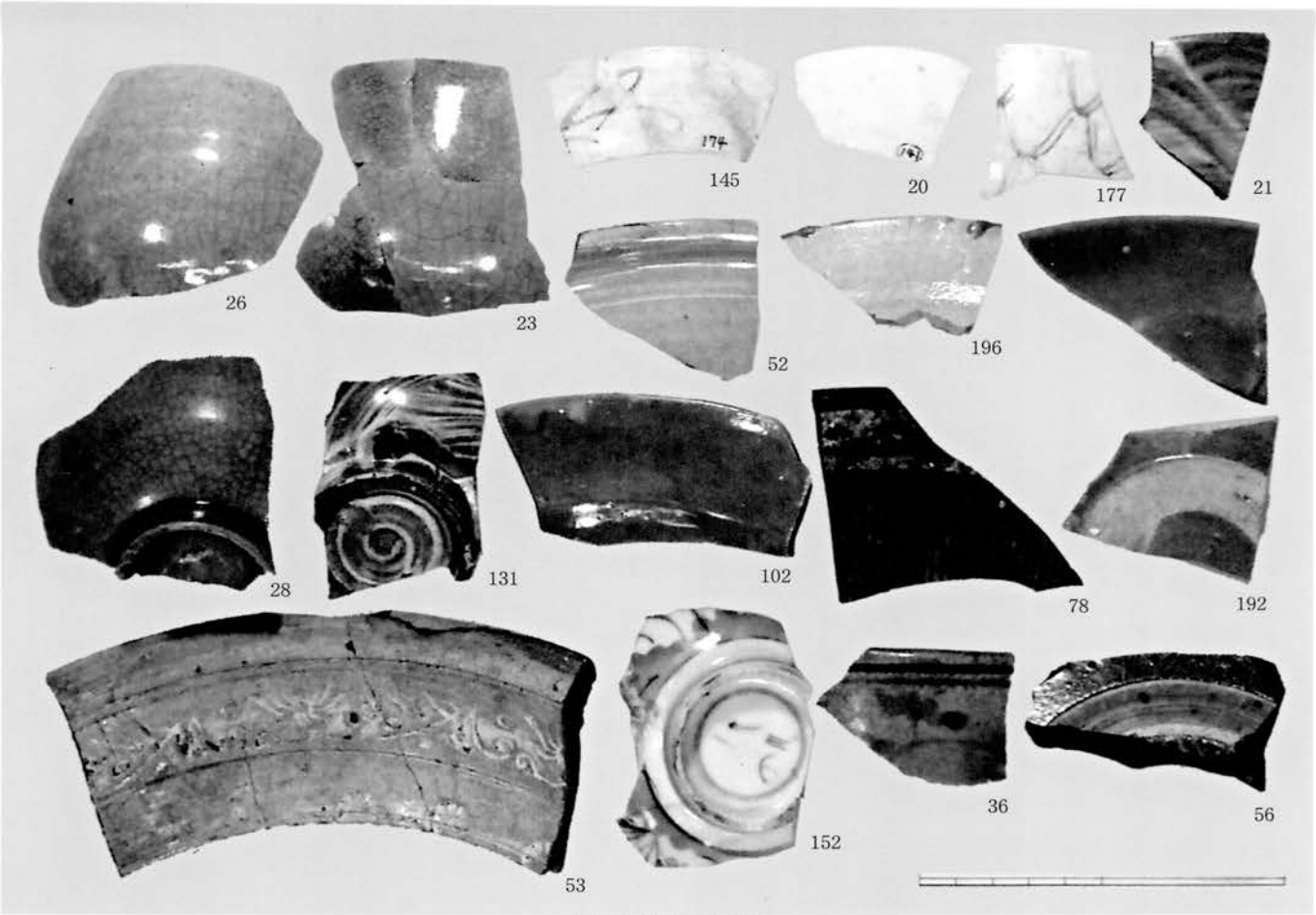
5. 籠（17 層）



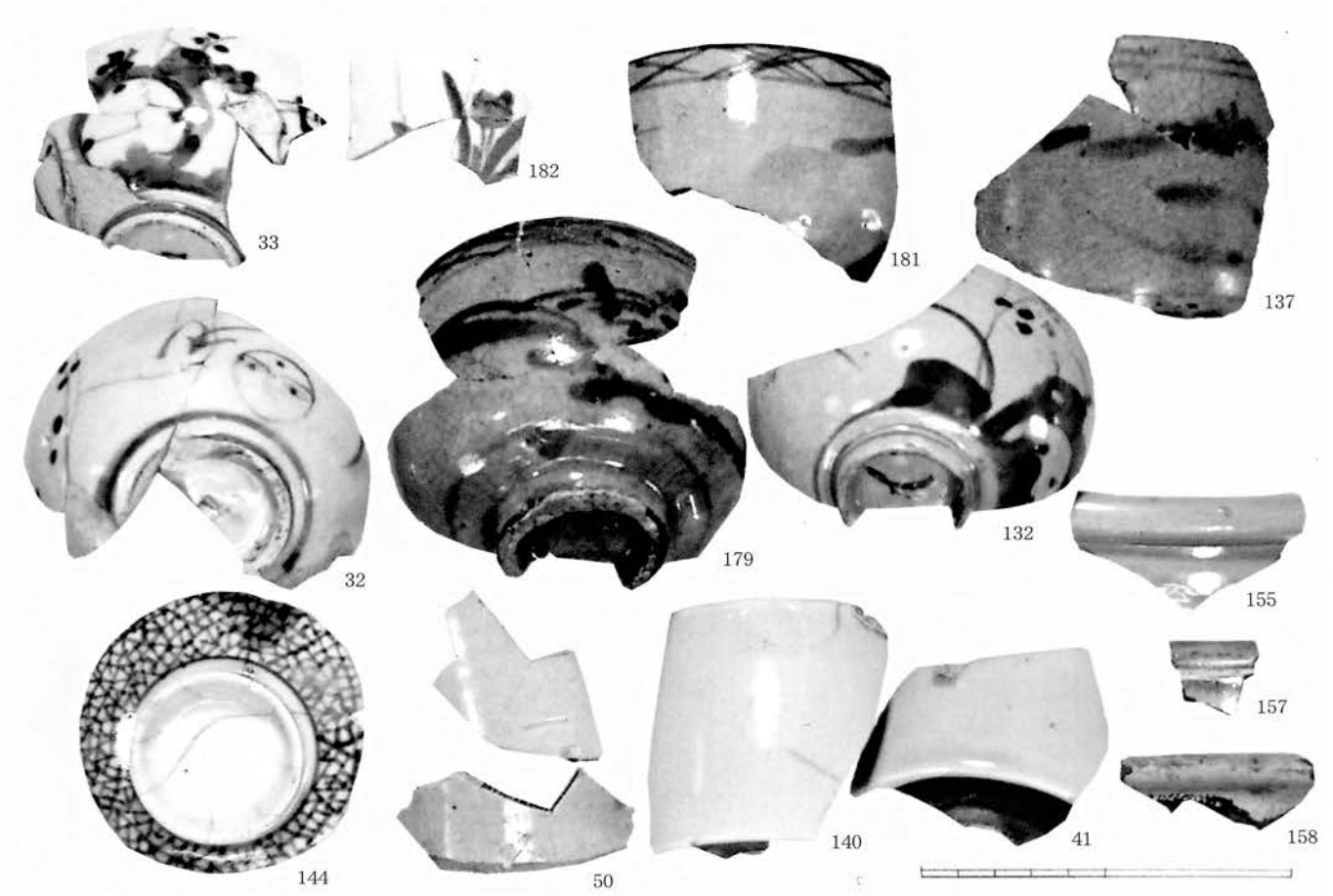
1. 輸入陶磁器、瀬戸美濃・越中瀬戸・京・萩



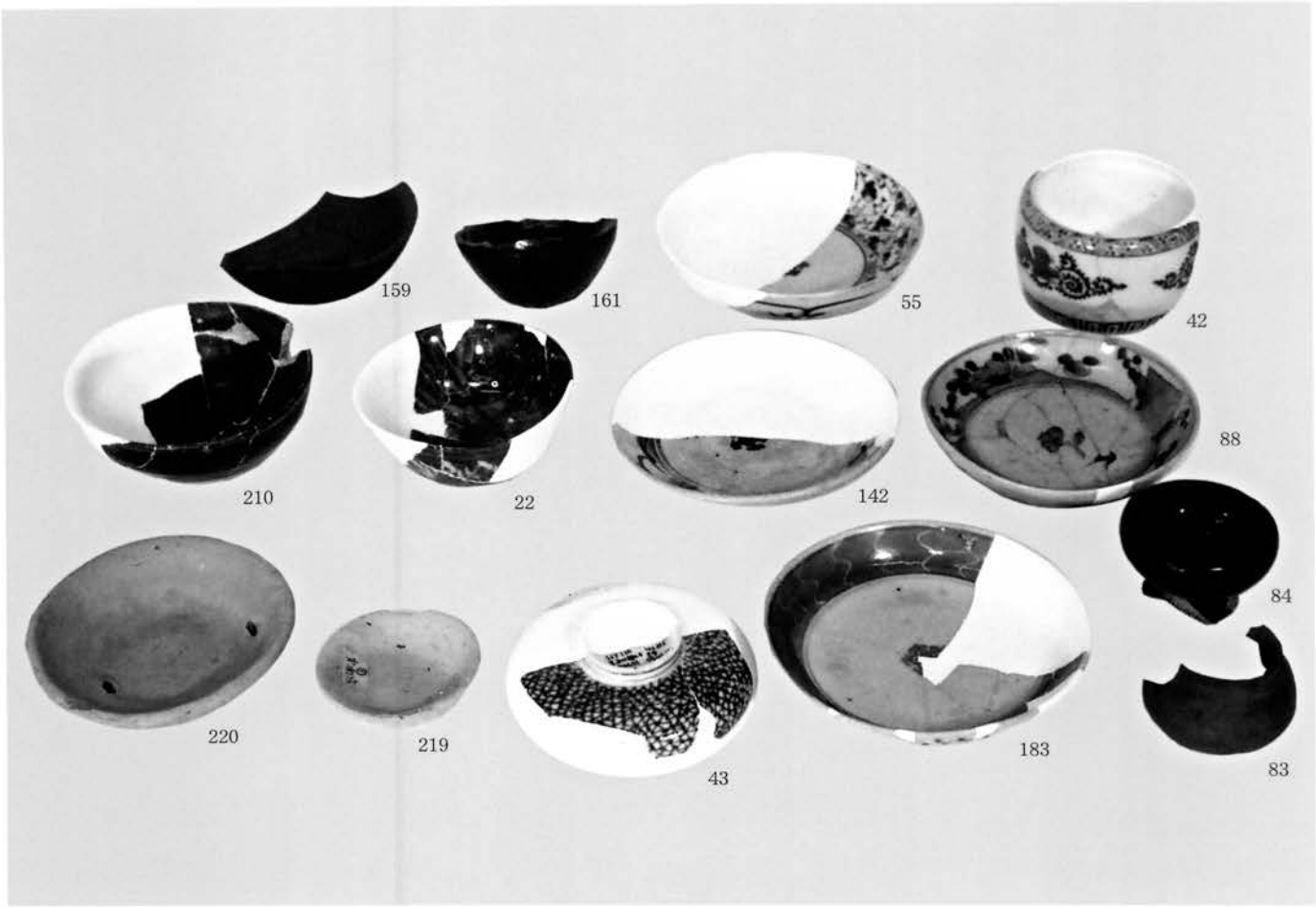
2. 肥前陶磁（Ⅰ～Ⅱ期）



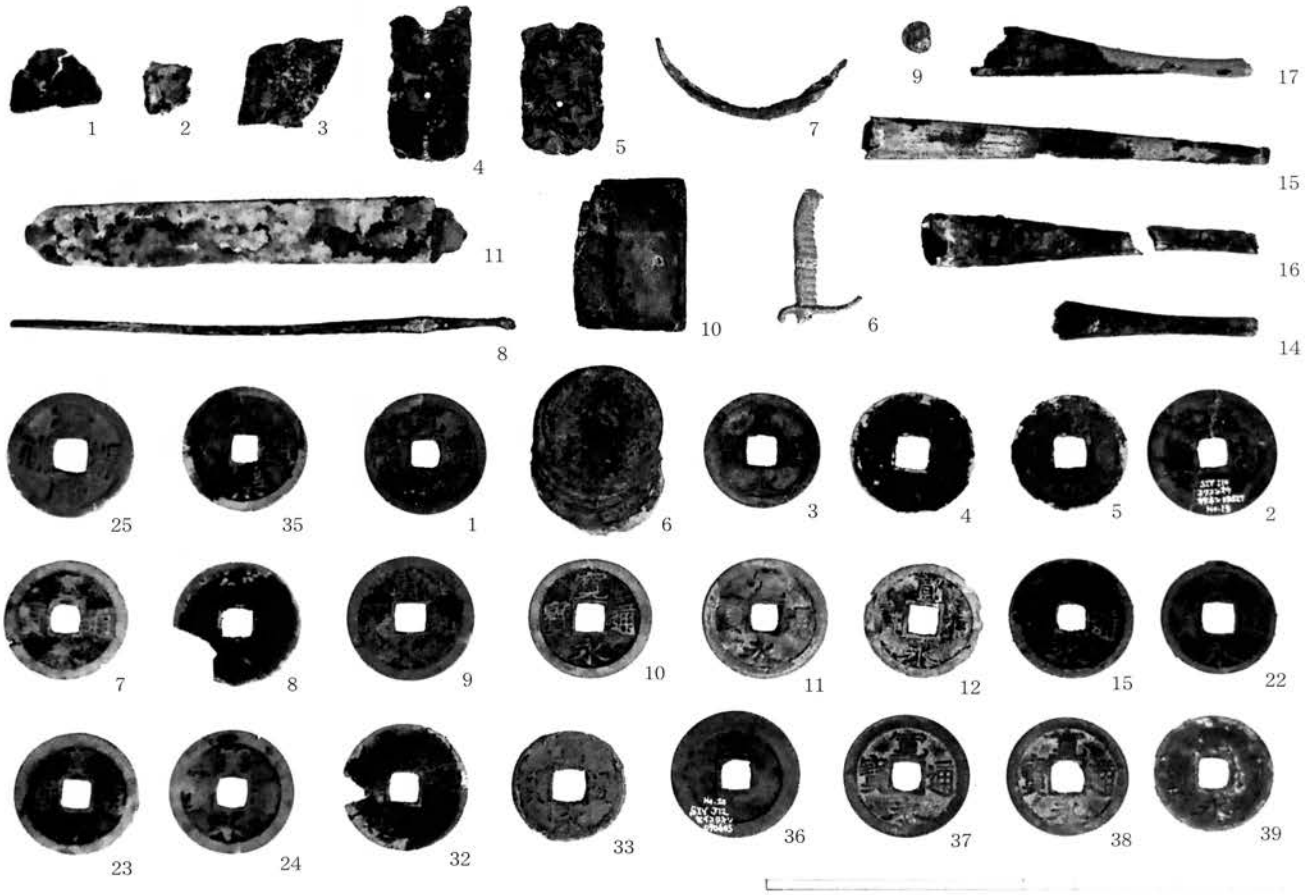
1. 肥前陶磁（Ⅲ～Ⅳ期）



2. 肥前陶磁（Ⅳ～Ⅴ期）・赤塩焼



1. 土師器小皿（カワラケ）・肥前陶磁・瀬戸美濃・地方窯



2. 金銅製品・銅製品・鉛製品・銭貨

芋川氏館跡(第４次)・(伝)願生寺跡

――飯綱町芋川田中公会堂建設・中山間地域等直接支払い事業ため池造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

２０１４年３月

長野県上水内郡飯綱町教育委員会

序

本書は、長野県上水内郡飯綱町に所在する芋川氏館跡ならびに（伝）願生寺跡の緊急発掘調査報告書です。芋川氏館跡ならびに（伝）願生寺跡は表町遺跡とともに平成21年度に発掘調査されました。

芋川氏館跡は、古代以来の芋川荘に根を張り、中世から戦国時代まで活躍した芋川氏の根拠地といわれてきた場所です。地元では芋川氏について昔から、用水を開削し耕地を開いた豪族、社寺を創建し文化をもたらした豪族として語り継がれてきました。（伝）願生寺跡も同じく中世に隆盛した浄土真宗願生寺があった場所だという伝承の地です。また表町遺跡も芋川氏が活躍した中世の時代に、島津氏の居城矢筒城の城下町だったという伝説がありました。

これら３つの遺跡に共通しているのは、先人から伝わる歴史語りの内容に比べて、現在のそれぞれの場所に遺跡の証しが乏しいことでした。芋川氏にせよ、城下町にせよ、お寺にせよ、地上にはほとんど痕跡を残していないので、先人からの伝承を事実としてうけとめるには戸惑いもありました。

今回、考古学のメスがこれらの遺跡に入り、そこに確かな先人の生きた証しがあったことが明らかになりました。この成果は私たちの町の“来し方”を物語る何よりの宝になりました。先人の昔語りが史実を伝えるものだったかは、さらに今後の研究に委ねるとして、本書が広く活用され、私たちの“行く末”を考える良き糧になることを念願しています。

この報告書には芋川氏館跡と（伝）願生寺跡の調査成果が収録されています。１年間に３つの遺跡を立て続けに発掘するのは飯綱町で初めての経験で困難を伴いましたが、無事に発掘調査を終え報告書を発刊することができました。発掘や整理作業に従事された皆様をはじめ、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に御礼申し上げますとともに、格別なるご指導を賜りました笹澤浩先生に深く感謝を申し上げ発刊の言葉とします。

平成26年３月31日

飯綱町教育委員会
教育長　寺島　政次

芋川氏館跡（第４次）

例言

1．本書は飯綱町芋川田中公会堂建設に係る芋川氏館跡の第４次発掘調査報告書である。
2．使用した地図は国土地理院発行の25,000分の１（使用許可基準範囲内）、飯綱町全図2,500分の１をもととした。
3．発掘調査の測量は簡易遣り方実測法で実施した。なお、国家座標は世界測地系である（詳細「発掘調査の方法」）。
4．発掘調査及び報告書作成にあたって以下の諸機関等と諸氏に、業務委託または協力を得た（敬称略）。
・長野県立歴史館、長野県埋蔵文化財センター、長野市埋蔵文化財センター
・田中公会堂建設委員会（委員長渡辺千賀雄）、田中組（組長村上今朝男）、妙福寺（住職中殿秀靖）
・測量・基本杭設定　龍野土地家屋調査士事務所　　・空中写真撮影　㈲清水工務所
・写真の現像・焼付　ナカムラフォト（信濃町）
・中・近世陶磁器鑑定　市川隆之（長野県埋蔵文化財センター）田中暁穂（長野市埋蔵文化財センター）
・漆器取り上げ　白沢勝彦（長野県埋蔵文化財センター）
・石器・石製品の石材鑑定　中村由克（野尻湖ナウマンゾウ博物館）
・建造物　土本俊和（信州大学工学部）伊藤友久（長野県埋蔵文化財センター）
・樹種同定、種子鑑定　㈱パレオ・ラボ　　・木製品保存処理　㈱吉田生物研究所
・木製犂　田中寿子（松山記念館）
5．報告書作成に係る作業分担は下記のとおりである。
遺物実測　陶磁器－高山いず美・峯山真由美　土器－富岡鹿子　石器・石製品－原田勝美・高山・峯山　木製品－原田・富岡　金属器－高山　拓本－鈴木千秋　遺構図整理－原田・柳澤まち子　レイアウト・トレース－笹澤・柳澤　観察表－笹澤・原田・鈴木・柳澤・横山かよ子　写真撮影－笹澤　写真図版－笹澤・横山
6．本書の編集は笹澤がおこない横山・柳澤・鈴木が補助し、執筆は下記のとおりである。
原田：第１章　笹澤：第２～４章第１～第３節、第５章　佐々木由香：第４章第４節
7．遺跡の記録類ならびに出土遺物は飯綱町教育委員会が保管している。

凡例

1．遺跡名は「芋川氏館跡」とし、記号は「SIY」である。
2．遺構記号は以下のとおりである。遺構番号は第１～３次調査からの通し番号とした。
SA：柵列・土塁　SB：建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SF：炉床跡と類似遺構
SK：土坑　SX：廃棄土坑（集石）ならびに性格不明な遺構
3．遺構・遺物実測図・遺物写真の縮尺は概ね下記のとおりであるが、例外は図中のスケールによられたい。
また、遺構図の方位は真北、レベルＨは海抜である。
発掘図１：800、１：120、１：100　掘立柱建物・柵列・礎石建物・溝１：50　杭列１：80　井戸１：40
廃棄土坑１：20
遺物実測図　土器１：４　陶磁器・土師器皿１：３　瓦１：４　臼・五輪塔など１：６　石鉢・凹石など１：４　打製石斧・叩石・砥石・硯・石盤１：３　石筆２：３　銭貨・銅製品・煙管など２：３　釘など鉄製品１：２　鍛冶関連１：３　犂・鍬・柱など１：８　杭１：４、１：８　曲物など木製品１：４
4．土器・陶磁器実測図の断面は珠洲を含む須恵器は黒色、灰釉陶器・陶磁器・瓦質土器はアミ掛けとした。また遺物の表面に煤・炭化物・漆・鉄釉など塗彩・自然付着の場合と遺構における焼土（炉床）はアミ掛けとした。
5．石材の略称は下記のとおりである。
輝石安山岩 And1　角閃石輝石安山岩 And2　黒灰色輝石安山岩 And3　凝灰岩質砂岩 Sa　緑色凝灰岩 GT　凝灰岩質頁岩 TS　石英安山岩 Dac　黒色粘板岩 Sl　頁岩 Sh　結晶片岩 SCH　滑石 PA
6．図・表・写真の遺物表示は原則として同一の図番号で統一し、それ以外は整理番号に（　）を付した。

目　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　１．調査の経緯と目的 …… 1
　　２．発掘調査対象地・予定面積・調査期間 …… 1
　　３．発掘作業 …… 1
　　４．整理作業 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 3
　　１．調査区の設定と調査方法 …… 3
　　２．基本土層 …… 4
　　３．整理作業 …… 5
　　４．発掘調査日誌（抄） …… 5
第２章　遺跡の環境と過去の調査 …… 8
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 8
　　１．遺跡の位置 …… 8
　　２．芋川氏館跡と福正寺跡 …… 9
　第２節　第１～３次調査の概要 …… 11
　　１．芋川氏館跡の調査 …… 11
　　２．田中下土浮遺跡の調査 …… 12
第３章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　鍵層の検討 …… 13
　　１．東堀埋土 …… 13
　　（１）第１赤ソブ層（３層）（２）再建福正寺整地層－第２次整地層（第４層、４－２層）
　　（３）第２赤ソブ層（15層）
　　２．東堀東部域 …… 17
　第２節　古代・中世の遺構と遺物 …… 18
　　１．古代（平安時代） …… 18
　　２．中世（戦国期） …… 18
　　（１）東堀 SD05　（２）柵列 SA05　（３）掘立柱建物　①掘立柱建物 SB08　②掘立柱建物 SB09
　　（４）井戸 SE02、P.（掘方）46
　第３節　近世～近代の遺構と遺物 …… 21
　　１．礎石建物 SB07 …… 21

2．溝SD07 …… 21
3．溝SD09・SD13、杭列A・B、その他の溝・杭列 …… 22
4．廃棄土坑（集石） …… 22
第4章　成果と課題 …… 26
第1節　芋川氏館跡東堀と館の構造 …… 26
1．主郭の規模 …… 26
2．障子堀 …… 26
3．柵列設置と芋川氏の会津移住 …… 26
第2節　福正寺の創建と再建 …… 28
1．福正寺の記録と礎石建物跡 …… 28
2．福正寺の境内と礎石建物の復元 …… 28
第3節　出土遺物の検討 …… 30
1．陶磁器と土器 …… 30
（1）分析の前提　（2）遺構ごとの陶磁器と土器
（3）中世的やきもの組成から近世的やきもの組成へ
2．瓦 …… 34
3．石器・石製品 …… 35
4．金属製品 …… 36
5．鍛冶関連遺物 …… 36
6．木製品 …… 37
第4節　種子鑑定 …… 38
第5章　まとめ …… 41
1．本稿の目的と前提 …… 41
2．芋川氏の防御施設 …… 41
3．芋川氏館と妙福寺の二重構造 …… 42
4．柵列の設置と館の再防御 …… 44
5．芋川氏館跡調査の課題 …… 44

引用・参考文献
表
図版
写真図版

図目次

第１図　グリッド設定図…… 3
第２図　芋川氏館跡の位置と周辺の遺跡 …… 8
第３図　土層図・トレンチ配置図…… 14
第４図　東堀 SD05における陶磁器・土器の層位別出土状況図…… 15
第５図　古代の土器…… 19
第６図　発掘全体図　芋川氏館跡第１次～第４次調査地点と妙福寺…… 58
第７図　下層遺構（中世）発掘図…… 59
第８図　柵列 SA05 …… 60
第９図　掘方（P.46）…… 60
第10図　掘立柱建物 SB08・SB09 …… 61
第11図　溝 SD07と礎石建物関係土層図 …… 61
第12図　土層図②・⑭・㊷…… 62
第13図　井戸 SE02 …… 62
第14図　溝 SD09・SD13、杭列Ａ・Ｂ …… 62
第15図　上層遺構（近世～近代）発掘図…… 63
第16図　礎石建物 SB07 …… 65
第17図　溝 SD07 …… 66
第18図　廃棄土坑 SX18・20・31・32 …… 67
第19図　中世～近代の陶磁器・土器（１）…… 68
第20図　中世～近代の陶磁器・土器（２）…… 69
第21図　中世～近代の陶磁器・土器（３）…… 70
第22図　中世～近代の陶磁器・土器（４）…… 71
第23図　中世～近代の陶磁器・土器（５）…… 72
第24図　中世～近代の陶磁器・土器（６）…… 73
第25図　中世～近代の陶磁器・土器（７）…… 74
第26図　中世～近代の陶磁器・土器（８）…… 75
第27図　瓦…… 76
第28図　石器・石製品（１）…… 77
第29図　石器・石製品（２）…… 78
第30図　石器・石製品（３）…… 79
第31図　銭貨…… 80
第32図　金属製品…… 81
第33図　鍛冶関連遺物…… 82
第34図　木製品（１）…… 83
第35図　木製品（２）…… 84
第36図　木製品（３）…… 85
第37図　木製品（４）…… 86

表目次

表１　東堀埋土の形成と契機…… 16
表２　廃棄土坑（集石）一覧表…… 23
表３　善光寺地震における飯綱町域の被害一覧…… 25
表４　芋川氏館跡出土の大型植物遺体…… 38
表５　芋川氏館跡出土古代～近代土器・陶磁器観察表…… 47
表６　遺構・層位別やきもの集計…… 52
表７　芋川氏館跡出土瓦観察表…… 52
表８　芋川氏館跡出土石器・石製品観察表…… 53
表９　芋川氏館跡出土銭貨一覧…… 54
表10　芋川氏館跡出土金属製品観察表…… 55
表11　芋川氏館跡出土鍛冶関連遺物観察表…… 55
表12　芋川氏館跡出土木製品観察表…… 56

写真図版目次

PL1　1．溝 SD07検出状況（北より）
　　2．溝 SD07完掘状況（北より）
PL2　1．再建福正寺跡全景（西より、上方に妙福寺参道と冠木門）
　　2．礎石建物 SB07（南より）
PL3　1．東掘 SD05と柱穴群（西より）
　　2．東掘 SD05障子堀と柵列 SA05（東より）
　　3．東掘 SD05・柵列 SA05（南より）
　　4．東掘 SD05（東より）
　　5．柵列 SA05・掘立柱建物群（南より）
　　6．柵列 SA05掘方２と柵痕跡
　　7．柵列 SA05掘方２と越中瀬戸（中央下）
PL4　1．溝 SD07護岸用石組
　　2．溝 SD07・杭列 A
　　3．17・18・19層間の不連続面
　　4．３の拡大写真
PL4　5．17層中の礫層
　　6．５の拡大写真
　　7．再建福正寺礎石と整地層
　　8．犂と鍬の出土状態
PL5　1．SX18上層　　2．SX18下層
　　3．SX32　　4．SX23・24・28・29・42
　　5．再建福正寺整地層内の肥前陶磁（22）
　　6．再建福正寺整地層内の地方窯香炉（139）
　　7．再建福正寺整地層内の地方窯製品（161）
　　8．ピット（掘方）46と柱痕
PL6　1．珠洲・内耳鍋・焙烙・火鉢
　　2．鉄製品・鞴羽口・鉄滓
PL7　1．木製品（曲物ほか）　　2．粉挽き臼
　　3．長床犂・鍬　　4．石硯・石盤
　　5．砥石・磨石　　6．五輪塔

挿入写真１　現地説明会 …… 7
挿入写真２　主郭を介した調査地（中央奥旧公民館）と妙福寺（西より）－手前西堀（道路）・右南堀の一部 … 10
挿入写真３　調査地・妙福寺全景 …… 27
挿入写真４　芋川氏館跡出土の大型植物遺体 …… 40

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１．調査の経緯と目的

平成21年１月20日　公共事業照会で田中公会堂建設計画を確認。町教育委員会から建設予定地が芋川氏館跡で埋蔵文化財包蔵地にあたるため保護協議が必要な旨、田中公会堂建設委員会に連絡し町教育委員会と設計業者で協議。その結果記録保存を前提に町教育委員会が主体となり、調査団を設置して発掘調査を実施することとした。

３月６日　田中公会堂建設委員会（委員長渡辺千賀雄）・田中組（組長村上今朝男）・工事担当者などと町教委・調査団で今後の調査日程や調査方法について打合せ。調査地は芋川氏館の東堀跡が予想されるので、公会堂建設に際し、その場所をさける旨要請、了解される。

６月２日　建設委員会・工事担当と町教委・調査団で協議。調査内容と調査の進捗状況について報告。

２．発掘調査対象地・予定面積・調査期間

対象地　長野県上水内郡飯綱町大字芋川字中峯前田1517－２

調査予定面積　581.6㎡

調査期間　平成21年４月13日～６月30日

３．発掘作業

（１）調査体制

団長　　笹澤浩

調査主任　　原田勝美

調査補助員　富岡鹿子　柳澤まち子　鈴木千秋

調査作業員　常田範夫　深津豊晴　松木幸三　峯山真由美　諏訪栄一　草間喜美子　柳沢依男　寺島尊夫

４．整理作業

（１）期間

平成21年11月17日～平成26年３月31日

（２）体制

埋蔵文化財調査整理特別指導員　笹澤浩

埋蔵文化財調査指導員　　原田勝美（～24年３月31日）・横山かよ子（24年４月～）

埋蔵文化財整理作業員　　富岡鹿子　柳澤まち子　鈴木千秋　峯山真由美（～24年９月30日）

高山いず美（～25年３月31日）

（３）経過

小野遺跡（2012年３月刊行）ならびに表町遺跡（2014年３月刊行）と併行して実施

（４）事務局（平成21年４月～平成26年３月）飯綱町教育委員会

教育長　　相澤壽（～22年11月９日）　寺島政次（22年11月10日～）

教育次長　　長澤照和（～22年３月）　寺島政次（～22年11月９日）　早川ひさ子（23年４月～）

生涯学習係（21年４月～23年３月まで担当制、23年４月以降は係制）

参事　　早川ひさ子（～23年３月）

係長　　平井喜一朗（23年４月～12月）　藤澤哲彦（23年12月～25年３月）

　　宮本裕満（25年４月～26年３月）

主幹　　小山丈夫（23年４月～）　小林貢（24年４月～25年３月）

企画員　　梨本克裕（21年４月～22年３月）　小山丈夫（22年４月～23年３月）

主査　　小林貢（21年４月～24年３月）　小山丈夫（～22年３月）

　　米澤忍（22年４月～26年３月）　大川明美（24年４月～）　黒岩潤也（25年４月～）

産業建設課　主査　久保田和祐（21年４月～22年３月）

いいづな歴史ふれあい館　館長　小柳義男（24年４月～）

　　臨時職員　伊藤愛加（23年４月～）

調査協力者（敬称略、順不同、現地指導者などは例言に記載）

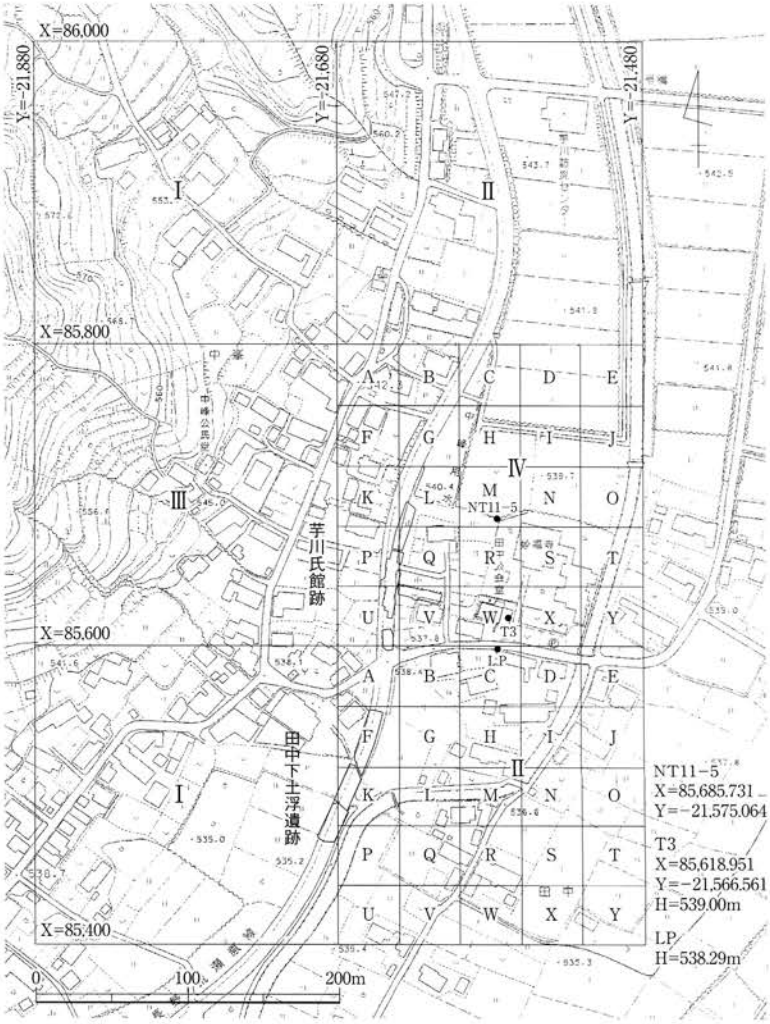
青木和明　飯島哲也　大竹憲昭　上田典男　遠藤公洋　岡村秀雄　河西克造　中野亮一　水沢教子　原明芳
平林彰　贄田明　風間栄一　笹澤正史　佐藤慶二　鋤柄俊夫　福島永　宮坂清　金子拓男　水沢幸一
矢野恒雄　龍野正道　中島庄一　中殿章子　森晃一

第２節　調査の方法

１．調査区の設定と調査方法（第１図）

芋川地区の埋蔵文化財（遺跡）の分布調査は平成26年４月以降実施される予定である。従来この地域の埋蔵文化財の状況把握は地元の龍野正道氏らの収集品にもとづいているもので、判明している遺跡も「点」として示されているにすぎなかった（三水村教育委員会1992）（註１）。よって遺跡範囲の確認や遺跡間の関係などは当地域の大半が水田地帯にあるとは云え十分とは云えなかった。こうした中で本格的な発掘調査は昭和50年に実施された小野遺跡（笹澤・市村・小柳・中村2012）に始まる。ここでは本遣り方実測など新しい調査方法で実施したが国土座標への導入はできなかった。平成13年から15年にかけて実施された３次にわたる芋川氏館跡および隣接する田中下土浮遺跡の発掘調査（笹澤・森・池田2003・2004）は芋川地区の遺跡相互の関係を国土座標（日本測地系）に入れるなど遺跡の空間的把握を十分に意図して実施したが、地区割設定も調査対象遺跡を同一の調査網にかぶせてはいるものの遺跡を広域にとらえた調査方法は今後の検討課題とした。よって、今回の第４次調査を実施するにあたって、飯綱町教育委員会が新たに実施した長野県埋文センターの発掘区設定基準に準じた地区割を採用した。これは合併前の牟礼村教育委員会においてもいくつかの遺跡で実施済である。ただし導入するにあたって第１～３次調査が磁北による調査区設定であり、新たな町の調査区設定方法が真北で実施のため混乱も危惧されたが、第１次～３次調査も旧座標（日本測地系）を採用しており、組みかえが個々にはわずらわしさもあるが、可能であると判断したことによる。さらに、今後の周辺遺跡の対応も含めて座標も世界測地系とすることにした。

調査区の設定は今次調査対象の芋川氏館跡と隣接する田中下土浮遺跡、北方にある小野遺跡、さらに今後の調査が予想される地域全体の中で新たに設けたものである。前述したとおり、周辺の遺跡の存在が不明の中ではあるが、中峯・田中地籍の遺跡群を芋川氏館跡と田中下土浮遺跡にそれぞれ一体化して地区割を設定し、その中に芋川氏館跡及び田中下土浮遺跡を含む遺跡群としてとらえたもので、あくまでも調査区設定上の基準であって、



第１図　グリッド設定図（1：5,000）

この設定区域内に埋蔵文化財が必ず存在すると云うものではない。存在の有無は今後の試掘調査などによって判断されるものである。

かように調査区設定は芋川氏館跡および田中下土浮遺跡を広域にとらえて対象として、前者をⅠ～Ⅳ、後者をⅠ・Ⅱの大々地区（200×200m）、A～Yの25区画（40×40m）の大地区とし、各大地区を２×２ｍの小地区（グリッド）に分け、南北に算用数字１～20を東西にアルファベットA～Tを付与した。尚、測量の原点は町の測量原点のひとつであるNT11－５（X＝85,685.731、Y＝－21,575.064）、町道上のL.P（H＝538.29m）を使用し、T3（X＝85,618.951、Y＝－21,566.561、H＝539.00m）を設定した。大々地区Ⅳの起点はX＝85,800、Y＝－21,680である。またこの大々地区割は芋川防災センターの北の東西道路や妙福寺前の東西道路と斑尾川などの半永久構造物を区割基準の目安としたものである。

今次調査区は芋川氏館跡のⅣW地区となる。ちなみに過去の芋川氏館跡調査地は芋川氏館跡ⅣK・Uなど、田中下土浮遺跡調査地は田中下土浮遺跡ⅡFなどとなる。

発掘調査は調査対象地が芋川氏館跡の東堀推定地にあたること、福正寺・芋井学校など中世以来のさまざまな形で土地利用されて来た所であり、そうした遺跡への対応を十分に配慮した調査方法で実施した。具体的には後段発掘日誌などを参照されたい。

なお測量点は地元の龍野土地家屋調査士事務所によって設定された基準杭をもとに簡易遣り方で実施した。また写真撮影は９×６cm、35mmフィルムカラー（ネガ・ポジ）及びデジタルカメラを使用するとともに東堀の撮影にはこれも地元業者（有）清水工務所の協力を得て高所作業車から実施したものである。

とくに各土層には留意し、遺構との関係、成立過程と新旧などを把握し、各土層の年代を把握するために遺物の出土状態に留意し、一部遺物についてはレベルなどを計測した。

２．基本土層

基本土層とは原則として広域にわたり形成された自然堆積土であり、いわゆる地層のことである。考古学上の遺構は整地土以外はこれらの土層を基盤として構築される。

芋川氏館跡は南北方向に長めの斑尾川扇状地の扇央部分にあり斑尾川に近接した右岸上にある。扇状地は最大幅でも東西方向500m程度で扇頂と扇端の比高差は53mと小さく、館跡の下方500mの寺村地籍では平坦となる。斑尾川はこの小規模な平野部を経て、東南に向きを変えながら狭い谷間を急流となって中野市替佐で千曲川に流れる。

扇状地上では斑尾川はこうした地形と深く係わり、扇頂にある小野遺跡周辺では明瞭な河岸段丘を左右に残すが、芋川氏館付近では不鮮明となる。館跡下方の田中下土浮遺跡で検出された９世紀代の旧斑尾川は現斑尾川に沿って幅10m深さ１ｍで蛇行しながら南流をしていた（笹澤・森・池田2004）。現河床は３ｍ程と深いがこれは河川改修によるもので、その前は浅かったことになる。

芋川氏館跡の基本土層は表土・黒色土・黄褐色砂質土である。これは斑尾川上流域にある小野遺跡や下流域にある下土浮遺跡と共通する。しかし、基盤層である黄褐色砂質土（シルト層）は同一遺跡内でも異なる。縄文時代以来生活の基盤としていた小野遺跡と館跡の主郭部分では後者の方が粘質性が強い。この傾向は主郭部周辺域や田中下土浮遺跡と共通する。芋川氏館跡の西堀や、今次調査で明らかになった東堀の基盤層はこの粘質化した黄褐色砂質土が厚く堆積し、下部はグライ化した砂礫層と互層になるなど、基盤層の堆積が斑尾川の浸蝕・運搬作用と深く係わっている。

小野・芋川氏館跡の２遺跡は縄文時代前期初頭から居住域となったことを示す遺物類が出土し（笹澤・森・池

田2003・2004、笹澤・市村・小柳・中村2012）田中下土浮遺跡でも、その可能性を示す磨製石斧が出土している（笹澤・森・池田2004）。つまり、扇状地中央部分は斑尾川右岸の尾根状の台地であったことを示すものである。一方、この台地と町部落との間には低地がある。西堀調査の際にも多量の砂礫土が堀内に流入している箇所がある所から、この低地がかつて斑尾川の流路であったことを示している。

このように芋川氏館跡は斑尾川とその支流に挟まれた縄文時代以降の比較的安定した尾根状台地に立地するが、堀埋土などに砂礫層が認められるところから、地点によっては砂礫層を含み基本土層に違いがある。

今次調査域の基本土層は中世以降現代に至る複雑な土地利用を示すものである。１層は撹乱層、２層は黒褐色粘質土（水田耕作土）、３層は鉄分集積層（第１赤ソブ層）、４層は福正寺整地土である黒色土まじり黄褐色砂質土、５層以下はその下位層で、グリッドＬ列を境に西と東側では異なる。西側は東堀埋土中層となり、粘質化した青黒色土が第２赤ソブ層を挟んで砂・砂礫・粘質土の互層となり、埋土下層はグライ化した砂層と粘質土の互層となる。グリッドＬ列東側は再建福正寺整地層の下部が江戸時代前半かそれ以前の包含層で西側と同様に基盤は黄褐色砂質土である。

芋川氏館跡の基本土層は斑尾川の浸蝕・運搬作用と深く結び付いたものである。しかし、館跡の東堀とその埋土の形成、福正寺の整地など、そこには人の生活活動と後述されるように善光寺地震という自然活動が加わった基本土層とは異なった独自の土層が形成されることになり、その痕跡に地元で赤ソブと呼ぶ鉄分沈澱層がある。水田や沼沢地に沈澱層として形成され、水質汚染を示す例とされ、当地方には数多く認められる。調査地では第１第２の２層があり、発掘調査において地層検討の鍵層として活用した（第３章第１節）。加えて、調査地の土地利用の歴史が文献からある程度知られているので、それと考古学検討を経た土層とのつき合わせから新たな当地方の地域史が復元可能となる。

３．整理作業

表町遺跡の整理作業などと併行して進めた。表町遺跡同様に木製品が多量に出土したため、その整理と保存処理を計画的に進めてゆく上では効率的ではあったが、分析が不十分になった点もある。また陶磁器については市川隆之氏（長野県埋文センター）、石製品素材は中村由克氏（野尻湖ナウマンゾウ博物館）、長床犂については田中寿子氏（（財）松山記念館学芸員）に鑑定を依頼し、各土層の年代化や資料の客観性につとめた。しかし一部資料には層位比定に疑問のあるものもあり、その対応にも追われた。東堀埋土のように低湿地堆積層が場所により異なるなど一様でないからである。これらについても該当する各項でふれている。そのほか多くの人々に指導協力を得たが別に芳名を記載している。

発掘調査及び整理作業で作成した図面類の整理・保管の手順などは町独自の方法で実施した。

４．発掘調査日誌（抄）

３月30日　試掘調査、公会堂建設予定地内に４ｍ間隔で試掘坑（１×１ｍ）６ケ所を適宜設定。手掘りで試掘。予定地内は、戦国時代以降現代に至るまで芋川氏館・福正寺・芋井学校・芋川公民館（田中公会堂）の敷地としてめまぐるしく土地利用されて来た所であり、本調査にむけて諸資料を得ることにある。その結果鉄分集積層である第１赤ソブ層（第３層）上部は撹乱が著しいものの検出した礎石と、第２次整地層（第４層）及びその下部は比較的安定した遺物包含層があることを確認。芋川公民館のコンクリート布基礎とくにコンクリート製地下室以外も同様と判断できた。

よって本調査に入る前に表土の撹乱層（20cm）は重機で廃土することにした。ただし、布基礎及びコンク

リート製地下室は周辺遺構への配慮からそのままとした。また、予想される館の東堀は存在を確認のうえ、一部を掘り下げることとした。これは事前に田中公会堂建設に際して予想される館の東堀を避けた設計となっていることによる。寛永通宝ほか陶磁片が出土した。

４月９日　調査地内は旧公民館跡の布基礎の内側をバックホーにより表土20cmを剥ぎとり。調査地南北間に表土からの東西土層観察用土手（土層図②）、中央に南北土層観察用土手（土層図①・⑩）を設定する。

４月10日　調査上支障になる布基礎の一部３か所の取り壊しと排土作業。芋川氏館跡の南堀確認調査のため旧公民館入口の駐車場アスファルトを1.6×6.0mの剥ぎとり、トレンチ３設定、重機で掘り下げる。黒褐色粘質土に黒色粘質土の落込みが認められたが南堀とは認められずここまで延長していないことを確認（土層図㊷）。

４月13日　調査団発会式。相澤教育長より団長以下に辞令交付　挨拶（教育長、笹澤団長）調査手順（原田調査主任）事務連絡（梨本係長）、発会式後調査開始。グリッド設定。第１層（表土・撹乱層）第２層（黄黒色粘質土）第３層（鉄分集積層・第１赤ソブ層）まで掘り下げ、黄色粘土ブロックを混じえた黒褐色砂質粘質土（第１検出面＝第２次整地層）を検出。黄色を帯びた黒褐色粘質土面（２層）まで掘り下げ調査。G12に黒色土の落込み、J12・K13に礎石を検出。

４月14日　前日に続きG～I・10～12ライン各グリッドの調査、東西観察用土層（土層図②）調査。午後降雨のため調査中止。信濃毎日新聞社来跡。

４月16日　館跡東堀の想定位置に確認のためのE11、F11をトレンチ調査。しかし未検出。矢野恒雄氏、長野市教委風間栄一氏来跡。

４月20日　K11グリッドに径35cm大の礎石検出。J12グリッドで径約30cmのSX19検出。調査区内東北L08～O09のグリッド内、溝SD07内の礫群検出。

４月21日　M09グリッドに新たに礎石検出。礎石群と柱筋が合わないため移動したものか。県埋蔵文化財センター中野亮一氏、信濃毎日新聞社来跡。

４月27日　G10～I10グリッド南側に東堀西肩確認のため深堀りのトレンチ２設定。黄色砂質土（６層）に青黒褐色粘質土（19層）の落込み確認、これを基に調査区東堀西肩掘り込みの範囲確認を進める。L08～O08ラインより南へ第１次整地面（４－２層）まで遺構検出。

４月30日　H09～H11・I07～I10グリッドの礫群（SD07上部の礫層）の検出。礫層を切って廃棄土坑SX32確認。SD07礫層から陶磁器片、瓦片等が多数出土。

５月８日　SX32調査、SX13・SX14・SX15の断面実測。H11グリッド及びSD07より鉄滓多数廃棄状態で出土。

５月12日　SX32写真撮影及びSD07実測のため礫群の検出清掃。

５月14日　あらたにJ12グリッドに礎石建物SB07の礎石４を検出。SX32・SX16～SX20の平面実測始める。

５月18日　H11の礫群取り除き、SD07の埋土掘り下げ、第２赤ソブ層の確認、鍵層として重視することとする。SX14・SX15の断面実測。遺跡内南東のL～Oグリッド整地面まで遺構検出。

５月20日　土層図②の実測と観察用土手の取り外し。東堀東肩の検出確認のためトレンチ２をI11～K11まで延長し1.7m掘り下げる。K11の黄褐色砂質土（６層＝地山）に東堀掘り下げ面を検出、これが東堀の東法面と確認でき堀の東西幅が８ｍと判明。柵列SA05掘方１～３埋土掘り下げ。いずれも深さ約70cmを測り底に柵残欠があった。柵は径20cmで明らかに他のピットとは様相が違い今後の検討課題となる。

５月21日　上層遺構の全体写真撮影。東堀規模がほぼ確認できたところで堀埋土の掘り下げにあたり、作業の安全確保のため堀の深さを現調査面から２ｍ以上と推定し、東西・南北６ｍをそれぞれ調査範囲とした。また、南北の掘り下げ法面を45度とし、1.5m下がりで50cmの犬走りを設け作業を進めることとした。結果として堀底

は１×２ｍとなり、かろうじて障壁土坑を確認できた。SX32の礫群の除去と下部遺構 SD07の埋土を掘り下げる。

５月25日　J08・I12グリッドで検出の木地が失われ漆塗膜のみとなった漆器椀を発砲ウレタンによる取上げを県埋蔵文化財センター白沢勝彦氏の指導で実施。SD07の I09・I10グリッドに検出された礫群と SD07の平面実測、SD07底面に SD09の溝落込みを検出する。安全を確認のうえ H09・I09より、東堀を1.7m 掘り下げ始める。トレンチ１・２の土層実測。

挿入写真１　現地説明会

６月１日　東堀内に前日の雨で多量の雨水が溜まり北側トレンチ６法面幅１ｍの土砂崩落。又東堀内の湧水が激しく排水路の設置は不可能なため排水ポンプ頼みとなる。調査を難航させる起因となり安全確保と併せ必要最小限の範囲で調査を進めることとなった。

６月４日　東堀西肩落込み青黒色粘質土（19層）、K10・K11黒色混じり黄褐色粘質土を掘下げ東堀東西肩の落込みを確認する。県埋蔵文化財センター伊藤友久氏（建築史）来跡。建物遺構の指導。

６月８日　東堀内の青黒色粘質土（19層）、黒褐色粘質土（14層）掘下げる。湧水が更に多く調査は益々難航を余儀なくされる。各検出ピットの埋土掘下げ及び廃棄土坑の断面実測。J11寛永通宝が６枚銭差の状態で出土。

６月13日　現地説明会　午前10時～12時。来訪者110名。午後堀の検出。土層図③実測。

６月16日　県埋蔵文化財センター市川隆之氏、県教育委員会遠藤公洋氏来跡。中世陶磁器、建物跡などの指導。

６月18日　調査区Ｌ～Ｏライン再精査。

６月23日　堀底部中央の東西壁方向に障壁を検出。長さ100cm、高さ25cm、幅15～20cm。

６月26日　遺跡全体写真の撮影。町内電気工事業者清水工務所の協力により高所作業車で撮影実施。

６月27日　堀の平面実測、縦横断面レベル測定。各遺構の精査及び実測。

６月29日　L09グリッドで井戸と思われる落ち込み（SE02）を確認したが日程の関係により部分調査。埋土保存とする。

６月30日　本日で調査終了。解散式。

７月１日　実測未了部分の実測ならびにチェック。

註１　飯綱町芋川地区の遺跡の概況ならびに考古学史は小柳義男氏に詳しい（小柳2012）。

第２章　遺跡の環境と過去の調査

第１節　遺跡の位置と環境

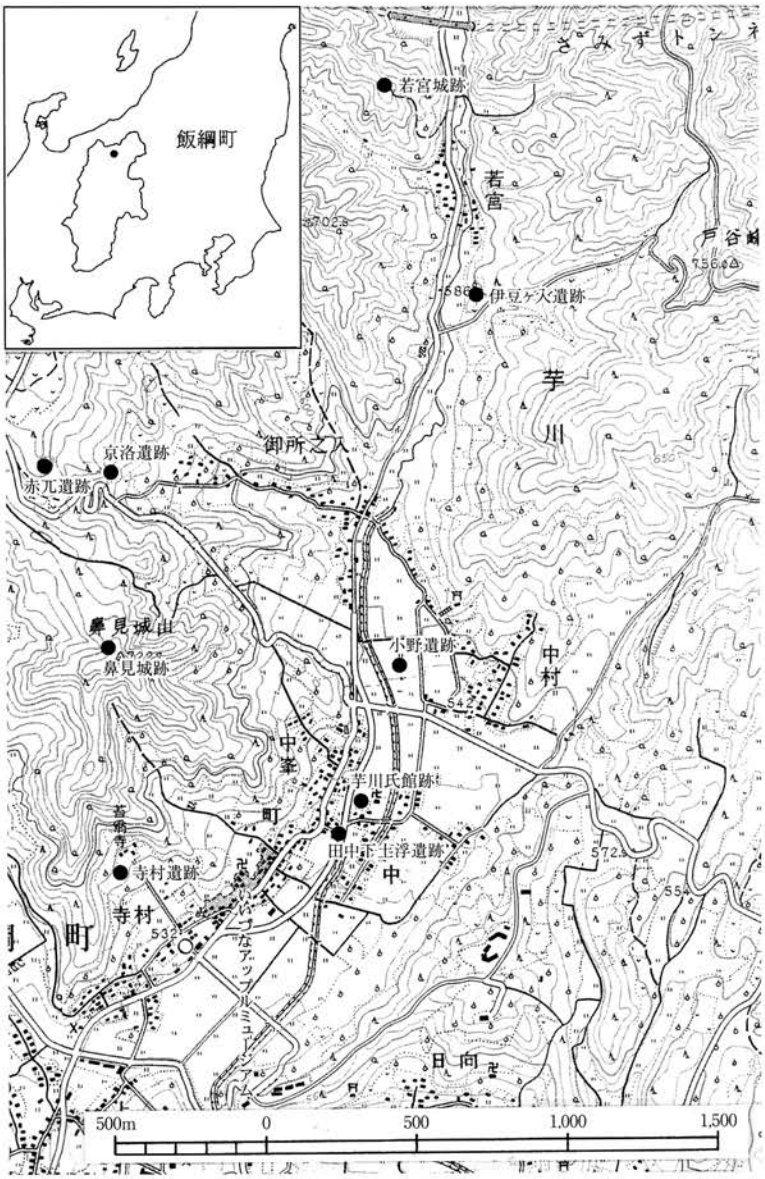
１．遺跡の位置（第２図）

芋川氏館跡（SIY）は長野県上水内郡飯綱町大字芋川字中峯前田にあり、標高は538m 前後である。遺跡がある飯綱町は長野県の北部にあり、隣接する信濃町とともに、長野県北部（北信）から新潟県頸城（上越）地方に抜けるルート上にあり、旧石器時代以来、人々が主としてこのルートを往来した。具体的には長野盆地（善光寺平）から千曲川の一支流である鳥居川を遡上し、信越国境を経て関川沿いに下れば頸城平野に到達できる。現在では国道18号線、上信越自動車道、JR 信越本線、そして間もなく開業する北陸新幹線がこのルート上にほぼある。

芋川氏館跡は鳥居川水系よりは一段高い台地上にある斑尾川水系にある。斑尾川は鳥居川よりも規模はごく小さく、中野市替佐で千曲川に合流し、その道沿いは上越地方から野尻湖を経て中野地方（中野平）に抜ける最短ルートとなる。中世の中野には高梨氏がおり長尾（上杉）氏と密接な関係を保持しており、このルートは中世社会では重要な政略上の道路としても開発されて来ている。

斑尾川水系の大部分は狭い谷で、館跡のある芋川地域のみ南2km 東西0.5km ほどのなだらかな扇状地地形となり、沖積地が発達している。縄文時代以降中世に至る芋川氏館跡・田中下土浮遺跡（笹澤・森・池田2003・2004）や小野遺跡（笹澤・市村・小柳・中村2012）が調査されている。この一帯は古代から中世にかけて『近衛家所領目録』にある「芋河荘」の故地であろう。とくに、小野遺跡では13世紀代の掘立柱建物群からなる豪族層の屋敷地が明らかにされている。

このように、芋川氏館跡は地理的にも、また歴史的にも、「芋川」という土地の中で語られるのである。



第２図　芋川氏館跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

２．芋川氏館跡と福正寺跡

芋川氏が文献上に登場する確実な史料は、永禄12年（1569年）２月24日の武田信玄の芋川親正あての手紙である。この頃、芋川氏は武田氏支配下にあったらしく「其堺無事ニ候哉、承度」と信越国境の様子を聞いている（『信濃史料』13の281）（註１）。芋川氏の支配地がどの程度であったか、確定できる史料はないが、手紙の文面から類推するに、芋川の地から信濃町に至る道筋であったものと思われるとともに、この地を信玄が重要視していたことの表れである。

武田氏滅亡後の織田信長支配下では善光寺平は森長可の領する所となる。芋川親正は北信の国人層と謀り、森長可ら織田方に一揆（「芋川の乱」）を企て大敗北をする（『信長公記』）。一揆の企ての背後には越後の上杉景勝がいたとも云われるが、この頃、芋川氏が北信地域で有力国人に成長したことを示すものである。

信長が本能寺の変で没すると北信は上杉支配下となり、親正は本貫地芋川のみならず、新たに牧之島城代（長野市信州新町）となり、香坂・大岡（ともに長野市）の地が与えられる。親正の知行高は4,485石で海津城代須田氏、長沼城代島津氏に次ぐ（文禄３年９月「定数員数目録」）。北信の有力諸将の上位に位置することとなる。

慶長３年（1598）正月豊臣秀吉支配下となった上杉景勝が会津に移封されると、芋川親正は北信の諸将とともに景勝に従った。この時秀吉の命により百姓を除く中間・小者に至るまで親正に従い、芋川氏館跡は無人の地となったと云われる。

館の東に接して芋川越前守親正によって、永禄10年（1567）妙福寺が建立される（『飯山藩寺社領由緒書』）。同寺の寺伝によれば、妙福寺は越後から移転して来たと云うが、場所は特定されていない。妙福寺は寺域が方形区画で地割は館跡と一致する。東側は斑尾川、北と南側は堀跡かと思われる低地や水田がある。妙福寺が館の副郭と云われる所以である（郷道・臼田1983）。なお今日の斑尾川はこの部分を含めて土地改良事業により改修されている（挿入写真２・３）。いずれにしても、芋川氏館と妙福寺が政治と信仰の差はあったとしても、一体として芋川氏の支配権遂行の拠点であったことは十分に考えられる。

明治12年（1879）の「寺院明細帳」（『長野県庁文書』）によれば寛永14年（1637）妙福寺参道の西側一角に越後から移転して妙福寺塔頭として、福正寺が建てられ、弘化４年（1847）の善光寺地震で被災したと云う。さらに同記載では「一、堂宇間数　本堂無之庫裏間口十間奥行五間　一、境内坪数並地種百五拾五坪　官有地第四種」とある。寺域は155坪で本堂は無く10×５間の細長い庫裡一棟からなる寺院が福正寺であったことになる。敷地面積155坪は今次調査地の面積より65㎡ほど少ない。しかし、庫裡の正面は文面からは分らない。明治13年（1880）頃記載の『長野県町村誌』によると境内は東西10間、南北15間３尺とある。先の「寺院明細帳」と敷地面積は若干異なるが建物についての記載はない。明治13年（1880）「真宗東派耍正寺院明細帳」（『長野県庁文書』）には「堂宇本堂三十坪　庫裏四十五坪」と本堂と庫裡を分けて記載している。史料からはそれぞれ別個の建物と見られ、さきの「寺院明細帳」の記載とは異なる。この相違は「耍正寺院」は更正寺院のことで、東本願寺末寺の寺院を全国的に網羅するにあたり、明治12年に福正寺が妙福寺塔頭から離れた独立寺院にふさわしい寺院として本堂と庫裡が別けられたことから生じたものと思われる。実体は「寺院明細帳」の記載のとおり、建物は庫裡１棟のみで、その中に本堂と庫裡分を分離した使い分けがなされていたものと思われる。ただし、この史料から善光寺地震による倒壊前の福正寺（前期福正寺）は本堂と庫裡２棟を基本とする寺院であったことを暗示している。福正寺が「本堂無之」庫裡のみからなる寺院であるという記載は善光寺地震で本堂が崩落し、緊急避難的に庫裡のみ再建されたものと考えられるが、被災前の福正寺についての同時代史料はなく、寛永14年（1637）（「真宗東派耍正寺院明細帳」では寛永６年）創建などの前述３史料の記述はいわば「福正寺の寺伝」によるものであり、これらの点は発掘調査の成果でふれる（註２）。

明治６年（1873）福正寺境内に芋井学校が開校される。明治８年の『長野県公立小学校表』によれば「旧民家借用」とあるが「旧民家」とは福正寺庫裡のことであろう。

明治12年（1879）福正寺は妙福寺から独立し「総本山東本願寺末」となる（『長野県町村誌』など）。明治17年（1884）芋井学校は新たに建てられた芋川中峰に移り、福正寺の仮校舎から離れる。そして、明治42年（1909）福正寺は石川県鶴来町（白山市）へ移転し、堂宇は壊され広場となって盆踊りなどに使用される（小林・矢野ほか1980）。

昭和29年（1954）その広場に芋川公民館（のち田中公会堂と改称）が建てられ、平成21年（2009）その建物も取り壊され今回の発掘調査となった。

調査地Ⅳ W 地区は芋川氏が館を築いて以来廃館、福正寺の創建と善光寺地震による被災と再建、福正寺庫裡を利用した芋井学校の開校と移転、福正寺の移転、空地化とその利用、そして芋川公民館の建設と取り壊しなど戦国期以降今日に至る間、めまぐるしく土地利用がされて来たのである。

挿入写真２　主郭を介した調査予定地（中央奥旧公民館）と妙福寺（左）－手前西堀（道路）・右南堀の一部

第２節　第１～３次調査の概要

１．芋川氏館跡の調査（第６図）

芋川氏館跡及び隣接の田中下土浮遺跡の発掘調査は第１次から３次にわたり実施された。いずれも主要地方道（県道）長野荒瀬原線芋川バイパス建設に係るものである。建設計画は当初三水村指定文化財である主郭を通過するものであったため、村文化財調査委員会の同意が得られず、道路建設はのびのびになっていたが、幾度となく重ねられた地元協議などを経て指定地である主郭部分をさけて、西堀部分を建設予定地とするものであった。よって、記録保存を前提とした発掘調査を実施し、検出した遺構は極力、埋め立てて保存することとした。発掘調査は調査団を設け、村教育委員会が主体で実施した。尚、調査にあたっては長野県教育委員会の指導を受けた。

第１次調査は平成13年10月26日から12月１日、第２次調査は翌年の６月27日から８月24日、第３次調査は平成15年４月28日から７月30日まで実施された。３次調査は田中下土浮遺跡と併行して、館跡の主郭内域の一部を道路工事の関連事業と関連して実施した。事業は調査地を30cm 程度削平して農地とするものであった。以下今次調査に直接係る部分について概要を述べる（笹澤・森・池田2003・2004）。

第１・２次調査　芋川氏館跡は「堀の家」と呼ばれる方形の主郭とその４辺を堀で囲まれた芋川氏の館跡とされた戦国期の遺跡である。東側には芋川親正によって創建されたという妙福寺がある。

西と北堀は周辺よりも一段低い水田と主郭西北隅の「L」字状に残る土塁の存在によって、調査前から存在が推定できた。しかし、南堀は民家が、東堀は妙福寺の境内地内の新設墓地や公民館の建設によって、地形が改変されていて確定できない。僅かに主郭南東隅に主郭線に沿う土手が「L」字状に認められる所から、堀の内縁とすることで、芋川氏館跡の規模及び構造を推定していた。

道路建設は西堀に沿って予定されたために、西堀の全域を２次にわたって発掘調査し、ほぼ全域（75×８m）を明らかにした。ただし、予定地が西堀の全幅からはずれていたため、西堀の東壁及び土塁との関係は未調査となった。つまり、掘り込み面の上端と底部の幅数は西壁と土塁から得られた推定値によるとともに、西堀は底部に構造の異なる掘り込み（障壁土坑）や高台部（堀底台）を設けたいわゆる障子堀が、長野県内ではじめて明らかにされたことになる。

西堀の全長は掘り込み面80m でほぼ中央（調査区北端から43m）の位置に上端幅２m の土橋がある。この土橋南６m の２基の障壁土坑を境として堀幅が異なる。北側では堀上端幅（外法）は８m、堀底幅3.8m 前後である。土橋より南側は堀の外法は６m と狭まる。調査当初は直線を予想していただけに予想外のことであった。西堀の西壁下部は北側では傾斜35度で整然かつ直線的に粘質土を１m 前後掘り込み、壁面は平坦で極めて滑りやすい構造とし、堀底は北西隅側には高低差や規模の異なる障壁土坑を交互・列状に、さらに２基並列に配置している。障壁土坑は堀底から垂直に掘り込まれ、もっとも深いものは１m である（SK05）。尚、各障壁土坑の一部は幅30cm、高さ10cm 前後の土手（障壁）で区切られ土橋側では区切りが大きく高低差はない。土橋南側は堀幅が狭まるとともに西壁の掘り込みも小さくなる。しかし、南西隅の土坑 SK19は堀底から120cm と深くこの部分を特に意識している。

かように西堀は調査時にもグライ化した粘土層から多量の湧水があり、堀構築時でも常に冠水状態にあったものと思われる。云わば「水堀」であるとともに大きさや深さの異なる障壁土坑を配し防御を目的とした、信濃で初めて検出された障子堀であり、未だ類例はない。障子堀は後北条氏の特有の堀とされるが、その支配地を越え

て調査例が広く知られるようになっており（池田ほか1998・1999、中世城郭研究会1999）、本例の源流がどこにあるか未だはっきりしない。

西堀の主郭側ラインは未調査地を残すものの堀の構造と規模が明らかにできたことと、南堀の存在と位置を推定できる根拠が得られたことである。従来南堀は民家の西側の直線的な切り通しとするか、東南隅の土手（切り通し）とするか、僅か３ｍのことではあるが判断できずにいた。しかし、西南隅の土坑SK19によって、その延長線が東南隅の土手の方向と一致することによって、南堀の位置を確定することができるとともに、その土手が直角に折れて北に向かう所から、この東側の土手を主郭側掘り込み線としてその東側に東堀の存在を想定したのである。

第３次調査　主郭西南区（30×10m）を発掘調査した。主郭南東域の実態と南堀に併行する土塁の存在を明らかにする機会であった。土塁跡は検出できなかったが、戦国期の井戸と小型の掘立柱建物群は土塁想定地をさけて構築されており、逆にそれが土塁の存在を示すものである。またここには18世紀後半以降の集石SX09、石組SX10が構築されている。この頃土塁は削平し堀を埋め立てたことによるものである。因みに現存する西北隅の土塁幅は６ｍ、高さは地表から１ｍ、堀底からは2.2m前後であり、南堀に推定できる土塁も戦国期の遺構分析から現存する土塁と同規模であったものと云える。

以上第１次～３次調査では東堀のみ考古学的には未確定ということになり、主郭の規模もまた推定の域を出ないということになる。

土塁の外域調査は第１次調査時に土橋のSX03延長上にトレンチ（５×３ｍ）を西堀に沿って設けて実施した。これは土橋の延長線上に幅２ｍの農道があり根小屋と推定される「町」集落に続いていたからであるが、遺構などは未検出であった。

２．田中下土浮遺跡の調査

田中下土浮遺跡は沼地を挟んだ芋川氏館跡の南方尾根上にあり、旧斑尾川の右岸にある。平安時代から中世に至る断続的に営まれた集落跡であり、中世では戦国期の掘立柱建物群からなる。検出された建物跡は２棟分と少ないが、芋川氏館時代の集落跡であろう。従来考えられていた「町」部落の根小屋（小林・矢野ほか1980）とは異なる集落跡となる。

註１　『信濃史料』13の281は13巻281頁のことであり、以下同様である。

註２　福正寺の創建については本報告書では「寺院明細帳」や『長野県町村誌』記載の寛永14年（1637）を採用し、「真宗東派更正寺院明細帳」記載の寛永６年はとらない。これは福正寺が妙福寺から離れ独立寺院となるための更生（申請）であり、客観性を欠くからである。しかし前記の３点の史料は共に福正寺の「寺伝」を元に明治12年前後の報告であり、同時代史料ではない。したがって福正寺の創建については「寺院によると寛永14年」とすべきであるが略して寛永14年と記載している。なお、考古学的検討でも福正寺の創建が17世紀前葉であることを確認した（本文第３章）。

第３章　遺構と遺物

第１節　鍵層の検討

１．東堀埋土

調査地の土層はすでに指摘したとおり、グリッドＫ列とＬ列の間にある芋川氏館跡東堀東側掘り込み面を境とし大きく異なる。Ｈ列からＫ列間を東堀埋土とし、Ｌ列東側を東堀東部として以下述べる。しかし、Ｋ列の出土遺物については両者にまたがるため個々に検討した結果による。

発掘調査の過程でもっとも難解で留意しなければならなかったことは、試掘調査で確認され、その後本調査で部分的に検出された礎石群と、それらが据え付けられた整地層が「寺伝」に云うところの1637年創建の福正寺のものであるかどうかであった。したがって、後世の複雑な土地利用を反映して、失われた礎石跡を見出し、建物跡を把握することにあった。この為整地層の確認と現存する礎石の据え付け方を徹底的に調査することであった。しかし、この点は礎石据え付け痕を確実に検出することは不可能であった。整地層にはその後多数の廃棄土坑（集石）の構築や芋川公民館のコンクリート基礎などでかなり不安定であったことによる。

SD07とその周辺、整地層およびその下層などの土層の形成過程の把握と陶磁器による年代把握は調査時の大きな課題であった。つまり、善光寺地震より前の福正寺関係の同時代史料がないことから、整地層が創立期のものなのかあるいは明治12年（1879）の「寺院明細帳」記載の善光寺地震による「被災」かが問題となる。東堀埋土内の調査過程で、SD07とその周辺部で出土した陶磁器は、整地層下部から肥前陶磁Ⅴ期や18世紀末以降の地方の製品（註１）を含み、整地層が創立期ではなく、善光寺地震による崩壊と再建にともなう後世のものであることと判断され（註２）、創立期の整地層の検出が近々の課題であった。

以下、これらの点を解く鍵層となる再建福正寺の整地層、第１赤ソブ層（３層）第２赤ソブ層（15層）を中心に、その前後の層位について述べる。特に調査地が戦国時代以降現代に至る複雑な土地利用がなされて来た以上、遺構の検討の前に、鍵層とその年代付与が必要と考えるからである。

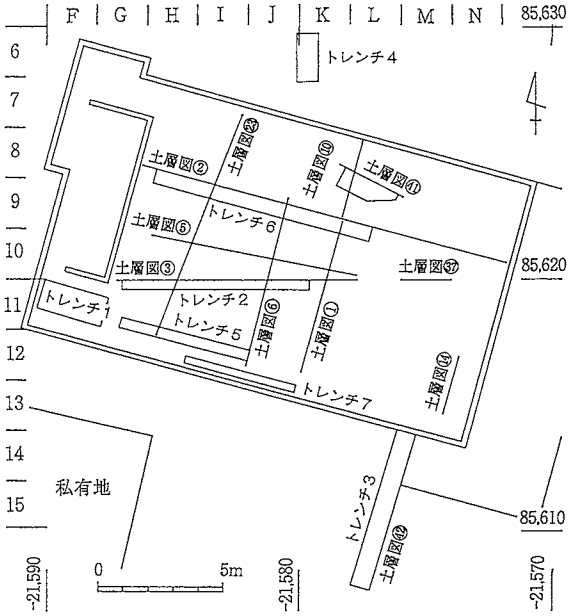
なお、土層のナンバー表示は遺構ごとに付与しているが、東堀埋土は今次調査地（Ⅳ Ｗ 地区）の基本土層と一体化して使用している。

（１）第１赤ソブ層（３層）（第17・29・32図、PL４－７）

上部層は第１層（撹乱層）と第２層（黒褐色粘質土）下にある水平堆積した地元で「赤ソブ」と呼ぶ一定期間湿地状態の中で形成された鉄分集積層であり、一部を除き調査地全域で認められた。第２層が水田耕作土であり、福正寺取り壊し以降に造成され芋川公民館建設前の間の造成土であるが、史料がないため詳細は不明である。ただし、トレンチ３内の土層図㊷（第12図）には第３層は認められない。この部分は道路に面しているところから、福正寺の入口部分として長らく空地として利用され水田造成はなかったらしく、『三水村誌』に云う村人たちによって盆踊りなどに利用された広場にあたるものであろう（小林・矢野ほか1980）。よって、第１赤ソブ層の形成は福正寺が移転に伴い取り壊された明治42年（1909）から、その跡地に造成された水田耕作によるもので、芋川公民館が建設されるまでの昭和29年（1954）の間ということになる。第２・３層からは一銭銅貨を含む明治・大正時代の銅貨３点や芋井学校時代に使用されたと思われる石盤片（19・20・22）石筆（24・25）石硯（23）がある。このほか玩具片（６）、肥前や近・現代の陶磁器、耳掻（８）などがあり、遺物からも証明される。

（２）再建福正寺整地層ー第２次整地層（第４層、４－２層）（第12・22～25・28・29・32）

黄褐色粘質土で黒色土を混じえているが、版築などは認められない。入口部調査域（トレンチ３）とSD07の周辺を除く全域に認められた。ただし、後述されるとおり、東堀東域は黒色土混じりの黄褐色粘質土か、黒色砂質土（４－２層）である。水平に整地され厚さ20cm前後の造成上で、礎石は整地土に掘り込んで据えられていたが、礎石据え付け痕は認められなかった（口絵２－２、PL４－７）。整地層下部は青黒色粘質土を挟んで下部に第２赤ソブ層（第15層）がある。SD07とその周辺部には整地層は認められない。土層図②・③では見るとおり第１赤ソブ層直下の第２次整地層（第４層）下部の12層は溝SD07で切られる。その南側４ｍ下方では第１赤ソブ層直下で第２次整地層と７・８層を切って薄い河川堆積物（５・６層）がSD07の上にのるため、第２次整地層はSD07の右岸ではごく一部が認められただけである。



第３図　土層図・トレンチ配置図（1：300）

第２次整地層からはさまざまな遺物が出土した（PL５）。肥前陶磁器Ⅲ～Ⅴ期など（137・192～196など）と18世紀末以降の「地方窯」で焼かれた擂鉢などの雑器類が多い（104・107・155・161・164など）。寛永通宝は48点余り出土しているが大半は第２次整地層出土である。寛永通宝は後述されるが寛永13年（1636）の公鋳以来、江戸時代を通して各地で多量に鋳造され、明治時代に入る頃まで流通したもので、年代の絞り込みは個々の貨幣の生産地と時期の特徴、流通の分析を経ないと困難である（小川2001）。ほかに、石鉢（３）砥石（９・12・14）石硯（18）金銅製品（１・３・５）銅製円粒（９）鏃（10）小柄（11）煙管（12・14～17）釘（24）などがある。金銅製品残欠などは、善光寺地震で破損した創建福正寺の仏具の一部とも思われ、鏃や小柄なども含め整地層内に取り込まれたものと思われる。

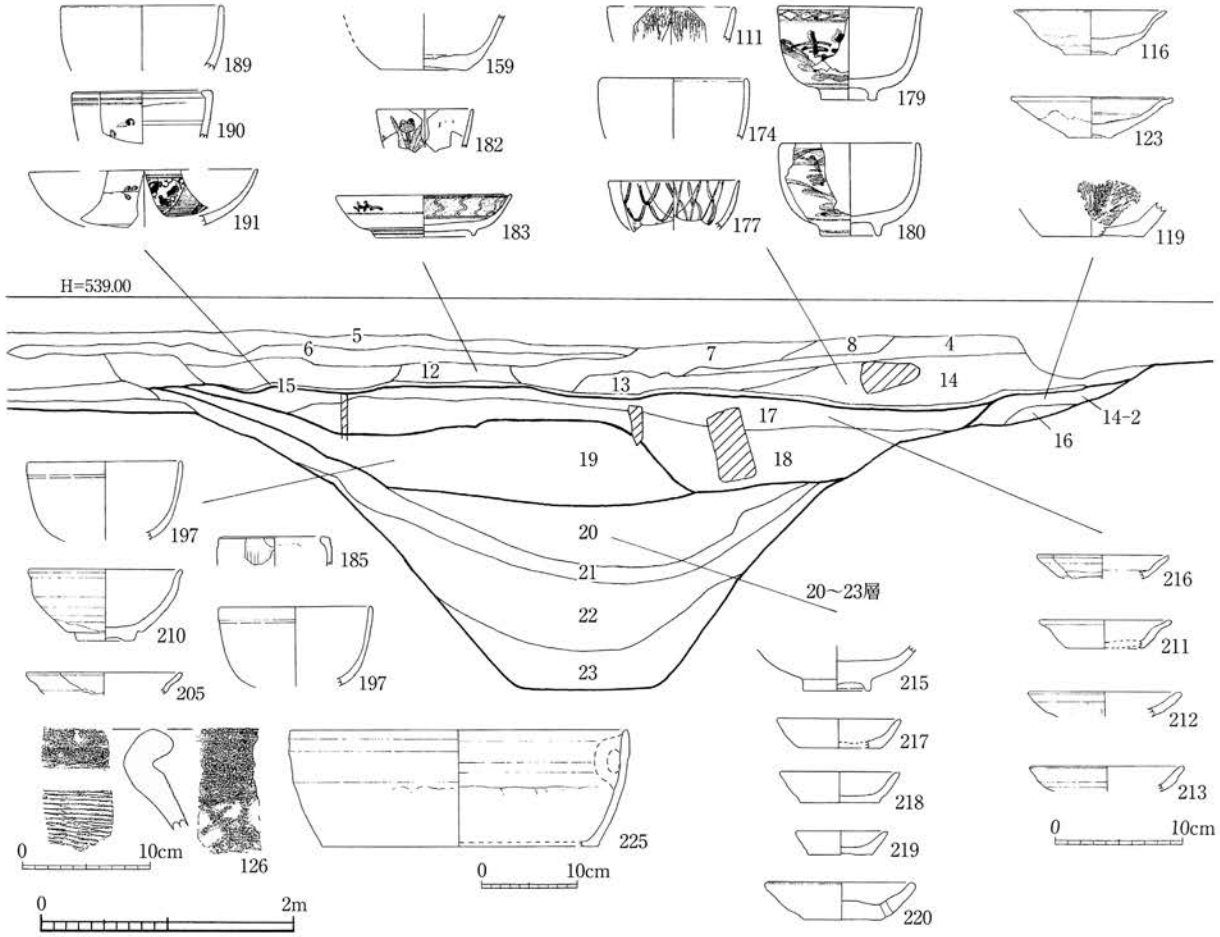
（３）第２赤ソブ層（15層）（第７・17・22・25・26図）

東堀埋土内上層にのみある厚さ5cm前後の鉄分集積層で上下２層からなり（土層図②）グリッドＫ列東側にはない。上層（15層）は海抜538.50m、下層（15－２層）は538.30m前後である。南に向い傾斜するなど調査地内では一様ではなく、形成には上部の土層のあり方に影響を受けたものである。また第２赤ソブ層のレベル自体は調査域の中では両層とも東堀の東壁から始まり、SD07で上層は切られ以下不明となる。下層はSD07の底部を経て東堀西端の掘り込み面埋土内の整地層下部で消える。下層のレベルは東堀西岸では高くなり、上層のレベルとほぼ一致するところから、SD07西壁付近で上・下２層が合わさっていたものと考えられ、間層に12層がくる。南側８ｍの土層図③では東堀の東壁寄りでは14層上部に上層は認められず下層のみであるが、西寄りでは14層に対応する12層が第２赤ソブ層の上部層となる。土層図③にみるとおり12層と14層の間に13層が入り込んだ形で堆積している。これら東堀埋土層は凹レンズ状の堆積土で土層図③では17・18と19層間に不連続面（PL４）となり、以下23層まで東堀底部となり堀が順次堆積していったことを示している。また、12・14層と第２赤ソブ層は下位の17層など堀下部埋土層を切り、第２次整地層とその相当層（７・８層）がSD07によって切られる。さらにSD07埋土の上層（５・６層）は第２次整地層を切って堆積していることからSD07はそれらよりも新しいことになる。

以上、土層の形成過程ならびにあり方から、第２赤ソブ層下層は上位層と下位層の間にできた沈澱層であることが明らかとなった。

次にその時期について検討してみる（第４図）。第２赤ソブ層直上の14層（黒褐色粘質土）からはH12グリッドとその周辺部に良好な資料がある（174～181）。肥前陶磁器Ⅲ－Ⅳ期（174）、Ⅳ期（177）とⅤ期（175・176・178～181）の碗類であり、この層が肥前陶磁の編年でⅣ～Ⅴ期である1780～1860年頃（大橋2000）ということになる。第２赤ソブ層（15層）では肥前陶磁Ⅰ－２、Ⅳ、Ⅴ期（188～191）が、直下の17層からは肥前陶磁Ⅱ期（202～204）、大窯２期（211）瀬戸・美濃登窯１期の志野丸皿（212～214）があり、この層の出土陶磁器は17世紀前半代であり、さらに下層の19層からも肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期の１点（197）を除いてほぼ同一時期の陶磁器類（205～207・209・210・224）が占める。17層によって切られた東堀東壁の第２赤ソブ下層直下の粘質化した黒褐色砂質土（14－２層）からは肥前陶磁Ⅰ、Ⅱ期（114・116・123）大窯２期（118）越中瀬戸（119）が出土している。肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期の陶器碗（197）は他の併出陶磁から見れば時期が新しく、17・18層出土に係わるものと思われる。だとするならば、14－２層は、資料が少ないという制約はあるが、その資料を尊重すれば、14－２層は肥前陶磁Ⅱ期を下限とする17世紀前半、そしてその層を切るように推積している17層は、肥前陶磁Ⅲ－Ⅳ期の18世紀後半の年代が与えられる。14－２層は第１次整地層（24層）と土層は異なるが、時間的には第１次整地層に相当する残存層と思われる（第12図）。

以上から第２赤ソブ層下層は1850年頃を定点とすることができよう。一方19層以下の東堀埋土は堀の機能が停



第４図　東堀 SD05における陶磁器・土器の層位別出土状況図（1：60）

止した17世紀初頭から後半代の期間に埋積し、17・18層を含めた下位層の一部が弘化４年の善光寺地震で欠損・流失し、そこへ14層以上が短期間に堆積したものと考えられるのである。

すでに述べたとおり第２赤ソブ層とその上位層（12・14層）と下位の17・18層の間に第２赤ソブ層下層が介在し、17・18層とは不整合（不連続）である。この面は水平ではなく東側が低く、西側との差は30cmであるとともに、小刻な起伏が認められるところから、浸食面であったことを示している。第２赤ソブ層上層も同様と思われる。この浸食面と12層（青黒灰色砂礫土）・14層（黒褐色粘質土）とは不整合であるところからその要因を求めて川（溝）の検出を試み、部分的にその痕跡を後述のとおり杭列Ａに認めた（SD09）が、落ち込み面などを含めた溝の全体像は確認しえなかった。17・18層もまた枝など多数の自然木片などを含み、一時的出水による水成堆積であることを示し19層との間に不連続面があり、前述のとおり1847年の善光寺地震によるものと考えてよい。よって、19層の上位にあった創建福正寺の第１次整地土もこの時流出したのであろう。第２次整地層出土遺物と年代的に近似しているところを見るならば、上位土層の堆積は短期の一括堆積となろう。J09グリッドなどに部分的に認められた南北方向の杭列Ｂと溝状の痕跡（SD13）は土砂の流出に対応したものと思われる。発掘調査では液状化などの地震痕跡は未確認である。しかし、小山丈夫氏の善光寺地震の被害調査によれば、飯綱町は極めて深刻であった（小山2007）（註３）。東堀埋土が南北方向で斑尾川水系の流路方向と一致する上に、調査地南縁の地境には高さ１ｍの石積がある。石積はコンクリートで固められているので旧公民館建設時に積まれたものであるが、もともとこの部分には段差があり、土手または石積みがあったものと思われ、その部分が地震により崩落し、整地土を含む基盤土層の一部が崩落・流出された結果、その痕跡が当初第２赤ソブ層下層の不連続面と12・14層の堆積層と考えたが、むしろ18層と19層間の不連続面と考える方が無理がない。東堀埋土以外のＬ列より東側と東堀西側の芋川氏館跡主郭域は、縄文時代以降の安定した土層となっている（笹澤・森・池田2004）。

また、礫を含む19層と砂質土主体の20層との間でも、不整合面が一部に認められるが、出土した陶磁器及び崩落後から第２次整地層形成（造成）までの時間的経過などを考えればそこまで善光寺地震の影響とするには無理がある。

よって善光寺地震による土砂の崩落と流出は不安定な東堀埋土内中央部のみに生じたものである。

ただし、石垣を含めた東堀埋土の流出方向である南北（上下）方向の土層把握は調査範囲が狭いこともあって不十分であり、流出土も含めた再検討も皆無ではない。しかし、発掘調査の成果を重視すれば、堆積土は18層に限定すべきものと思われる。少ないデータからではあるが、土砂の流出量を含めたさらなる細部検討が今後の課題となろう。

以上後段各章で検討されるが、考古学的検討による東堀埋土の各土層を史料にみる土地利用の歴史にあてはめると表１のとおりとなる。

表１　東堀埋土の形成と契機

東堀埋土層の形成	土層形成の契機
・23～19層の形成	・東堀の廃棄1598～1600年 （芋川氏の会津移住・関ヶ原の戦いに備えた再整備後）
・19層上部へ福正寺第１次整地層の造成	・福正寺の建立（1637年～17世紀後半代）
・19層の流出と12・14層の堆積	・善光寺地震（1847年）による福正寺の倒壊
・再建福正寺の整地層（４層）の造成	・福正寺の再建
・水田の造成（２層）・一部広場化	・福正寺の移転（1909年）
・水田の廃棄と公民館敷地の造成	・芋川公民館の造成（1954年）

２．東堀東部域（第12・22図）

東堀埋土がその形成過程から複雑であるのに対して、東堀の掘り込み面東のグリッドＬ列以東の基本層は、撹乱層（１層）黄褐色粘質土（２層）第１赤ソブ層（３層）第２次整地層である黒色土混じり黒（褐）色砂質土または黒色砂質土（４－２層）、黒色土混じり黄褐色砂質土（第１次整地層、24層）黄褐色砂質土（９層）である。９層は東堀西域では東堀の基盤層で直下に礫層（26層など）がくるなど一様ではない。Ｌ列東でも同様である。とくにＬ列では調査地北側からの黒色砂礫層が黒色混じり黄褐色砂質土層を切り込んで流入堆積するなど状況が異なるが両層の前後関係は知りうる。Ｌ列東で検出された掘立柱建物 SB08などは第１次整地層（24層）直下の黄褐色砂質土層を掘り込んでいるがＬ列検出の SA05もまた、黄褐色砂質土層に相当する黒色砂礫・暗赤褐色砂礫層を掘り込んでいる。各遺構が基盤とする各層相互の細部調査は未実施であるが、検出面での各層の観察で見る限り、柵列 SA05と掘立柱建物の検出面との時間差は認められない。Ｌ列東の出土遺物は極めて少なく信頼度は小さくなるが、比較的安定した出土状態にあるので参考となる。出土遺物は第２次整地層（４－２層）からは多数の寛永通宝とともに肥前陶磁器Ⅲ～Ⅳ期（97～99・102・103）瀬戸・美濃産と思われる18世紀中葉以降の仏飯具（101）地方窯の小型壺などがある。よって、この層の形成が東堀埋土の第２次整地層に相当することになる。また、柵列 SA05の構築は後述のとおり16世紀末であるが、掘立柱建物 SB09の上部にある黒色土混じり黄色砂質土層（24層）との関係は黒褐色砂礫層が介在するために不明である。しかし24層からは肥前陶磁Ⅱ期の端反皿（115）、丸皿（121）、Ⅲ期の手塩皿（125）が出土している。よって第２次整地層の造成は肥前陶磁Ⅲ期の年代である1650～1690年代となる。ただしⅢ期の手塩皿は１点のみの出土で、大多数（といっても総数は少ないが）がⅡ期以前であり、寺伝で云う福正寺の創建年1637年を考えれば手塩皿の混入も考えられるので、17世紀前半代となる。

以上から考古学上から見た場合には黒色砂質土・黄褐色土を混じえた黒色砂質土層（４－２層）は再建福正寺整地層（第２次）であり、その下層の黒色土混じり黄褐色砂質土層（24層）は創建福正寺の整地土層（第１次整地土）になると思われる。よって、掘立柱建物群は創建福正寺の建物と云えず SA05とともにこれらに先行し SA05の構築時期の越中瀬戸Ⅰ期のうちに、第１次整地土の造成は肥前陶磁Ⅱ期の1600～1650年代となろう。

第２節　古代・中世の遺構と遺物

１．古代（平安時代）（第５図、表５）

９世紀以降の土器類が少量出土した。大半が東堀埋土内出土で散在的であって、遺構も認められなかった。

遺物は須恵器坏Ｂ・坏Ｃ・皿・蓋・甕、土師器坏・甕、黒色土器坏・椀、灰釉陶器椀である。須恵器坏Ｃには瓦質胎土（３・４）を含むところから、飯綱町前高山古窯址群（笹澤・佐藤・原田ほか1986）焼成のものであろう。灰釉陶器皿は東濃光ヶ丘１号窯型式である。

古代の遺構・遺物は芋川氏館跡主郭内や田中下土浮遺跡など斑尾川水系に広く認められるところから古代から中世初期の芋川庄の中心が、当地域にあったことを示すものである（笹澤・池田・森2004）。

２．中世（戦国期）

（１）東堀 SD05（第７図、口絵１・２、PL３）

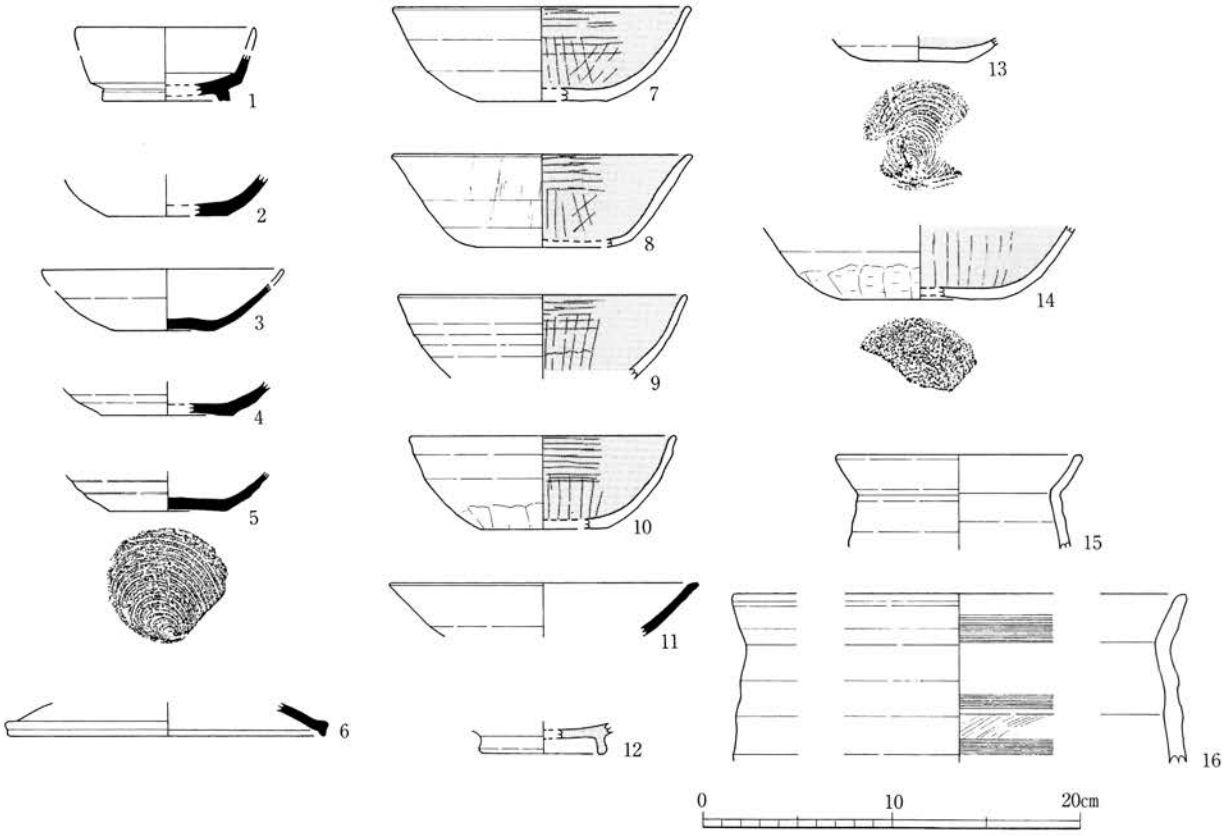
溝 SD07の下部に検出された芋川氏館跡の東堀跡である。第１～３次調査では調査成果と現地の地形等からの総合判断で、芋川氏館跡主郭と妙福寺の境界を東堀の西側掘り込み線とする位置を想定したが、今次調査では東側に８ｍずれていた。このラインは、妙福寺境内の新旧墓地の境界であるとともに溝 SD07のラインである。

東堀は主軸方向がN10°Ｅで、上端で幅８ｍ底部幅１ｍ深さは検出面から2.5mであるが、実質調査域は南北方向は上部で６ｍ、底部では２ｍである。これはトレンチの壁を安全法面としたためである。掘り込み（検出）面は西端で第９層（黄褐色砂質土層）、東端は第９層に対応する29層（黄色土混黒褐色砂礫層）である。西堀に比較して検出面と壁面の状態が良く、ほぼ構築時の状態が保持されているものと思われる。ただし、堀外の主郭側（東土塁跡地）は旧公民館建設時に地下室が設置されたため、大部分は破損され調査はできなかった。東堀の壁は断面形が逆台形状で、上段は比較的緩やかに落ち込むが中段以降は急角度（38度）で底部に達している。この点は西堀の壁と同様である。底部幅は１ｍで西堀は全掘してないため推定値ではあるが約２ｍである。東堀の長軸方向に直交して底部（堀底）には上段長180cm 下段長100cm 幅50cm 高さ30cm の土手（障壁）がある。障壁は１ヶ所のみ確認したが、未調査地にいくつか設けられ、その間を障壁土坑としているものと思われるが長さは未調査のため不明である。西堀は堀底幅を広くし、そこに平面形・大きさや深さの異なる障壁土坑や堀底台を巧みに配置して障子堀としていたのに対して東堀では堀底を小さくし、そこへ単純に障壁を築いているなど、同じ障子堀でも構造が異なっている。勿論、今次調査で得られた知見は東堀のごく僅かであり、西堀でも場所によって、障壁設置の仕様は異なるので、東堀全域ではこのような単純な構造であったとは思えない。東堀も西堀と同様に複雑な底部構造をもつ障子堀で、導排水施設などは未確認であるが、そこに水が張られていたものと思われ、変化に富む障子堀の構築に見る芋川氏の防備に備えた姿勢が並々ならぬものであったことを知るのである。

なお、東堀の主軸方向はN10°Ｅで西堀のN17°Ｅと７度程度ずれる。また、柵列 SA05、掘立柱建物 SB09とはともに主軸方向がN10°Ｅで東堀と共通するが、これらは後段でふれる。

（２）柵列 SA05（第８・22・37図、口絵１、PL３）

東堀 SD05の掘り込み線に沿った東側１ｍ前後の肩にあたる部分にある防御のための柵列である。検出面は第２次整地層（４－２層）である粘性の強い黒色砂質土の下部で黒褐色砂礫層を切って構築されている。黒褐色砂礫層は厚さ10cm 幅２ｍの北側からの流出堆積物で、掘方２の南側で終わる。掘方１・２の断面観察では下層に



第5図　古代の土器（1：4）

2～4層にわたる砂礫の互層があり、深さ70cmで青灰色砂礫層に達しているので一連の堆積物である。この層は土層図③における青灰色砂質土に相当するものと考えられ、東堀はこの層を切り東側では第1次整地層がその裾部に載る。

柵列SA05は径60cm前後、検出面からの深さ70cmの円形状掘方からなり、掘方1～4のみを確認・検出した。予想される掘方6は調査予定地際のため落ち込みの一部を、掘方5はコンクリート基礎により破壊されていて未確認である。

柵列SA05の4基の掘方は掘方中央に径20cmの黒色粘質土からなる柱痕跡が円形に認められ、下部に柱状の柵底部があった。柵はクリ材で底部は平坦に切断されており（57・58）、掘方底部も平坦でそれに見合う。柵間距離は真真で掘方1と2は240cm、掘方2と3は190cm、掘方3と4は170cmとそれぞれ異なる。この柵間の不統一とこれらに見合う掘方は他に未検出であることと東堀肩部に直線的に設置されていること、掘方の共通性など、掘立柱建物の柱掘方でないことは明白で、柵列とした根拠である。

柵掘方2の埋土最下部から越中瀬戸Ⅰ期の小皿（90）が出土した（PL 3－7）。柵を抜いた痕跡が認められないところから、柵設置時に混入したものであり、後段でも詳しくふれるが、柵の設置時期および目的は越中瀬戸Ⅰ期の年代である16世紀末から17世紀前半代（宮田1988）の中でもより古く、関ヶ原の戦いに備えた芋川氏による館防備のために急遽設置された施設で、会津移封後の数年間のことと推定した根拠のひとつである（註4）。

（3）掘立柱建物

グリッドL列以東では多数の柱穴などのピットが検出されたが、建物跡と思われる遺構は掘立柱建物SB08・09の2棟のみである。いずれも、第1次整地層（24層）直下で検出された中世末期の建物跡と推定される。

①掘立柱建物 SB08（第10・37図、PL３－５）

２間×２間の東西棟で側柱建物である。掘方はいずれも黒色粘質土（第２次整地層）黒色土混じり黄褐色砂質土（第１次整地層）下に検出された。４隅に大型の、中間に小型の掘方を据えている。２×２間で主軸方向はE5°Sであり、長辺3.0短辺1.8mである。掘方１・３・７には柱痕跡が認められ掘方１には柱根が残存していた(62)。径13.3cmのクリの丸太を表面のみ削り、木口を斜位に切断している。柱の据え付けにはとくに礎板などは認められず、直接土中に埋め込まれていた。尚、掘方７は廃棄土坑SX43が掘方上部に切り込んでいた。埋土は黄色土を含む黒色粘質土である。出土遺物は認められなかった。第１次整地層（24層）はすでに述べたとおり肥前陶磁Ⅱ期（115）Ⅲ期（125）大窯２期（117）連房登窯１期の志野（121）などの陶器を含むので16世紀末の建物跡と思われる。

②掘立柱建物 SB09（第10図、PL３－５）

グリッドM11を中心にある１×２間の南北棟の掘立柱建物である。主軸は柵列SA05と同様にN10°Eで東２mの位置にあり両者は併行関係にある。南北230東西180cmで柱間は等間である。掘方１、掘方２は２ないし３回にわたり切り合いがあるが、それに対応する掘方ははっきりしない。各掘方は円形で４隅は径40cm前後でやや大きく柱痕跡は掘方１掘方２でそれぞれ10cm、掘方４掘方５では15～20cmであり想定する柱は大きくない。それぞれ第２次整地層（４－２層）とその下部の黒色土を混じえた黄褐色土（24層）の下に検出され、黄褐色砂質土を基盤としている。

SB09は検出状況と柵列SA05と併行関係にあるところから、両者は同一時期であり、SB08がSB09に直交するところから、配置状況からみても、これらを含めて1600年代を前後する時期のものと思われる。

（４）井戸 SE02（第13・35図）、P.（掘方）46（第９・22・37図、PL５－８）

柵列SA05掘方４埋土の調査過程で礫を少量混じえた青灰色砂層を埋土とする円形状の落ち込みを確認する。規模確認のため250×80cmの小トレンチを設定し、その結果径約２mの井戸跡と判断した。第１次整地層下部の青灰色砂礫層（基盤）を切って構築していた。この基盤層はSB09の黒褐色砂礫層に相当するものである。落ち込みは検出面から50cm掘り下げほぼ垂直となる壁面を確認したが一部に崩落が認められ、このため平面形は円形とはならない。埋土からは曲物の小片や板材片（23）が少量出土した。なお、この部分は東堀の落ち込みにあたる部分であり、SE02が僅かではあるが東堀東壁上段と同様に青灰色砂礫層を切り込んでいる。よってSE02は東壁よりは新しいが第１次整地面に覆われていることから、柵列SA05と同時期となる。掘立柱建物と井戸がセットとなると思われるが、柵列外に設けたことは、これら施設が柵列構築用の短期の施設で柵列構築後にはこれらの施設は廃棄されたものであろう。つまり掘立柱建物が小規模な小屋程度であることからも、説明がつくものと思われる。なお、以上が確認できたことにより、SE02は完掘せずに埋め立てて保存することとした。SA05掘方４も同様の方法をとった。またP.（掘方）46が近接してあるが第２赤ソブ層を切っており新しい。埋土内から瀬戸・美濃大窯２期の端反Ⅲ（91）が出土しているがこの場合には遺構の年代を示すことにはならない。掘方中央にクリの柱材（63）があった。

第３節　近世～近代の遺構と遺物

１．礎石建物 SB07（第15・16図、PL２）

建物 SB07は南北３間分、東西１間分の礎石のみを SD07の東、東堀埋土最上部に検出されたもので、大部分は抜き取られ、現存する各礎石は径50、厚さ30cm の安山岩平石で、第２次整地層に僅かに掘り窪めた掘方内に据えられていた。失われた礎石の配置と据え付け痕跡を注意深く精査したが、栗石等は用いられておらず、掘方そのものも不鮮明で確認できなかった。このほか、柱筋の通らない原位置をずれた礎石がいくつか認められた。よって礎石建物の復元は発掘調査からは困難である。南北方向の礎石の間隔は２間分が240cm（８尺）、１間分が180cm（６尺）東西方向は180cm（６尺）であり南北方向は N9°E である。別章でふれるとおり整地層及び礎石建物は弘化４年の善光寺地震で倒壊した福正寺再建のもので、５×10間の福正寺の南北棟庫裡ということになり、南北２列分の礎石列の一部となる。

２．溝 SD07（第17・19～21・29・31～35図、PL１・４）

調査域西側で東堀埋土上部に検出された。幅1.8～２m、深さは検出面から20～30cm、断面Ｕ字状の素掘南北溝である。東堀とほぼ方向を同じくし、主軸方向は N21°E である。I08グリッドの西壁の一部に長径50～70cm 大の玉石を用いた護岸用の石組が認められた。検出は第１赤ソブ層直下で、12層および10層を切り込み、第２赤ソブ層を底部としている（土層図②・③）。埋土内には多量の玉石を含む砂礫を含む。埋土上部は廃棄土坑31・32によって切られている。

埋土は場所によって異なるが、基本は青黒色砂礫土（11層）であり、I09グリッド北壁の土層図②では上層に黄褐色砂礫土層（11－１）が載る。調査当初この層上部には人頭大からこぶし大の川原石が列状に認められたことから「列石」としたが、その後の検討で砂礫土層の一部であることが判明した。砂礫土は一部に粘質土を含み水成堆積であり、「列石」部分は溝の末期以降か廃絶後に投棄されたものも含むと思われる。

以上から構築時の溝 SD07は護岸用石組で保護された南北溝で、礎石建物 SB07の西２m の位置に構築された一体的なものが福正寺の廃寺に伴い、溝 SD07となって方向にもズレが生じてきたものと思われる。それは護岸用石組の残存と思われる列石状の痕跡（PL４－１）が、石組みの延長線上（H10）に僅かではあるが認められること、第２次整地層の広がりが SD07付近まであること、そして石組と残存石組を結ぶ主軸方向が N15°E で、礎石建物 SB07の主軸 N9°E に近いことなどがあげられる。調査当初、SB07の礫群を一括して列石とした点も護岸用石組を想定してのことであったが、それは結果的には一部のみであったことになる。かように SD07は福正寺再建に伴い構築された寺域を区画する溝であったものと思われる。

現在芋川氏主郭と妙福寺境を南流する用水路があり、さらに調査地北西隅で屈折し妙福寺境を東流したのち、参道西側沿いに南流する。この現行の用水路は SD07を祖源としており、流路の変更は土地利用を反映したものである。SD07の位置が現行用水路よりも東に７m ほど寄っているが、本来は SD07の延長線上にあったものが、妙福寺の土地区画の変更などに伴い現在位置に付け変えたものであろう。また、SD07は館跡東堀の位置と一致し館の構造が廃絶後の土地利用を大きく規定していたことになる。出土遺物は多様で量も多い。陶磁器・土器（17～77）砥石（13）煙管（13）鉄製品（19）鞴羽口（１～４）鉄滓（５～12）寛永通宝（１・２）曲物底（４）などと不明木製品（５・７・８・19～22・26）がある。

陶磁器は整理箱２箱分で今次調査でもっとも出土量が多く、実測可能なものの大半を図示した。

３．溝 SD09・SD13、杭列群Ａ・Ｂその他の溝・杭列（第14・34～37図、PL４－２）

杭列は溝 SD07壁際のＡ杭列群と SD07の東側 J09から I11にかけて弧状に多く認められたＢ杭列群がある。Ｂ杭列群は第２赤ソブ層下部の17～19層内に打ち込まれており、第２整地層や第２赤ソブ層以前の構築物である。杭は残存したものだけで腐食が進行し、痕跡だけのものも認められたが、記録には確実に杭と判断可能なものだけとしたため、腐食により消滅した杭も含めて、構築時の杭の数量は倍増するものと思われる。ただしグルーピング化した杭列群すべてが同一時期に属するものかは残存杭の性格上わからない。杭56は明らかに第２赤ソブ層を切っており、一部に時期の異なるものも含まれている可能性はある。

杭列ＡはSD07の掘方よりも内側両側に30cm 幅で SD07の掘方底部に沿って検出された（32・42・45・50）。杭は板材やソダなどともに土手を作るものであるが、ここでは杭のみであった。杭の分布状況から SD07に先行する SD09の構造物と思われる。よって SD09の幅は50～70cm となる。SD09は第２赤ソブ層下部に認められるので第２整地層造成前の溝で一時断絶ののちに SD07が第２整地層を切って構築されたものと思われる。

杭列Ｂは西列（37・39・41・49）東列（36・43・47・59・61・64）からなり、南側では太杭（59・61・64）を使用している。後者は先端を平坦に調整しているので柱材を転用したものと思われる。なお南側では杭列Ａの東列とＢの西列とが接するため杭40・53と杭31の所属は不明である。

溝 SD13の幅は上端で150cm 前後となる。調査過程でも礫層が認められ溝の存在を確認したが、礫層が部分的で平面からの追究はできなかった。よって人工物と云うよりも善光寺地震の崩落土に残された流路跡と思われ、杭列Ｂは最大傾斜線に伴うところから、崩落土保護などに構築されたとも思われるが実体はよく分からない。溝内からは長床犂（１）や鍬先（２）をはじめ木片などの植物質遺物が多く認められた。なお杭はクリ・カラマツ・マツ・コナラなどの丸木を使用している。

その他の杭例は N09に集中して認められたが遺存が悪く配列などは復元できなかった。また L09から N09にかけて幅30cm 前後で深さ10cm の小規模な東西溝 SD10・11が認められた。杭穴・溝埋土は砂層で第２次整地面を切り込み、これらは第２次整地層形成以降の遺構である。

４．廃棄土坑（集石）（第18・20～22・27～32図、PL５、表２）

こぶし大から人頭大の円礫を土坑内に投げ入れた廃棄土坑は、規模と構造上の相違から廃棄土坑Ａ・Ｂ・Ｃの３種がある。Ａは深さ40～70cm の土坑内に川原石などが投げ込まれた状態で検出されたもので、平面形は径70cm 前後の円形である。Ｂは径が40cm 前後とＡよりも規模が小さく、土坑も浅いものであり、平面形は円形が多い。Ｃは規模がＢと同程度であるが、土坑は浅いか不明瞭であり、集石のみで見るならば列状の配石遺構と見られるものも含む。中には廃棄土坑以外の目的で石が集められたものもあろうが、その目的が不明である所からこれらを一括してＣとした。集石はある目的を意図してつくられた構造物であり、土坑内に投げ入れられ、結果として石の集まりとして見られる廃棄土坑とは本来別のものである。よって現象面を重視して性格が把握できるＡ・Ｂと一部のＣについては、廃棄土坑とし、それら以外を集石（配石）とすべきであろうが、近世以降の集石の意義付けは恐らく多様で不明部分が多いため廃棄土坑の中に含め、必要に応じて「集石」を併用した。ただし礎石の据え付け用の集石（栗石）は認められなかった。

廃棄土坑Ａは溝 SD07周辺に多く SX18・20・31・32・34がある。SX18は第３層（第１赤ソブ）を切った状態で検出された。深さ23cm ほど掘り窪めた土坑内に多数の円礫と陶磁器類（80～84）瓦（８・10・15・16）筒形

鉄器（25）引手金具（26）銅線状製品・銅製コイル（バネか）　磨石（８）砥石（10）石硯（15）など多様な遺物が出土した。陶磁器は肥前陶磁Ⅴ期の皿（80）地方窯と思われる近・現代の碗（81）19世紀以降の地方産擂鉢（82）や茶瓶（83）瀬戸窯と思われる鉄釉秉燭（84）がある。以上からSX18はいわゆるゴミ捨て穴（廃棄土坑）の典型で礫は遺物群とともに埋め立てられたことを示している。遺構の検出と出土遺物から、公民館建設時に構築されたもので、現代の廃棄土坑である。

溝SD07を切って構築された廃棄土坑SX31・32も同様である。SX32からは焙烙（62）など、SX31からは五輪塔（28）などが出土しているが、整地にともない礫とともに埋め立てたものと思われる。

廃棄土坑ＢにはSX13・14・16・19・22・25・27・28・33・40～42がある。いずれも第３層（第１赤ソブ）直下で第２次整地層を切って構築されており水田造成前に作られたことになる。SX16からは内耳（85）擂鉢（86）、SX22からは砥石（11）、SX28からは寛永通宝２点（４・５）、SX29からは擂鉢（78）と肥前陶磁（Ⅳ期）、SX40からは銅製品（３）が出土している。福正寺移転後の水田造成に先立って不要物を埋め立てたものであろう。出

表２　廃棄土坑（集石）一覧表

遺構名	グリッド	平面形	型式	法量(cm)			主な出土遺物 （　）は図番号	備考
				長軸	短軸	深さ		
SX13	J10	円	B	50.0	40.0			
SX14	J09	円	B	40.0	35.0			
SX15	J09·K09	不整	C	70.0	40.0			
SX16	I12	楕円	B	35.0	25.0		内耳(85)擂鉢(86)	
SX17	I11	列状	C	60.0				
SX18	I11·12	円	A	90.0	90.0	23.0	肥前皿(80)碗(81)地方擂鉢(82)常滑茶瓶(83)瀬戸·美濃秉燭(84)軒丸瓦(8·10)瓦製品(15·16)筒形鉄器(25)引手金具(26)銅製品(コイル·銅線)磨石(8)砥石(10)石硯(15)石盤(21)	
SX19	J12	円	B	50.0	30.0			
SX20	J08	円	A	60.0	60.0			
SX21	M10	不整		42.0	30.0	30.0		
SX22	M12		B	30.0	20.0		砥石(11)	
SX23	K·L12	円	C	65.0	50.0	13.0	寛永通宝2(3)	
SX24	L12·13	楕円	C	85.0	64.0	10.0	叩石(2)	火床上
SX25	K10	円	B	40.0	35.0	30.0		
SX26	N12	不整円	C	75.0	60.0			
SX27	L10	不整円	B	50.0	45.0			
SX28	K12	不整円	B	40.0	30.0	17.0	寛永通宝2(4·5)	
SX29	L12	円	C	30.0	25.0		肥前擂鉢(78)	
SX30								SX13ダブリ
SX31	I08	円	A	70.0	70.0		肥前鉢((52)空風輪(28)	
SX32	I10	円	A	70.0	70.0	25.0	土瓶(44)内耳(62)瓦(6·11·12·13·14)	
SX33	H08	円	B	35.0	30.0	7.0		
SX34	I10	不整楕円	A	70.0	50.0		瀬戸·美濃猪口(87)	
SX35	O10	不整長方		80.0	40.0			
SX36	J11	列状	C	45.0	40.0		中国天目(15～16c)(89)	一部未調査 J11 17·19層と接合
SX37	J11		C	45.0	40.0			
SX38	K11		C	114.0	70.0			
SX39	N11			47.0	40.0			P7に伴う
SX40	N10·11		B	40.0	36.0		銅製品(3)	P8
SX41	N10·11		B	50.0	50.0			P9
SX42	K12		B					
SX43	M10							
SX44	N09						砥石(12)	
SX45	N09							

土品の年代にもこの点で矛盾がない。

廃棄土坑Ｃ（集石）はSX15・17・23・24・26・29・36～38がある。掘り込みがほとんど認められない所から廃棄目的で石を集めただけか、浅く掘り窪めた穴に石を置いたものと思われる。しかし、SX23・24は相接した遺構で60～100×30cmの範囲に小石を集めたものであり、意図を持って石を配置したものであろう。集石または配石遺構とするべきもので土坑はまったく認められない。人頭大の礫を列状に配石したSX36・37・38もSX24と同様に土坑は認められずに集石（配石遺構）とすべきものと思われる。同様にL12-13とその周辺に用途不明のSX23・24・28・29・42が第２次整地土に検出された。SX24下部には焼土が認められた。礫には特に火熱を受けた痕跡は認められない。

廃棄土坑Ｃ（集石）からの出土遺物にはSX24から叩石（２）、SX36から中国天目（89）がある。15～16世紀代のもので輸入陶磁としては当時にあっては貴重品と思われるが、これはI09グリッド、J11グリッドの第２赤ソブ層下部出土品と接合関係にある。上層遺構であるSX36の天目片は、何らかの事情で地表に出現し、再度不要物として円礫群とともに集められ、埋め立てられたものである。天目片はこの場合にSX36の年代を示す資料ではなく、接合関係を通してSX36の集石の構成過程を示す資料になるものと思われる。

廃棄土坑はこの地域の歴史の中でごくごく最近の人々の廃棄行為と土地利用の一端を示すものである。しかし、これらをこの地域の土地利用の歴史と発掘調査の成果から総合的に判断するならば、その廃棄行為が明治43年（1910）以降の水田造成（一部は『三水村誌』に云う広場化）と昭和29年（1954）の芋川公民館建設の造成工事に伴って生じた不要物をごく小型の穴を掘って埋め立てた行為を示すものと思われる。それはSD07内への不要物の投げ込みも同様である。今日の機械化された造成工事とは異なる小規模な人力による労働、おそらく共同作業を思い浮かぶのである。

註１　陶磁器全体については市川隆之氏の教示によるが、越中瀬戸については田中暁穂氏からも教示を受けた。なお、市川氏は肥前陶器を唐津、磁器を伊万里と使い分けをしているが、本稿では九州近世陶磁学会（2000）により肥前陶磁として一括して呼称している。瀬戸・美濃大窯と連房登窯（藤澤2007）及び肥前陶磁（大橋2000）の編年に示される年代は下記のとおりである。

大窯第１段階1480－1530　　第２段階1530－1560　　第３段階1560－1590　　第４段階1590－1610

登窯第１段階（17世紀初頭～17世紀中葉）　第２段階（17世紀後葉～18世紀中葉）　第３段階（18世紀後葉～19世紀中葉）

肥前陶磁（Ⅱ期（　）は磁器の場合）

Ⅰ期1580－1610　　Ⅱ期1600（1610）－1650　　Ⅲ期1650－1690　　Ⅳ期1690－1780　　Ⅴ期1780－1860

また瀬戸・美濃窯に係わる基本的文献は藤沢（1986）以外では田口（1983）井上（1992）

肥前陶磁では大橋（1989・2000・2004）、九州近世陶磁学会（2002）を参考とした。

註２「寺院明細帳」には福正寺は「弘化四年震災ニ罹リ」とあり、倒壊したという記載はない。「真宗東派更正寺院明細帳」や『長野県町村誌』には地震の語すらない。いずれの史料も福正寺からの報告を元に記載されたもので、必要度から使い分けされていたものと思われる。

註３　善光寺地震については従来はマグニチュード7.4、震源地は長野市浅川清水付近、最大震度７とされていた。中央防災会災害教訓の継承に関する専門調査会報告書（2007）『1847善光寺地震報告書』によれば「マグニチュード7.3震央野尻湖東岸付近約10km、震源域震央から断層の破壊が始まり、北北東および東西の２方向へ伝播、延長約50km幅約15km。最大震度７」とあり、飯綱町全域が震源域に含まれていたことになる。

なお飯綱町域被害統計は小山文夫氏によれば表３のとおりである。

註４　越中瀬戸の操業開始は文献上の研究によると、天正19年（1591）と文禄２年（1593）説があり、16世紀末とされてきた。これに対して窯跡資料をもとに考古学的検討をおこなった宮田進一氏は天正初年～13年間の天正年間説（1573～1585年）を

唱えた。氏は瀬戸の工人の移動（「瀬戸山離散」）により操業が開始されるが越中瀬戸の初期の資料には志野釉が認められないことと輪トチンによる内ハケ皿の重ね焼き焼成によるところから、井上喜久男（井上1988）、藤沢良祐（藤沢1986）両説をもとに示されたもの（宮田1988）である。よって、SA05出土の越中瀬戸丸皿は宮田氏の分類に云う丸皿２類となり、操業開始期に近い年代の付与が可能となった。しかし、それが開窯期の黒川窯の製品とするには今後の検討が必要である。

表３　善光寺地震における飯綱町域の被害一覧

村名	家数	人数	潰家	半潰家	潰土蔵	半潰土蔵	潰物置	半潰物置	潰堂社	半潰堂社	潰郷蔵	即死	怪我	死馬	死牛	領主名	根拠史料
芹沢村	15	43	2	7								2	5			幕府(中野代官)	①
野村上村	59	197	55	5							1	10	23	6		幕府(中野代官)	①
茶磨山新田村	8	38	6	2								2	4	2		幕府(中野代官)	①
袖之山村	47	208	32	8	2	3	36	7	3			2	2	8		幕府(中野代官)	①
坂口村	13	49	13	6								1	9	1		幕府(中野代官)	①
夏川村	27	116	11	10					1			2	3			幕府(中野代官)	①
地蔵久保村	21	71	14	7		4	12			2		2	8	2		幕府(中野代官)	①
横手村	18	91	10	4	2							0	4			幕府(中野代官)	①
北川村	23	84	10	8								4	8	1		幕府(中野代官)	①
高坂村	62	253	56	4					2			2	18	2		幕府(中野代官)	①
牟礼村	189	826	182	2	23		22		8			88	87	15	2	幕府(中野代官)	①
中尾新田村(山神代)	16	69	16									4				幕府(中野代官)	①④
小玉村	81	327	81						1		1	10	21	8		幕府(中野代官)	①
黒川村(東組)	91	363	80	5			8		5			24	10	2		幕府(中之条代官)	②
黒川村(西組)	55	241	*									25	9			幕府(中之条代官)	③
中宿村(裏村ともに)	37	154	32									1				幕府(中之条代官)	①
新井村	*	*	*									9				幕府(中之条代官)	①
平出村(新田村ともに)	96	*	18	8								7				飯山藩	④
福井新田村	22	*	22						1			2				飯山藩	④
神代村(番匠新田組)	*	*	5	13								*				飯山藩	④
神代村(狐沢組)	*	*	4									*				飯山藩	④
東柏原村	*	*	*									*				飯山藩	
奈良本村	*	*	*									*				飯山藩	
普光寺村(寺坂組)	70	*	37									10				飯山藩	④
普光寺村(舟久保組)	65	*	53									31				飯山藩	④
芋川村	250	*	125									90				飯山藩	④
上赤塩村	80	*	20									5				飯山藩	④
下赤塩村	40	*	10									10				飯山藩	④
毛野村	57	*	20									10				飯山藩	④
倉井村	176	*	125									36				飯山藩	④
河谷村(風坂組)	20	*	17									5				飯山藩	④
合計(判明分のみ)	1638	3130	1056	89	27	7	78	7	21	2	2	394	211	47	2		

＊印は史料に記載のないもの、わからないもの。

根拠史料

①「高野式左衛門日記」　中野代官所作成の被災統計を同年10月に中野郡中代から借覧した牟礼村高野式左衛門が筆写したものという。

②「黒川村潰家死人怪我人書上控」　神谷家文書の内。黒川村東組名主神谷佐左衛門がまとめた中之条代官所への報告集控。

③「黒川村西組即死人調書(仮称)」　西黒川区有文書の内。黒川村西組から中之条代官所への被災死者の状況報告。

④「高家数潰家痛家死失怪我人書上帳」　神谷家文書の内。中之条代官所の命で黒川村の周囲2里の建物・死者被災統計を伝聞し報告したもの。

第４章　成果と課題

第１節　芋川氏館跡東堀と館の構造

１．主郭の規模（第６図）

東堀の発掘調査によって、明らかとなった点は、ひとつは東堀の位置の確定によって館跡の規模がほぼ判明したことである。西堀の発掘調査と現在の地形や地割によって南・北堀の位置は推定できていたが東堀の位置についてはいまひとつ明らかにされていなかった。しかし、今次調査によって東堀の主軸方向が西堀のN17°Ｅと異なりN10°Ｅで東西の堀が僅かながらではあるが併行せず、東堀と南・北堀の接点では３ｍほど内側にくいこむ。ただし東堀の方位は実質調査域が６ｍと全体の10分の１の範囲の判断であり、また西堀の土塁との接線（西堀の東側掘り込線）は未調査で推定によるもので不確定要素はあるが、この差は堀または土塁幅の中で吸収されるとすれば、東西の堀の間隔となる主郭の東西径は土塁を含めてほぼ60ｍとなる。つまり芋川氏館跡の主郭は８ｍ幅の堀で囲まれた一辺60ｍの方形区画となる。かつて主郭の東西間の距離を50ｍとし60×50ｍの長方形区画とした（笹澤・森・池田2003）が、本稿で一辺60ｍの方形区画とする。

２．障子堀

防御を目的とし、堀底にさまざまな土坑（障壁土坑）を設置した障子堀は西堀のみならず、東堀にもあることが、今次調査で判明した。すでに前回調査でも西堀の南・北堀とのコーナーの在り方から、南・北堀も障子堀である可能性を指摘した（笹澤・森・池田2003）。よって主郭は変化に富ませた障壁土坑からなる障子堀で４辺が囲まれていたことになる。そこには防御を最優先とした芋川氏の意図を知りうる。

３．柵列設置と芋川氏の会津移住

柵列SA05はクリの丸太材を東堀SD05外縁肩にそって設置したものであり設置時に混入した越中瀬戸Ｉ期の小皿の出土によって、設置時期の上限が知りうる。そこで、この陶器の年代が問題となる。越中瀬戸は瀬戸の工人が越中で16世紀末までには開窯し、17世紀前半代に生産した陶器でＩ期はまさにその開窯期のものとなり（宮田1988）、SA05の年代比定の根拠である。掘立柱建物SB08・SB09と井戸跡SE02はすでに検討したとおり配置などからSA05と係わって構築されたものである。つまり、柵列と２棟の建物は同時期に建てられた可能性が強い。よってSA05と２棟の建物の年代は出土陶器から判断すれば16世紀末から17世紀前半代の遺構ということになる。しかし、福正寺は寺伝によれば寛永14年（1637）に建立されるのでそれよりも早い時期に柵列及び掘立柱建物２棟は建てられていたことになる。

次に柵列設置時期についていま少し年代を絞り込む。創建福正寺の敷地面積は別章で検討したとおり再建福正寺の敷地面積153坪とほぼ同じであるので、その中央にある柵列や掘立柱建物と寺院が同時に共存することはあり得ず、柵列と掘立柱建物２棟は創建福正寺の建立前の構造物となる。このことは発掘調査の検出状況から見た所見とも矛盾するものではない。もっと平たく云うならば、柵列や掘立柱建物と寺院との同時存在は考えられないのである。

慶長３年（1598）、豊臣秀吉により上杉景勝は会津移封を命じられると、芋川親正は百姓を除く配下の一族・

小者に至るまで景勝に従い、芋川氏館跡は廃館となったとされる（小林・矢野ほか1980）。ところが、すでに見たとおり、柵列構築の目的と設置時期から、背後に秀吉死後の上杉景勝の徳川家康に対する戦略上の政治姿勢を伺い得る。会津移封に際して秀吉の命は百姓以外はすべて旧地を離れるというものであった（『信濃史料』18巻）が、それがどこまで守られたのかは分からない。しかし、堀の外側に新たに柵列を設けて館の防御を固めることは、関ヶ原の戦いを想定したことと思われる。恐らく、会津移封以降、家康との対立が厳しさを増す中で、急遽芋川氏配下の人物を派遣して柵を設置したか、親正と結び付きの強かった妙福寺が関与したものと思われる。親正自身は、家康軍の上杉征伐に対応すべく白河小峰城（現　白河市）の城主として、城の普請に忙殺されていた（小林・矢野ほか1980）。慶長３年（1598）３月秀吉の死後、家康は「会津の上杉景勝が旧領の越後・北信に、多年つながりのある残留土豪・地侍層と呼応して侵入する可能性」があったから、家康方の森忠政を海津城主としている（古川1987）。史料的裏付が十分でないが、発掘調査の成果から考えられることと思われる。よって、柵列の設置は芋川氏の会津移住以降で関ヶ原の戦い直前の慶長３年（1598）１月から慶長５年（1600）７月の間となる。

挿入写真３　調査地・妙福寺全景

第２節　福正寺の創建と再建

１．福正寺の記録と礎石建物跡

福正寺は寛永６年（1629）あるいは寛永14年（1637）に妙福寺塔頭として建立され、弘化４年（1847）に善光寺地震で倒壊、その後庫裡のみが再建され、そこへ芋井学校が併設・浄土真宗東本願末寺として独立、明治43年（1910）石川県鶴来町（白山市）に移転、堂宇取り去られる。これが福正寺に関係した記録の大略である。福正寺に係わる記録は明治12年（1879）の「寺院明細帳」「真宗東派要正寺院明細帳」（ともに『県庁文書』）明治13年頃の『長野県町村誌』（長野県1936）であり、創建福正寺に係わる同時代史料はない。よって福正寺の建立年は前述史料の記載にある同寺の「伝承」によるものである。

発掘調査では１棟の礎石建物跡SB07と２層にわたる整地層（第１・第２次）などと関係する溝SD07などと、陶磁器など多量の遺物が出土した。以下これらを用いて、福正寺の建物配置などについて記述する。

２．福正寺の境内と礎石建物の復元（第６・15図、挿入写真２・３）

『長野県町村誌』には福正寺の境内（敷地）は「東西十間南北十五間三尺面積五畝三歩」で面積数は「寺院明細帳」の「百五拾五坪」とほぼ同数である。まず敷地の東西方向について検討してみる。公会堂建設予定地は581.6㎡で前記２史料の記載面積より65㎡ほど多い。これは旧公民館建設時に新たに用地取得されたからであろう。それがどの部分になるか推測の域を出ないが、芋川氏館跡側と思われる。現在調査地（建設地）と館跡との境界は土手となっているが、これは用地取得に伴ない主郭側が削平された痕跡と思われる。この土手はかつて東堀の痕跡として見誤ったものである。しかし、東堀が今回の調査でSD07の下部にあることが判明し、東堀が埋没した後も用地境としての役割を持っており、その痕跡として溝SD07が福正寺の区画溝（用水路）として残されていたものと思われる。今日、地境の用水路は館跡と妙福寺境を南北に流れ、調査地と妙福寺境を東西に、さらに妙福寺参道に沿って南下しているが、かつては妙福寺の新旧墓地間にあり、さらに調査地の南側では調査地と私有地との地境に一致するところから溝SD07は本来は妙福寺新旧墓地間から私有地境に直線的につながっていたものであり、それぞれの方向（N9°E）が一致する。よってSD07は用水路として新旧墓地間から調査地南側の用地境に沿って流れていたものであろう。つまり面積差65㎡はSD07の西側面積に近い。尚、新墓地は1970年代には妙福寺所有の水田を造成したものである（中殿秀靖氏教示）。東堀の西側のトレンチ調査ではSD07より館跡寄りには認められず、この部分は館の土塁跡にふさわしい安定した土層であり、SD07以東の上層に認められる礫を含んだ堆積層は全く認められなかった。福正寺時代の代表的遺物である肥前陶磁器はグリットＦ列以西では皆無である。以上から福正寺の敷地はSD07を西限とするのであり、この部分から参道までの距離が約20mで『長野県町村誌』に云う「東西十間」に相当するものである。

次に「南北十五間」について検討する。現在の敷地は妙福寺境から町道まで26m前後である。ただし私有地境の石積から町道にかけては私有地であるので、敷地は逆「L」字形となる。この私有地は建設予定地あるいは「寺院明細帳」記載の面積から除外して計算できるので、少なくとも再建福正寺の段階では敷地外となる。よって、この私有地を差し引いた部分が敷地面積となる。尚、この道路沿い部分は入口部分として削平され、トレンチ３でも整地層は確認されていないが整地されていなかったとは云えない。以上から復元できる敷地は東堀の西肩（構築時のSD07）以西と私有地部分を除くことになる。

次に考慮に入れなければならない点は福正寺は妙福寺を本寺とする脇寺（塔頭）であることで、妙福寺の中殿秀靖氏によれば脇寺は通常妙福寺参道側に入口部を設けるということである。つまり参道側から福正寺に入るということである。２点目は「寺院明細帳」にある福正寺は本堂はなく間口十間奥行五間の庫裡のみからなる寺院であることである。記録が正しいとするならば、５×10間の南北または東西方向の建物となる。さらに創建福正寺の存在と、のちの芋井学校併設も考慮に入れて、礎石建物を以下に復元する。ただし、庫裡を南北棟か東西棟とするかで結論が全く異なる。今後は同じ地域内に移設されたと伝える民家もあり、これらも含めて周辺部の寺院建築などを考慮に入れた詳細な検討が必要であるが、一応の結論を導いておく。

南北棟とした場合には礎石列１～４を側柱とする建物で、東西方向と南北方向ともには敷地内に収まる。

次に東西棟についてみる。この最大の難点は東西方向が敷地ぎりぎりに設置されることになる。礎石も建物内の一部となる。ただし妻が５間であるから柱間８尺（礎石１～３の２間と北側１間分）の３間分を身舎とし、その左右に６尺の廂（礎石３と４など）が付く切妻造りなどの建物として復元が可能である。芋井学校を併設した場合に南側は広場としての使用も可能である。逆に南北棟とした場合にこれらの点について別に回答を用意しなければならないが、総じて東西棟とするよりは合理的と思われる。

次に「真宗東派要正寺院明細帳」記載の福正寺についてみる。ここでは「本堂」と「庫裡（裏）」を分離し、それぞれ30坪、45坪とある。この数字は「寺院明細帳」記載の福正寺庫裡５×10間を参考とすれば「本堂」は５×６間で30坪、「庫裡」は５×９間で45坪となり、一体の建物としても東西・南北いずれでも敷地内に収まらなくなる。恐らくこの記載は福正寺が独立寺院としての体裁を保持するための数字と思われ、誇大されたものであろう。むしろ「寺院明細帳」の５×10間が実体を示したものと思われる。

建築史の土本俊和氏の教示によれば福正寺のように南北道路（参道）の東に門を設ける例は長野市善光寺の宿坊に見られ、北方向に本堂を南に庫裡を設置していると云う。これを参考とすれば、創建福正寺の伽藍配置もこれに該当するかも知れない。善光寺の宿坊は善光寺詣の宿泊施設で、善光寺門前の参道及び南北道に面した39の宿坊からなる（註１）。明治24年（1891）の大火で大半は消失し、その後、建物配置などの基本は宝永４年（1709）に成立していた（浅野2009）ものを踏襲して再建された（土本ほか2009）。よって善光寺宿坊と福正寺は脇寺という点と江戸時代の小寺院という点で、共通性がある。よって、福正寺を復元するにあたり善光寺宿坊を参考とすることは許されるであろう。建物配置は江戸時代の寺院では参詣者の便を配慮して決定される（石田1975）からである。ちなみに妙福寺は南門の延長上に本堂が門の北東方向に庫裡がある（第６図）。

つまり、創建福正寺は本堂を妙福寺側に南側に庫裡があった可能性が強い。だとするならば、再建福正寺の庫裡も倒壊前の状態を踏襲して、応急処理的に庫裡のみ再建されたものと思われる。再建福正寺の庫裡が本堂を含む南北棟とする根拠のひとつでもある。

（註１）　善光寺宿坊の建物配置の基本は参道または南北道路に構えた門の位置によって規定されている。東門では南に庫裡、北に本堂（小御堂）が、西門では東に本堂、西に庫裡が置かれる。いずれも門と玄関を空間（庭）を介して庫裡と結び、空間の上方（北側）に本堂を置き、３者が一直線上に配置される例はごく僅かである。門と庫裡・本堂を庭に面して置く建物配置は参詣者を意図したものであるとともに、東門建物では南北、西門建物では東西方向に長い長方形敷地という狭い敷地面積を効果的に活用するためのものであろう。

第３節　出土遺物の検討

１．陶磁器と土器（第19～26図、口絵３・４・５－１、PL６－１、表５）

（１）分析の前提

中世以降近代に至る陶磁器や土器などいわゆる「やきもの」には中国産の輸入陶磁器、瀬戸・美濃や肥前などの広域流通の陶磁器と地元の窯などで焼かれた地方窯の製品がある。調査地が中世後半の芋川氏館とその後の小寺院の建立、学校の併設など多様な土地利用と善光寺地震の被災を受けており、出土した「やきもの」もさまざまである。特に幕末から焼かれた当町の赤塩焼（唐木田1974・安藤ほか1977）など地方の製品は食生活のみならず、さまざまな生活用具に影響があったはずであるが、具体的には不明部分が多い。本稿では広域流通品として全国的視野の中で検討が可能な肥前陶磁など以外の地方で焼かれたやきものを一括して「地方窯」の製品としてまとめている。今後の検討の資料となるからである。

今回出土したやきものは、（１）芋川氏館に関係する15世紀代末頃から16世紀初頭、（２）前期（創建）福正寺期、（３）再建福正寺以降のものとなる。（２）についてはさらに創建期・前期福生寺期に分けるが、前期福正寺に直接係わる遺構は整地層の一部を除いて未確認である。それは善光寺地震による寺院の倒壊や大部分の整地層の滅失、再建時における新たな整地層の造成作業と密接に関係する。この点をより出土量の多い肥前陶磁で見るならば、芋川期に係わる東堀の下部埋土（19層以下）、第１次整地層（24層）と柵列SA05と掘立柱建物に関係した土層以外は新・旧が混在した状態で出土している。つまり土層の項で検討したとおり、調査地の土層は善光寺地震の影響を抜きにしては語れない。加えて、東堀や溝SD07などの埋土の形成には多量の砂礫を混入するなど斑尾川や用水路の氾濫が深く係わり、短期間に堆積したものが多く、出土遺物もそうした過程で取り込まれたものである。陶磁器片に磨耗が認められないところから、東堀の周辺部から取り込まれたものである。整地層出土の遺物も、整地作業に伴ない、SD07や廃棄土坑（集石）の出土遺物の多くは廃棄に伴なうもので、鉄滓や瓦などとともに、外部から持ち込み投棄されたものも含むが、大半は土地利用の際に生じたと考えられるものである。つまり、出土した陶磁器や土器類は原則として当地において使用されていたと思われるものであり、こうした前提に立って時代別に整理した各遺構ごとのやきものの特徴を以下に見い出しまとめる。こうした作業は多様な土地利用の歴史を経験した本遺跡だからこそ可能であるとともに、少なくとも芋川という土地の地域史復元の出発点となり得るからである。

（２）遺構ごとの陶磁器と土器

芋川期の陶磁器と土器　芋川氏館の存続期間は15世紀末に始まり、1598年の上杉景勝の会津移封に同伴した芋川氏の移住による廃館までとしていた（笹澤・森・池田2003）が今回、柵列SA05の検出によって、関ヶ原の戦い（1600年）までは後述のとおりそこに妙福寺が関与した館としてあらたな機能が生まれ、かつ堀の外縁にそって柵列SA05を設置するなど、完全移住でなかったことが判明した。よって、関ヶ原の戦いまでを芋川期として、この時期の陶磁器にふれる。

芋川期の遺構は芋川氏館跡の障子堀である東堀SD05、柵列SA05と２棟の掘立柱建物がある。陶磁器・土器類はSA05堀方２埋土出土の越中瀬戸Ⅰ期の小皿（90）、東堀埋土と下層（20～23層）からの出土品がある。下層（20～23層）からは15世紀後半から16世紀前半の中国龍泉窯の青磁碗（215）と土師器皿（カワラケ）（217～220・222・223）がある。下層には肥前陶磁器は全く含まず、そこの様相は中国陶磁器、古瀬戸や大窯期前半の

陶器と珠洲に在地の土師器からなり、西堀（笹澤・森・池田2003）と共通するまさに芋川氏館時代の遺物である。この点を東堀埋土とSA05のあり方から検討する。柵列SA05は別に述べたとおり芋川親正が上杉景勝の命を受け、関ヶ原の戦いにそなえて、1598年正月の芋川氏の会津移住から、1600年７月の関ヶ原の戦いの間に構築されたものである。この想定に誤りがなければ、越中瀬戸Ⅰ期の定点を示すことになるとともに、開窯してさして時間を置くことなく、この地にもたらされていたことを意味する。一般に善光寺平へⅠ期の越中瀬戸が搬入される時期は17世紀前半と云われるが、かならずしもそうでないことを示すものである。越中瀬戸の広域流通を検討する上でも重視されるべきものと思われる。

東堀下層（20～23層）の陶磁器や土器を芋川時代とした根拠はひとつには肥前陶器（唐津）を全く含まず、西堀と同様の中世的組成であることに加えて、すでに土層の項でふれたその在り方にある。20層の有機物層は堀が機能していた冠水状態で堆積したもので、その時期は17世紀代には下らないので柵設置までとなる。堀の総浚いは常時行なわれていたと思われるが、芋川時代末期には滞り、底部から１ｍの不要土が堆積していたことになる。これは西堀には認められなかったので、東堀だけのことであろう。だからこそ、東堀には柵が設置されることになったとも思われる。かように考えれば、下層出土の陶磁器や土器類は16世紀代の時間帯の中に収まることになる。

関ヶ原の戦い前後の芋川氏館完全廃館後から1637年の福正寺創建間の約37年間のやきもの類は東堀SD05中間層（19層）出土資料がある。この層は廃館後から福正寺創建に係わる第１次整地層造成までの堆積層であるからである。

19層からは肥前陶磁Ⅰ－２期（206）、Ⅱ期の小皿（199・200・205・207）青磁香炉（185）、Ⅲ・Ⅳ期の小碗（197）大窯２期の天目（210）、珠洲Ⅳないし Ⅴ期の甕（壺）（126・224）と、内耳鍋（225～227）がある。19層の肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期の小碗は17層からの混入と思われるのでこれ以外は肥前陶磁Ⅱ期で占められ、これに登窯第１段階の志野丸皿が加わるので中間層の形成は寺伝に云う福正寺建立の1637年より前で柵列SA05設置後の時間帯に収まる。何故ならば中間層にはこの福正寺の第１次整地層の残存と思われる相当層（14－２層）とともに上位の17・18層にともに切られ上部に載ると思われるからである（第４図）。

この東堀中間層出土の陶磁器や土器は在地土器編年の定点を示すものであるが、問題はこれらに伴なう遺構が不明であり、使用者が特定できないことである。この点は後段でもふれるが、恐らく芋川氏館と妙福寺との関係から、柵列設置以降も芋川氏館の跡地の管理は妙福寺が関与していたことを示すものとすれば、単純に妙福寺でこれら陶磁器類を使用したものとしても特に問題はない。

なお、19層出土の内耳鍋は西堀下層出土のそれよりも背が低く、17世紀代の基準資料となりうるものである。

福正寺創建時の陶磁器と土器　1637年の福正寺創建時の陶磁器は第１次整地層（24層・14－２層）がある。東堀の東辺部にあり、第２次整地層の下部にあり、掘立柱建物の埋土上部にある黒色土をまじえた黄褐色砂質土で粘性が強い。柵列SA05との関係は別稿で検討のとおり、SD05が古い。第１次整地土からは肥前陶磁器Ⅰ期の見込みに胎土目痕跡のある小皿（116）をはじめ、Ⅰ－２期（114）、Ⅱ期（115・123）、Ⅲ期（125）、瀬戸・美濃大窯第２段階（117）、登窯第１段階の志野丸皿（121）がある。125は手塩皿で年代がやや新しいが他は福正寺の創建時代に年代は合致しており、逆に寺伝に云う福正寺の創立年が正しいことを示している。116は砂目積みの溝縁皿（123・199）（口絵３）とともに、窯詰め法の変遷を知る指標となるものである（大橋1989・2004）。尚、胎土目積みの小皿は善光寺平では初見例であろう。砂目積みの皿は松代城下町跡でも見出されており（西本2005）、肥前陶磁の善光寺平への波及が、17世紀前葉の段階で盛んとなることを示すが、Ⅰ期陶器の出土はそれよりも古く15世紀末頃まで遡ることになる。しかも、興味深い点はそれらの使用者が福正寺建立にも係わっていることで

ある。いわゆる唐津焼を受け入れ側がひとつの遺跡で時間差はあるにしても異なっていることは興味深い。肥前陶磁は太平洋側よりも日本海側に広く分布する所から、Ⅰ期から北海道まで広く船運で搬出されたと云われ（大橋1992)、上越地方にもⅠ期の資料は上越市至徳寺遺跡（鶴巻2003）に認められる。直江の津（上越市）に陸上げされた肥前陶器（唐津焼）はその後は北国街道など陸路持ち込まれたものであろうが、そうした広域流通の在り方を検討する資料となり得るものである。

前期福正寺期（1637年～1847年）の陶磁器と土器　この時期に相当する陶磁器などは東堀埋土12・14・15・17・18層があり、第２次整地層（４層・４－２層）にも取り込まれていようが後者は次項で取り扱う。前者は1847年の善光寺地震で崩落した堆積物で、再建に伴ない造成された第２次整地層が上位に載る。この整地土の造成時期は不明であるが、地震後に第２赤ソブ層を含む堆積層（12・14層）が形成されている点と被災後の混乱を考慮すれば造成まで若干の時間が経過したものと思われる。被災後の堆積層のうち12層（154・159・171・182・183・198)、14層（110～112・118・174～181)、15層（188～191)、17層（202～204・211～214・216）の陶磁器と土器類は肥前陶磁器Ⅰ期（110・112など）Ⅰ期ないしⅡ期（188・202～204）Ⅲ期（198など）Ⅳ期（177など）Ⅴ期（175など）の全期にわたり、Ⅴ期（1780～1860年）がもっとも多い。このほか中国華南の白磁皿(216)、京焼の徳利（122)、地方窯の片口鉢（154)、小型壺（徳利？159）や土師器の焙烙（170）などがある。つまり前期福正寺時代の使用陶磁器は肥前陶磁器、とくに伊万里焼と呼ばれる染付磁器や産地の量産化に伴ない多量に生産された陶胎碗が主体であるが、18世紀末頃からは各地で開窯した地方窯の製品が一部器種に含まれるようになり、京焼の徳利なども含むなど多様なやきものを保持するようになったことが伺える。

再建福正寺期の陶磁器と土器　これらは第２次整地層（４層・４－２層）にある。このほか、SD07出土の大半も含まれるが、前期福正寺時代のものも含まれるので、個々に検証が必要である。

第２次整地層の４層からは肥前陶磁Ⅱ期からⅤ期が主体である。陶胎碗（135）など碗が多いが染付の大皿（194）緑釉（196）や二彩手（192）の鉢、青磁の瓶（149）香炉（140）がある。瀬戸・美濃登窯３段階（127・148）や京焼小皿（193）と18世紀末以降の陶器が多数加わる。後者は碗（134）香炉（火入れ139）燈明皿（141）こね鉢（155）壺（161・162）焙烙（166・168）火鉢（172）内耳鍋（187）などがある。

４－２層は４層に比較して資料は少なく器種も限られるが、産地とり分け地方窯製品の多い点は共通する。肥前陶磁Ⅲ期の擂鉢（103)、瀬戸・美濃と思われる仏飯具（101)、京焼の徳利（122)、地方窯の火舎（105・106）がある。

福正寺再建時の19世紀中頃の肥前陶磁は碗以外に鉢・大皿・瓶・香炉・擂鉢など器種の増加とともに染付以外にも青磁や緑釉そして何よりも陶胎碗などより多様である。肥前陶磁以外では京焼や瀬戸・美濃窯が少数ではあるが一定量がある。そして最大の特徴は18世紀末頃から広まる地方窯の製品が広域流通の製品を補完する器種、例えば香炉（139）・灯明皿（141）・こね鉢（155）や仏飯具（101）が加わるとともに擂鉢（104）火舎（105・106）焙烙（172など）に地方窯製品を多用している。地方窯の実体は不明であるためこれ以上は立ち入れないが、こね鉢には地元の赤塩焼（156～158）が２層から出土している。赤塩焼は甕・こね鉢・徳利・片口鉢などの日常雑器とともに素焼きの火鉢なども焼いている（唐木田1974、安藤ほか1977）ので、この頃から赤塩焼が加わった可能性がある。

溝SD07の陶磁器と土器　再建福正寺造成以降に作られた溝（用水路）SD07出土品は、陶磁器以外にも鉄滓や瓦などが廃棄されるなど、多様な土地利用に際して廃棄されたものも含むので、いわゆる一括遺物ではない。しかし廃棄土坑SX31・32などよりは古い。

SD07からの出土量はＷ地区ではもっとも多い。ここでも第２次整地層、前期福正寺時代後半の堆積層（12・

14・15層）と同様に肥前陶磁が主体で、これに瀬戸・美濃登窯（47）萩焼（46）京焼（45）地方窯（49・51・59・60・66・67・73・74）在地の内耳鍋と焙烙（61～65・68～71）などが加わるなど善光寺地震前後の土層出土のやきもの類と産地別の組成は共通する。あえて相異があるとすれば肥前陶磁Ⅲ期が他よりも多い傾向にあるがⅣ・Ⅴ期が多数を占める点では共通する。

肥前陶磁の中ではⅡ期の初期伊万里の碗（染付）がある（30）。一重の網目文を描く。Ⅲ期では鉢（52～54・56）がある。53は内面に菊花文を型押し白土を刷毛塗りした三島手と呼ばれるものであり、56は見込み中央に蛇ノ目の釉剥ぎののちに白土刷毛塗りしている。Ⅳ期では刷毛目文を持つ蛍手碗（22）、外面青緑色釉、内面に四方襷文を持つ染付碗（31）、見込みに五弁花のコンニャク印判を持ち底部外面に「大明年製」の文字と唐草文のある輪花皿（55）、Ⅴ期では白毫を描いた仏画（32）や梅樹文を持つ（33）染付碗、そして量的に多いⅣ～Ⅴ期の陶胎碗（34～38）などがある。このほか、青磁（40・41）と半四方襷文・蛸唐草文・雷文を持つ染付の香炉（42）がある。また京焼風の徳利（50）もある。18世紀末頃であろうか。肥前陶磁以外では京焼の松葉碗（45）や瀬戸・美濃登窯３期の灯明皿（47）、萩焼の茶道用の碗（46）などがある。これらも18世紀末から19世紀代のものである。地方窯では鉄釉を施釉した汁吹（49）をはじめ、徳利（51）壺（59）擂鉢（66・67・73・74）や内耳鍋（61～63・68～70）があるが後者の一部は焙烙かもしれない。

廃棄土坑（集石）の陶磁器と土器　SX31・32に見るようにＷ地区では大半がもっとも新しい。SX18では底部に「カイ」の墨書のある常滑焼の茶瓶（83）や瀬戸系の秉燭（84）、SX34では漢詩「赤壁の賦」を記した瀬戸系の猪口（註１）がある。これらは19世紀以降の所産である。

（３）中世的やきもの組成から近世的やきもの組成へ

中世的やきもの組成　前項で今次調査で出土した陶磁器と土器について第１次～第３次の調査成果（笹澤・森・池田2003・2004）もとり込み調査地の土地利用の変遷に即して、芋川氏館跡出土のやきものについてまとめ、かつこの点から考えられる使用者の性格付けをする。

芋川氏が今の地に居館を構えた15世紀末頃から1598年の会津移住するまでの芋川時代の陶磁器と土器は中国産の青磁碗・白磁小皿などの磁器類、古瀬戸天目、大窯の鉄釉皿・端反皿、能登産の珠洲甕・壺と擂鉢、在地の土師器皿（カワラケ）や内耳鍋に加えて瓦質の風炉がある。中国陶磁と少量の瀬戸・美濃系陶器を食器とし、儀式用や燈明皿である土師器皿、煮炊用の鍋、茶の湯用の風炉、貯蔵用の珠洲甕と壺が今日まで明らかになっている芋川氏館時代のやきものであり、基本的には当町の矢筒城館跡（牟礼村教委1981・1988）や表町遺跡（笹澤・原田・小柳2014）、長野市栗田氏館跡（原1991、市川1994、田中2014）、中野市高梨氏館跡（中島1993）などと共通する。もっとも主郭部分に調査が及んでいる栗田氏や高梨氏館跡ではやきものの内容ははるかに豊かである。

近世的やきもの組成の樹立　次に慶長５年（1600）７月関ヶ原の戦い直前から1637年の福正寺創建までの間の陶磁器や土器は、柵列SA05構築時を示す掘方埋土出土の越中瀬戸小皿と東堀SD05中層出土の陶磁器がある。前者は16世紀末に瀬戸の工人が越中に来て開窯した初期の陶器で、芋川氏館の歴史的背景と発掘の成果を考慮すれば柵列の構築が関ヶ原の戦い直前であろうという時期決定の重要資料であるとともに、初期越中瀬戸の編年上の定点を示す資料となる。

東堀中層は関ヶ原の戦い以降は廃館となり、1637年の福正寺建立までの間に堆積したと考えられる土層で肥前陶磁Ⅰ期の初期唐津やⅡ期の碗と小皿、瀬戸・美濃大窯や登窯１段階の志野丸皿と中国陶磁に在地産の内耳鍋がある。肥前陶磁Ⅱ期や志野丸皿は17世紀前葉（大橋2000、藤沢2007）であるから、柵列設置より新しいもので、その使用者を確定することは困難である。むしろ芋川親正が建立したと寺伝（「寺社領并由緒書」）（信濃史料刊行会1976）に云う妙福寺が関わったものとする方が自然である。柵列の建設は親正が会津から派遣された配下の

者とするよりも、むしろ親正の要請により妙福寺が関係していたものと思われる。よって柵列及び福正寺創建までの陶磁器類は館に隣接していた妙福寺に係わるものと思われる。その陶磁器類は中国陶磁と在地の土師器皿（カワラケ）や内耳鍋に少量の瀬戸・美濃系からなる中世的やきもの組成にⅠ期の肥前陶磁と志野皿や越中瀬戸が加わるという近世的やきもの組成への転換期を意味していよう。そこには儀式用のカワラケが欠除していることも妙福寺とする根拠である。

近世的やきもの組成の展開　1637年頃の創建期のやきものは第１次整地層にあり、肥前陶磁１期と２期の唐津の碗と皿である。資料が少なく予想であるが、前代に始まった近世的組成は継続したものと思われる。福正寺は寺伝によれば越後頸城郡植苅村から移転したと云い（『長野県町村誌』）、越後と関係が深く、本寺である妙福寺もまた同様の寺伝（「妙福寺聖人木像縁起」）を持ち（小林・矢野ほか1980）、福正寺建立の従事者は肥前陶磁の受け入れが可能であったからである。

再建福正寺時代（1847年頃より以降）のやきものは肥前陶磁Ⅳ・Ⅴ期の陶胎碗が主体でこれに京焼や地方窯が加わるがこれらは18世紀末以降で、17世紀から18世紀代の状況は善光寺地震被災後の堆積層（12・14層）や善光寺地震崩落土層（17・18層）の資料だけでは分からない。しかしSD07などには前期福正寺時代に年代的に合致する陶磁器が多数あるので、それらを加えると肥前陶磁に依存したやきもの組成を見ることができる。かように18世紀代末以降は19世紀中頃の再建福正寺の第２次整地層出土のやきものにも見ることができるとおり、肥前陶磁を中心に地方窯が加わった近世的組成の完成期と思われる。善光寺平各地で始まった地方窯はすでにふれたとおり須坂の吉向焼などは別として、一般には肥前陶磁や瀬戸・美濃など広域流通の陶磁器の補完として生産を開始した。こね鉢や片口鉢、瓶など独自の器種を生みだすとともに、大型甕や火鉢など素焼の製品も生産した。

以上芋川氏館跡のやきものは中世的組成から近世的組成への変遷過程を垣間見る。資料数が決して多くないために器種別、産地別の比率は目安程度の意味しかないかもしれない。産地別では中国陶磁から肥前陶磁へ、器種別では碗・小皿類などの食膳具から鉢・大皿・瓶・水注・香炉など多様な器種を肥前陶磁に大きく求めたのである。しかし瀬戸・美濃系や萩・京焼などが全く用いられなかったのではなく、ごく低比率ではあるが使用していた。長野市松代城下町遺跡の調査成果では使用者相や時期によって産地別比率は異なるが、いずれも肥前陶磁の占める割合は高いものの瀬戸・美濃系陶磁の割合もまた決して低くない（西本2005）。同じ北国街道沿いにあるものの、マチとムラの相異、脇寺という小寺院と武家層との違いを反映したものであろうか、今後の検討課題である。併せて広域流通の陶磁器の搬入経路と方法も検討されねばならない。肥前陶磁は日本海まわり（大橋1992）で陸路北国街道を経てもたらされたものであろうが、瀬戸・美濃系はすべて中仙道経由としてよいかという点が課題として残る。

２．瓦（第27図、表７）

溝SD07、廃棄土坑SX18（８・10・15・16）・SX32（６・11～14）と第２層から少量の瓦が出土した。瓦は桟瓦（14）丸瓦（７・９・10）軒瓦（１～５）軒丸瓦（８）熨斗瓦（６・11）と鬼瓦（12・13）がある。軒瓦は桟瓦に瓦当を接合し、瓦当面には中心に蓮華文を置き左右に均等に唐草文を配している。参考とあげた軒瓦（１）は最近まで妙福寺鐘堂で使用されていたもので中心の文様は桐である。軒丸瓦の瓦当面は欠損して文様は不明である。熨斗瓦は角に釘穴がある。鬼瓦は細片のためどの部分にあたるか不明であるが、渦文が隆線で描いている。遺構内へはいずれも廃棄されたものである。

このほか大棟へ設置したと思われる瓦（15・16）があるが用途は不明である。

瓦の出土量は細片を含めても総数67片であり、投棄された状態で出土している所を見ると、いずれも明治時代

以降に廃棄されたものであり、福正寺の屋根材ではなく今日と同様に妙福寺の築地土塀用の瓦であろう。大棟用の熨斗瓦や丸瓦はそれを示していよう。今日でも妙福寺本堂は茅葺きであり、福正寺も同様であったと思われる。一般に今日でも豪雪地帯にある信濃町や飯綱町の多くの建物には瓦葺きは少ない。

３．石器・石製品（第28～30図、PL７、表８）

縄文時代中期の１点の打製石斧（１）と断面三角形の叩石（２）を除いては戦国期以降の石製品であり、調査地の多様な土地利用を反映している。石斧は芋川氏館跡主郭西南域で打製石斧５、磨製石斧１点が出土しており（笹澤・森・池田2004）、それらと関係するものである。

戦国時代以降の石製品は粉挽き臼上臼（34）石鉢（３～６）凹石（７）砥石（９～14・33）石硯（15～18・23）石盤（19～22）石筆（24・25）磨石（８）炭化物付着の円礫（26）五輪塔空風輪（27・28）地輪（29・30）石佛（31）と「矢」の痕跡が残る安山岩の建築石材（32）の13種である。

遺構別では廃棄土坑SX18から磨石（８）砥石（10）石盤（21）石硯（15）、廃棄土坑SX24からは叩石（２）、SX22から砥石（11）、SX44から砥石（12）、SX31から五輪塔空風輪（28）、溝SD07からは砥石（13）、東西溝SD10から石鉢（５）がそれぞれ出土し、遺構別では廃棄土坑が多い。これらの遺構はすでに述べたとおりいずれも第２次整地層よりも新しい。また、廃棄土坑に多いことは不要となった石などとともに埋めたてたもので、土坑の構築時期は出土遺物の年代の下限を示すものである。層位別では第２次整地層上層から石硯（16・17・23）石盤（19・20・22）石筆（24・25）がある。第２次整地層からは石鉢（３）砥石（９・12・14）石硯（18）円礫（26）、第２次整地層下部からは石鉢（６）五輪塔（27・29・30）石佛（31）建築石材片（32）粉挽き臼（34）がある。

よって、第２次整地層出土の石製品の年代は善光寺地震の起こった1847年以降に第２次整地層内に取り込まれたことになり、石製品としての使用年代の下限が得られる。第２次整地層下部は善光寺地震にともなう崩落層で、石製品の下限が1847年以前となる。

以上から、18を除く石硯の大部分、石筆・石盤は用途を考えれば、芋井学校時代の遺物としてよい。石筆と石盤は鉛筆の代用品として使用されたもので、石硯とともに芋井学校時代の学習活動を髣髴とさせる。また、砥石や石硯、石鉢は第２次整地層かその上位出土であり、埋没時期が知り得るので使用時期も推定できる。砥石は携帯用の小型砥石Ａ（10・13）、木枠に固定した砥石Ｂ（14）、固定式の大型砥石Ｃ（９・11・12）があり、前者には荒砥（14）も含む。第２次整地層とその上位から出土し時間差がある。中世後半から江戸時代初頭の集落（根小屋）である牟礼地区の表町遺跡では砥石は多くが小型携帯用砥石（Ａ）であって大型砥石は見られなかった（笹澤・原田・小柳2014）。この相異は時間差もあろうが、遺跡の違いも反映したものと云える。つまり、廃棄土坑SX22出土の大型砥石Ｃ（11）などは鍛冶用砥石であった可能性があり、鉄滓などとともに外部から廃棄された可能性がある。だとするならば、出土遺物から遺跡本来の性格を推定する資料とは成り得ないことになる。このほか、自然石に鉄製利器の研磨痕のある砥石Ｄ（33）がある。

石鉢は大型（３・４）と小型（５・６）がありともに黒灰色輝石安山岩製である（註３）。出土状態からは新旧があるが、用途や使用時期を推定するには資料不足と云える。

五輪塔は空風輪（27・28）と地輪（29・30）があり、水・火輪を欠くなど、石佛片とともに本来の位置を示すものではない。空風輪の風輪部側面には墨書痕が残るが、判読不能である。空風輪27は表町遺跡に似るが空風輪28とは異なり時間差がありそうである。おそらく時間差のある二種類の五輪塔は、石佛とともに出土しているので、近接地に墓域があったことを暗示している。

４．金属製品（第31・32図、口絵５－２、PL６－２、表９・10）

出土した金属製品にも多様な土地利用の反映が色濃い。腐蝕の進んだ微細な破片や薄板の一部など用途不明品を除けば、出土状況や材質などから、ある程度の推測が可能である。

金属製品には材質別では銅（１～５・７～17）鉛（６）鉄（18～26）の製品がある。銅製品では金銅（１・２）青銅（10・11）真鍮（８・12～17）があり金銅製品も含めた銅板（１～５・７）は第２次整地層（４層）出土が多く、寺院に関係した仏具などに係る遺物とすることができる。ただし、鏃（はばき）（10）や小柄（こづか）（11）などの刀装具類は芋川氏関係の遺物とすることができよう。鉛製品のサーベルの柄は２層出土で、近・現代の玩具、耳掻も出土状況から近・現代のものであろう。

煙管（キセル）は雁首・煙管・吸口からなり、これらが一体である少数の延べ煙管と雁首と吸口を竹でつなぐ羅宇煙管がある（小泉2001）。本遺跡ではすべて後者である。雁首と吸口の多くは真鍮製で、本例（12～17）も同様であり、吸口片である。いずれも蝋着痕をとどめる。口付から小口にむけてふくらみを持つもの（14・16・17）と直口（13・15）があり、菊花文を毛彫された例（15）もある。いずれも18世紀後半以降とされる（小泉2001）。SD07の１点（13）を除きいずれも第２次整地層出土で、年代的にも矛盾がない。喫煙が江戸時代末期に当地において盛んであったことを示すものであり、肥前産火入れの出土もこのことを後押しする。

鉄製品は断面方形の和釘（21・22・24）、円形の丸釘（23）と轡の引手金具（26）を除き用途は不明である。これらは第２次整地層上層または相当層出土で、近代以降のものであろうし、丸釘は明らかに新しい。また、用途不明の鉄製品のうち第２次整地層出土品（18）も含むが、いずれも江戸時代を大きく遡るものではない。

銭貨は77点がある。銭種の内訳は中国銭２、近代銅貨５、寛永通宝51、不明19点である。不明銭は銭差資料６点（６）を含み大多数は寛永通宝であろう。寛永通宝は寛永13年（1636）公銭として初鋳された古寛永（１など）と寛文８年（1668）初鋳の新寛永（２など）がある。前者は「寶」の字がスとなるもので16点と３割を占める点注目される。また新寛永には背に「文」をもつ文銭が５点（２・９・18－２・32・36）ある。このほか中国銭２枚は北宋の熙寧元宝（25）と明の永楽通宝（35）、近代銅貨では明治半銭・一銭と不明銅貨がある。

遺構別・層位別など出土状況ではSD07が３点（１・２など）、廃棄土坑（集石）では４点（３～５、整理番号28-２）、第２次整地層（４層）31点（７など）東堀埋土上層（14層）６点（10～12、整理番号34）、東堀埋土中層の北宋銭（25）がある。このほか最上層（１～３層）からは少量の寛永通宝と明治時代以降の近代銅貨がある。層位別の出土状態では土層の分析と矛盾はない。第２次整地層に新・古寛永通宝が集中して出土していることは再建時の福正寺における寛永通宝の流通状態をある程度示すものと思われる。つまり古・新寛永通宝が共に使用されていたのである。銭差状態で出土した例は認められたが、そこにも新古２種が混在しており、再建時の流通に共通する。また古寛永が３割を占めていることから、それを以って福正寺における貨幣経済の実態を示すものとするには早計である。

５．鍛冶関連遺物（第33図、PL６－２、表11）

鞴羽口（１～４・13・14）と鉄滓（５～12・15・16）がある。大多数が溝SD07の青黒色砂礫層（11層）上部の礫層出土（１～12）であり、廃棄された状態である。鉄滓は椀型で少量ではあるが、SD07の周辺部からも出土した（15・16）。器面に多数の炭化物片や砂粒を付着した例（５など）もある。鉄滓の中には鉄分を多く含む例も多い（10・12・15・16）。鞴羽口の直径は破片から体部径が復元でき、直径は７cm前後、空気孔径は3cm前後である。粘土製で器壁厚は2.5cm前後である。このほか鍛冶用と思われる大型砥石Ｃがある。廃棄時期は再建福正寺の移転（1909年）以降であろう。調査地の100m西南には昭和30年代まで操業していた鍛冶跡（SX08）

がある（笹澤・森・池田2003）。いつ頃から操業を始めたかはっきりしないが、信濃町古間の鍛冶集団から分離した小規模な鍛冶集団の行為結果を示すものである。

６．木製品（第34～37図、PL７、表12）

木製品には食関係の漆器・曲物などの容器、文具である木製硯、農耕具である犂・鍬先、土木・建築関係の柱・柵・杭と板材があるが、大半は小片が多く器種は不明である。器種別では杭が大多数を占める。尚、自然遺物ではオニグルミ・モモ・アンズ・ブドウなどの果実、コメ・ソバ・アサなどの栽培種子などが出土した。

犂（１）は自然木の股木を利用して犂床と犂柄（犂身）を作りだした一本造の長床犂である。一般に長床犂は組木によって犂ヘラと鉄製の犂先を着装するが、田中寿子氏によればこのような一木造の長床犂は類例がないと云う（註２）。犂は人力による足踏み式の鋤と牛馬に引かせる犂があって、後者は古墳時代後期以降、大陸または朝鮮半島から持ちこまれたものであり、牛・馬の飼育を伴なうもので、農村への普及は元禄から天明年間（1781～89）以降のことである（三橋時雄1985）。千曲市馬口遺跡で仁和４年（888）の洪水砂で覆われた水田面に犂先の痕跡が見られた（翠川2012）が、本例は杭列Ｂを伴なう溝SD13から鍬（２）とともに出土した。SD13は善光寺地震崩落土も考えられるところから、江戸時代後期18世紀末～19世紀前半代のものであり、長床犂の変遷と普及ひいては当地の農村史を考える上で、貴重な史料である。ハンノキ製。鍬（２）は先端幅が狭まる形である。先端に鉄製の鍬先を着装したものであるが、遺存していない。江戸時代末期に使用されたものでコナラ製である。長床犂とともに年代が分かる定点資料となり得る貴重資料である。

漆器は椀（３）鉢など５点がある。３はSD05埋土（20層）出土で椀底部で中世末期、他は第２次整地層出土である。鉢（口絵２－４）は第２次整地層出土で、木地が失われ赤の塗の膜のみ残存し、ウレタンで取り上げたものの実測は不可能である。

曲物は側板のヘギ板（12・14）、底板（４・９）と柄（17・18）がある。柄と小型の底板は柄杓であり、西堀から完形品２点が出土している。ヒノキやスギを素材としている。SD07（４）、SA05掘方２埋土内（18）、東堀埋土（12・14）などは、年代が知り得る資料である。ヘギ板の細片は他にもある。木製硯（６）は、石硯の代用品あるいは携帯用か。コナラを使用している。このほか籠の一部と思われるあみもの片（口絵２－５）や建築用材と思われる板材（19・23）などがあるが、用途は不明である。柵（57・58）柱（60・62・63）を除いて、木製品の大多数は自然木とともに杭がある。杭は枝または細い丸太材の先端を削ったものであるが、柱を転用したと思われる例もある（59・61・64）。柵と転用柱も含めた柱材はクリを用いている。杭もクリ（49・54ほか）が多いが、スギ（28ほか）マツ（29ほか）カラマツ（34ほか）など針葉樹が多用されている。その他にモモ（53）コナラ（48ほか）イヌエンジュ（30）がある。栽培種であるモモを用いている点興味深い。

註１　長野市埋文センター田中暁穂氏の教示による。なお詳細はいいづな歴史ふれあい館紀要に掲載予定である。

註２　犂には短床犂・中床犂・長床犂があるが、在来犂と近代以降の改良犂などの呼称もある（河野2009）。本稿で使用する用語は日本農業発達史調査会（1953）記載（307頁）の呼称に原則従った。なお犂身と犂床が一体の一本造りの犂は福岡県浮羽町（現うきは市）の在来中床犂がある（河野2009）。

註３　黒灰色輝石安山岩（And３）は多孔質・軟質で加工しやすく、輝石安山岩（And１）とともに飯縄火山岩のひとつである。表町遺跡では五輪塔・板碑・石鉢・石臼などの主要な石材として使用されている（笹澤・原田・小柳2014）。尚同報告では凡例で「無斑晶質」と表記したが、「黒灰色輝石」の誤りであり、訂正する。

第４節　種子鑑定

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

１．はじめに

芋川氏館跡は、長野県上水内郡飯綱町芋川に所在し、斑尾川沿いに立地する。利用された植物や周辺植生の復元を目的として、16世紀末以降に埋没したと考えられている東堀などから得られた大型植物遺体の同定を行った。なお、同定にあたり、千葉大学大学院園芸学研究科百原新先生よりご教示を得た。

２．試料と方法

試料は、東堀中など調査区内で取り上げられた17試料である。なお、同一試料中に複数の分類群が含まれていた場合は、細分番号を付した。東堀の埋没は別稿のとおりであるが、個々の試料の詳細な時期は不明である。

種実の抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても１個体とみなせるものは完形として数え、１個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、飯綱町教育委員会に保管されている。

３．結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のオニグルミ核とコナラ属果実、オオウラジロノキ果実、モモ核、アンズ核、サクラ属サクラ節核、ブドウ属種子の７分類群、草本植物ではアサ核とソバ果実の２分類群、計９分類群が得られた（表４）。得られた種実は完形21点、破片13点の計34点であった。

産出量はソバが最も多く完形12点破片５点、次いでオニグルミが完形４点破片２点、モモが完形３点破片２点であった。そのほかの分類群は１点ずつであった。なお、オニグルミには１点のみ齧歯類の食害痕がみられた。

以下に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

表４　芋川氏館跡出土の大型植物遺体

写真番号	試料No.	遺物番号	グリッド	遺構名	層位	分類群	部位	産出数	破片	備考
1	8	16	J10		20	オニグルミ	核	1		
2	11	19	H11	堀上面	12	オニグルミ	核		(1)	動物食痕
3	17	31	L11他			コナラ属	果実		(1)	
4	13	27	J10		19	オオウラジロノキ	果実	1		
5	5	12	J10		15	モモ	核	1		
6	1	5	L11		19	モモ	核	1		
7	2	7	J11		19	モモ	核		(1)	
8	16	30	I10		19	アンズ	核		(1)	
9	14	28	J11		20	サクラ属サクラ節	核		(1)	
10	12-1	26	J11		20	ブドウ属	種子	1		
11	12-2	26	J11		20	アサ	核		(1)	
12	15	29	L11他			ソバ	果実	12	(5)	
	3	9		堀		モモ	核		(1)	
	4	11	J09		17	モモ	核	1		
	6	14				オニグルミ	核		(1)	
	7	15	I10		20	オニグルミ	核	1		
	9	17	H10		4	オニグルミ	核	1		
	10	18			20	オニグルミ	核	1		

（１）オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino　核　クルミ科

黄褐色で、広卵形。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。計測可能な４点の大きさは、長さ28.5～31.1（平均30.2）mm、幅25.1～28.0（平均26.8）mm、厚さ23.0～26.6（平均25.4）mm。

（２）コナラ属　*Quercus* sp.　果実　ブナ科

暗褐色で、破片だが完形ならば楕円体か。柱頭および臍は残存していない。縦方向の細かい筋がある。残存長12.5mm、残存幅7.8mm。

（３）オオウラジロノキ　*Malus tschonoskii* (Maxim.) C.K.Schneid.　果実　バラ科

暗褐色で、球形。頂部に萼片が残って直立する。下端には円形の臍がある。長さ17.2mm、幅15.6mm。

（４）モモ　*Amygdalus persica* L.　核　バラ科

淡褐色～淡黄色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。計測可能な３点の大きさは、長さ23.4～27.6（平均25.0）mm、幅15.6～20.2（平均17.5）mm、厚さ12.6～14.8（平均13.7）mm。

（５）アンズ　*Armeniaca vulgaris* Lam. var. *ansu* (Maxim.) T.T.Yü et L.T.Lu　核　バラ科

淡褐色で、破片だが完形ならば上面観は扁平、側面観は円形。一方の側面では縫合線が発達する。表面には網目状の模様がある。縫合線付近には不規則な縦皺がある。長さ16.2mm、幅12.7mm。

（６）サクラ属サクラ節　*Prunus* sect. *Pseudocerasus* spp.　核　バラ科

淡褐色で、上面観は楕円形、側面観は円形～広卵形、上部がやや尖る。下端に大きくくぼんだ着点があり、一方の側面では縫合線が発達する。表面は平滑だが、縫合線付近には斜め方向の数本の条が入る。厚く硬い。長さ6.4mm、幅5.8mm。

（７）ブドウ属　*Vitis* spp.　種子　ブドウ科

黒褐色で、上面観は楕円形、側面観は下端が尖る卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面には縦方向の２本の深い溝がある。種皮は薄く硬い。長さ4.4mm、幅3.4mm、厚さ2.1mm。

（８）アサ　*Cannabis sativa* L.　核　アサ科

淡褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ4.3mm、幅3.5mm。

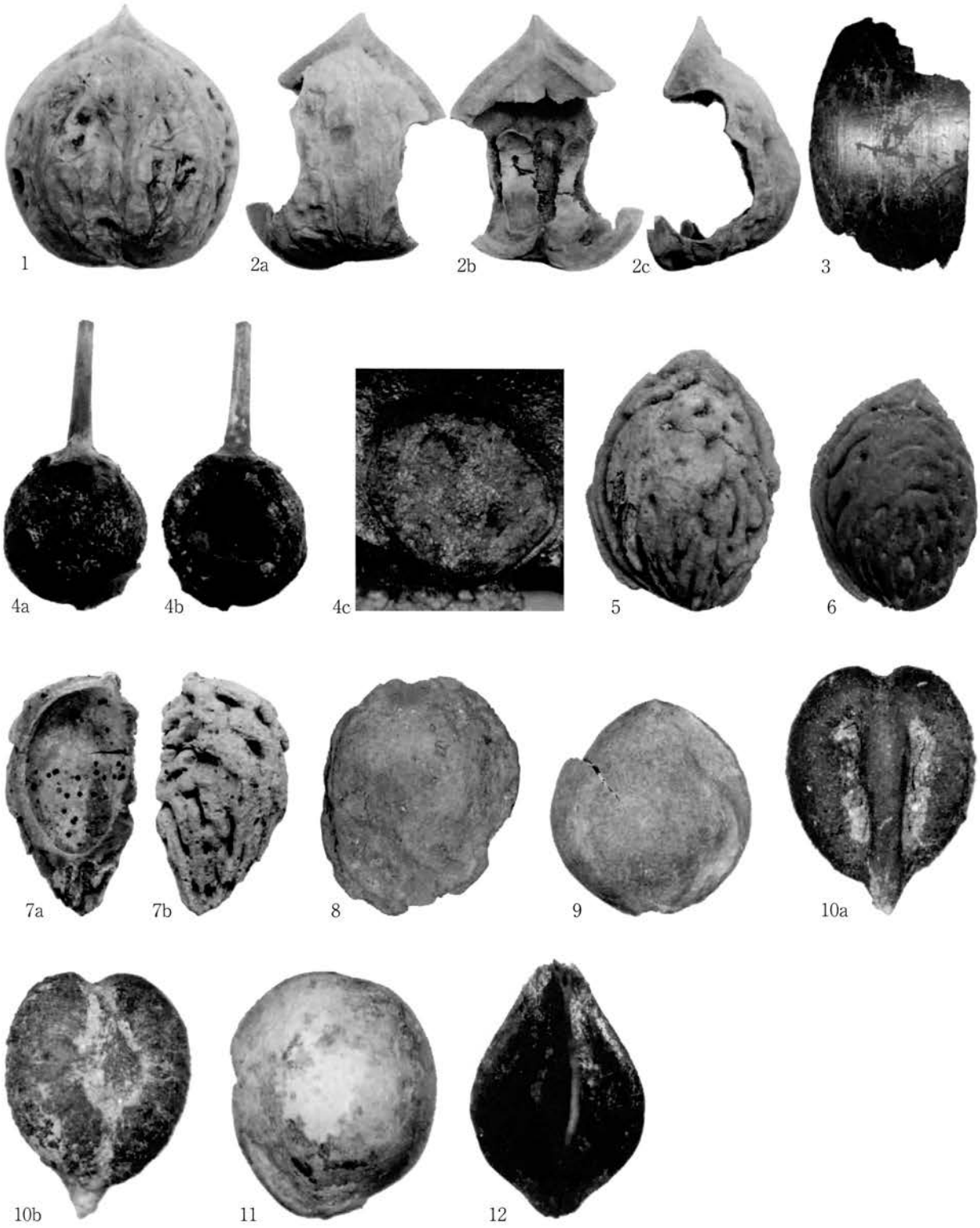
（９）ソバ　*Fagopyrum esculentum* Moench　果実　タデ科

茶褐色で、横断面が正三角形の三稜形。着点付近には膜状の果皮が残存する。長さ7.0mm、幅5.8mm。

４．考察

芋川氏館跡からは、栽培植物で果樹あるモモとアンズ、畑作作物であるアサとソバ、食用や薬用などに利用可能な野生植物であるコナラ属とオオウラジロノキ、サクラ属サクラ節、ブドウ属が取り上げられた。これらの植物が館跡の近くに生育あるいは栽培されていた可能性もあるが、食用のために持ち込まれ廃棄された可能性もある。モモなどは、祭祀行為に使用された可能性などが考えられる。今後、樹種同定や花粉分析を併用することにより、周辺の植生についてはより詳しく検討できると期待される。

註　種子鑑定は２回にわたり、本鑑定は２回目のもので、第１回と異なる点はイネ（東堀19・20層）、シラカシ（19層）、トチノキ（15・19層）であり、他は共通するので割愛した（笹澤）。



スケール　1－3，5－8：5mm，4a-b：10mm，9－12：1mm，4cは任意

挿入写真４　芋川氏館跡出土の大型植物遺体（　）内は試料No.

1．オニグルミ核（No.8）、2．オニグルミ核動物食痕（No.11）、3．コナラ属果実（No.17）、4．オオウラジロノキ果実（No.13）、5．モモ核（No.5）、6．モモ核（No.1）、7．モモ核（No.2）、8．アンズ核（No.16）、9．サクラ属サクラ節核（No.14）、10．ブドウ属種子（No.12-1）、11．アサ核（No.12-2）、12．ソバ果実（No.15）

第5章　まとめ

1．本稿の目的と前提

芋川氏館跡第４次発掘調査は、館跡と妙福寺参道間の581.6㎡で、地元の田中公会堂建設に伴う緊急調査であった。しかし、小面積の調査ではあったが、この地方の地域史を語る上で数々の成果をあげることができた。本稿では、第１～３次調査も含めて、芋川氏館跡に係わる成果と課題を以下の４点についてまとめる。１点目は芋川氏の防御施設、２点目は館と寺の二重構造、３点目は柵列について、そして４点目は今後の課題である。よってここでは前章ではふれなかった妙福寺や山城についても言及する。また前提として以下の３点を確認しておく。

前提の１点目は遺跡の呼称についてである。これについては過去にふれている（笹澤・森・池田2003）が再度以下に述べる。

居館跡が芋川氏の居館であるという根拠は芋川という地名と地元に伝わる伝承以外に以下の史料がある。ひとつは永禄12年（1569）の武田信玄の芋川親正あての手紙（『信濃史料』13の281）において「其堺」（信越国境）についての様相を訪ねており、芋川氏の領域を伺い得る。

２点目は天正10年（1582）４月の「芋川の乱」における『信長公記』の記載である。芋川親正は、「芋川の乱」で織田軍に大敗北をするが、信長の死去によって北信を制圧した上杉景勝により天正10年７月26日本領安堵の上、香坂・大岡（長野市信州新町・大岡）を宛がわれている。ここでいう本領には芋川の地を含むであろう。この時には別に景勝は牧之島城（長野市信州新町）の掟書を下付しており（『信濃史料』補遺上の578）親正は城主として城の全権を委任された。その理由はこの地方が「小笠原貞慶の北進と安曇郡諸土の向背とが連動して、もっとも緊迫し、かつ不安定な前戦基地であった」（池上1998）からである。

国人層の多くが苗字を本領地の地名を冠しており、以上により芋川氏館跡として「伝」をはずした理由である。

３点目は館跡の規模についてである。今回調査で東堀を確認したことにより主郭の規模及び平面形が一辺60m規模であることが判明した。前回調査時より主郭の東西径が8mほど大きくなったが、市川隆之氏の北信地方の居館分類の半町規模である点は変わらない。市川氏は居館を１町規模・半町規模・30m規模の３種に分類し、14世紀代に半町規模がまず出現し、以後１町規模・30m規模に分化するとし、規模と出現時期から国人層について言及した。（市川1997）。しかし、国人層の判明している居館跡の調査例が乏しく一般化するにはさらに検討が望まれる。芋川氏館跡の出現時期は半町規模ではあるが15世紀末頃で市川編年には当てはまらない。しかし、市川氏が指摘するとおり館の規模は構築時の国人層の力関係を示すものである。例えば、１町規模の栗田氏や高梨氏居館は北信の有力武将の居館であり、芋川氏館跡は中段階の国人層の居館となる。また居館の中には武田氏によって山城の機能を吸収した平城が出現する。海津城（長野市松代）や長沼城（長野市長沼）などであり、武田氏の信濃攻略の拠点となる。

以上により芋川氏館跡は出土遺物で見る限り戦国時代の居館で、芋川親正が牧之島城主となっても本貫地の居館として機能していた。しかし主郭内部は西南域（笹澤・森・池田2004）以外は未調査で実態不明である。

2．芋川氏の防御施設

芋川氏の防御施設は館跡と山城がある。柵列は芋川氏が信州を離れた後の施設であるので後段で扱う。この地の国人芋川氏の存在は甲越対立抗争の中で、極めて微妙な立場にあった。これは矢筒城を構える島津氏とて同じ

立場にあった。矢筒城の堀の構造は不明であるが芋川氏の防御施設には障子堀を設けるなど腐心の跡が伺える。障子堀は従来から小田原の後北条氏の城郭を代表する防御施設と云われてきたが、多くの城館の発掘調査例から、小田原氏の領国内にとどまらず、広域に見られることが判明しつつある（池田1998・1999、中世城郭研究会1999)。しかしその情報の入手先は未だ解明できずにおり、依然として課題として残されている。

芋川氏の防御施設は戦国期の国人層と同様に山城と居館である。従来芋川氏に係わる山城には、館の西方背後の城山山頂にある鼻見城と、斑尾川を2km 遡った山間にある若宮城とされてきた。

鼻見城は「本丸跡」と「二・三の丸」と呼ぶ３ヶ所の平場からなる。詳細な縄張図は作成されておらず、細部は不明である。「本丸跡」は最高所にあり、東西25m 南北6m の平場で空堀で囲まれる。山城自体は全体に小規模であり、帯曲輪も少ない。

若宮城は斑尾川水系が狭まり、深い渓谷に面し斑尾川とその支流に挟まれた尾根先端の山塊を山城としている。

鼻見城に比較して若宮城は曲輪・土塁・堀切・竪堀など山城としての機能を整えているところから、応永11年（1404）の足利幕府代官細川慈忠によって攻め落とされた「下芋河之要害」をこれにあて、さらに「防備施設が複雑で念が入っている所」から、戦国時代に施設を増強したとして、芋川氏の山城とし、鼻見城を補助的な山城とする見解が一般的であった（小林・矢野ほか1980)。これに対して遠藤公洋氏は詳細な縄張図を元に、この山城の独自性から、武田家滅亡後の織田軍の越後侵攻に備え急遽築城した上杉側の山城であるとした。さらに氏は若宮城は「尾根を土塁に見立て、谷部分の空間を利用する構造」であり、越後の山城と、北信地方の髻山城（長野市・飯綱町）や野尻城（信濃町)、矢筒城（飯綱町）などにも認められ、「総体として空間確保を最優先した臨時的な普請の様相がうかがえる」もので、吉江与太郎らに宛て出された卯月18日付上杉景勝書状にある「新地普請」の城で築城には芋川氏などの協力も得て実施されたものとする（遠藤2009・2013)。遠藤氏の主張のとおり若宮城の立地する斑尾川水系はすでに指摘してきたとおり、越後と中野・飯山を結ぶ云わば軍用道路の役割を担っており、狭い谷間を眼下に、織田の大軍に立ち向かうには最適の備えであると云えよう。館跡から2km と離れた地点に立地する理由と「若宮城」を「新しい城」と理解すればこの呼称も説明がつく。

もともと若宮城については芋川氏の構築に係わるという伝承が地元には強い。主郭の一角に明治７年（1874）に建てられた「芋川古城の碑」には芋川氏の出自と若宮城との関係が記されている。そこには応永年間に足利幕府に攻められて芋川氏が滅亡し、楠正成の子孫が跡を継ぐなど、楠氏との係わりが示されている。応永年間の記載事項は応永11年の下芋川の要害のことである。

したがって、遠藤説によって、芋川氏の山城は鼻見城のみとなる。しかし鼻見城が山城としては簡易な構造で、障子堀で囲まれた堅固な館とは落差が大きい。はたして簡易な山城であるか、今後の調査・検討が望まれる。同様に若宮城が遠藤氏の主張どおり臨時的に構築されたにせよ、その後の管理など疑問が生まれる。若宮城成立の契機は遠藤氏の主張どおりとしても、若宮城が芋川氏の城であるという伝承から織田軍撤退以降は芋川氏の管理下に置かれていたものと思われる。発掘調査などでさらに詳細な検討が望まれる。

３．芋川氏館と妙福寺の二重構造

西に芋川氏館、東に妙福寺が併置されているところから、郷道哲章・臼田武正両氏は、館跡を主郭、妙福寺を副郭とする中世館の二重構造説を唱えた。長野県の中世城館跡の集成を意図したもののため根拠は特に記されていない（郷道・臼田1983)。

妙福寺は森尾山妙福寺と呼び真宗東本願寺末寺であり、本尊は阿弥陀如来で、本堂・庫裡・鐘楼からなる。貞永元年（1232）下総国の荘司鎌田兵衛政清の子政成が、下総国鎌田村に建立、その後兵火にかかり越後国箱井に

移転、再び兵火にかかり元亨二年（1322）現地に建立するも寛永元年本堂を焼失、現在の本堂は寛文元年（1661）に建立したと寺伝には伝える（「妙福寺聖人木像縁起」ならびに「妙福寺秀瑩師の屋根換時の文」）（小林・矢野ほか1980）。飯山藩の「寺社領并由緒書」（信濃史料刊行会1976）には「開基永禄十卯年（1567）芋川越前守殿造営」とある。妙福寺の前歴はさておき、永禄10年（1567）、芋川親正によって、館に併設したものと思われる。妙福寺もまた芋川氏館の東堀と斑尾川そして現状の地形からも、東西にすくなくとも土塁や堀に囲まれていた可能性がある。調査地では、館の南堀は妙福寺まで延長してはいなかったが、参道東側から斑尾川にかけて築地にそった低い水田と北側の地形から、東は斑尾川を利用し西は館の東堀を、そして南北は妙福寺の築地塀に沿った防御施設が予想できる。今次調査では築地塀沿いは未調査であったため妙福寺の防御施設の具体的内容は今後に委ねられることになる。

館跡を妙福寺と一体としてとらえた研究者は先述のとおり、郷道哲章・臼田武正両氏である（郷道・臼田1983）。政庁の場である館と宗教施設である妙福寺の二重構造は、上越市にある越後の守護所跡と至徳寺跡（金子2003）など類例はいくつかある。芋川館の二重構造が館創立の当初からであったとは思えない。芋川氏館の建立が15世紀末と思われるので、永禄10年創建の妙福寺は、のちに館に併設したことになる。この永禄年間は、永禄４年（1561）の川中島の戦いの激戦のあと、上杉謙信が関東各地の転戦の間に、武田信玄が北信国人層を取り込み、国境に近い飯山・野尻城のみが、上杉方の拠点となり、それも武田軍の攻撃にさらされていた（池上1998）。芋川親正もまた武田側につかざるを得ず、永禄12年（1569）に信玄は親正に国境の様子を伺う手紙を出している。よって、妙福寺を館に併設した大きな理由は甲越抗争の中で、自身の保全を目的に、一向宗の勢力を取り込むことにあったと思えるのである。

武田氏滅亡のあとに織田信長は信濃攻略を開始し、北信４郡は配下の森長可が支配するところとなる。これに対して、北信の国人層は叛乱をおこす。それが天正10年（1582）４月４日の芋川親正を大将とする数千の浪人・百姓らの一揆いわゆる「芋川の乱」である。まず、飯山城を包囲する織田軍の稲葉貞通を攻めるが、織田軍の援軍により敗北し、大倉城（長野市豊野町）に婦女子一族数千とともに立てこもる。４月７日には織田方の長沼城（長野市長沼）を攻めるが海津城（長野市松代）からかけつけた森長可によって大敗北し、大倉城にいた婦女子、子供など数千人が殺戮されたと云う。乱の背後には上杉景勝がいたと云われる。この「芋川の乱」は池上裕子氏によって、一種の一向一揆の性格があったと云う（池上1998）。小山丈夫氏も飯綱町から長野市北部の寺院や旧家に出自が三河門徒であったという伝承が多くみられることを検証して池上説を補強している（小山2000）。こうした三河国一向一揆を弾圧した織田信長に対する云わば怨念が乱の大きな要因とするのである。芋川親正が一向宗の熱心な信者ゆえに妙福寺を併設しただけではなく、最大の目的は織田信長に対する怨念を持つ一向宗徒の取り込みにあったからである。妙福寺出身の元長野市埋蔵文化財センターの調査員であった中殿章子氏によると家人がゴミ穴を掘った時に多量のカワラケが出土したことを子供ながら見聞きしたと云う。妙福寺が寺院であるとともに軍事的要塞であったことを物語るものである。土師器皿（カワラケ）は戦国武将にとって儀礼用の祭器であるからである。今後妙福寺内の調査が及ぶ機会があればぜひ確認したい点である。

なお、妙福寺の前身に蓮証寺があったと『三水村誌』にある。蓮証寺は西本願寺末寺で近江国から永禄３年（1560）に芋川中峯の地に移転し、寛文７年（1667）に飯山藩主に請われて飯山市奈良井沢の地に移転した真宗寺院で、芋川時代には、妙福寺ほか８ヶ寺ほどの寺院を末寺とし、門徒も1000戸あり、移転に際してそれらを離檀したと伝える。『三水村誌』には永禄３年に館跡に建てられ寛文７年に移転したとあるが妙福寺が永禄10年に建てられるので矛盾している。もっとも別の記載では廃寺跡蓮証寺領の墓として、町部落の背後地を比定している（小林・矢野ほか1980）ので、館跡は誤解である。このように芋川中峯に真宗の寺院として構えていたから芋

川氏と深い関係にあったのであろうか基本的にはよくわからない。寺伝にあるとおりとすれば芋川氏との関係は見られないところから、芋川氏の会津移住後建立されたものと思われる。

同様に現在芋川氏の菩提寺とする苔翁寺が町部落に近接している。芋川氏によって建てられたという伝承を持つ古刹である。元真言宗寺院であったが永禄元年戦火により堂宇消失し、元亀２年芋川金七が再建曹洞宗に改めたという。現在芋川親正の墓があるが、弘化４年に芋川氏一族の柏原村（現信濃町）の中村家が米沢芋川家から分骨したものである（小林・矢野ほか1980）。なお現在の墓は城主を務めた福島市大森城跡にある（小林・矢野ほか1980）。

苔翁寺は芋川氏に係わる伝承をもち芋川時代の根小屋の一隅を占めるところから芋川氏と関係のある寺院であったことは間違いがない。しかしそこに前身芋川氏館があったとする見解もあるが、現状ではそれを語る資料はない。

４．柵列の設置と館の再防御

調査範囲が狭く調査例から柵列の設置について普遍化することには抵抗もあるが、その意義については後段にふれる。

さて、柵列 SA05 堀方２の埋土から越中瀬戸Ⅰ期の小皿１点が出土し、柵列構築の年代がほぼ確定した。これは柵の検出状況とも矛盾しない。第２次調査においては西堀外縁の柵列などは確認できなかったが今次調査における柵列の確認時には、土塁と堀に加えて柵列の３施設による防御システムを想定したが、越中瀬戸の出土などによって、堀との年代差が明らかになり、別な解答が必要となった。

芋川氏は甲越抗争の中にあって、常に危機的状態の中にあった。これは北信の国人層とも共通し、その時々の政治状況により、甲越いずれに身を置くかによって、自己の存続に深く係わっていたのである。芋川氏も上杉方に身を置いていたが、永禄４年（1561）以降の数年の間は武田側に属した。こうしたなかで芋川親正が積極的に事態打開に動いたのが、一向宗徒とともにおこした天正10年（1582）４月４日の「芋川の乱」である。一揆側の大敗北によって上杉景勝は織田軍の侵攻に備えて飯山城と野尻城を二大拠点として、その中間点である芋川の地に若宮城を構築したとする理解は無理がないし、その直接の契機は遠藤公洋氏（遠藤2009・2013）が明らかとしている。こうした対織田軍の対応施設として、芋川館の再防御も考えられるが越中瀬戸の開窯が宮田進一氏の研究（宮田1988）から無理となる。そこで越中瀬戸Ⅰ期の上限である16世紀末以降で、館の防御体制を強固にする歴史事象は芋川氏会津移住の慶長３年（1598）正月以降から関ヶ原の戦いの慶長５年７月の間における上杉・石田方と徳川との政治的緊張関係にあるとしたことはすでに述べた。これには百姓を除く芋川氏一党がすべて会津へ移住したのかという疑問点と妙福寺などの一向宗（浄土真宗）の寺院や門徒など親芋川勢力の存在がどう係わっていたのかという点である。豊臣秀吉死去後は北信は慶長５年（1600）２月家康配下の森忠政の入封もあって、どの程度移住が徹底していたか定かでない（古川2000）が、柵列設置など館の再防御体制は芋川氏の指示のもと、在地の妙福寺など親芋川氏勢力によってなされた点はすでに述べたところである。しかし、一地方のしかも極めて小さな館跡の防御が、日本の政権の趨勢を左右するものではないであろうが、上杉方の情報入手の一拠点として、かつての上杉支配下に多数存在とすれば情勢は変わってくる。今後は史料的裏付けと、類例を考古学的方法で集成・検討することにあろう。

５．芋川氏館跡調査の課題

東堀外縁にそって構築された柵列の評価は調査範囲が狭く、妙福寺側は未調査域が多く、結論を出すには早計

であるという反論もあり得る。それでもあえてこの点について触れる最大の理由は、各地に残る館跡の現状にある。特に都市部にある館跡は調査されることなく消え去ることは、さすがに耳にしなくなったが、長野県内の館跡について云えば全く問題がない訳ではない。特に堀外縁の調査例は皆無といってよい。文化財指定も、本遺跡がそうであるように、主郭部のみが指定対象とされ、堀が除外されている例が結構長野県には多い。堀の分布範囲が不明であることも原因であろうが、それだけのことではない。堀または堀外についての知見が乏しく、調査の対象から除外されるという悪循環に陥っていることにあろう。しかし本報告で示したとおり、僅かに残された柵列にも地域史を紐解く貴重な資料がひそんでいる。根小屋との関係も含めて堀外の調査も視野に入れてゆかなければならないと考える。したがって本報告が中・近世史研究や文化財保護に対して歴史考古学からのささやかなアプローチである。

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会考古部会　2007『愛知県史　別編　窯業２中世・近世瀬戸系』愛知県

青木和明・市川隆之・河西克造　1994『栗田城跡（２）』長野市教委

浅野純一郎　2009「都市的スケール、都市計画的視点からみた善光寺とその門前町」『善光寺とその門前町』長野市教委

安藤　裕ほか　1977『信州の焼き物』信濃毎日新聞社

池上裕子　1998「戦国期北信の武士と上杉氏の支配」『史誌研究ながの』第５号　長野市公文書館

池田光雄ほか　1998『テーマ「障子堀」について』第15回全国城郭研究者セミナー実行委員会　中世城郭研究会

池田光雄　1999「障子堀について（発表要旨）」『中世城郭研究』第13号　中世城郭研究会

石田茂作　1975「Ｖ特論伽藍配置の研究」『新版考古学講座　第二巻寺院』雄山閣

市川隆之　1994「栗田城出土の遺物と若干の考察」『栗田城跡（２）』長野市教委

市川隆之　1997「中世の遺構と遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15－長野市内その３－石川条里遺跡　第１分冊』長野県埋蔵文化財センター

井上喜久男　1988「美濃陶磁器研究の現状」『考古学ジャーナル』No.297

井上喜久男　1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社

遠藤公洋　2009「髻大城と長野県北部の城館遺構―横堀遺構に着目した再評価の視点―」『市誌研究ながの』第16号　長野市公文書館

遠藤公洋　2013「若宮城」「髻山城」『長野県の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版

大橋康二　1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社

大橋康二　1992「近世における肥前陶器流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集　国立歴史民俗博物館

大橋康二　2000「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

大橋康二　2004『世界をリードした磁器窯・肥前窯』新泉社

大橋康二ほか　2004～2008『古伊万里の見方』１～５　九州陶磁文化館

小川　望　2001「銭貨」『図説江戸考古学研究事典』柏書房

金子拓男　2003「至徳寺跡」「総論にかえて」『上越市史叢書８考古―中・近世資料―』上越市

唐木田又三　1974「赤塩窯物語」『赤塩学校百年誌』

唐木田又三　1993『信州松代焼』信毎書籍出版センター

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』

小泉　弘　2001「喫煙―煙管」『図説江戸考古学研究事典』柏書房

郷道哲章・臼田武正　1983『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』長野県教委

河野通明　2009「福岡県の在来犂―民具から見た６－７世紀の福岡県域―」『商経論叢』44巻第１・２合併号　神奈川大学経済学会

小林計一郎・矢野恒雄ほか　1980『三水村誌』三水村

小柳義男　2012「第２章　遺跡の環境」『小野遺跡』飯綱町教委

小山丈夫　2000「戦国時代の太田荘」『豊野町の歴史―豊野町誌２』豊野町誌刊行委員会
小山丈夫　2007「コラム牟礼宿周辺の被害と富くじによる復興」『1847善光寺地震報告書』中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会
笹澤　浩・原田勝美・佐藤慶二ほか　1986『前高山窯跡群』牟礼村教委
笹澤　浩・池田　陸・森　佳也　2003『芋川氏館跡発掘調査報告書』三水村教委
笹澤　浩・池田　陸・森　佳也　2004『田中下土浮遺跡・芋川氏館跡（第３次）発掘調査報告書』三水村教委
笹澤　浩・小柳義男・市村勝巳・中村由克　2012『小野遺跡』飯綱町教委
笹澤　浩・原田勝美・小柳義男　2014『表町遺跡』飯綱町教委
信濃史料刊行会　1953『信濃史料』第３巻　信濃史料刊行会
信濃史料刊行会　1969『信濃史料』補遺巻上　信濃史料刊行会
信濃史料刊行会　1976『新編信濃史料叢書』第14巻
田口昭二　1983『美濃焼』ニュー・サイエンス社
田中暁穂　2014『栗田城跡（４）』長野市教委
中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会　2007『1847善光寺地震報告書』内閣府
中世城郭研究会　1999『中世城郭研究』第13号　中世城郭研究会
土本俊和ほか　2009「善光寺とその門前町の伝統的建造物」『善光寺とその門前町―善光寺周辺伝統的建造物群保存予定地区調査報告書』長野市教委
中島庄一　1993「中世土師皿」『高梨氏館跡』中野市教委
鶴巻康志　2003「至徳寺遺跡－中世後期以降」『上越市史叢書８考古―中・近世資料―』上越市
長野県　1936『長野県町村誌―北信編』（複製版　同1985郷土出版社）
西本正憲　2005「松代城下町出土陶磁器の様相」『松代城下町跡―中木町・西木町・紺屋町―』長野市教委
日本農業発達史調査会　1953『日本農業発達史』１巻　中央公論出版
原　明芳　1991「遺物」『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡（３）』長野市教委
藤沢良祐　1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館
藤沢良祐　2007「総論―瀬戸大窯の時代」『愛知県史別編中世・近世・瀬戸系　窯業２』愛知県
古川貞雄　1987「第二章第一節徳川政権の成立と信濃」『長野県史通史編近世一第四巻』長野県史刊行会
古川貞雄　2000「第三章第一節豊臣氏の支配から幕藩体制へ」『豊野町の歴史　豊野町誌２』豊野町誌刊行会
三橋時雄　1985「すき　鋤・犂　耕転農具」『日本歴史大辞典』６　河出書房新社
翠川泰弘　2012『長野県千曲市屋代遺跡群馬口遺跡（８）』千曲市教委
宮田進一　1988「越中瀬戸の窯資料（１）」『大境』第12号　富山考古学会
牟礼村教育委員会　1980『矢筒城館跡』牟礼村教委
牟礼村教育委員会　1988『矢筒城館跡（第２次発掘）』牟礼村教委
矢野恒雄　1993「若宮城」『信州の山城』信毎書籍
湯本軍一　1987「第三章戦国の争乱と信濃　第一節応仁・文明期の信濃」『長野県史　通史編中世二　第三巻』長野県史刊行会
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

表5　芋川氏館跡出土古代～近代土器・陶磁器観察表

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			類別・産地など	器種	形態	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
			グリッド	遺構名	層位					口径	底径	器高					
1	6		J11			須恵器 在地	坏B		9C		6.8		ロクロナデ　付け高台	硬	青灰	1/4	
2	27	149	J11			須恵器 在地	坏C				6.4		ロクロナデ　付け高台　糸切	硬	青灰	1/4	
3	10		I11		15	須恵器 在地	坏C				5.2		ロクロナデ　付け高台　糸切	瓦質	暗灰	1/4	
4	13		K10		18	須恵器 在地	坏C				7.0		ロクロナデ　付け高台　糸切	瓦質	暗灰	1/4	
5	3		H09		17	須恵器 在地	坏C				6.0		ロクロナデ　付け高台　糸切	石英 瓦質	暗灰	1/3	
6	20		J11		20	須恵器 在地	蓋			17.0			ロクロナデ	硬		1/10	
7	2		K12		14	土師器 黒色土器	坏			16.0	7.0	5.1	ロクロナデ　(内)ヨコ・タテヘラミガキ　(底外)糸切ののち手持ちケズリ		褐	1/4	
8	4		H10		21	土師器 黒色土器	坏			16.0	7.6	5.0	ロクロナデ　口縁外反　(内)ヨコヘラ　タテヘラミガキ		暗褐	1/4	(外)ヘラ跡あり
9	14		H09		2	土師器 黒色土器	坏			15.2			ロクロナデ　(内)ヨコ＋タテヘラミガキ	硬		1/4	
10	5		K11		11	土師器 黒色土器	坏			14.0	6.6	5.0	ロクロナデ　(内)ヨコ＋タテヘラミガキ　(底)手持ちケズリ(右)	高温石英微	暗茶	1/3	
11	7		L12		12	須恵器	皿			16.4			ロクロナデ	瓦質		1/6	
12	603		G11		2	灰釉陶器 東濃	皿		光ヶ丘		6.6		ロクロナデ　付け高台　内面ハケ　重ね焼き痕	密	灰白		
13	11		H11 I09・10		20	土師器 黒色土器	埦				5.0		ロクロナデ　磨滅　糸切		茶灰		19・20・21層接合
14	12	143	I10		20	土師器 黒色土器	埦				8.6		ロクロナデ　底部下～底中央手持ちケズリ　中央に糸切痕　(内)タテヘラミガキ	石英 微	茶褐	1/3	
15	229		H11		14	土師器	小型甕			13.2			ロクロナデ				
16	228		H09 I10		20	土師器	大型甕						ロクロナデ　(内)カキ目　口縁～体部3段ナナメハケ			1/10	
17	148			SD07	11	陶器　肥前	小碗	丸形	Ⅰ-2	8.0			透明釉		暗黄灰	1/8	
18	123		I07	SD07	11	陶器　肥前	小皿	溝縁	Ⅱ	11.0			透明釉		暗褐	1/10	
19	156		H11	SD07	11	陶器　肥前	小皿	溝縁	Ⅱ	13.0			透明釉、灰釉		白灰	1/15	
20	141		H11	SD07	11	磁器　肥前	小皿	丸形	Ⅲ	12.3			染付、呉須		灰白	1/5	
21	619			SD07	11	磁器　肥前	碗	筒形	Ⅲ	11.2			染付、呉須			1/8	
22	168		H10	SD07	11	陶器　肥前	碗	端反	Ⅳ	11.0	4.4	10.0	蛍手碗、刷毛目文、高台露胎、ハマ、白泥、透明釉		暗褐	2/3	
23	103		H09	SD07	11	陶器　肥前	碗	腰張形	Ⅲ・Ⅳ	14.2			透明釉	やや粗	黄灰	1/5	
24	116			SD07	11	陶器　肥前	碗	丸形	Ⅲ・Ⅳ	12.8			透明釉	やや粗	黄灰	1/6	礫群
25	102		K10	SD07	11	陶器　肥前	碗	丸形	Ⅲ・Ⅳ	11.2			透明釉	やや粗	黄灰	1/5	
26	104			SD07	11	陶器　肥前	碗	丸形	Ⅲ・Ⅳ	10.2			透明釉	やや粗	黄灰	1/4	
27	101	196	H11	SD07	11	陶器　肥前	碗	丸形	Ⅲ・Ⅳ		5.4		透明釉	やや粗	黄灰	1/2	
28	125	193	H11	SD07	11	陶器　肥前	碗	丸形	Ⅳ		5.0		透明釉、底部見込みにハマ痕	やや粗	黄灰	1/4	
29	107			SD07	11	陶器　肥前	碗		Ⅲ・Ⅳ		5.2		透明釉	やや粗	暗黄灰	略存	
30	94	235		SD07	11	磁器　肥前染付	碗		Ⅱ		5.0		透明釉、高台内無釉、網目文		淡い明緑灰	1/5	
31	89			SD07	11	磁器　肥前染付	碗	丸形	Ⅳ	9.6			呉須、外面青緑色釉、四方襷文、内面透明釉		白灰	1/8	
32	99	211	I09	SD07	11	磁器　肥前染付	碗	丸形	Ⅴ	10.0	4.0	5.1	呉須透明釉、草花文、白毫ある人物画(仏画)、高台内に文字		白灰	2/3	
33	136	221		SD07	11	磁器　肥前染付	碗	丸形	Ⅴ	10.4	4.2	5.0	透明釉、呉須、梅樹文	密	白灰	1/3	
34	85 -2		I07・08	SD07	11	陶磁　肥前陶胎	碗	丸形	Ⅴ				透明釉、呉須、梅樹文	やや粗	灰白	1/12	
35	85		I08	SD07	11	陶磁　肥前陶胎	碗	丸形	Ⅴ				透明釉、呉須、2重圏線	やや粗	灰白	1/12	礫群
36	629		H09	SD07	11	陶磁　肥前陶胎	碗	丸形	Ⅳ	10.8			透明釉、呉須、2重圏線、草花文	やや粗	灰	1/6	平戸あるいは波佐見窯
37	72	199	H09	SD07	11	陶磁　肥前陶胎	碗	丸形	Ⅴ		5.0		透明釉、呉須、草花文、畳付釉剥ぎ	やや粗	灰白	1/4	礫群
38	97		I08	SD07	11	陶磁　肥前陶胎	碗	丸形	Ⅴ		4.4		透明釉、呉須、畳付釉剥ぎ	やや粗	灰白	1/5	
39	115	221	I09	SD07	11	陶器　地方窯		丸形		12.2			透明釉	やや粗	灰	1/5	
40	149			SD07	11	磁器　肥前青磁	香炉		Ⅳ				釉(口縁内面端部まで)	緻密	白	1/10	
41	132			SD07	11	磁器　肥前青磁	香炉		Ⅴ		9.0		青磁、高台内蛇ノ目釉剥ぎ、鉄漿	緻密	白灰	1/5	
42	143		I09	SD07	11	磁器　肥前染付	香炉		Ⅴ	8.4	7.4	6.7	口縁部半四方襷文、胴下半蓮弁文、蓮華・蝋唐草文・蛇目高台釉剥ぎ、透明釉胴内面下半まで	緻密	白灰	1/2	
43	192	212	I09・10	SD07	11	磁器　肥前染付	蓋		Ⅴ	10.4	4.4	2.8	つまみ部2重圏線、天井部氷裂文(?)、口縁内四方襷文、見込み釉剥ぎ2重圏線、松樹文	緻密	白灰	1/2	あるいは皿か、類例144高台の違いから蓋とした
44	137	229	I10	SX32	11	陶器　地方窯	土瓶		近代	8.4			口縁端部内面以下無釉、蓋受け白色・黒色・空色釉、花押?	密	灰	1/5	
45	150		I09・10	SD07	11	陶器　京焼	松葉 茶碗		18末～ 19c前		4.4		透明釉、高台ケズリ出し(ｼｬｰﾌﾟ)	やや粗	黄灰	1/5	I09・10接合・石列
46	159		I09・10 H10	SD07	11	陶器　萩焼	碗		18末～19c		3.6		ケズリ出し高台ｼｬｰﾌﾟ、明褐・灰色の地に白・黒褐釉見込み乳白色釉	密	灰	1/3	礫群
47	105			SD07	11	陶器　瀬戸・美濃 登窯	燈明皿		3		3.0		ケズリ出し高台、鉄釉	やや粗	灰	3/4	礫群
48	615		I08	SD07	11	磁器　青花景徳鎮 窯	瓶		15末～ 16c前	8.0			口縁端内外圏線、草文(?)	緻密	白	1/6	
49	120		H11	SD07	11	陶器　地方窯	汁吹		18c末～ 19c	5.4			ロクロナデ、口縁内面ユビナデ、鉄釉、口縁端部無釉		(内) にぶい黄褐	1/3	H10・11＋SD07　接合　礫群

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			類別・産地など	器種	形態	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
			グリッド	遺構名	層位					口径	底径	器高					
50	127		H10・11 G11	SD07	11	陶器　肥前京焼風	徳利		18c末		7.6		胴部内面輪状の水引き痕、胴下半～底部回転ケズリ、透明釉	密	白灰	底 1/3	H10・11 G11　同一個体8点 礫群
51	114	245	J08他	SD07	11	陶器　地方窯	徳利		18c末～19c		5.0		ロクロ		灰赤	胴下半～底 4/5	
52	155	240	I08	SX31	11	陶器　肥前	鉢		Ⅲ	18.2			透明釉	密	白灰	1/8	
53	113	234	I09	SD07	11	陶器　肥前	鉢		Ⅲ	29.0			灰釉内面、型押し(菊花文)、白土刷毛塗り(三島手)		明赤褐	1/4 弱	礫群
54	142		H11	SD07	11	陶器　肥前	鉢		Ⅲ				透明釉	やや粗	灰白		
55	147		I09	SD07	11	磁器　肥前染付	輪花皿		Ⅳ	14.7	4.6	7.4	高台露胎、見込みにコンニャク印判(五弁花)、唐草文、「大明」年製	密	灰白	1/2	
56	161		H11	SD07	11	陶器　肥前	鉢		Ⅲ		7.2		透明釉、見込み中央蛇ノ目釉剥ぎのち白土刷毛塗り、高台露胎	やや粗	赤褐	1/5	
57	160		I08	SD07	11	磁器　肥前染付	皿		Ⅳ		9.0		見込み、草木文、圏線	密	白灰	1/5	
58	184		H11	SD07	11	陶器　肥前	擂鉢(?)		Ⅳ末～		8.8		高台内中央に釉、灰釉(黄褐釉)	粗	灰黄褐	1/5	
59	110	236	H10	SD07	11	陶器　地方窯	壺		18末～19c		7.0		底部ケズリ出し「蓉笥底」、露胎見込みに水引き痕跡のコブ、自然釉	粗	浅黄橙	1/2	
60	87		H08	SD07	11	土師器							口縁ロクロナデ、内面にカキ目	粗 石英粒多	赤褐		傾き推定
61	46		J10	SD07	11	土師器	内耳鍋			31.0			ロクロナデ(丁寧)、口縁端部シャープ、内面タテヘラナデ(丁寧)、(外)煤多		暗茶褐	1/5	外面煤付着
62	61	206	I10	SX32	11	土師器	内耳鍋						ロクロナデ、端部シャープ、内耳小型、オサエ		暗茶褐		外面煤付着
63	54		H10	SD07	11	土師器	内耳鍋			30.0			ロクロナデ(丁寧)、口縁外傾直線的	白色粒少	暗茶褐		外面煤付着　石列
64	50			SD07	11	土師器				28.0			ロクロナデ(丁寧)、端部シャープ、(外)煤		暗黄褐	1/12	外面煤付着
65	56			SD07	11	土師器				27.4			ロクロナデ、端部シャープ、(内)タテヘラナデ		暗黄褐	1/8	礫群
66	28	245		SD07	11	陶器　地方窯	擂鉢		18c末～		13.6		回転糸切	褐粒、流紋岩片		1/5	
67	31		I07・08	SD07	11	陶器　地方窯	擂鉢		18c末～		10.4		回転糸切	石英・白粒微		1/6	
68	55		H10	SD07	11	土師器	内耳鍋			24.0			口縁端内側突出、丁寧なロクロナデ凹凸、端部シャープでなく、焼成前穿孔、(外)煤多		暗褐	1/10	
69	44		K10	SD07	11	土師器	内耳鍋						ロクロナデ、外面オサエ(底部)、(外)煤	雲母など砂少	暗褐		
70	43		H10	SD07	11	土師器	内耳鍋						ロクロナデ、底部内面オサエ痕、(外)煤少	砂微	暗褐		
71	64	223	I09	SD07	11	土師器							底部内面ロクロナデ、焼成前穿孔2、底部外面煤	砂少	暗褐		
72	29			SD07	11	陶器　地方窯	擂鉢				9.6		ロクロナデ、糸切、擂目、櫛不規則、(内外)鉄釉	やや粗白粒微	灰赤	1/6	
73	32	198	H09	SD07	11	陶器　地方窯	擂鉢			35.0			擂目口縁内面上部ロクロナデで消去、(内外)鉄釉	やや粗	にぶい橙	1/6	
74	35		J09	SD07	11	陶器　地方窯	擂鉢						擂目上半ロクロナデで消去、(内外)鉄釉		灰褐	1/6	
75	30		I08	SD07	11		擂鉢				12		糸切＋板目　無釉	粗 砂微	褐	1/5	
76	602		J12	SD07	11	須恵器　珠洲	壺		Ⅴ				タタキ　当具痕	白色粒少気泡	青灰		
77	40	217	H10	SD07	11	須恵器　珠洲	甕		Ⅳ				タタキ　当具痕	白粒少	青灰		
78	633		L12	SX29		陶器　肥前	擂鉢		Ⅲ				口縁部鉄釉　玉縁状口縁、擂目(14本)櫛、右回り	硬 黒色土	赤灰		
79	22		N10	P.54		陶器　肥前?	小皿			12.6			灰釉(見込みのみ)	硬	白灰	2/5	
80	158			SX18		磁器　肥前染付	皿		Ⅴ	(14.0)			草花文	硬	白灰	1/8	
81	157	344		SX18		陶器　地方窯	小碗	筒形	19c以降	7.4	4.7	5.3	鉄絵縦縞文　高台釉なし		白灰	完	
82	34	346		SX18		陶器　地方窯	擂鉢				16.4				黄褐	1/8	
83	195	370		SX18		陶器　常滑	茶瓶		19c以降	4.6	4.8	3.9	ロクロ成形　底部墨書「カイ」	硬	黄褐	2/3	鉄釉(内外面)
84	163	355		SX18		陶器　瀬戸・美濃	乗燭		18c後半以降	6.0	4.0	4.4	鉄釉　底部無釉糸切		灰白	脚一部欠	
85	51		I12	SX16		土師器	内耳鍋			31.5			ロクロナデ、胴部外面石灰化、	雲母など微硬	明褐～灰白	1/10	
86	33		I12	SX16		陶器　地方窯	擂鉢			28.5			鉄釉(内外面)	硬	暗褐	1/8	
87	644	205	I10	SX34		磁器　瀬戸・美濃	小坏(猪口)	端反形	19c以降～	6.4	3.0	4.1	見込みに「永楽年製」　型使用　外面に漢詩「赤壁賦」	硬	白灰	1/2	猪口or煎茶用
88	138			SD11		磁器　肥前染付	小皿		Ⅳ	13.4	8.8	3.1	唐草文　梅花・帆掛船文	硬	灰白	完	
89	121	148	J11	SX36		中国陶器	天目		15～16c	11.4			ロクロナデ　胴下半ケズリ　鉄釉	硬	帯赤灰	1/4	
90	630		L11	SA05 掘方2		陶器　越中瀬戸	小皿		Ⅰ 16c末	11.0			鉄釉、ケズリ出し高台		明褐	1/8	掘方埋土
91	628		K09	P.46		陶器　瀬戸・美濃大窯	端反皿		2	10.6	5.6	2.2	灰釉　見込み内禿		灰(帯オリーブ)	1/3	
92	185		M12 L12		2	磁器　色絵	小碗		19c以降		3.0		赤・空色、楼閣・青海波文			1/4	産地不明
93	126		M10		2	磁器　瀬戸	碗?	筒形	19c以降	12.4			口縁端(内)釉剥　薄い銅釉	密	灰白	1/5	
94	193		L11		2	白磁　瀬戸	碗	丸形	18末～19c	10.0				密	灰白	1/5	瀬戸あるいはその周辺窯
95	186		M12		2	陶器　肥前	皿		Ⅳ前		4.8		畳付露胎、白化粧土	粗	灰白(帯黄)	略存	
96	170		M09		2	磁器　地方窯染付	碗	丸形	19c以降	10.0	4.0	5.2	胴部下半、高台に2重圏線、畳付露胎	密	灰		
97	81		N08・09		4-2	陶磁　肥前陶胎	碗	腰張形	Ⅳ	11.2			四方襷文　草花文		灰		
98	624		K12		4-2	陶磁　肥前陶胎	碗	丸形	Ⅳ	10.0					灰	1/5	
99	75		M11		4-2	陶磁　肥前陶胎	碗	腰張形	Ⅳ	10.6			2重圏線、草花文		灰	1/4	
100	180		K10		4	陶器　肥前	小皿		Ⅲ	10.0			灰釉掛け	やや粗	灰褐		

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			類別・産地など	器種	形態	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
			グリッド	遺構名	層位					口径	底径	器高					
101	194		M09 ·10		4-2	陶器　瀬戸・美濃(?)	仏飯具(?)		18末～19c	6.0			(内外)鉄釉	やや粗	暗褐	1/3	
102	153		N12		4-2	陶器　肥前	鉢		Ⅲ前	18.0			透明・ワラ灰釉	密	灰白	1/5	緑釉、蛇ノ目細片(L11)あり
103	609		K11		4-2	陶器　肥前	擂鉢		Ⅲ				鉄釉		暗褐	1/12	
104	36		M11		4-2	陶器　地方窯	擂鉢						鉄釉				
105	66		M12		4-2	土師器	火鉢						ロクロナデ、胴部外面巻上痕　(内)ユビナデタテヘラミガキ　煤付着	粗	茶褐		
106	62		M09		4-2	土師器	火鉢				23.4		(外)ロクロナデ、ナナメヘラナデ、下部はヨコヘラミガキ、胴下半(内)煤　(内)ロクロナデ	流紋岩石英少	暗褐	1/4	
107	134		K10		4	陶器　地方窯	小型壺(?)		18c末～19c		3.2		灰釉掛け　底部ケズリ出し	粗	にぶい黄褐	1/3	
108	190		L10		4-2	陶器　肥前	碗		Ⅰ-2		2.8		灰釉　底部ケズリ出し＋沈線　碁笥底		灰黄褐	略存	
109	131		K10		4	陶器　肥前	壺		?		8.6		鉄釉　糸切＋ケズリ　ロクロ	石英粒少	にぶい赤褐	2/3	
110	610		K08		14	陶器　肥前	小碗	丸形	Ⅰ-2				灰釉掛け			1/5	
111	645		K11		14	陶器　瀬戸・美濃登窯	小碗		1				鉄釉・灰釉流し掛け	やや粗	暗黄灰		
112	95	247	K10		14	陶器　肥前	小碗		Ⅰ		4.6		胴部下半～回転ケズリ(右)　底部ケズリ出し　灰釉掛け	やや粗石英微	にぶい橙褐	3/4	
113	622		M11		2	陶器　肥前	小皿	丸形	Ⅰ				灰釉		白灰(帯黄)		細片　器形推定　復元
114	23	145	K11		24	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅰ-2	10.8			灰釉		灰褐		
115	618		M13		24	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅱ	12.8			灰釉	密	灰白	1/12	
116	144	142	K11		14-2	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅰ	11.8	4.0	8.5	灰釉掛け、胎土目(3箇所)胴下半回転ケズリ、底ケズリ出し	石英微	にぶい赤褐	2/3	
117	17		L09		24	陶器　瀬戸・美濃大窯	小皿	端反	2	10.6	5.6	2.5	灰釉、内外面に重ね焼き痕跡(輪トチン)、胴部下半ケズリ、ケズリ出し高台		白灰	1/2	
118	19		K08		14	陶器　瀬戸・美濃大窯	小皿	端反	2	10.2	5.6	1.9	灰釉、見込みに輪トチン　(外)胴部下半ケズリ　ケズリ出し高台		白灰	1/3	
119	634		K10		14-2	陶器　越中瀬戸	擂鉢				10.0		底部糸切、鉄釉　胴下半ケズリ	石英少	灰白(帯黄)	1/6	
120	255		M09		2	陶器　瀬戸・美濃登窯(志野)	丸皿		1	11.4			長石釉	やや粗	白灰	1/8	
121	256		M12		24	陶器　瀬戸・美濃登窯(志野)	丸皿		1		8.0		長石釉	やや粗	白灰	1/8	
122	620		M13		4-2	陶器　京焼	徳利		18c末				透明釉、山水(鉄釉)		白灰(僅かに黄)		
123	16		K08		14-2	陶器　肥前	小皿	濡縁	Ⅱ	12.4	3.4	3.4	灰釉掛け　砂目(3箇所)底部に砂付着　ケズリ出し　見込みに沈線		灰	1/2	
124	612		M11·12		4-2	磁器　肥前染付	〃		Ⅲ	11.4	3.7	3.7	呉須、蛇ノ目釉剥ぎ＋鉄漿　胴下半～底部鉄漿		白灰	1/3	
125	129		L09·10		24	磁器　肥前白磁	手塩皿		Ⅲ	9.2	3.6	2.5	蛇ノ目釉剥ぎ＋鉄漿　胴下半～底部鉄漿			1/3	
126	39		K10		19	須恵器　珠洲	甕		Ⅳ				ロクロナデ　平行タタキ　(内)当具痕	白粒少	青灰		
127	167		トレンチ7		4	陶器　瀬戸・美濃登窯	灰釉碗		3	9.2			灰釉	やや粗	灰白	1/5	
128	154		I11		4	陶器　肥前	小碗		Ⅲ·Ⅳ	9.2			透明釉	やや粗	黄灰	1/4	胴部片他に1
129	92		H11		2	陶器　肥前	小碗		Ⅴ		3.8		透明釉　ケズリ出し高台　露胎	やや粗	白灰	1/4	
130	108		H08		2	陶器　肥前	小碗		Ⅲ-Ⅳ		4.6		透明釉　畳付釉剥ぎ	やや粗	黄灰	1/3	
131	182		H09		2	陶器　肥前	碗		Ⅲ-Ⅳ		4.8		刷毛(白土)畳付釉剥ぎ	やや粗	赤褐		
132	91		I19		4	磁器　肥前染付	小碗		Ⅴ	9.4	3.4	5.0	畳付釉剥ぎ、呉須、梅樹文、高台内草文	密	灰	1/2	
133	93		I11		4	磁器　肥前染付	小碗		Ⅴ	9.4			梅樹文　呉須	密	白灰	2/3	(地方窯?)
134	188		I11		4	陶器　地方窯	碗				6.6		透明釉、ケズリ出し高台、見込み蛇ノ目釉剥ぎ	やや粗	にぶい黄橙	1/2	底部打ち欠き(?)
135	48		I11		4	陶磁　肥前陶胎	碗		Ⅴ		5.6		呉須　草花文、畳付釉剥ぎ、透明釉(厚い)	やや粗	にぶい赤褐	2/3	
136	135		N11		4-2	磁器　肥前染付	瓶				7.0		呉須　圏線　透明釉　畳付釉剥ぎ　見込みに鉄漿＋白色釉(付着)	密	白灰	1/3	
137	88		H11		4	陶磁　肥前陶胎碗	火入れ(香炉)		Ⅴ	12.0			呉須　透明釉　圏線　袋形文(?)	やや粗	灰	1/4	
138	166		J09		4	磁器　肥前染付	香炉		Ⅳ	9.8			圏線　草花文(?)　呉須	密	灰	1/6	
139	169		J10		4	陶器　地方窯	香炉			10.0			透明釉、外面～口縁内面灰釉　胴下半鉄釉、呉須　花文　内面鉄漿(口縁・見込み)	やや粗	にぶい黄橙	1/3	
140	133		I10		4	磁器　肥前青磁	香炉		Ⅴ	9.2	9.0	7.0	蛇ノ目高台　釉剥ぎ　鉄漿	密	白灰	1/5	
141	117		I11		4	陶器　地方窯	燈明皿		18末～19c	16.0	8.0	4.1	三足　付け高台・露胎　外面～内面見込みまで鉄釉	やや粗	灰	1/3	
142	67		I11		2	陶磁　肥前染付	皿		Ⅳ	14.2	7.4	2.6	内面唐草文　2重圏線　見込みコンニャク印判(五弁花)　重ね焼き痕　畳付釉剥ぎ　呉須	密	白灰	1/2	
143	100		H10		4	産地不明　染付	皿			13.2	8.2	3.6	呉須　花鳥文	密	灰白	1/3	
144	191		J08		3	磁器　肥前染付	皿		Ⅴ		4.6		呉須　氷裂文　見込み草文　2重圏線　畳付釉剥ぎ	密	灰白	略存	43と同一意匠別個体
145	174		H11		4	磁器　肥前染付	小皿		Ⅳ	12.8			呉須　(外)草文　(内)草花文	密	灰白	1/4	
146	175		H11		4	磁器　肥前染付	小皿		Ⅳ	12.0			呉須　(内)梅樹文	密	灰白	1/8	
147	183		I11		4	陶器　産地不明	蓋			9.4			灰釉(外)	密	茶灰	1/4	
148	605		トレンチ7		4	陶器　瀬戸・美濃登窯	蓋		3	5.6		1.0		やや粗	白灰(帯黄)	1/2	
149	606		H11		4	陶器　肥前青磁	瓶			3.6				密	灰白	1/4	

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			類別・産地など	器種	形態	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
			グリッド	遺構名	層位					口径	底径	器高					
150	181		I10		2	陶器　産地不明	蓋			10.0		1.6	(外)灰釉　白土	密	にぶい黄燈	1/2	
151	196		O09		3	陶器　産地不明			19～20c	6.8		0.9	(外)透明釉	密	灰(帯黄)	1/3	
152	171		L09		1	磁器　肥前染付	小碗		Ⅳ	4.6			呉須　草花文、高台内不明　文様不明	密	白		
153	197		L09		1	陶器　産地不明	水注		19～20c	6.2			(内外)鉄釉	やや粗	白灰(帯黄)	1/3	
154	614		H12		12	陶器　地方窯	片口鉢		18末～19c	22.0			鉄釉　白色釉刷毛塗り	やや粗	灰白	1/8	
155	109		I11		4	陶器　地方窯	こね鉢		18末～19c	10.9			透明釉　玉縁	やや粗	黄灰	1/8	
156	631		H09		2	陶器　赤塩	こね鉢		19c後半～20c前半	16.0			灰釉　玉縁	白色粒微やや粗	暗灰	1/10	試掘6
157	632		H10		2	陶器　赤塩(松代)	こね鉢		19c後半～20c前半				灰釉　玉縁	白色粒微やや粗	暗灰		
158	118		H08		2	陶器　赤塩(松代)	こね鉢		19c後半～20c前半				灰釉　玉縁	白色粒微やや粗	褐		
159	24		H11		12	陶器　地方窯	壺(徳利)		19c後半～20c前半		6.8		底部内面巻上げ痕　ロクロナデ　底部→ロクロナデ、「井」刻印		赤褐	2/3	
160	128		I09		12	陶器　地方窯					3.4		ロクロナデ　糸切　(内)黄白色釉		褐	2/3	
161	189		J11		4	陶器　地方窯	壺				5.2		ロクロ　糸切　鉄釉掛け	やや粗	暗灰	2/3	
162	111		H08		4	陶器　地方窯	壺				3.6		ロクロ　糸切　灰釉	やや粗	灰	1/3	
163	37		I10		2	陶器　地方窯	擂鉢(片口)		19c～	30.0			ロクロナデ　擂目(クシ12本)　口縁部内外鉄釉	硬	暗赤褐		
164	38		I10		4	陶器　地方窯	擂鉢		19c以降		12.0		擂目(クシ11～13本)、4区画反時計回り　摩滅　糸切　ロクロナデ	硬	にぶい赤褐	3/4	
165	227		Z		2	土師器	焙烙			25.0	21.8	5.0	ロクロナデ　底部外面板目痕	石英・雲母少硬	暗茶灰	1/5	
166	60		H11		4	土師器	焙烙				24.0		ロクロナデ　底部外面ヘラナデ(?)	石英多	暗茶褐	1/3	
167	65		I11・H10		4	土師器	(?)						底部内面ヘラナデ　焼成前穿孔(蒸気抜き?)				類例あり、底部は焙烙底に類似
168	68	254	J11		4	土師器	焙烙						耳下方に焼成前穿孔　ロクロナデ　耳はりつけ	石英など少			
169	70		M09		4-2	土師器	火鉢						脚2点　おそらく三脚	石英など少			
170	57		N10		4-2	土師器	焙烙						ロクロナデ(内外)　両耳はり付け(外)煤多	石英など少	明褐	1/12	
171	58		I11		12	土師器	焙烙						ロクロナデ+ユビナデ	高温石英多	暗褐	1/12	
172	601		J09		4	土師器	火鉢						口縁に2ないし4の鍔を持ち中央に円形の火入れ部がある三足盤状の火鉢　焼成前穿孔あり　煤付着　成形ラフ	石英など少	暗茶褐		
173	74		L10		2	土師器	焜炉(?)						上部に円形の孔がある　部品少なく器形は不明部分が多い　別に類似片がある　(I09　K10　H10)	雲母微	茶褐		煤の付着見られない
174	106		I09		14	陶器　肥前	碗	腰張形	Ⅲ-Ⅳ	11.4			透明釉	やや粗	淡黄	1/4	
175	177		I09		14	陶器　肥前	碗	腰張形	Ⅴ	9.0			透明釉	やや粗	浅黄	1/5	
176	140		I07		14	陶磁　肥前陶胎	碗	腰張形	Ⅴ		5.2		透明釉、畳付露胎	やや粗	暗灰	1/2	
177	178		I12		14	磁器　肥前染付	碗	端反形	Ⅳ	10.2			透明釉　呉須、2重網目文	密	灰	1/8	
178	90		H12		14	陶磁　肥前陶胎	碗	丸形	Ⅴ	11.0			透明釉　呉須	やや粗	灰	1/10	
179	45		J10		14	陶磁　肥前陶胎	碗	腰張形	Ⅴ	11.2	4.2	4.4	四方襷文　帆船　呉須　透明釉　畳付釉剥ぎ	やや粗	白灰	1/3	接合J10+H12+I10+L11
180	47		H12		14	陶磁　肥前陶胎	碗	腰張形	Ⅴ	11.0	4.8	7.3	四方襷文　草文(?)	やや粗	白灰	1/3	
181	69		H12		14	陶磁　肥前陶胎	碗	腰張形	Ⅴ	11.0			四方襷文　透明釉　呉須	やや粗	灰	1/3	
182	176		I11		12	磁器　肥前染付	猪口	桶形	Ⅳ-Ⅴ	7.6			透明　呉須　あやめ文	密	白灰	1/3	
183	63		I11・H12		12	磁器　肥前染付	小皿		Ⅴ	13.8	7.6	3.3	透明釉(外)圏線　唐草文(内)コンニャク印判(宝相華文)　岩はじき文　畳付釉剥ぎ	密	白灰	3/4	SX18とも同一個体
184	172		I10		4	磁器　肥前青磁	香炉		Ⅱ	9.0			綿文、施釉内面に及ぶ	密	白灰	1/8	I12・M9
185	173		I12 H09		19	磁器　肥前青磁	香炉		Ⅱ	8.8			綿文　(内)口縁直下まで施釉	密	白灰	1/10	
186	49		I11		19	土師器	内耳鍋			31.2			端部シャープ?(外)ロクロナデ　口縁部に直線文(クシ4条)　(内)丁寧なロクロナデ　下方ユビナデ　(外)煤多　オサエ	石英など多	暗茶褐	1/10	
187																	欠番
188	145	291	J11		15	陶器　肥前	碗	丸形	ⅠorⅡ		4.6		胴部下半・内面薄灰釉流しかけ　胴下半回転ケズリ　高台内ユビナデ	やや粗	にぶい燈～灰白	2/3	
189	139		J10		15	陶磁　肥前陶胎	碗	腰張形	Ⅴ	12.6			透明釉	やや粗	灰白	1/5	
190	623		J09		15	陶磁　肥前陶胎	香炉		Ⅳ-Ⅴ	10.6			外面呉須透明釉　内面口縁下まで透明釉以下鉄漿		灰	1/7	
191	164		J12		15	磁器　肥前染付	Ⅲ		Ⅴ				呉須透明釉(外)　草花文(内)ぶどう唐草文	密	白灰	1/12	
192	119	168 169	J12		4	陶器　肥前二彩手	鉢		Ⅳ	19.0	6.4		(外)透明釉　(内)銅緑釉　褐釉(鉄釉)　見込み蛇ノ目釉剥ぎ　高台ケズリ出し　露胎	やや粗	淡燈	1/5	(内野山北窯)
193	112		J09		4	陶器　京焼	小皿		18末～19c	13.0			灰釉(内～外面上半)	やや粗	黄みを帯びた灰色	1/5	
194	96		J10		4	磁器　肥前染付	大皿		Ⅴ以降		17.0		透明釉　呉須　見込みにコンニャク印判　竹文・他不明　底部外面にハリ支え痕	密	白灰	1/10	
195	625		J09		4	陶器　肥前	Ⅲ		Ⅲ	18.6			透明釉	やや粗	黄灰	1/12	
196	162	157	J12		4	陶器　肥前緑釉	鉢		Ⅳ(前)	18.0			透明釉、(内)銅緑釉	やや粗	淡燈	1/8	
197	98		J08		19	陶器　肥前	小碗	腰張形	Ⅲ-Ⅳ	12.2			透明釉	やや粗	黄灰	1/4	

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			類別・産地など	器種	形態	時期	法量(cm)			成形・文様・釉薬などの特徴	胎土	色調	残存率	備考
			グリッド	遺構名	層位					口径	底径	器高					
198	26		H11		12	陶器　肥前(京焼コピー)	小碗	呉器形	Ⅲ		5.0		透明釉　畳付釉剥ぎ　シャーブ	密	黄灰	1/5	
199	18				19	陶器　肥前	小皿	溝縁	Ⅱ	12.7	4.2	3.5	灰釉　砂目(3箇所)　畳付露胎　ケズリ出し高台	密	黄灰	2/3	
200	152		I11		19	陶器　肥前	小皿	溝縁	Ⅱ	11.8			透明釉(見込み～端部)		灰白	1/5	
201	627		J10		15	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅱ				透明釉		灰	1/16	
202	165		J09		17	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅱ	13.0			透明釉		灰	1/10	
203	626		J11		17	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅱ	11.2			灰釉		灰褐	1/12	端反　J11他に2点あり　別個体
204	617		J11		17	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅱ	11.2			灰釉			1/7	
205	83	139	J10		19	陶器　肥前	小皿	端反	Ⅱ	12.0			灰釉		暗灰白	1/8	
206	621		J09		19	陶器　肥前	小皿	丸形	Ⅰ-2	11.4			草木灰灰釉		灰	1/12	
207	616		J10		19	陶器　肥前	皿		Ⅱ		4.6		灰釉掛け　底部ケズリ出し　砂目		灰黒	1/5	
208	608		J09		—	磁器　肥前白磁	手塩皿	丸形	Ⅲ	9.0			透明釉		白灰	1/6	13層?
209	607		H09 H12		12+19	陶器　瀬戸・美濃大窯	天目		3	11.0			鉄釉	やや粗	白灰	1/6	
210	130	259	J10 K10		19	陶器　瀬戸・美濃大窯	天目		2	11.8	4.4	5.6	鉄釉　ケズリ出し蛇ノ目高台　シャーブ　胴下半回転ケズリ		にぶい黄橙	2/3	
211	21		I08・09		17	陶器　瀬戸・美濃大窯	小皿	端反	2	10.4	6.0	2.2	灰釉	やや粗	灰白	1/4	
212	611		I11		17	陶器　瀬戸・美濃登窯(志野)	丸皿		1	11.8			長石釉	やや粗	灰白	1/4	
213	122		J10		17	陶器　瀬戸・美濃登窯(志野)	丸皿		1	12.0			長石釉	やや粗	白灰	1/5	
214	124		J10		17	陶器　瀬戸・美濃登窯(志野)	丸皿		1	12.0			長石釉	やや粗	白灰	1/4	
215	151	257	J10		20	中国青磁　龍泉窯	碗				5.2				青味を帯びた灰	1/8	
216	146	138	J11		17	中国白磁(華南)	皿		12c	10.2			印花文	密	白灰	1/4	
217	15		H10		21	土師器	皿(カワラケ)			9.6	6.3	2.4	ロクロナデ　糸切	A	明茶白	1/3	
218	9	166	J11		22	土師器	皿(カワラケ)			9.2	6.2	2.5	ロクロナデ　糸切	B 硬質 石英少	淡茶白	1/2	
219	1		H11		20	土師器	皿(カワラケ)			7.2	5.0	1.9	ロクロナデ　糸切	B 硬質 石英少	明茶白	完	
220	8	261	J11		22	土師器	皿(カワラケ)			11.3	6.1	3.0	ロクロナデ　見込みナデ　糸切	A	明淡褐	完	胴部下半穿孔(植物痕)
221	257		J10		20	土師器	坏		古代末	11.0			ロクロナデ	褐粒など微	明褐	1/8	
222	254		J10		20	土師器	皿(カワラケ)			7.4			ロクロナデ	A		1/8	
223	258		J10		21	土師器	皿(カワラケ)				5.8		ロクロナデ　底部下半ヘラケズリ(手持)　糸切	C	灰	1/5	
224	252		J10		19	須恵器　珠洲	壺		V				タタキ　(内)ユビナデ		赤味を帯びた灰色		
225	225	154-2	J11		19	土師器	内耳鍋			35.6	29.0	12.5	ロクロナデ　胴下半ユビオサエ+ナデ　(外)煤多	雲母・高温石英など少	暗褐	1/5	胎土砂質
226	226	152	J11		19	土師器	内耳鍋			33.8	25.6	11.6	ロクロナデ　胴下半ユビオサエ+ナデ、(外)煤	雲母微		1/5	
227	42		J09		19	土師器	内耳鍋				24.0		ロクロナデ　胴下半　内外カキ目　煤　(外)胴部内面に巻き上げ痕　オサエ	雲母微	黒褐	1/6	

表6　遺構・層位別やきもの集計（観察表集録のみ）

		肥前								瀬戸・美濃						常滑	萩	京	越中瀬戸	地方窯	珠洲	在地		中国	備考
										大窯				登窯（連房式）											
		Ⅰ	Ⅰ−2	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ・Ⅳ	Ⅳ	Ⅴ	不明	1	2	3	4	1	2〜							Ⅲ	鍋他		
東堀埋土	2・3					2	1	2												4			1		不明1
	4			1	2	1	5	6	2						2			1		8			4		不明2
	12〜15	1	1	2	2	1	3	9			1			1						3			1		
	SD07		1	3	5	6	8	9	1						1		1	1		9	2		9	1	不明1
	SD11 廃棄土坑				1		1	1							2	1				4			2	1	
	小計	1	2	6	10	10	18	27	3		1			1	5	1	1	2		28	2		17	2	4
	14-2	1		1															1						
	17			3							1			3										1	
	19		1	5		1					1	1									2		4		
	20																					2		1	
	21																					2			
	22																					2			
	小計	1	1	9		1					2	1		3					1		2	6	4	2	
基本土層	1						1																		不明1
	2・3 SX29	1			1		1							2	2					1			1		不明1
	4-2		1		3		3		1						1			1		1			4		
	24		1	1	1						1			1											
	P46 P54 SA05								1		1								1						
	小計	1	2	1	5		5		2		2			3	3			1	1	2			5		2
計		3	5	16	15	11	23	27	5		5	1		7	8	1	1	3	2	30	4	6	26	4	6

表7　芋川氏館跡出土瓦観察表

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			遺物名	型式	残存率	法量(cm)				成形・文様などの特徴	備考
			グリッド	遺構名	層位				長径	短径	厚さ	重量		
1	(参考資料)					桟瓦 軒先平瓦				25.0	4.4		妙福寺境内　桐・唐草文　型使用	現代
2			Z			桟瓦 軒先平瓦					4.2		桐・唐草文	
3			J09		2	桟瓦 軒先平瓦					4.0		タテヘラケズリ　顎下端ヨコナデ 唐草文	
4			N12		2	桟瓦 軒先平瓦					4.2		タテヘラミガキ　ヨコナデ　唐草文	第1赤ソブ直下
5			L08・09		3	桟瓦 軒先平瓦							ヨコナデ　　唐草文	
6		210	I09・10	SX32		熨斗瓦					1.8		釘穴　左端に成形時の沈線	
7	221	220	H10		2	丸瓦					1.6		縁キリ　(内)ヘラナデ　煤付着	
8		350	I11	SX18		軒先丸瓦					1.3		瓦当面欠　キリ　接合　(タテハケ)	
9		204	H08			丸瓦					1.8		(内外)タテヘラナデ　　端部ケズリ	
10		364	I11	SX18		丸瓦					1.1		(外)タテヘラミガキ　(内)ユビナデ 端部キリ	
11		207 241	I09・10	SX32		熨斗瓦					2.0		全面ヘラナデ　左肩に釘穴	3点接合
12		228	I10	SX32		鬼瓦(?)							鬼瓦の一部か　4条の隆線による渦巻文　接合痕	
13		208	I10	SX32		鬼瓦(?)							12と同一個体　粘土塊に指頭によるオサエ痕	
14	220	202 216	H09 I10	SX32		桟瓦 平瓦								4点接合
15・16	223 224	356 358	I11・12	SX18		不明					2.0		不明　断面1/4円形	大棟・下り棟に関係したものか　1面に円孔(径13.4)各部品組合わせ器面ヘラナデ

表8　芋川氏館跡出土石器・石製品観察表

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			遺物名	型式	残存率	石材	法量(cm. g)				属性
			グリッド	遺構名	層位					長径	短径	器高(厚さ)	重量	
1			I09		4	打製石斧		完	TS	10.7	4.8	2.0	126	正面両側調整　裏面一方向剥離 先端使用痕・磨滅　上端磨耗痕
2	246		L12・13	SX24		叩石			Sa	12.5	5.8	4.0	450	断面三角形の川原石利用　両端に敲打痕　側面に付着痕(炭化物)
3	237		G11		4	石鉢			And3	31.0				敲打成形　内面使用により磨耗 底部欠
4	235		I09		18	石鉢			And3					敲打・ケズリ成形　底径16.7 口縁部欠
5	233		N09	SD10		石鉢		1/3	And3	12.0		7.2		三足、脚部　底径10.2
6	236	307		SD05	埋土	石鉢			And3	11.6				
7	234		Z			凹石		略完	And1	11.4	11.0	5.4	1,110	平面円形　断面隅丸長方形の自然礫一部加工　中央に凹部　底部平坦敲打
8	244	354	I11	SX18		磨石				9.0		5.8	1,320	自然円礫　全面磨滅
9	238		J10		4	砥石	C		And1		11.0	9.5		長方体、自然石利用　下半オレ、3面研ぎ 上端に切り出し時の切断痕　凹石兼用 下端オレ
10	249	373	I11	SX18		砥石	A		GT	5.7	2.7	2.1	71	携帯用、4面使用　1面使用回数少　斜・横位使用痕
11	240		M12	SX22		砥石	C	完	Sa	20.3	9.6	7.9	2,700	六角柱体　各面利用　両端敲打 敲石兼用　研ぎ面に使用痕
12	239		N09	SX44	4	砥石	C		GT		10.2	7.2		下端オレ　上端切断痕(キリ) 長方体　4面研ぎ痕
13	241	195	H11	SD07		砥石	A		Sa		5.2	2.8	124	板状直方体上端オレ　下端と側面に切断痕3面研ぎ面
14	80		I10		4	砥石	B		Sa					両端オレ　荒砥用　側面に切断痕　両面に使用痕
15	243	367	I11	SX18		石硯			Sl		7.7	1.5		長方硯、背(裏)を図示　側面キリ＋ミガキ　背と側面の角は面取り　海(池)・背下半欠　墨堂(陸)使用により湾曲
16	76		J09		3	石硯			Sh		7.9	2.3		海部縁一部欠　側面ミガキ
17	78		L11		1	石硯			SCH					海の一部存　背欠
18	259		J09		4	石硯		1/3	Sh			2.5		海から陸の隅残　背一部欠　縁幅0.3cm
19	79		H11		2	石盤片		1/5	GT			1.1		角面取り　側辺切断痕
20	77		M09		2	石盤片			SCH					海部背片　海部欠　角面取り
21	245	353	I12	SX18		石盤片			Sl					側辺研磨　剥離片　格子状の線刻
22	84	37	H11		2	石盤片			SCH					側辺細片　背部分残ケズリ痕 陸部分欠　側面斜め切断痕
23			M09		2	石硯			Sl					海部のみ細片　掘り込鋭角　背面欠
24			J11		2	石筆			PA	5.2		0.5	2.6	タテミガキ　下端ナナメに研磨
25			H09		2	石筆			PA	4.2		0.5	2.7	タテミガキ　下端ケズリ
26	242		I10		4	温石(?)			And1	16.0	15.2	5.7	2,000	平面円形で板状の自然礫　側面に剥離痕　全面磨滅　全面に炭化物付着
27	230	153	I10		20	五輪塔 空風輪			And3	空 18.5	風 17.0	23.3	7,700	空輪ナナメハツリ＋研磨(一部) 風輪タテハツリ＋研磨(一部)墨書痕? 底径14.6　敲打凹状
28	232	239	I08	SX31		五輪塔 空風輪			And3	14.0	12.6	14.0	2,200	器面磨滅　敲打成形を基本　底径9.0
29	251		J11		14	五輪塔 地輪			And3	22.0		17.0	16,600	上辺に円形に窪み成形　水輪設置痕 敲打成形
30	231		K09		14	五輪塔 地輪			And3	17.0	(18.6)	10.5		敲打成形　側辺一部欠損　上辺に水輪設置痕(円形に赤褐、周囲スス付着)
31	248		J09		東堀下層	石佛			And3					石佛か　正面縁に幅4cmの隆帯　内側平坦とし背面はカマボコ形　破片のため詳細不明
32			I12			建築石材片			And1	37.0	27.0	12.5		木口に幅4～5cm奥行5cmの矢板痕が5cm間隔にあり、木口及び上面にノミによるハツリ成形　他は破損
33	247			P103		砥石	D		And1	20.0	19.5	8.0		板状礫、スス付着　加工痕なし 金属先端研磨痕自然面に多数
34	250		K10		14	粉挽き臼 上臼		1/2	And1	(30.0)				側縁部欠損　6分割　左まわり 副溝5目　補給孔　芯棒受口孔 挽き木孔

表9　芋川氏館跡出土銭貨一覧

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			遺物名	法量(mm.g)			備考
			グリッド	遺構名	層位		縦	横	重量	
1	7		H10	SD07	11	寛永通宝(古)	24.0	24.0	3.0	初鋳 寛永13年(1636)公鋳
2	13	237	I10	SD07	11	寛永通宝	25.0	25.0	1.8	背面「文」 初鋳 寛文8年(1668)
3	28-1	267	L12	SX23		寛永通宝	22.8	22.9	2.4	
4	29		K12	SX28		寛永通宝(古)	24.2	24.4	2.1	
5	30		K12	SX28		寛永通宝	22.9	22.7	2.2	
6	15	282	J11			寛永通宝	23.2	23.2	13.0	6枚銭差
7	38	52	L11		4	寛永通宝(古)	24.2	24.3	2.5	
8	51		M10			寛永通宝	25.2	25.2	1.8	一部欠損
9	57		N11		4	寛永通宝	25.1	25.2	2.6	背面「文」
10	21-1	150	J11		14	寛永通宝(古)	24.2	24.2	2.8	
11	21-2	150	J11		14	寛永通宝(古)	24.4	24.5	9.9	3枚接着
12	14		I10		14	寛永通宝	23.1	22.9	2.1	
13	45	100	L09		4	寛永通宝(古)	24.0	24.0	2.2	
14	9		H11		4	寛永通宝	22.2	22.1	2.3	
15	5		H11		4	寛永通宝(古)	24.2	24.1	3.3	
16	4	33	H10		4	寛永通宝		22.4	1.4	一部欠損
17	16	322	J10		2	寛永通宝	23.5	24.2	2.2	
18-1	23-1		K10			寛永通宝(古)	25.0	25.0	5.2	2枚接着
18-2	23-2		K10			寛永通宝				背面「文」 銭差
19	24		K10		4	寛永通宝	23.1	23.4	1.5	他に不明1
20	31	164	K12		4	寛永通宝(古)	24.6	24.7	3.1	
21	32	162	K12		4	寛永通宝	23.4	23.5	1.8	
22	26		K10		4	寛永通宝	22.8	22.7	1.8	
23	27		K12		4	寛永通宝(古)	24.3	24.4	3.3	
24	63		K08			寛永通宝(古)	25.0	25.0	1.8	試掘3
25	35	314	H11		19	熙寧元宝	24.8	24.7	3.2	初鋳 北宋熙寧元年(1068)
26	42		L09			寛永通宝(古)	23.9	23.9	1.8	
27	39	53	L11		4	寛永通宝	22.8	22.7	2.8	
28	40	50	L11		4	寛永通宝	24.3	24.3	3.1	
29	41	51	L11		4	寛永通宝(古)	24.1	24.0	2.8	
30	54		N12		4	寛永通宝	23.2	23.2	2.7	
31	37		L10		4	寛永通宝	23.1	23.0	2.4	
32	56		N11		4	寛永通宝	25.2	24.7	2.7	一部欠損 背面「文」
33	62		N12		2	寛永通宝	22.0	22.3	2.2	
34	52		N10		2	寛永通宝	24.1	23.6	2.4	
35	49	15	M11		2	永楽通宝	24.8	24.8	3.3	初鋳 明 永楽6年(1408)
36	20-1		J12		1	寛永通宝	25.1	25.0	3.2	背面「文」 銭差
37	20-2		J12		1	寛永通宝(古)	24.3	24.3	2.8	銭差
38	20-3		J12		1	寛永通宝(古)	23.4	23.2	3.5	銭差
39	20-4		J12		1	寛永通宝	23.0	23.2	2.4	銭差
	1		H11		2	銅 貨	21.6	21.9	2.9	近代
	2		H11		3	銅 貨	27.8		6.4	近代
	3		H11		3	明治半銭銅貨	22.0	22.0	3.0	初鋳 明治6年(1873)?
	6	192	H11	SD07	11	不 明			0.5	2/3欠損
	8		H10		2	不 明	24.0	24.4	1.7	腐食
	10		I10		2	寛永通宝?	24.1	23.7	2.4	一部欠損
	11		I07		1	不 明	22.9	22.9	2.6	腐食
	12	44	I12		12	不 明	27.0	27.0	2.1	腐食
	17		J12		2	寛永通宝			1.0	1/2強欠損
	18	167	J11		4	不 明	23.6		1.7	腐食
	19		J10		4	寛永通宝?	25.6	25.5	2.5	
	22		K08		4	寛永通宝	22.6	22.8	1.6	湾曲
	25		K08		4	寛永通宝	20.3	20.4	0.6	一部欠損
	28-2		L12	SX23		寛永通宝?	23.9	24.3	2.5	
	33		K11		4	不 明	21.1	21.1	2.0	腐食
	34	47	L10		14	不 明	23.5	23.3	1.9	腐食
	36	45	L10		4	不 明	24.0	23.9	2.9	腐食
	43		L12		4	不 明	22.7	23.0	1.3	腐食
	44		L09		3	寛永通宝(古)	23.9	24.0	1.9	湾曲
	46		M09		2	不 明	22.9	22.9	2.1	
	47		M12		1	明治一銭銅貨	23.0		3.5	
	48		M13		4	寛永通宝			1.1	1/2欠損
	50	266	M10		4	寛永通宝	21.8	22.0	1.9	
	53		N12		3	明治一銭銅貨	23.0	23.0	3.3	他に不明1
	55	57	N11		4	不 明	23.2	23.5	2.4	
	58		N11		4	不 明	22.9	22.9	2.0	
	59		N11		4	不 明	20.2	18.5	1.7	
	60	99	N10		4	不 明	24.4	24.4	3.2	

表10　芋川氏館跡出土金属製品観察表

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			遺物名	型式	残存率	材質	法量(cm. g)				属性
			グリッド	遺構名	層位					長径	短径	器高(厚さ)	重量	
1			L10		4	金銅製品		残欠	金銅					銅製金箔張薄板
2			L10		3	金銅製品		残欠	金銅					銅製金箔張薄板
3			N10	SX40	4	銅製品		残欠	銅					薄板　歪みあり
4	212		I11		4	銅製品		残欠	銅				1.2	薄板　穿孔　歪みあり　図№5と重ねて使用か
5	213		I11		4	銅製品		残欠	銅				1.1	薄板　穿孔　歪みあり　図№4と重ねて使用か
6	214		L11		2	玩具 サーベル		残欠	鉛					サーベル柄、鍔　おもちゃ部品片
7	218		H10	SD09		銅製品		残欠	銅					円環?銅板
8	210		J11		2	耳掻		完	真鍮	10.0		0.3	2.1	耳かきと　把手部からなり、歪みあり
9	211		L11		4	円粒		完	銅			0.6	0.8	球形
10	219		L09		4	鑷		略存	青銅	3.0	2.2	1.1	11.3	刀装具　中央に刀身残
11						小柄鞘		略存	青銅	8.2	1.3	0.5	13.1	中央に身欠あり
12	209		K12		4	煙管		片	真鍮		(0.7)			吸口片　蝋着痕
13			I09	SD07		煙管		片	真鍮					吸口　煙管側欠　蝋着痕
14	205		N12		4	煙管		片	真鍮		(0.8)	0.4	(2.8)	吸口片、口付から煙管にかけふくらみ
15	207	163	K12		4	煙管		片	真鍮	(8.0)	(0.8)	0.4	(2.8)	吸口片　口付から煙管側直線的　蝋着痕　毛彫り菊花文
16	208		J11		4	煙管		片	真鍮	(6.0)	(1.0)	(0.5)		吸口片　ふくらみ　蝋着痕
17	206		K11		4	煙管		片	真鍮	(5.6)	(1.0)	(0.3)		吸口片　ふくらみ　蝋着痕
18	203		M11		4	円板状製品			鉄	7.0		2.0	186	全面サビ　用途不明
19	198		I08	SD07		Y字状製品			鉄	7.1		0.7	41.8	鍛造　用途不明
20			N13		2	輪状金具			鉄	5.0	2.0		10.8	用途不明　平面楕円鎖の一部か
21	200		L11		2	頭巻釘		欠	鉄	(6.7)			(0.6)	下端欠　サビ付着　断面方形　鍛造
22	201		I09		2	頭巻釘		下端欠	鉄	(7.8)		(0.6)		断面方形
23	202		M12		2	頭巻釘 (丸釘)		略存	鉄	(9.0)		(0.6)	(14.4)	断面円形　大きく湾曲
24	217		K09		4	頭巻釘		欠	鉄			(0.6)	(7.8)	断面方形　両端欠
25		362	I11	SX18		筒形鉄器		欠	鉄		(3.5)	(0.2)	(67.2)	用途不明　筒形
26		361	I12	SX18		轡引手金具		略存	鉄	14.5			47.7	径4cmの円環と長さ10.5cmの金具からなる　風化著しい

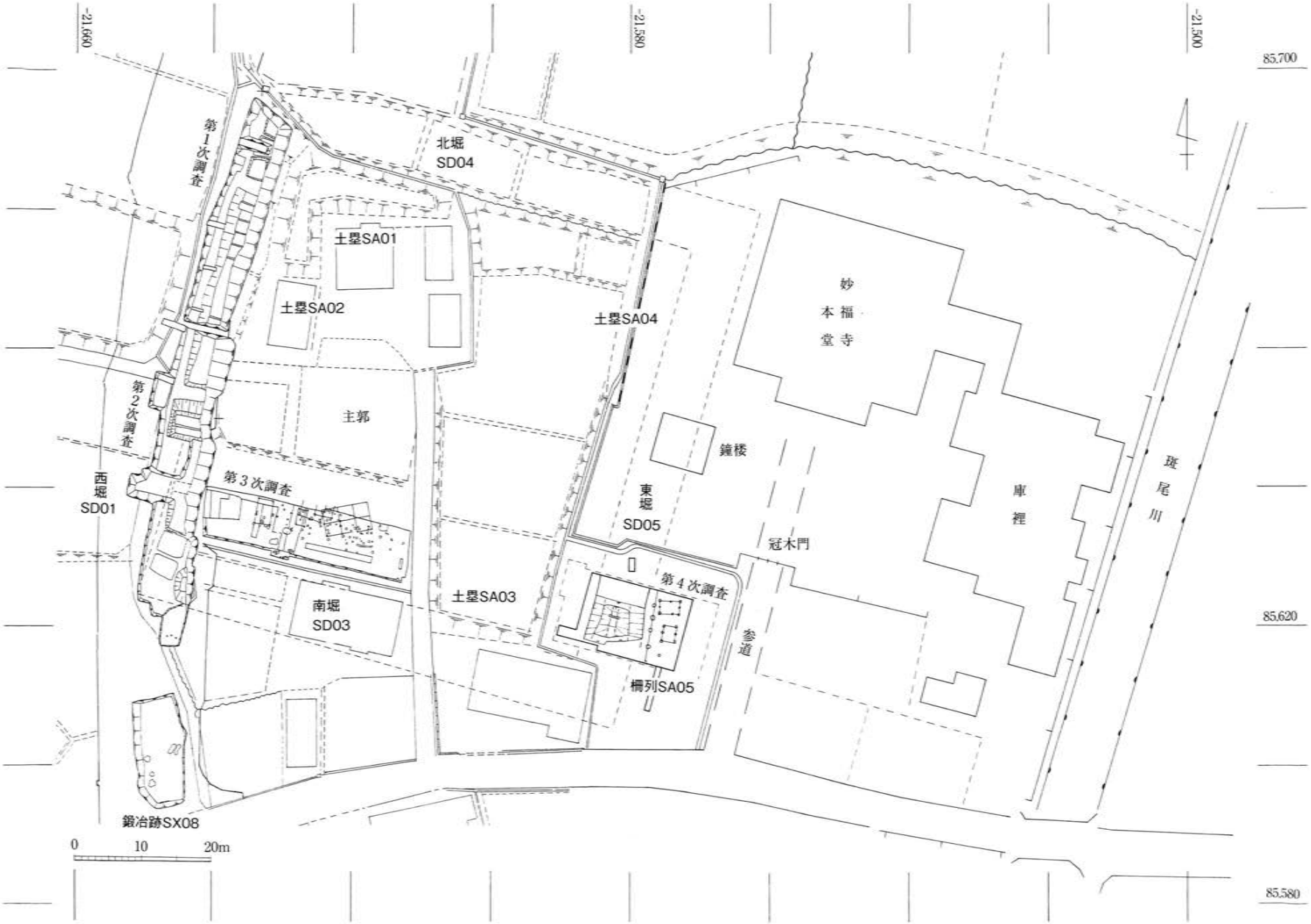
表11　芋川氏館跡出土鍛冶関連遺物観察表　　＊法量短径（推定値）

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			遺物名	型式	残存率	法量(cm、g)				属性	備考
			グリッド	遺構名	層位				長径	短径 (上段　外径) (下段　内径)	厚さ	重量		
1	260		H11	SD07		鞴羽口				(6.9) (2.8)	(2.1)		羽口端部火勢でケロイド状 器面タテヘラナデ	
2			I12	SD07		鞴羽口				(5.9) (2.3)	2.0		羽口端部ケロイド状　タテヘラミガキ	
3	261	214	I08	SD07		鞴羽口				(7.0) (2.0)	2.5		体部片　タテヘラミガキ	
4			I07・08	SD07		鞴羽口				(6.6) (3.6)	1.5		羽口端部ケロイド状	
5	199		I08	SD07	(礫層)	鉄滓(椀形)			6.8	5.9	2.0	59	炭片付着	
6			I07	SD07		鉄滓(椀形)			9.0	6.8	3.2	151		
7			I08	SD07	(礫層)	鉄滓(椀形)			7.1	7.1	3.9	203	小石、炭多量付着	
8		213		SD07		鉄滓(椀形)			6.0	5.1	2.0	80		
9		213		SD07		鉄滓(椀形)			9.6	5.3	2.5	134		
10		224	I09	SD07		鉄滓			4.9	3.5	1.6	22	鉄分多い	
11		213		SD07		鉄滓(椀形)			8.4	6.8	3.0	204		
12			I07	SD07	(礫層)	鉄滓(椀形)			8.3	6.5	2.8	181	鉄分多い	
13			H10		2	鞴羽口							体部片外面のみ 大型羽口	
14			G11			鞴羽口							鉄滓鉄分多い　羽口片鉄滓中に取り込まれる	
15			H10		2	鉄滓(椀形)			5.6	5.4	3.5	113	鉄分多い　砂付着	
16			G11			鉄滓(椀形)			5.2	3.0	2.2	32	鉄分多い	

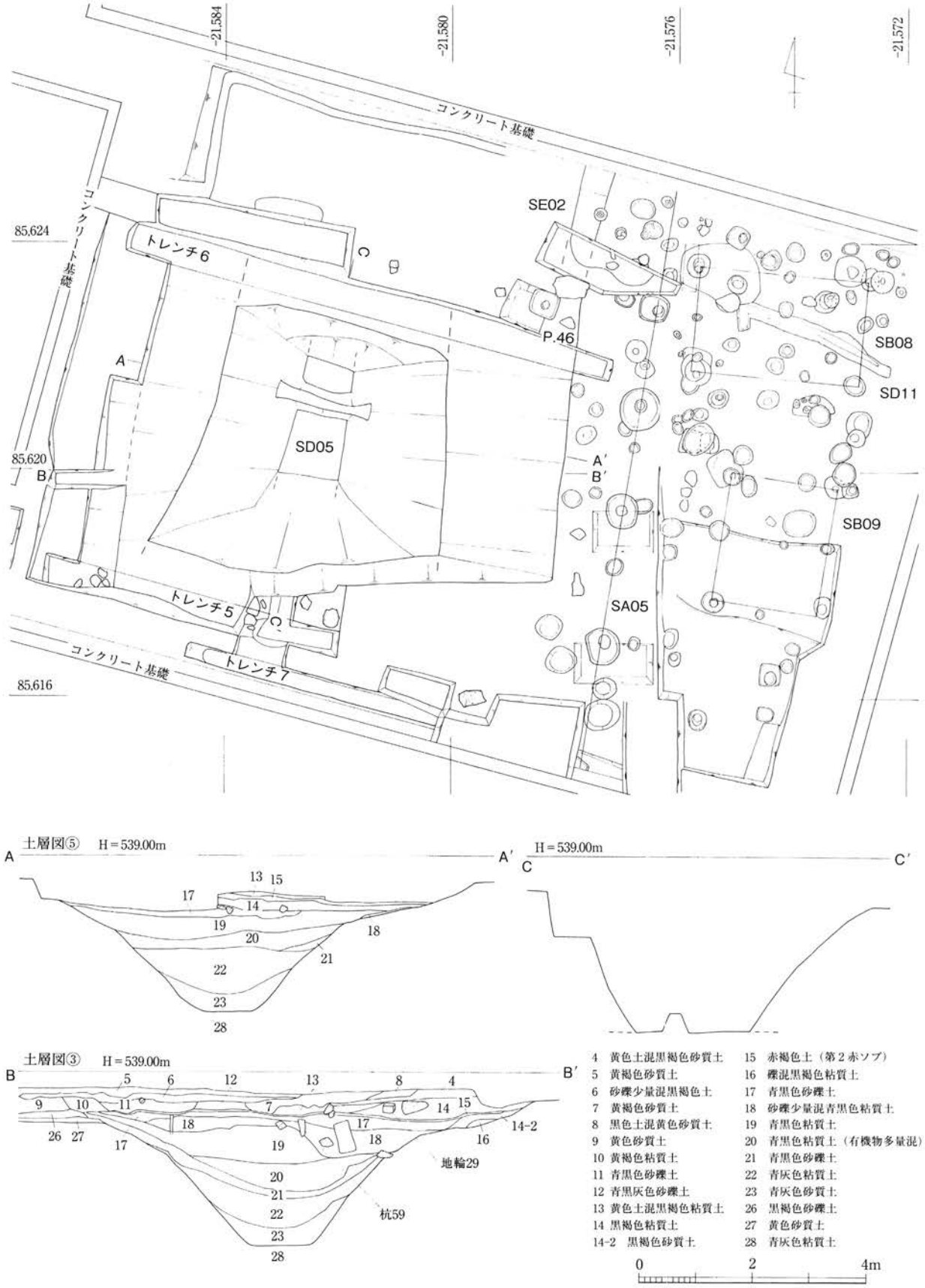
表12　芋川氏館跡出土木製品観察表　　○番号は樹種同定済み

図番号	整理番号	取上番号	出土地点			器種	木取・木目	樹種	法量(cm)			属性	備考
			グリッド	遺構	層位				長	幅	厚さ		
①	75	335	J09	SD13		長床犂	芯持丸木	ハンノキ属 ハンノキ亜属				自然木の股木利用、犂床と犂柄をケズリ出し、両者の開き角度は60度で犂床表面は犂床先に向かいケズリ、犂柄より後部の犂床表面はやや丸みを持つ。裏面はカマボコ型。犂柄は20cmで上部は欠損、犂先は一部に欠損見るが丸く整形。 犂床の厚さは14cm、組木による長床犂は類例が多いが、一木から器形整形される犂は類例がない。	
②	24	334	J09	SD13		鍬	柾目	コナラ節	30.5	14.0	3.0	風呂台先端はカマボコ状、刃床部(鉄製鍬先着装部)は湾曲し薄くケズリ出している。風呂台の柄壺は7×2.5×2.8cmで穴はほぼ直角に開けられている。柄の装着には楔で装着の角度を調整。風呂台表面は丁寧なケズリ仕上げ、裏面は使用痕の凹箇所が見られるが、先より6cmの範囲には凹がないことから鉄の刃先の深さはその範囲と考える。風呂台には刃先の装着用に表・裏共に斜めにケズリ出している	
③	6	262	I11	SD05	20	漆器椀	縦木取り	トネリコ属 シオジ節	7.5		3.2	高台一部欠損、外面黒漆塗り、体部立ち上がりわずかに残	
4	46		I10	SD07	11	曲物底	柾目板	針葉樹	26.8	9.0	1.2	3分の1残存、木口の一部炭化	
⑤	39-3		J09	SD07	11	加工木製品	追柾目	スギ	21.5	3.4		長辺木口の一端部はやや厚く短辺木口は僅かに薄く加工され、先端は刀の切先状にケズル。上端欠損、炭化痕あり	
⑥	7		L09			硯	柾目	コナラ節	14.5	4.5		木製の硯　完品で残存状態が良い、海部・陸部も顕著に残り墨堂にスリ痕跡、裏面に穿ち穴があり、携帯用硯か。	
⑦	40		I09	SD07	11	加工木製品	芯持ケズリ出し	ヤナギ属	19.5	5.3	3.4	自然木を利用し上端から先端部まで扇状にケズリ先端部は5面となる。両端共ケズリ切断。樹皮が一部に残る	
⑧	3	260	I10	SD07	11	加工木製品	芯去みかん割り	マツ属 複維管束亜属	15.0	2.5	1.7	湾曲する木製品、外面はケズリ痕がある、断面台形、全体に炭化、用途不明	
9	8	165	I12		17	柄杓底板	板状	ヒノキ	9.6			内面にヤリカンナのケズリ痕跡をとどめ側面木口も丁寧なケズリ仕上げ、底面の3分の1は著しく磨滅、端部がわずかに欠損する。	
⑩	39-2		J09		12	木製品	縦木取り	スギ	4.1	2.5		小破片で湾曲面から鉢様器形の部分品とも推定される、器内外面にロクロ引き痕跡らしきケズリ段がある、口唇部分も外面を薄くケズリだしている鉢ものの口縁破片か	
11	58	302	I11		堀内	木製品	桧材	針葉樹	12.8	1.7	1.4	両端部にケズリ痕、角状の加工された棒、用途不明　上端は丸み帯びている下端はオレ	
12	56		K11		22	曲物		不明	8.6	0.8	0.5	線刻・ケズリ	
13	39-1		J09		19			針葉樹(スギ)	5.6	3.3		上端にケズリ加工が見られ、下端は欠損　小破片で用途不明	
14	60		J10		19	曲物	板状	針葉樹(スギ)	11.2	3.0		曲物側板の破片、表面に鋸歯状の刻線がある	
15	12-1		I10		19	板	板状	ヒノキ	10.4	4.1		小破片、釘穴が見られ用途不明	
16	12-4		I10		19	木製品	板状	ヒノキ	6.7	2.1	0.4	完品で両端部に楔型に抉りが入り、上下に2個並列の釘穴がある。用途不明	
17	74		J09			柄杓の柄	棒状	針葉樹	26.0	2.0	1.3	先端部欠損。ケズリ。断面長方形	
18	43		L11	SA05 掘方2	埋土	柄杓の柄	棒状	不明	22.5	1.7	1.4	小型の加工品で幅の細い板状でケズリ。先端のケズリ・摩耗、他の物に差し込むことを意図したもの。上端オレ断面長方形	
⑲	41-1		H10	SD07	11	不明	板目	クリ	22.0	3.7	2.7	正面左端に矩形の切り込み、残存部3分の1から薄く楔型に削られている、断面長方形、建築用材か、	
⑳	140			SD07	11	割り板材	柾目	コナラ属 コナラ節	29.5	5.0		断面長方形で板状、両端オレ、各面割りのまま、長辺1面に7か所の穿ち穴、裏面に小判型の打ち込み痕多数　加工台に再利用か	
21	12-3		I10	SD07	11	削屑	板		4.1	3.5		上下端部に同方向からチョウナのケズリ痕、木材加工に伴う削屑	
22	12-2		I10	SD07	11	削屑			3.0	2.5		上下端部に同方向からチョウナのケズリ痕、木材加工に伴う削屑	
23	113		L09	SE02		板材			29.0	4.0	1.0	丁寧なケズリ痕　左端切断痕　他はオレ	
㉔	59		I09		20	枝	芯持丸木	クリ	22.0	0.9	0.8	木の枝　樹皮がある　左端斜めに切り落し痕、右端部は欠損	
㉕	132		J10		19	杭	芯持丸木	クリ	12.3	7.6	6.0	先端部1面を自然面とし直行する2面をやや鈍角にケズル、先端部のみ残	
26	71		J09	SD07	集石群内	削屑		針葉樹	7.5	5.4	2.0	上下端部に同方向からケズリ	
27	68				19	削屑		針葉樹	5.0	3.6	1.0	端部内面に段差のあるチョウナ痕	
㉘	53		K08			杭	芯去ケズリ出し	スギ	6.5	2.1		先端部残、4面を鋭く鋭角にケズル	
㉙	50		K09			杭	芯持丸木	マツ属 複維管束亜属	8.9	2.1	1.5	先端部4面丁寧なケズリ	
㉚	51	295	I09			杭	芯持丸木	イヌエンジュ	11.2	1.7	1.5	先端部2面ケズリ	
㉛	137	296	H12	AorB		杭	芯持丸木	クリ	19.8	6		先端部のみ残存、ケズリ	
㉜	41-2		H10	杭列A		杭	芯持丸木	マツ属複維管束亜属	15.5	4.5	4.1	先端部のみ残存、鋭角に5面ケズリ	SD07
㉝	136		H10			杭	芯持丸木	マツ属 複維管束亜属	16.9	6.9	5.3	先端部のみ残　3面ケズリ	
㉞	37		N09			杭	芯持丸木	カラマツ	11.4	2.5	2.5	先端部残　4面を鋭角にケズリ、樹皮残	
㉟	128		H11			杭	芯持丸木	マツ属 複維管束亜属	17.6	3.3	3.2	先端多面からケズリ、樹皮残　上端オレ	
㊱	127	285	J09	B		杭	芯持丸木	クリ	17.7	3.2	3.0	自然木で芯持材の先端部を4面から鋭角にケズリ円錐状となる、樹皮一部に残存	
㊲	129	287	J09	B		杭	芯去ケズリ出し	マツ属 複維管束亜属	12.4	3.6		割り材を柾目取り　1面を丁寧なケズリ調整し他面は割面、 先端部を鋭角にケズリ、先端部一部オレ、建築材の再利用か	
㊳	130	304	H12	AorB		柱材	芯持ケズリ出し	コナラ属 コナラ節	16.7	4.9	3.1	長方形製材し、端部1面鋭角にケズリあり、腐食が強い、側面にケズリ	
㊴	119	276	I10	B		杭	芯持丸木	クリ	55.5	8.0	7.8	自然木先端ケズリ、楔状　あるいは建築材か　上部腐食	
㊵	118	293	H11	AorB		杭	芯持丸木	マツ属 複維管束亜属	33.2	6.2	6.2	自然木の先端多面からケズリ　樹皮僅かに残る	
㊶	139-1		H10	B		杭	芯持丸木	クリ	49.9	12.8	7.8	自然木上端のみが残存　斧による切断　一部に炭化痕　断面楕円	
㊷	120	273	H10	A		杭	芯持丸木	マツ属 複維管束亜属	45.8	4.5	3.9	先端一部残ケズリ痕あり、樹皮なし　上端欠	SD07
43	154	289	J09	B		杭	芯持丸太		66.4	4.0		樹皮一部残	
㊹	125		I09		19	杭	芯去ケズリ出し	マツ属 複維管束亜属	26	5.3	5	断面は長方形、先端部4面ともチョウナによる丁寧なケズリ	
㊺	133	274	H10	A		杭	芯持丸木	カラマツ	21.4	4.0	3.6	自然木先端部を3面から鋭いケズリ　上端欠	SD07
㊻	123	298	I12			杭	芯持丸木	カラマツ	27.0	6.1	4.3	自然木先端部3面ケズリ　上端欠	
㊼	126	280	J10	B		杭	芯持丸木	クリ	32.8	3.8	3.5	広葉樹、残存上部に樹皮が残る、先端部6面ケズリ　上端欠	
㊽	114	144	J09			杭	芯持丸木	コナラ属 コナラ節	38.3	7.1	5.0	自然木上端斜めにケズリ側面僅かにケズリ上端部の一部に樹皮、残存下部は風化が強い	
㊾	124	250	I09			杭	芯持丸木	クリ	27.8	6.0	5.0	自然木先端部多面からケズリ　上端部はオレ　樹皮炭化痕	
㊿	116	272	H10	A		杭	芯持丸木	マツ属 複維管束亜属	26.9	7.5	6.4	自然木先端1面を鋭角にケズリ落し、その両端を調整ケズリ、樹皮なし	SD07
51	117	283	J10			杭			43.0	5.8		先端ケズリ、割り材使用	

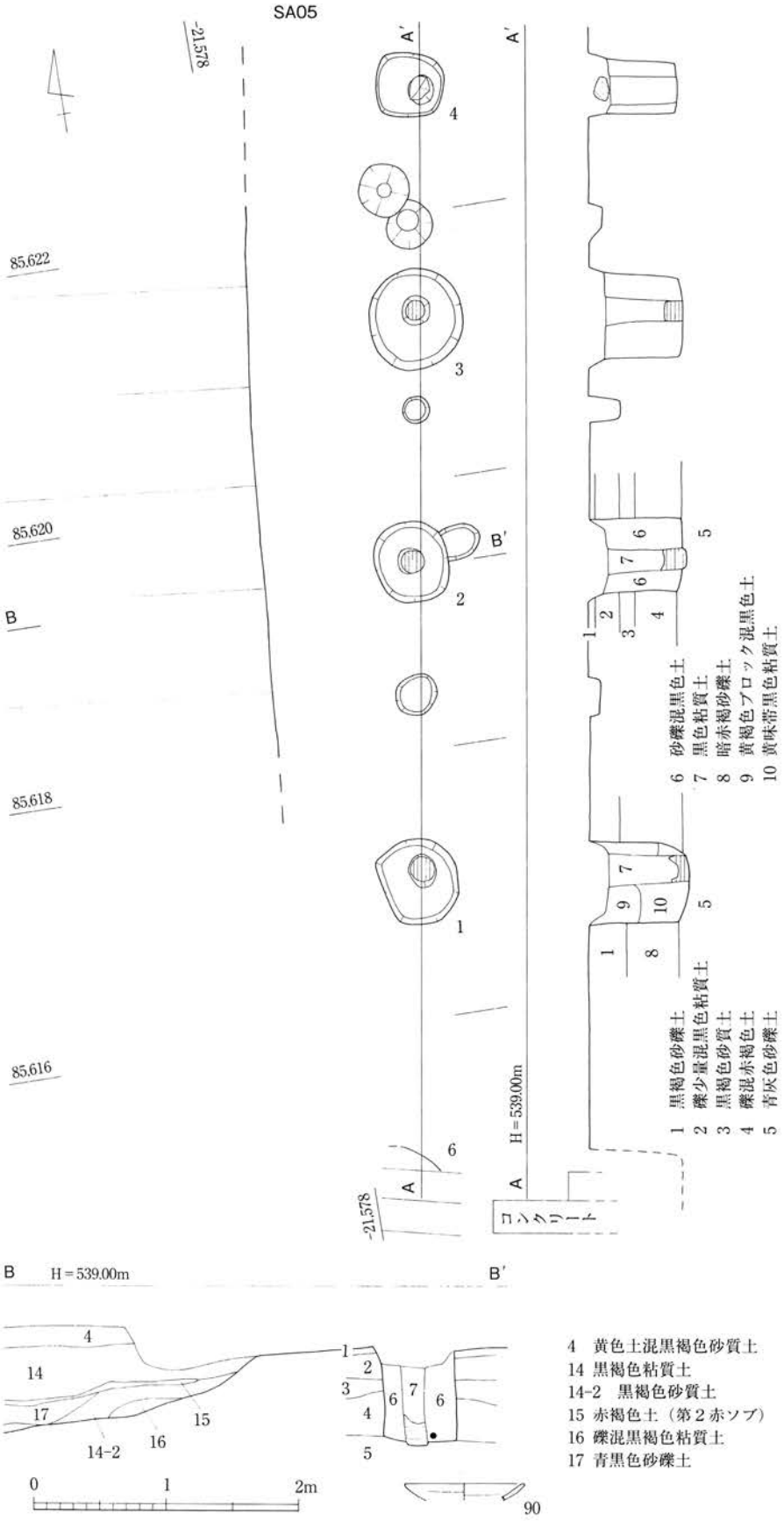
図番号	整理番号	取上番号	出土地点			器種	木取・木目	樹種	法量(cm)			属性	備考
			グリッド	遺構	層位				長	幅	厚さ		
52	134		I09			杭	芯持丸木	スギ	39	3.8	3.3	自然木先端部を多面ケズリ、全体に樹皮ある　上端欠	
53	122	292	H11	AorB		杭	芯持丸木	モモ	33.3	4.3	3.2	自然木先端部多面ケズリ　上端部3分の1風化腐れ	
54	115	303	H12	AorB		杭	芯持丸木	クリ	48.0	5.0	5.0	自然木先端多面ケズリ　上端部炭化痕　オレ	
55	121	297	H12	AorB		杭	芯持丸木	クリ	50.4	5.8	4.7	自然木先端部多面ケズリ　全体に炭化　上端オレ	
56	45	299	H12	AorB		杭	芯持丸木	コナラ属 コナラ節	64.0	7.0	6.5	自然木先端部4面から鋭角にケズリ、体部の半分に樹皮残る	
57	144		L12	SA05 掘方1		柵	芯持丸木	クリ	13.0	20.5		底部のみ残存、内部は腐食、伐倒後底部調整ケズリ	
58	148		L11	SA05 掘方2		柵	芯持丸木	クリ	23.0	19.9	19.0	内部腐食により空洞、底面丁寧に器面調整、断面は円形、底部のみ残	
59	145	301	I11	B		杭(柱)	芯持丸木	クリ	32.8	13.4	10.6	断面円形、上端部および側面腐、底面は水平なキリ痕(鋸挽)	
60	149		I09			柱	芯持丸木	クリ	34.0	13.5	13.0	断面は円形、上端腐食、底部ケズリ、樹皮が残存部3分の2の全面に残る	
61	146	300	I11	B		杭(柱)	芯持丸木	クリ	19.4	11.0	9.5	上端及び内面腐食、底部は伐倒後に斧による平面整形樹皮なし、残存状態良好	
62	147		M09	SB08 掘方1		柱	芯持丸木	クリ	15.5	13.8	13.3	側面に丁寧なケズリ調整、端面は斜位(3分勾配位)にケズリ、平坦に調整　側面丁寧なケズリ	P.47
63	150		K09	P.46		柱	芯持ケズリ出し	クリ	30.0	17.1	15.8	断面は楕円形、上端部は腐食、底部は芯に向かい鋭角に2方向からケズリ、底部のみ残存、側面タテケズリ	
64	151	305	I10	B		杭(柱)	芯持丸木	クリ	60.0	21.9	21.0	底部は削斧で平面に丁寧な整形が見られ側面タテケズリ、断面長楕円形	
65	153		L09			割り板	板目	クリ	74.6	13.0	12.0	建築用材の残存部分(背ガ板)か、底部に伐倒の斧キリ痕あり	



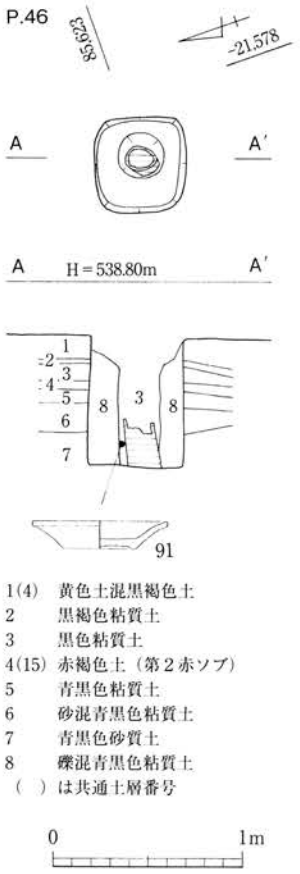
第6図　発掘全体図　芋川氏館跡第1次～第4次調査地点と妙福寺（1：800）



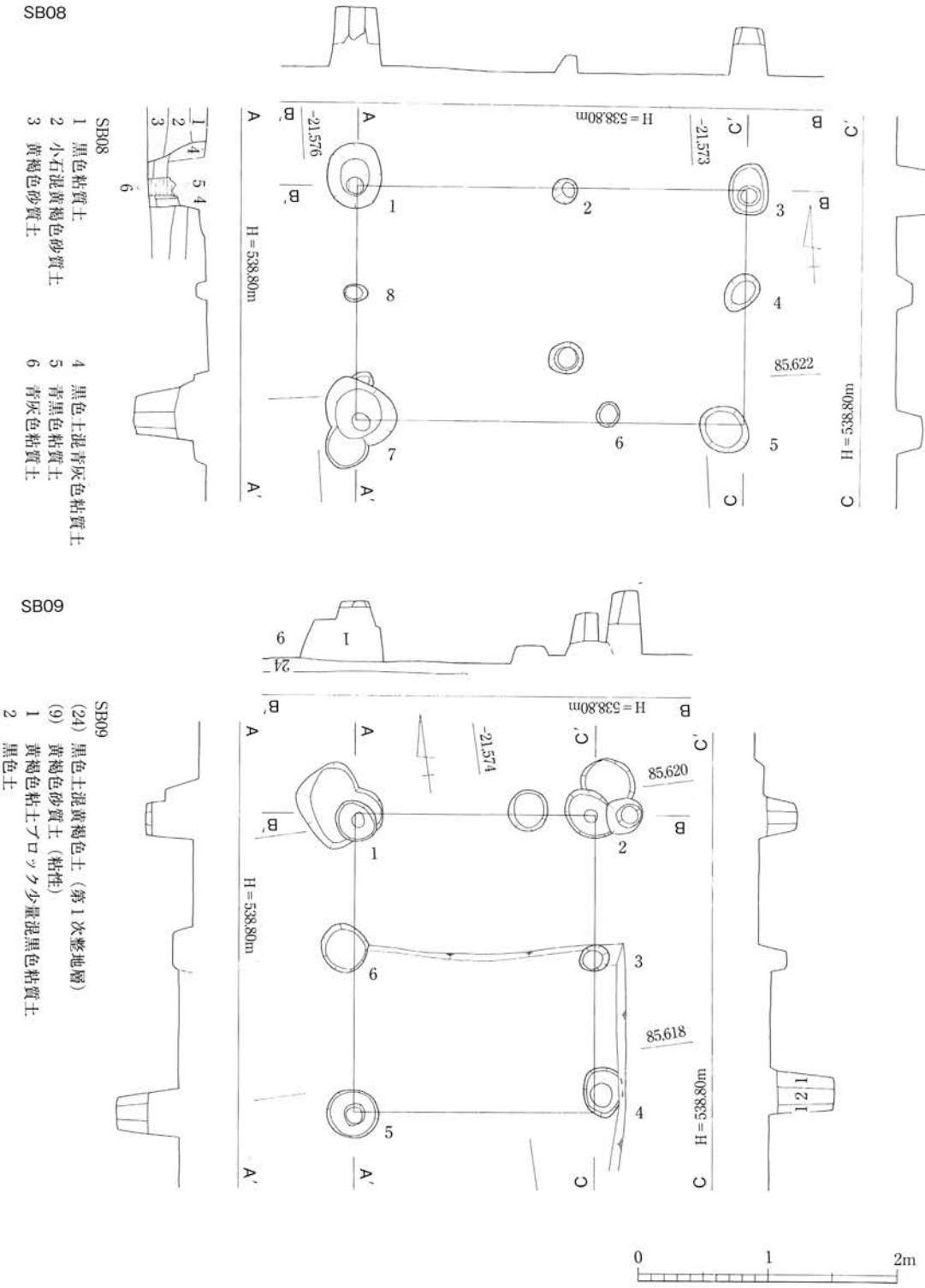
第７図　下層遺構（中世）発掘図（1：100）



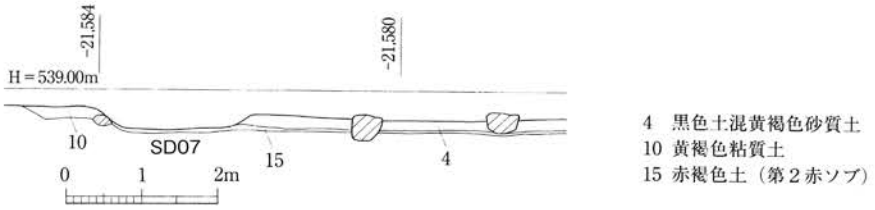
第８図　柵列 SA05（1：50）



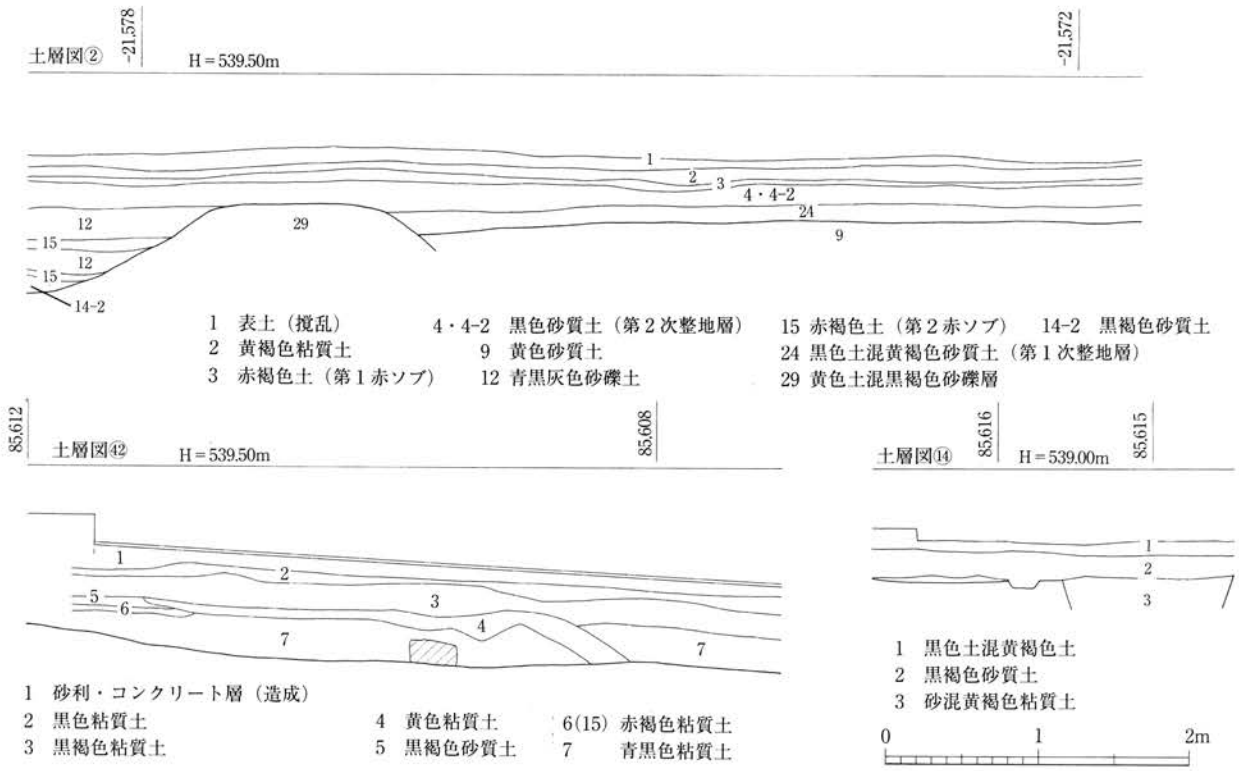
第９図　掘方（P.46）（1：40）



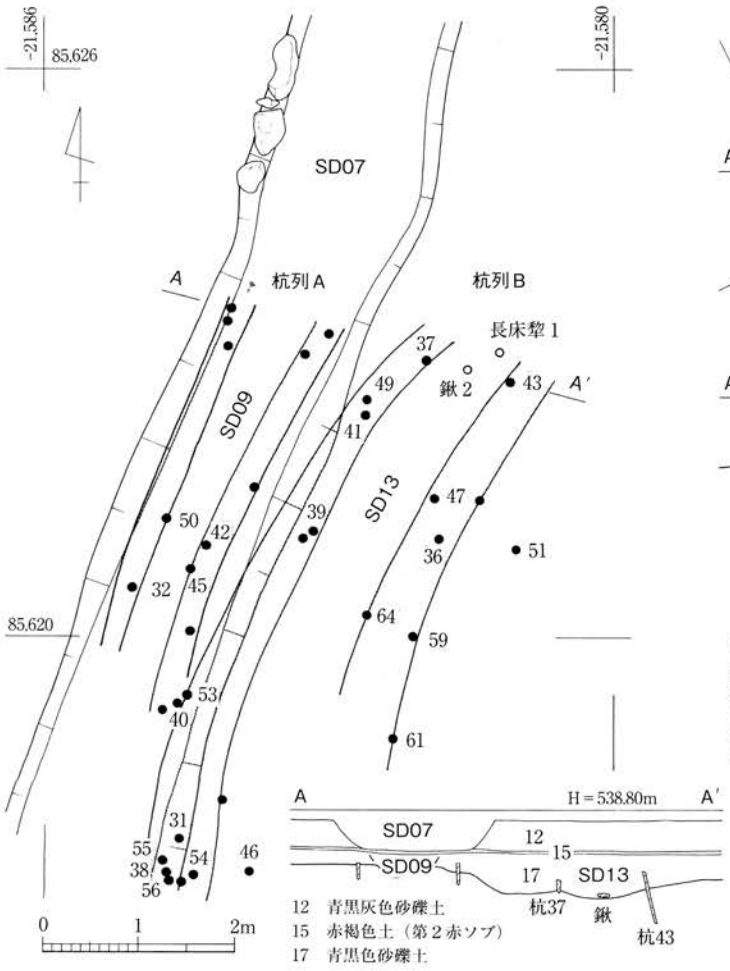
第10図　掘立柱建物 SB08・SB09（1：50）



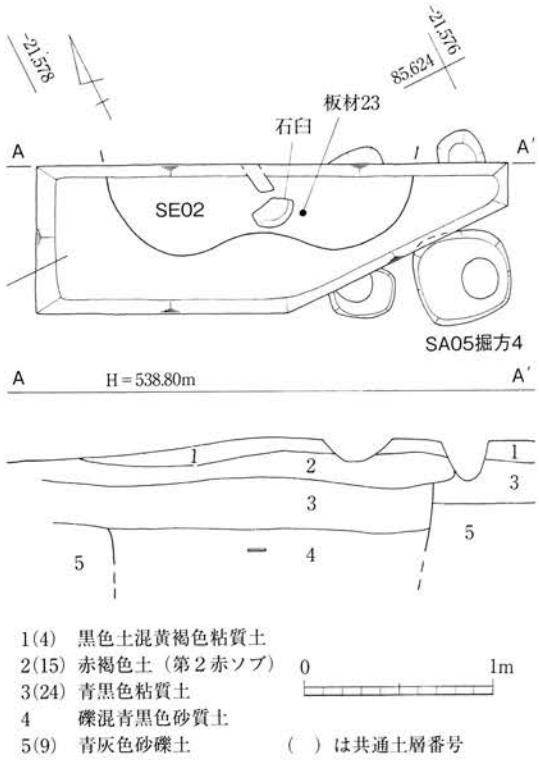
第11図　溝 SD07と礎石建物関係土層図（1：100）



第12図　土層図②・⑭・㊷（1：50）

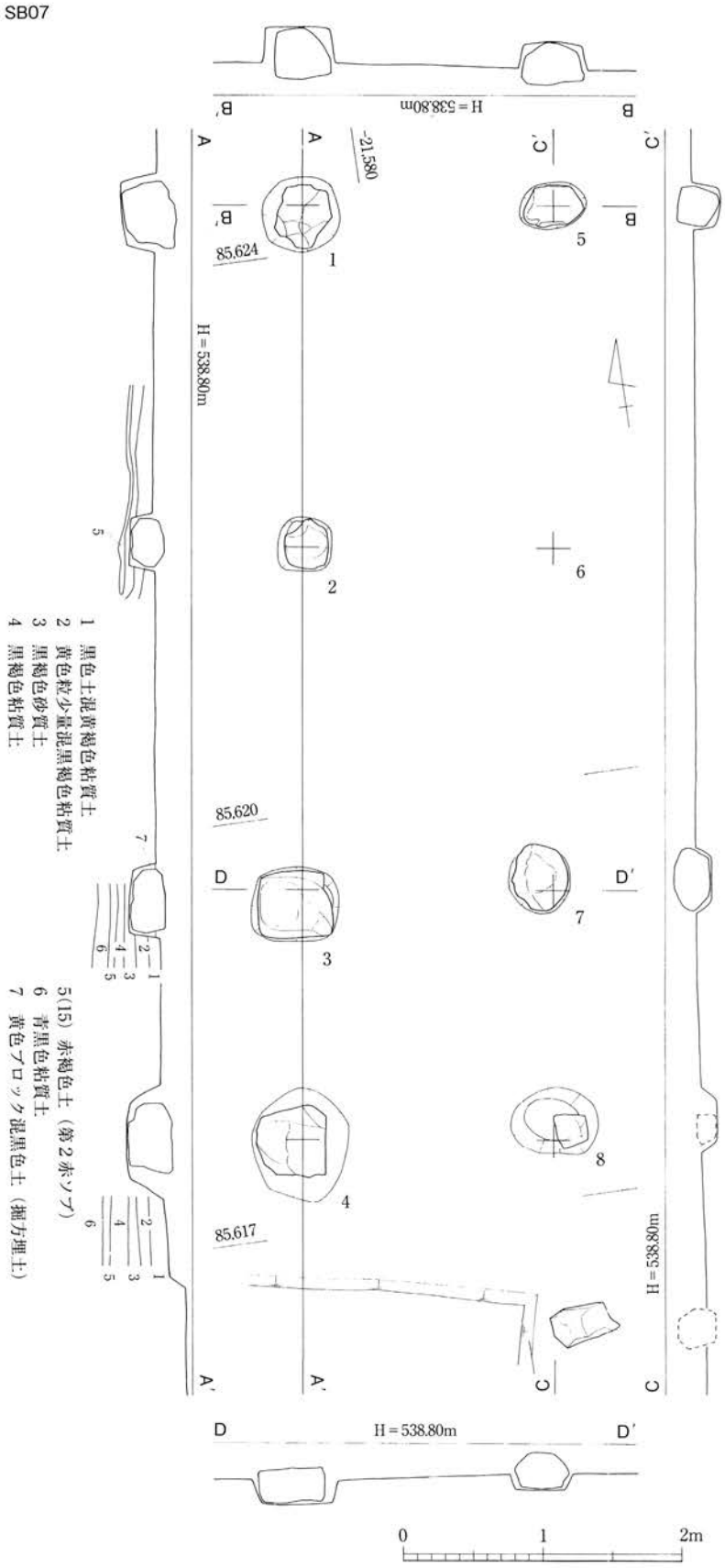


第14図　溝 SD09・SD13、杭列 A・B（1：80）

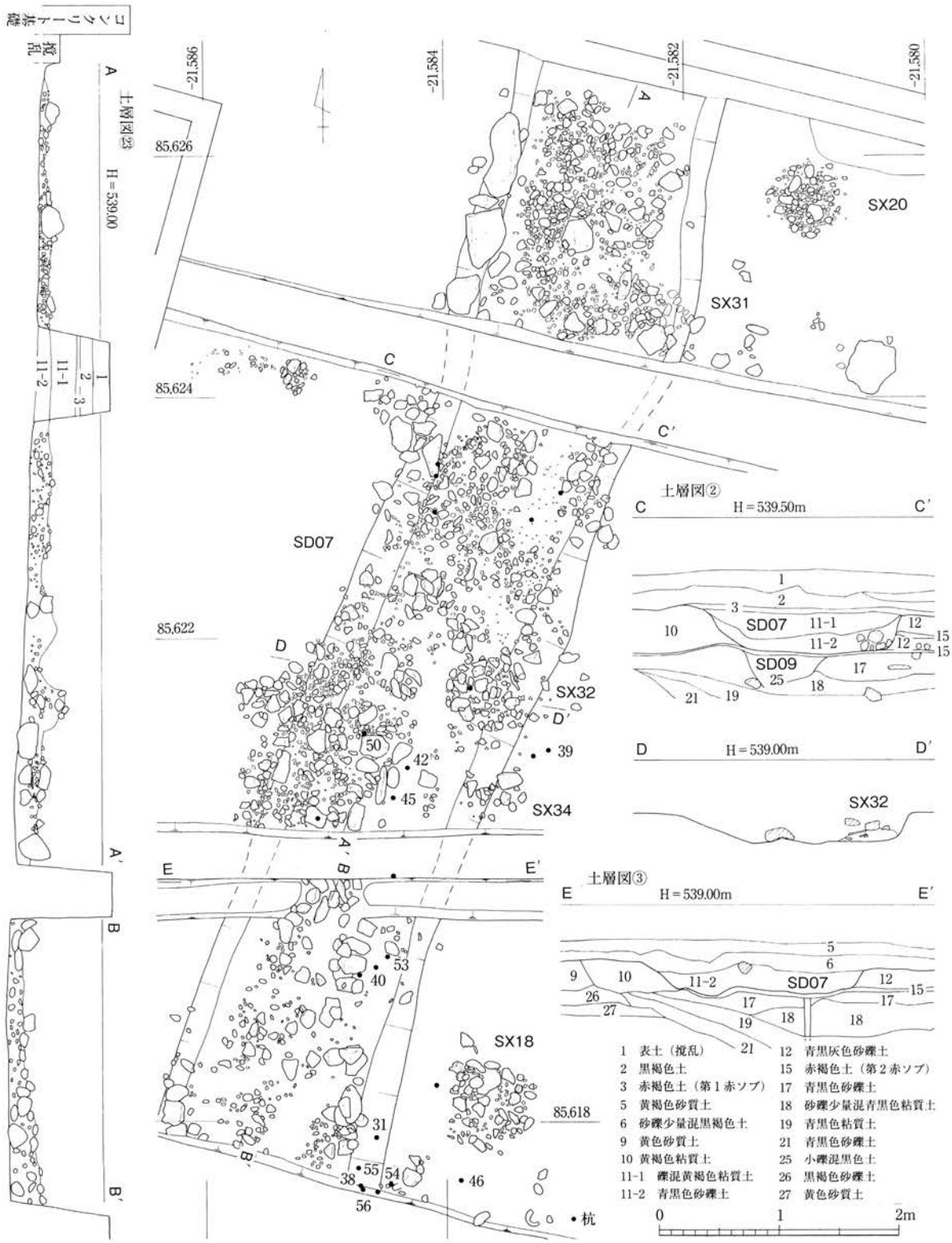


第13図　井戸 SE02（1：40）

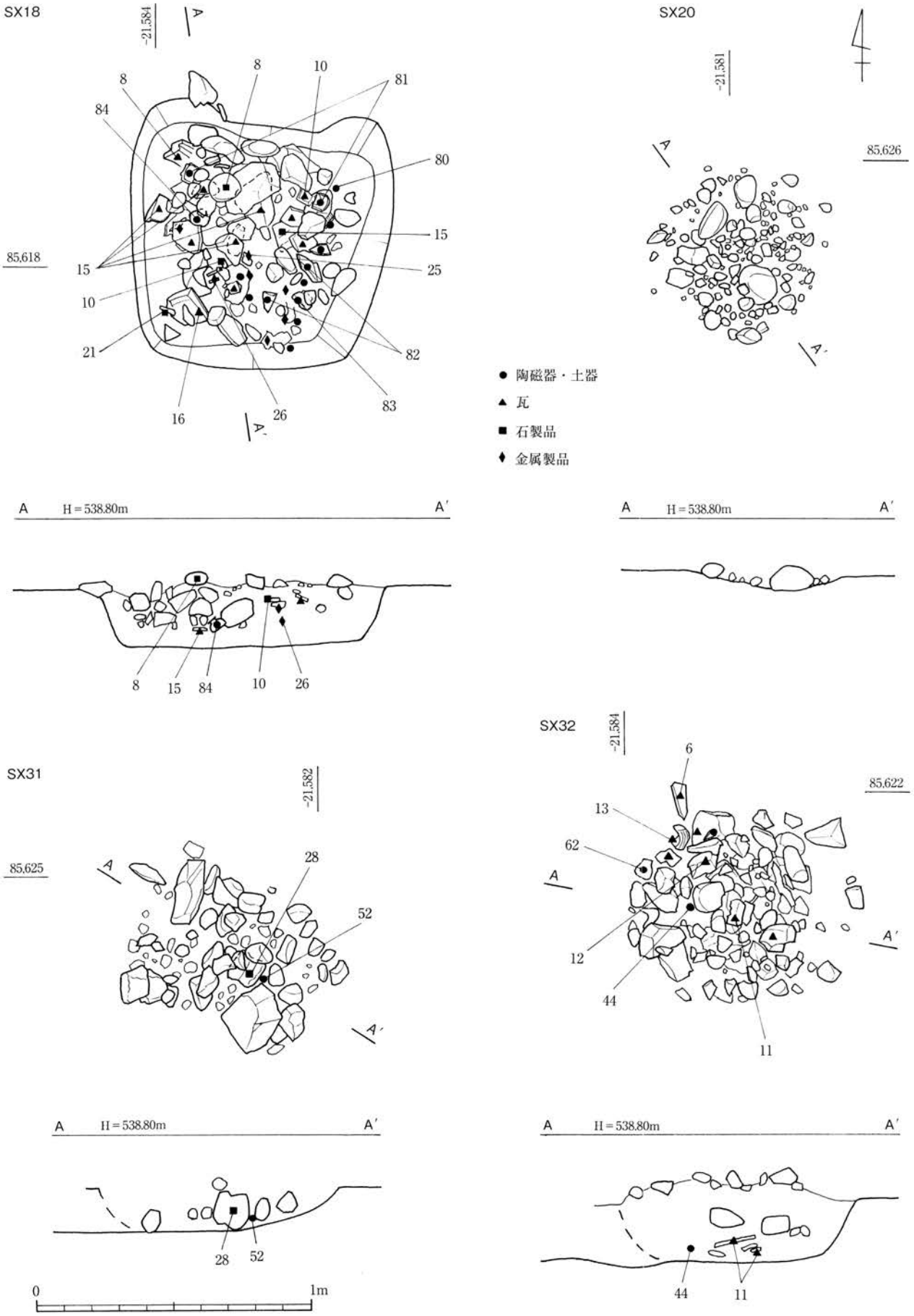
第15図　上層遺構（近世～近代）発掘図（1：120）　ただし土坑・柱穴は時期不詳につき省略（第7図参照）



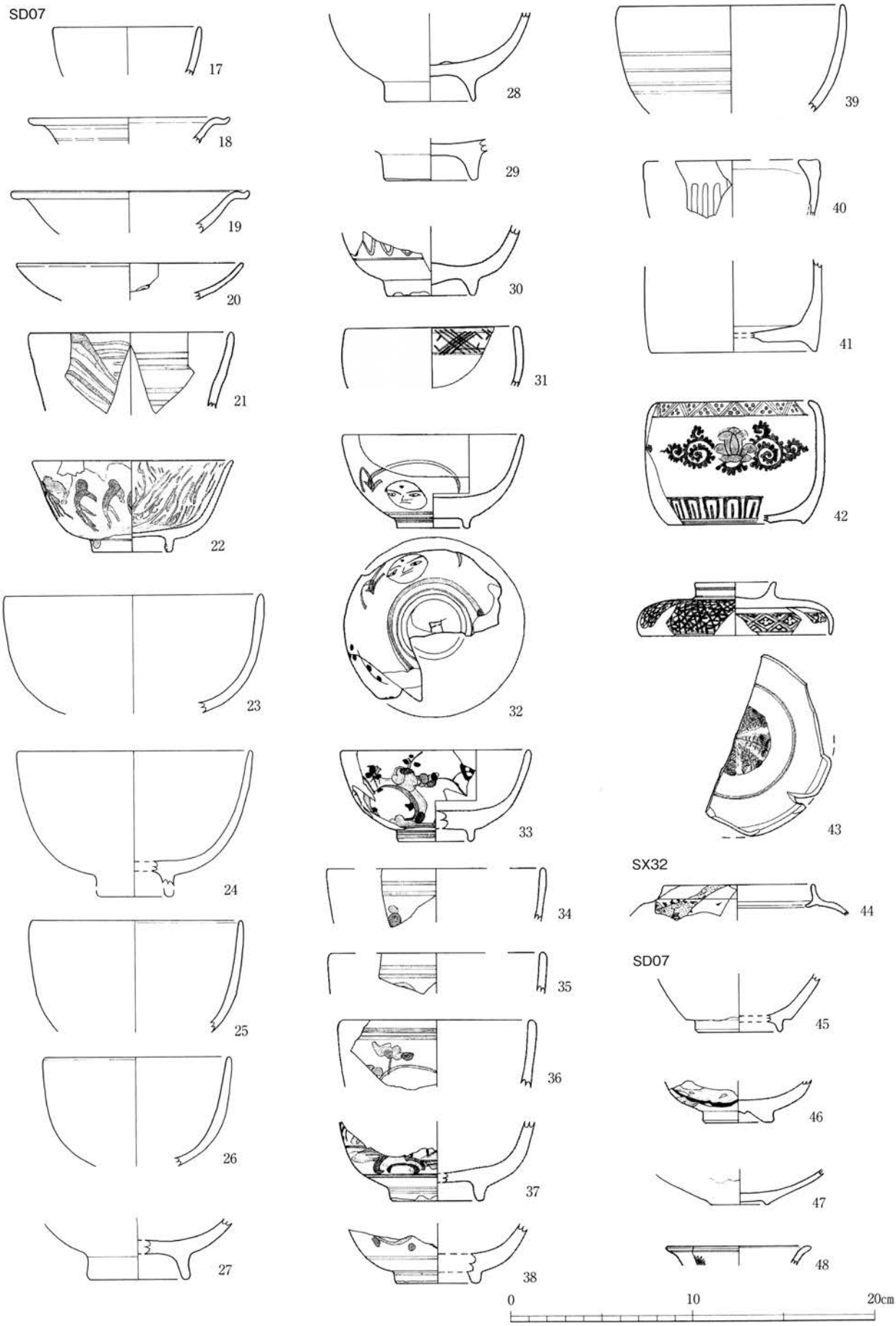
第16図　礎石建物 SB07（1：50）　共通土層　4層（第2次整地層）－1・2層　14層－4層　15層－5層　17層－6層



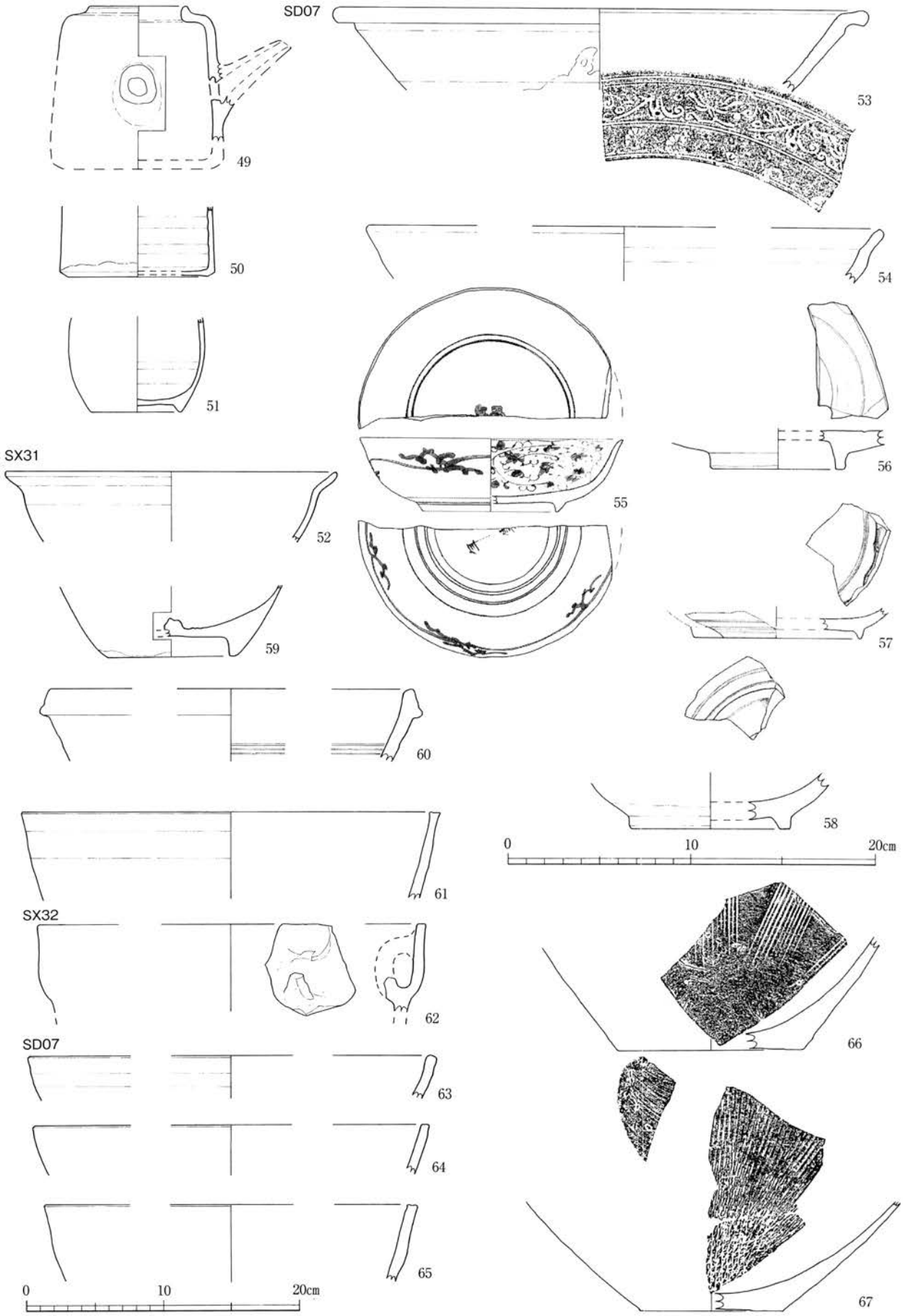
第17図　溝 SD07（1：50）



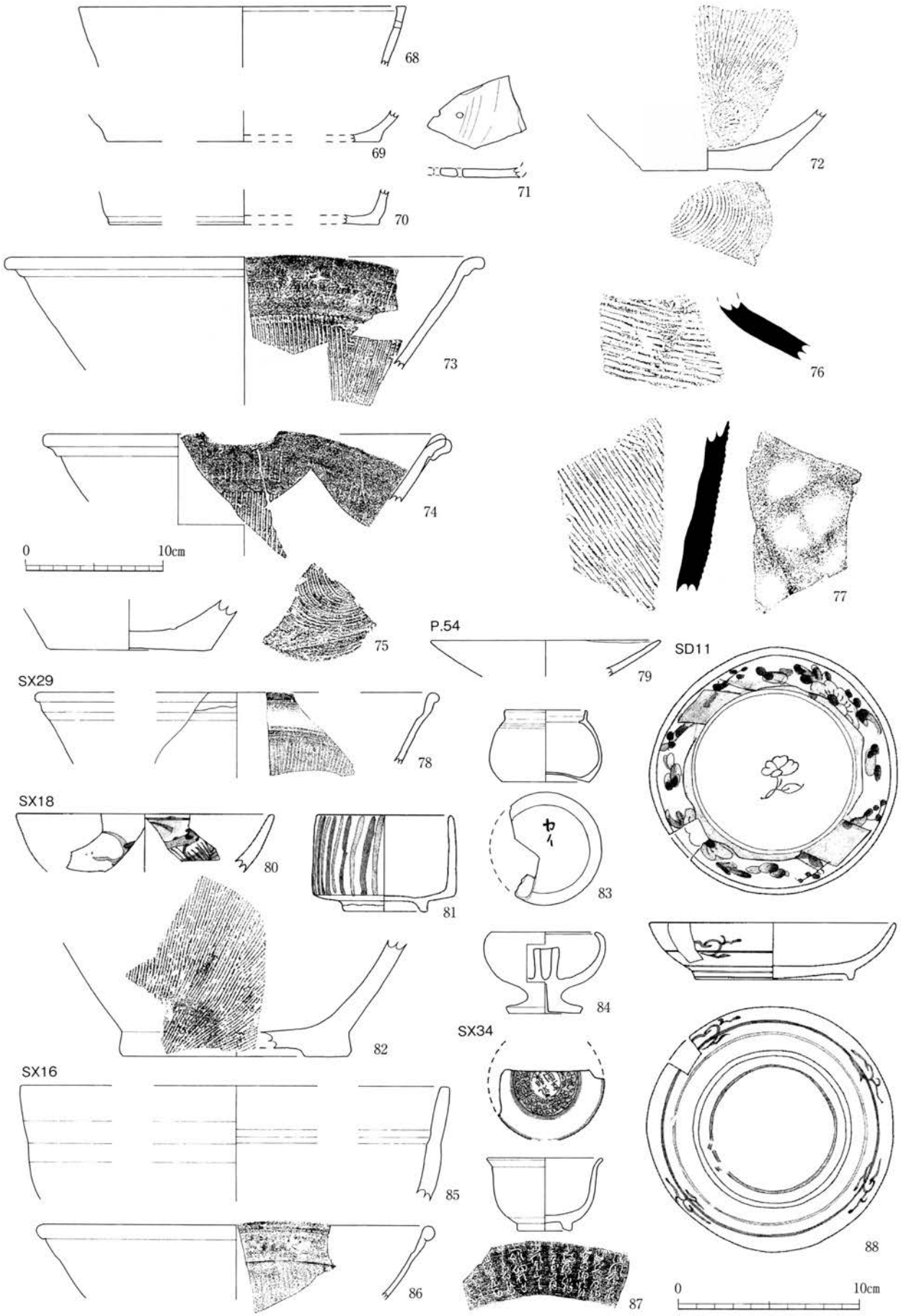
第18図　廃棄土坑 SX18・20・31・32（1：20）



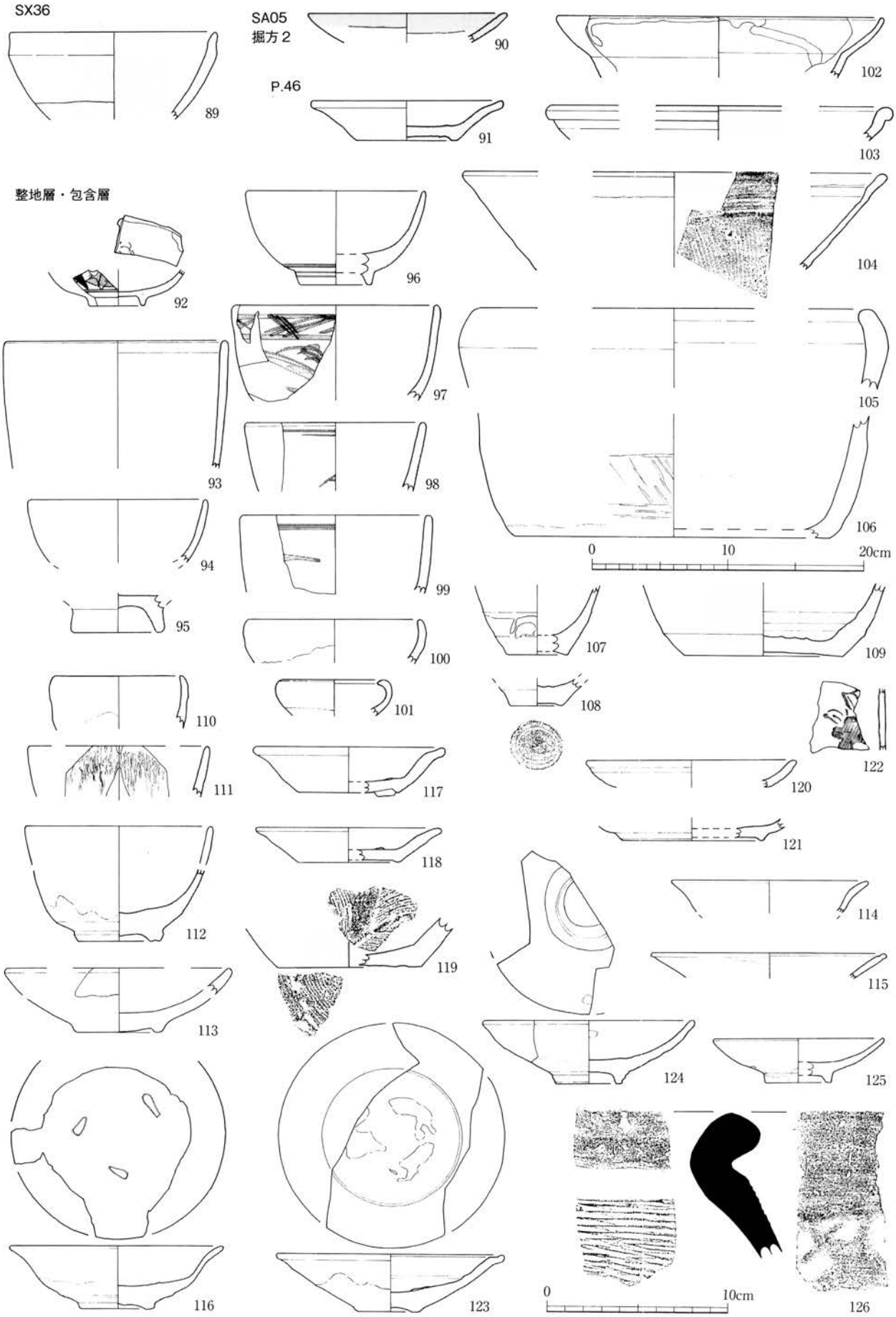
第19図　中世～近代の陶磁器・土器(1)（1：3）



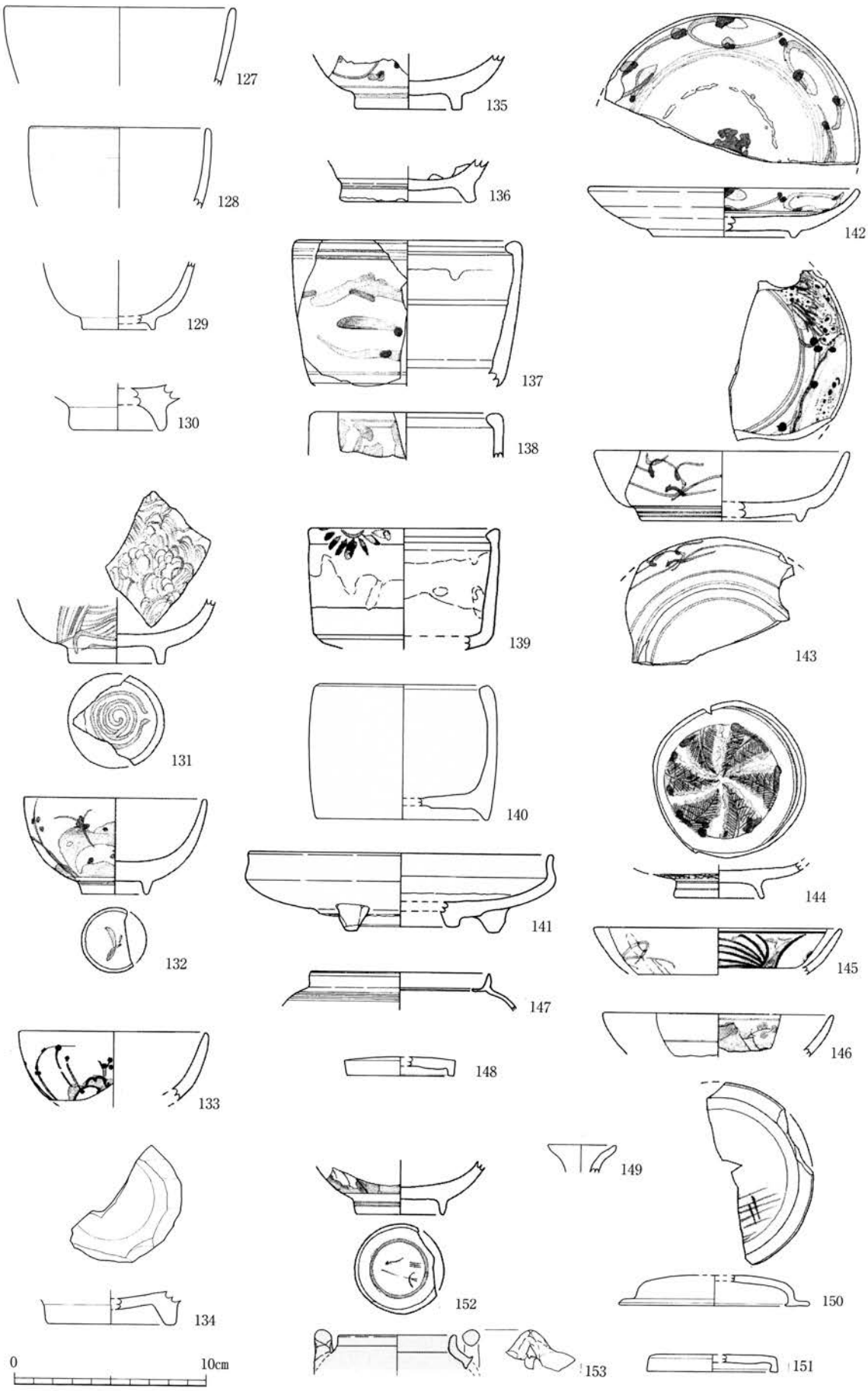
第20図　中世～近代の陶磁器・土器(2)（1：3、1：4）



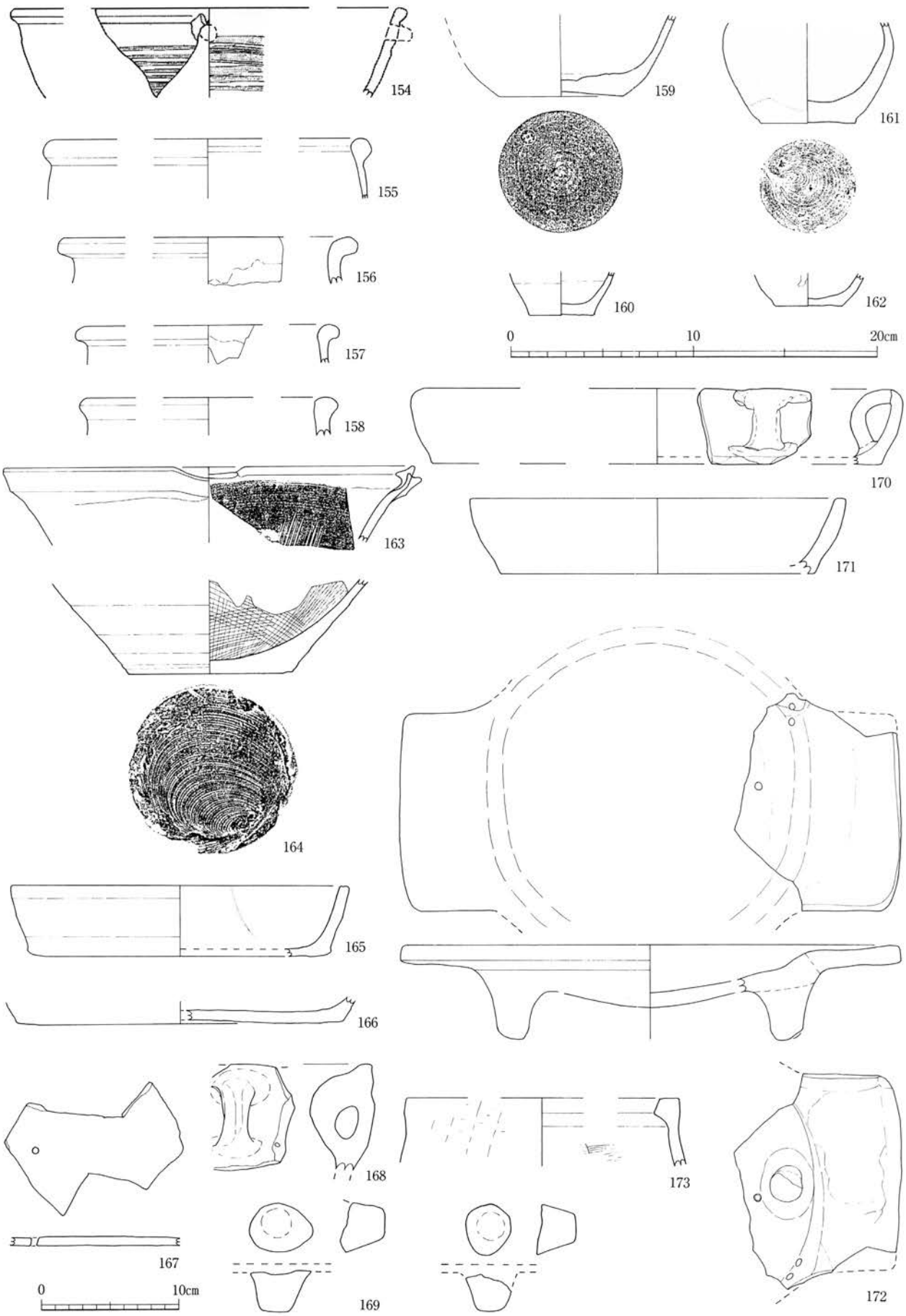
第21図　中世～近代の陶磁器・土器(3)（1：3、1：4）



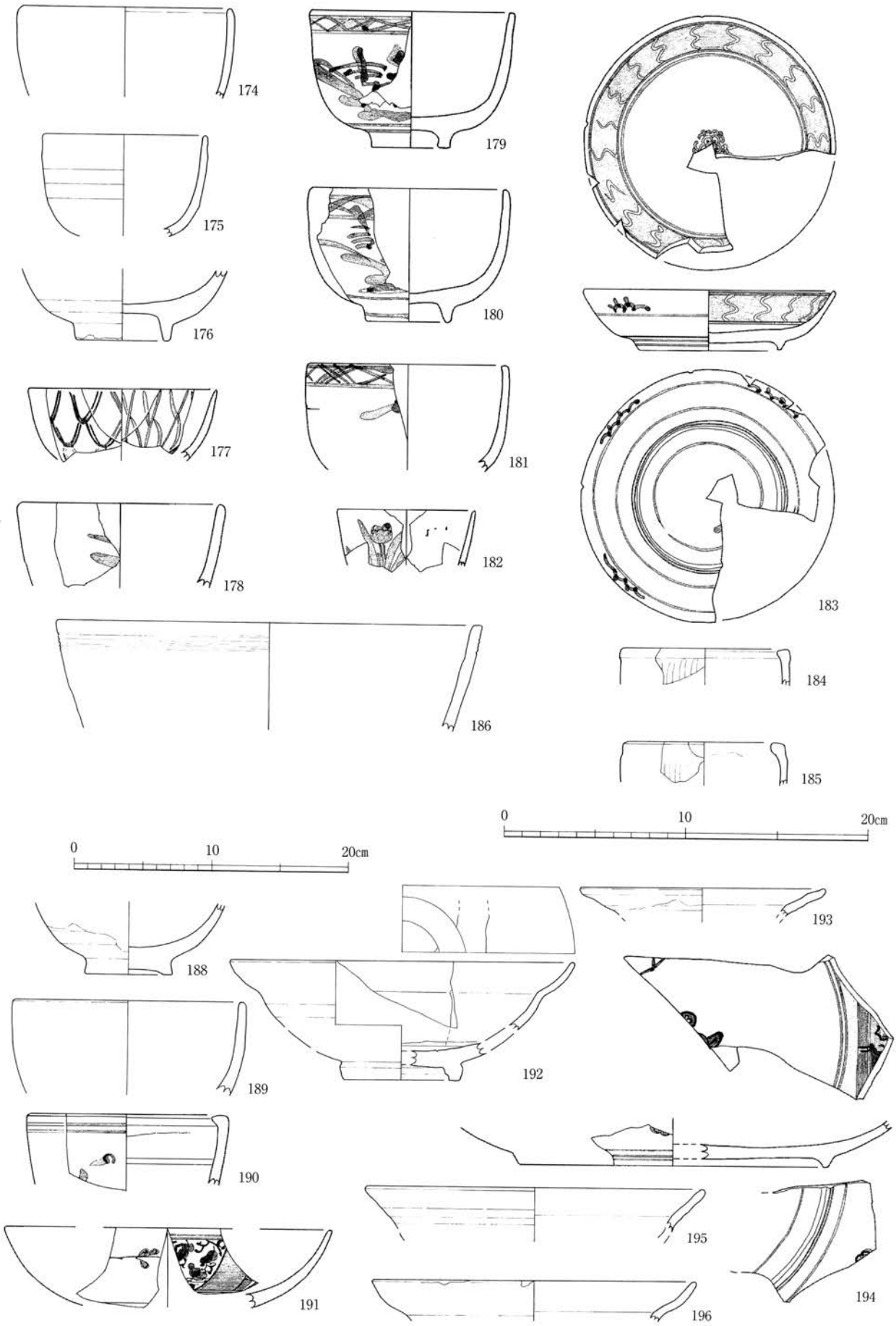
第22図　中世～近代の陶磁器・土器(4)（1：3、1：4）　2層（92～96・113・120）4・4－2層（第2次整地層）（97～109・122・124）24層（第1次整地層）（114・115・117・121・125）14・14－2層（110～112・116・118・119・123）19層（126）



第23図　中世～近代の陶磁器・土器(5)（1：3）　1～3層（129～131・142・144・150～153）4・4－2層（127・128・132～141・143・145～149）

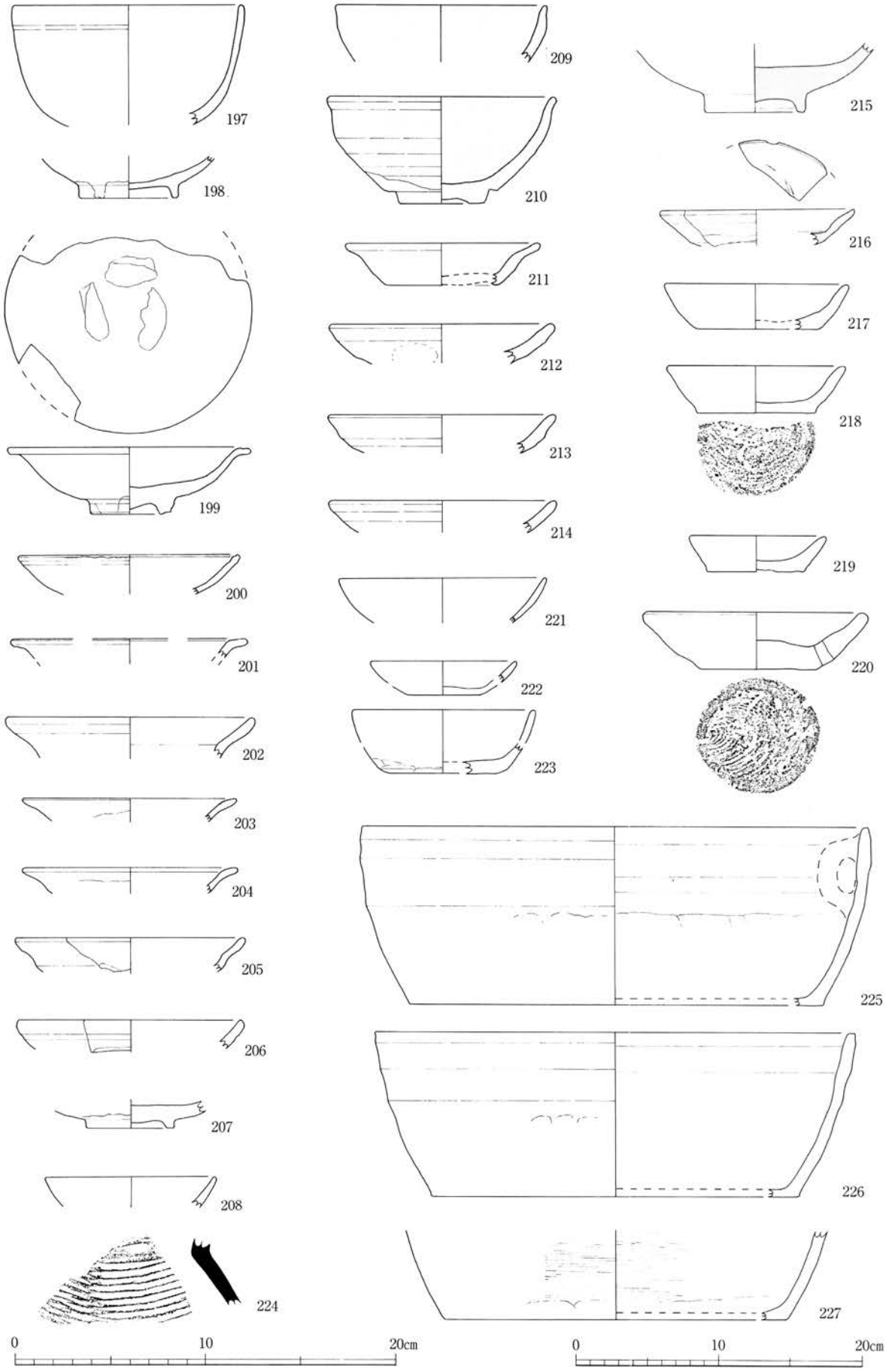


第24図　中世～近代の陶磁器・土器(6)（1：3、1：4）　2層（156～158・163・165・173）4・4－2層（155・161・162・164・166～170・172）12層（154・159・160・171）

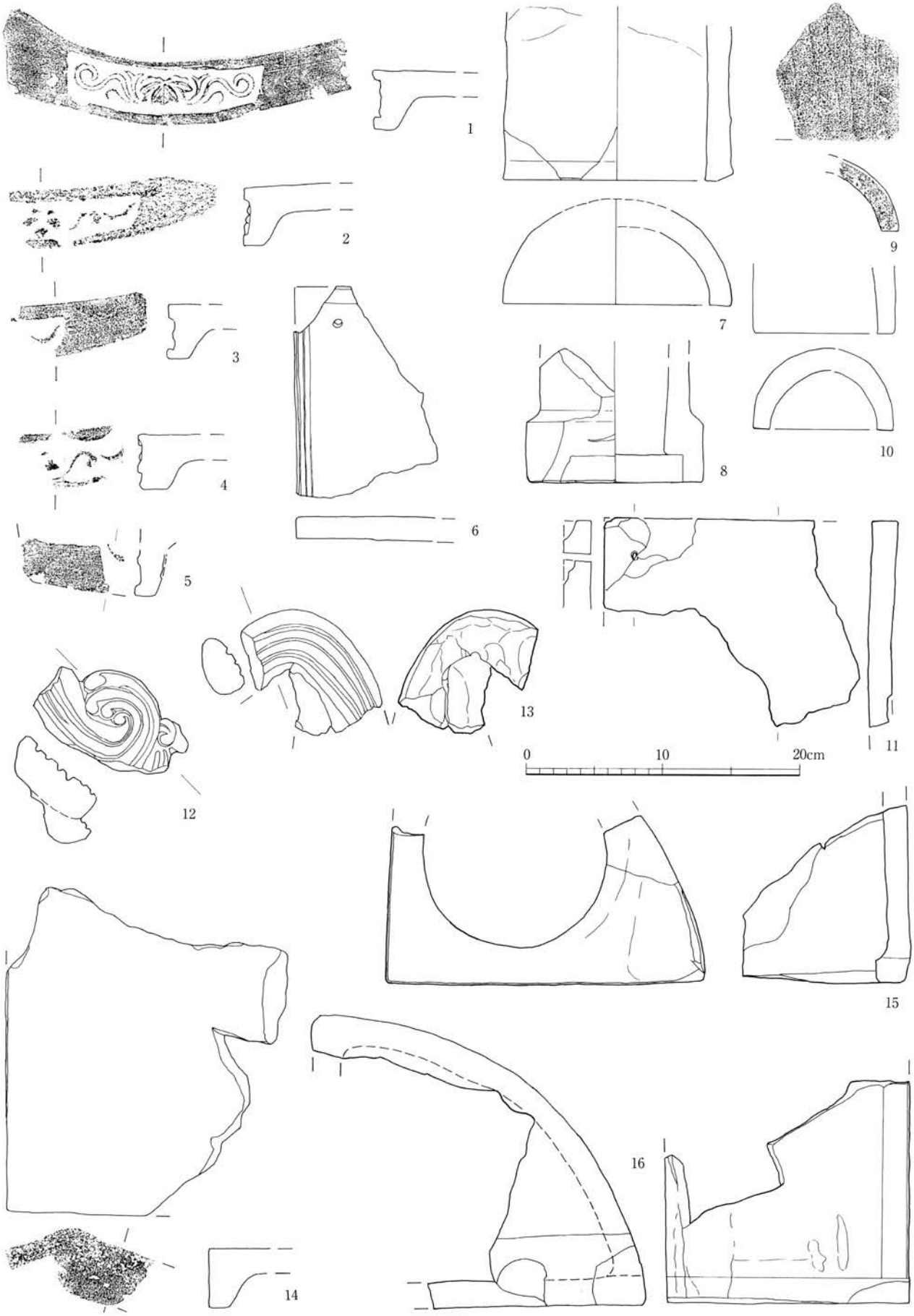


第25図　中世～近代の陶磁器・土器(7)（1：3、1：4）　4層（184・192～196）12・14・15層（174～183・188～191）19層（185・186）

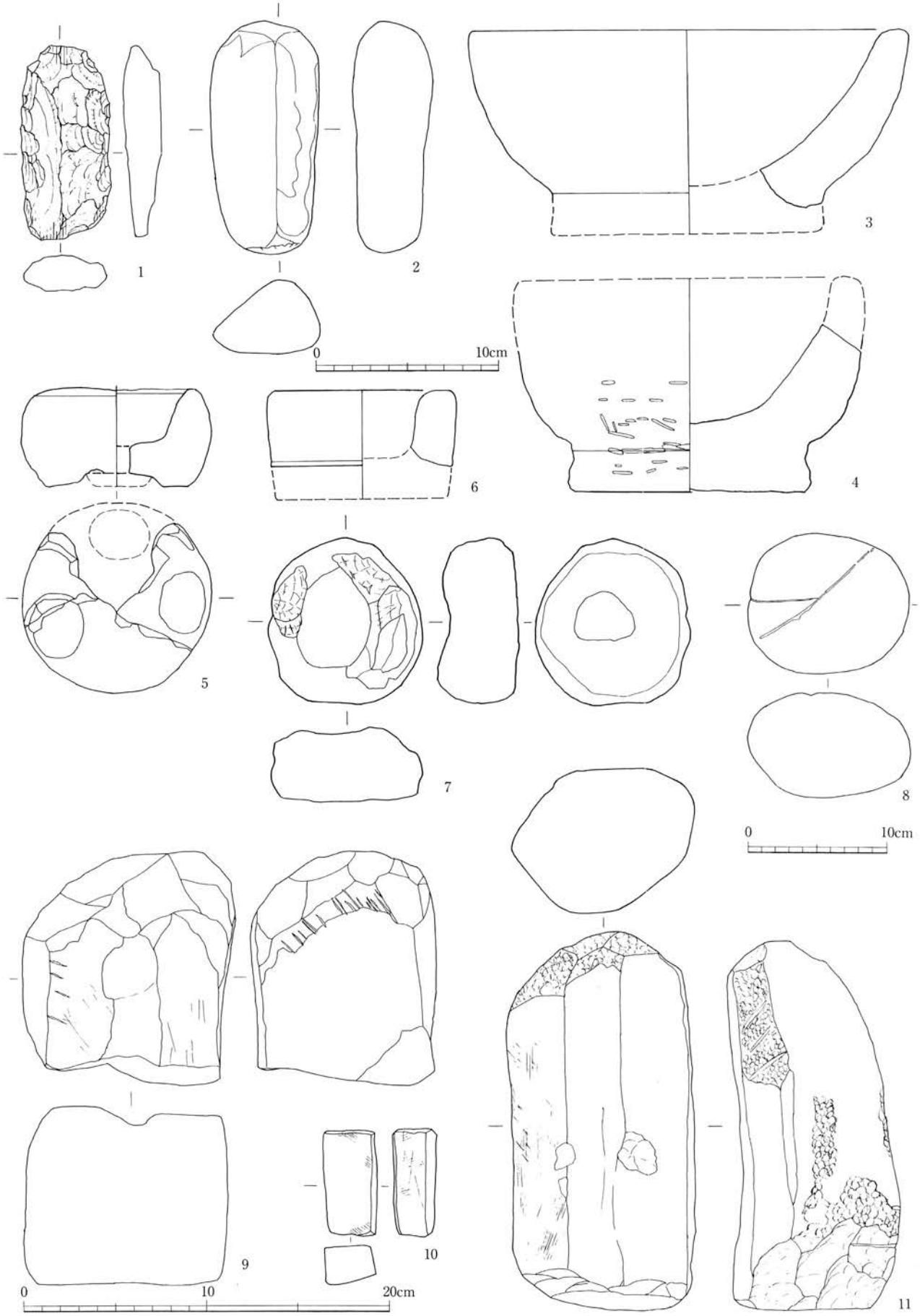
東堀SD05埋土



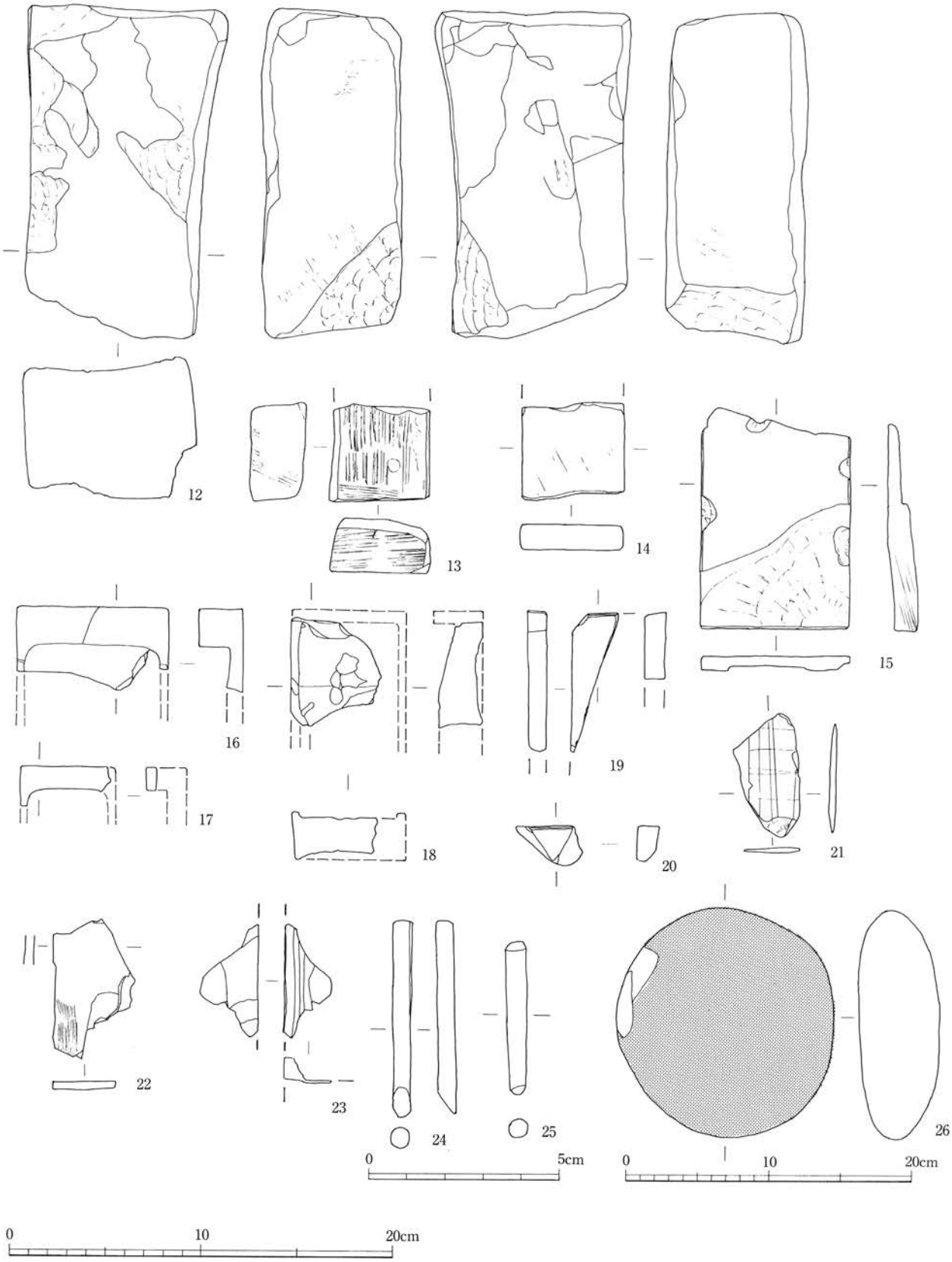
第26図　中世～近代の陶磁器・土器(8)（1：3、1：4）　12～15層（198・201・208）17～19層（197・199・200・202～207・209～214・216・224～227）20～22層（215・217～223）



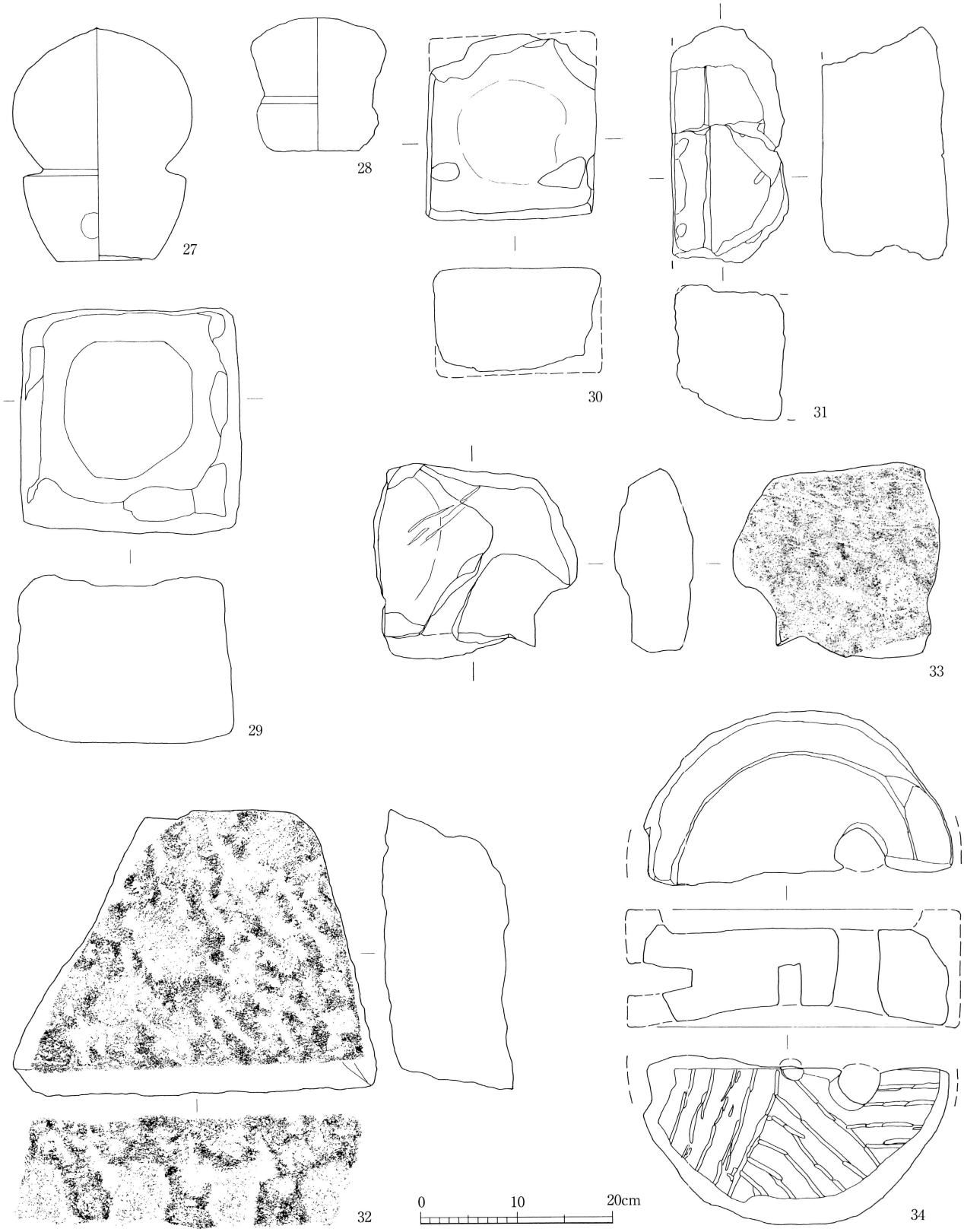
第27図　瓦（1：4） SX18（8・10・15・16）SX32（6・11～14）他包含層



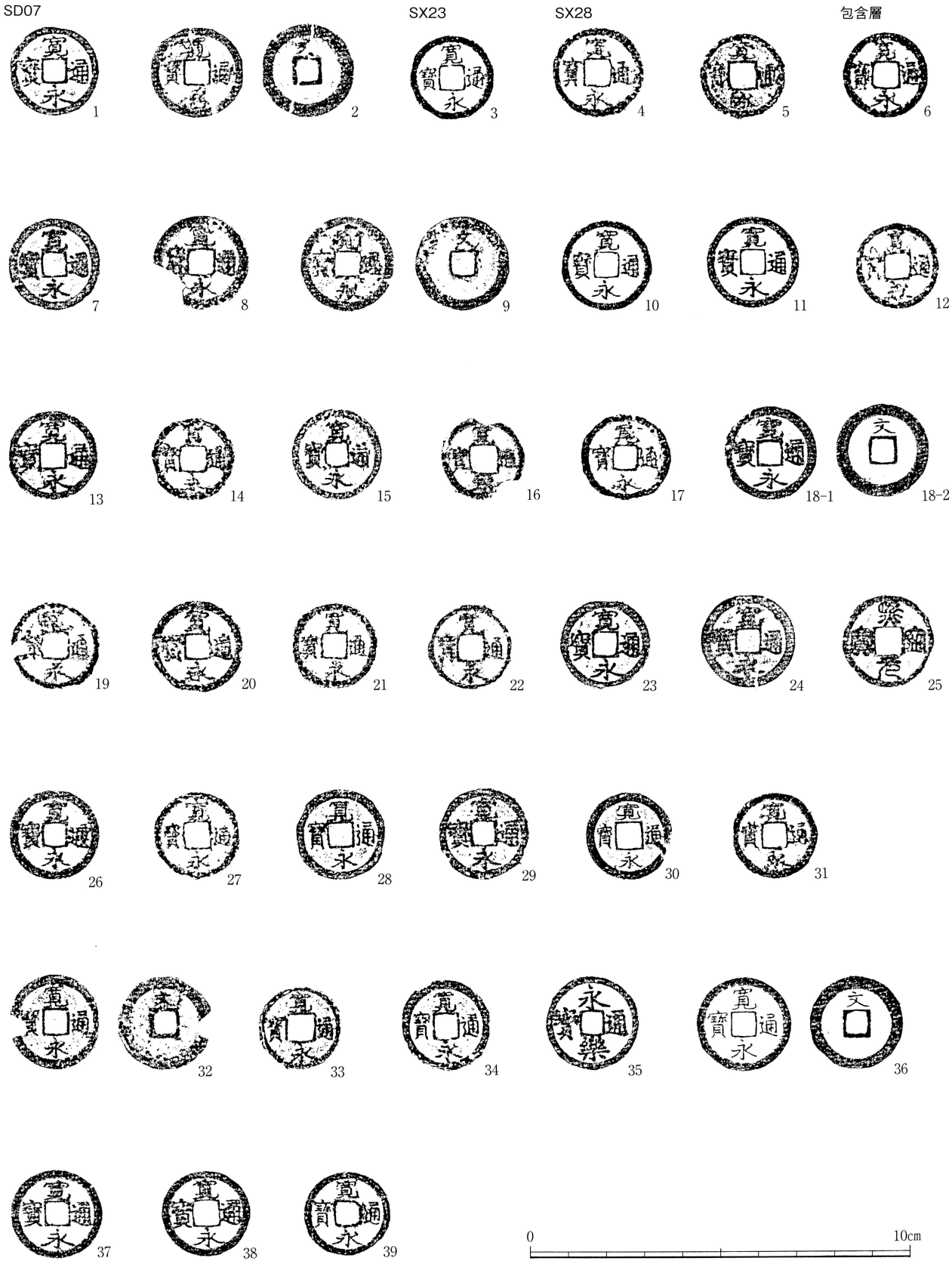
第28図　石器・石製品(1)（1：3、1：4）　SD05（6）SD10（5）SX18（8・10）SX22（11）SX24（2）他整地層・包含層



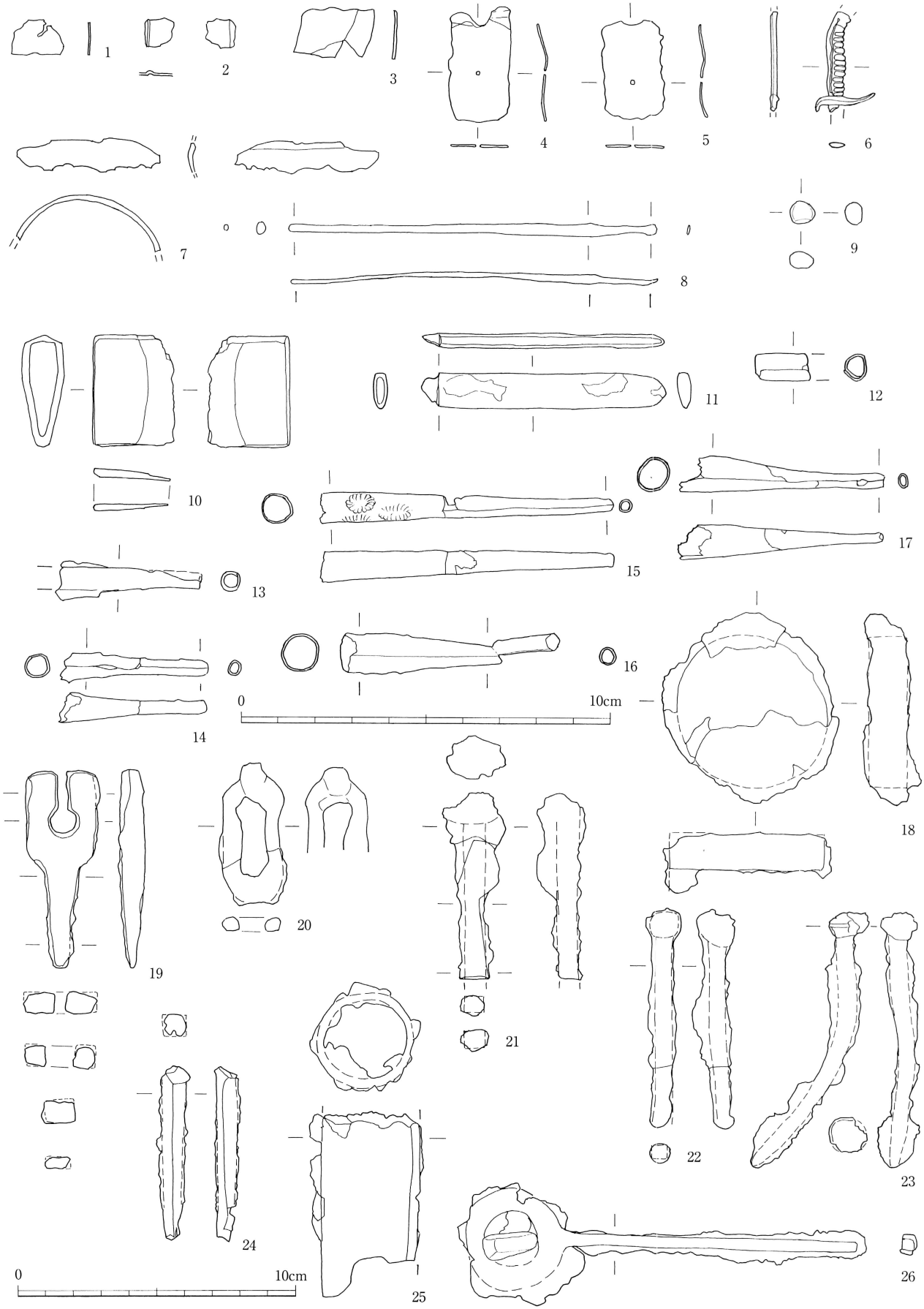
第29図　石器・石製品(2)（2：3、1：3、1：4） SD07（13）SX18（15・21）SX44（12）他整地層・包含層



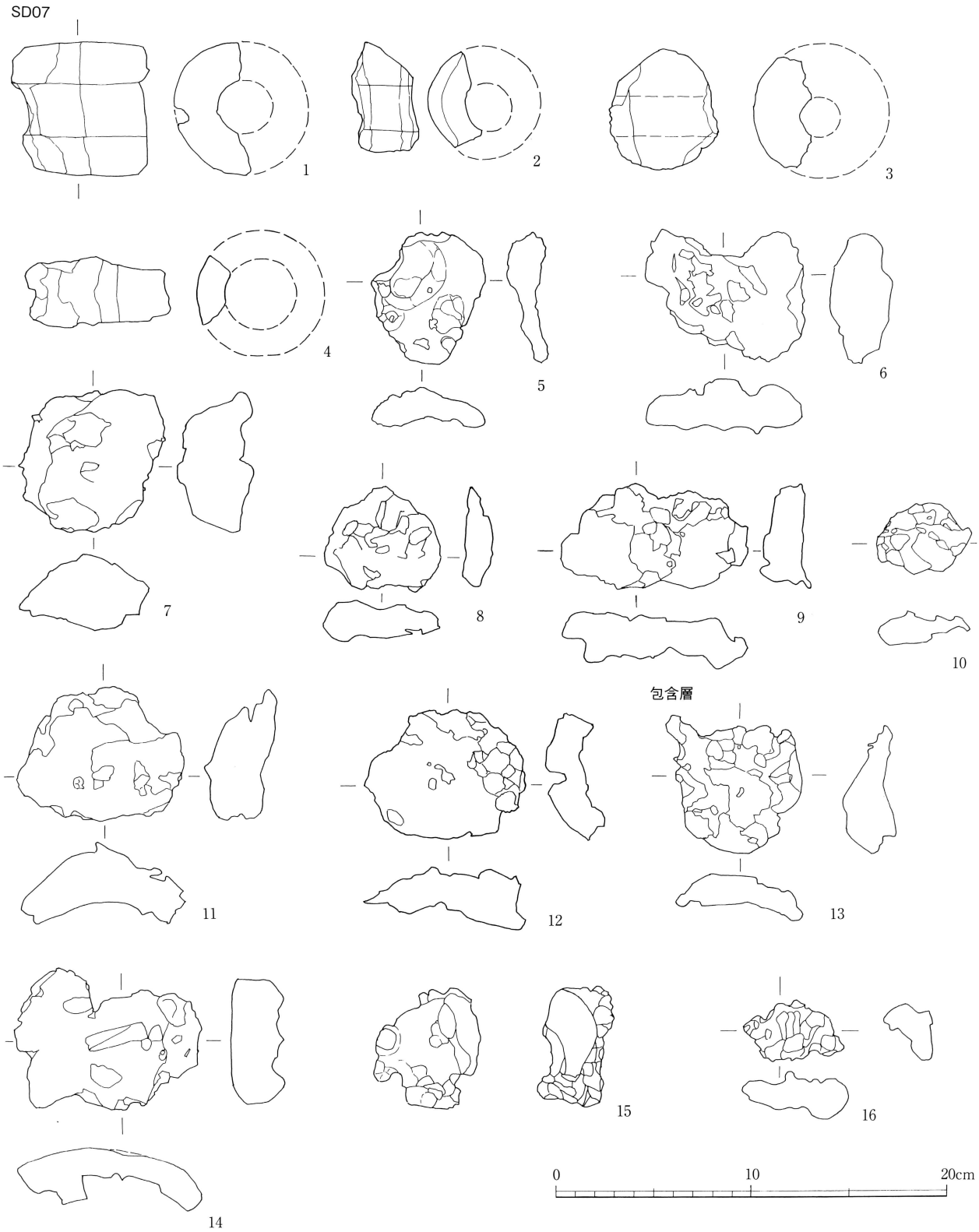
第30図　石器・石製品(3)（1：6）　SX31（28）P.103（33）他包含層



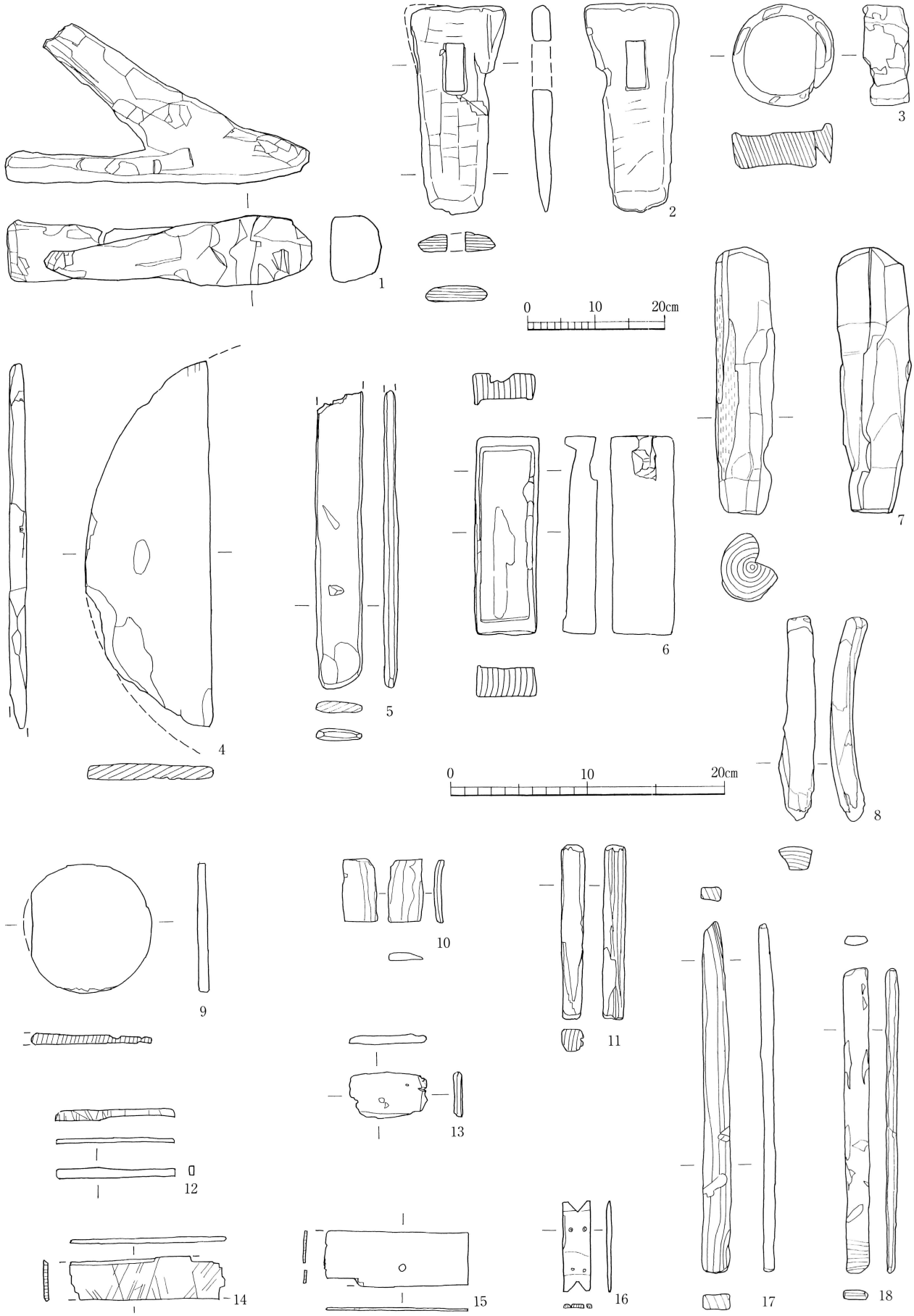
第31図　銭貨（2：3）



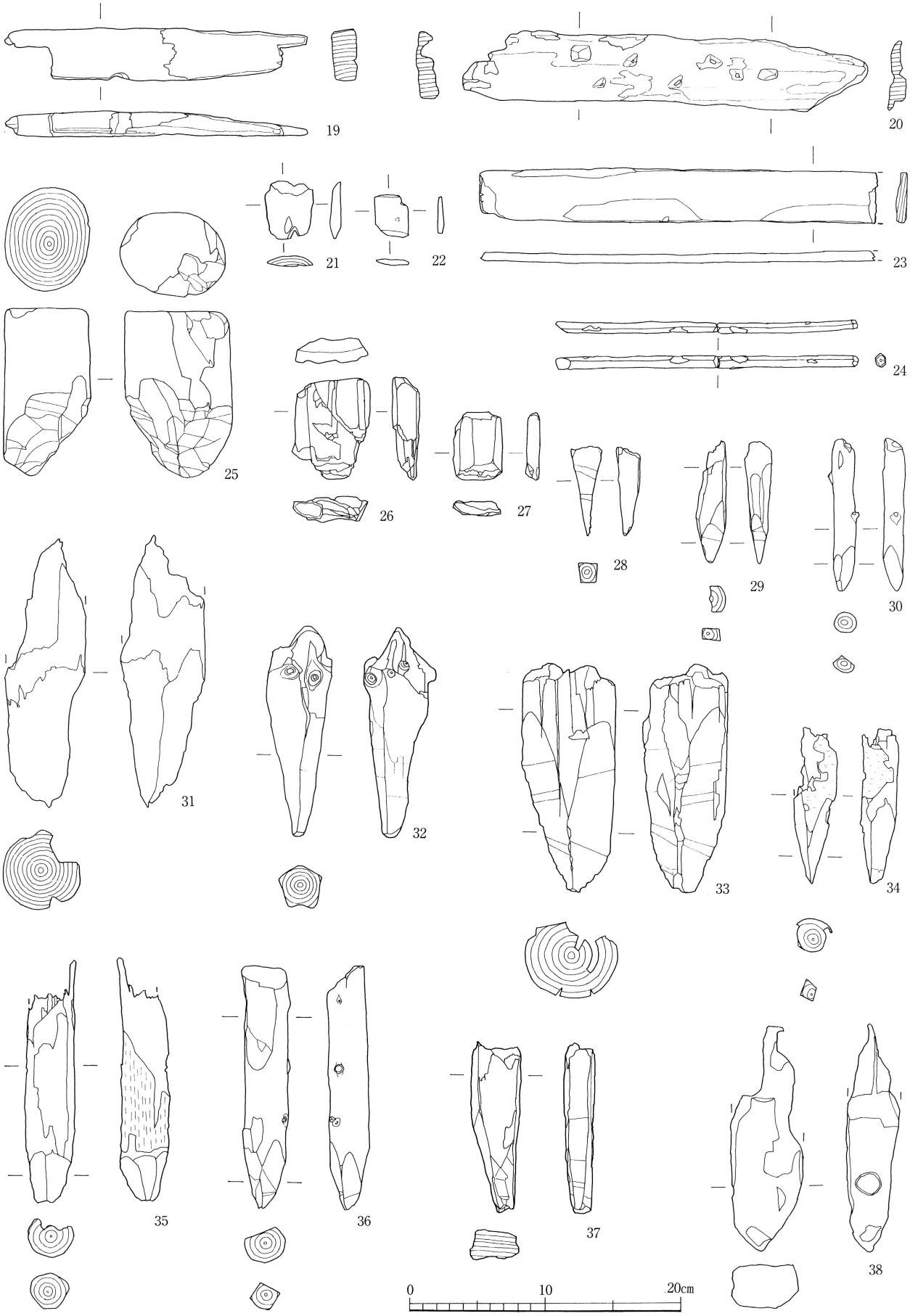
第32図　金属製品（2：3、1：2） SD07（13・19）SD09（7）SX18（25・26）SX40（3）他整地層・包含層



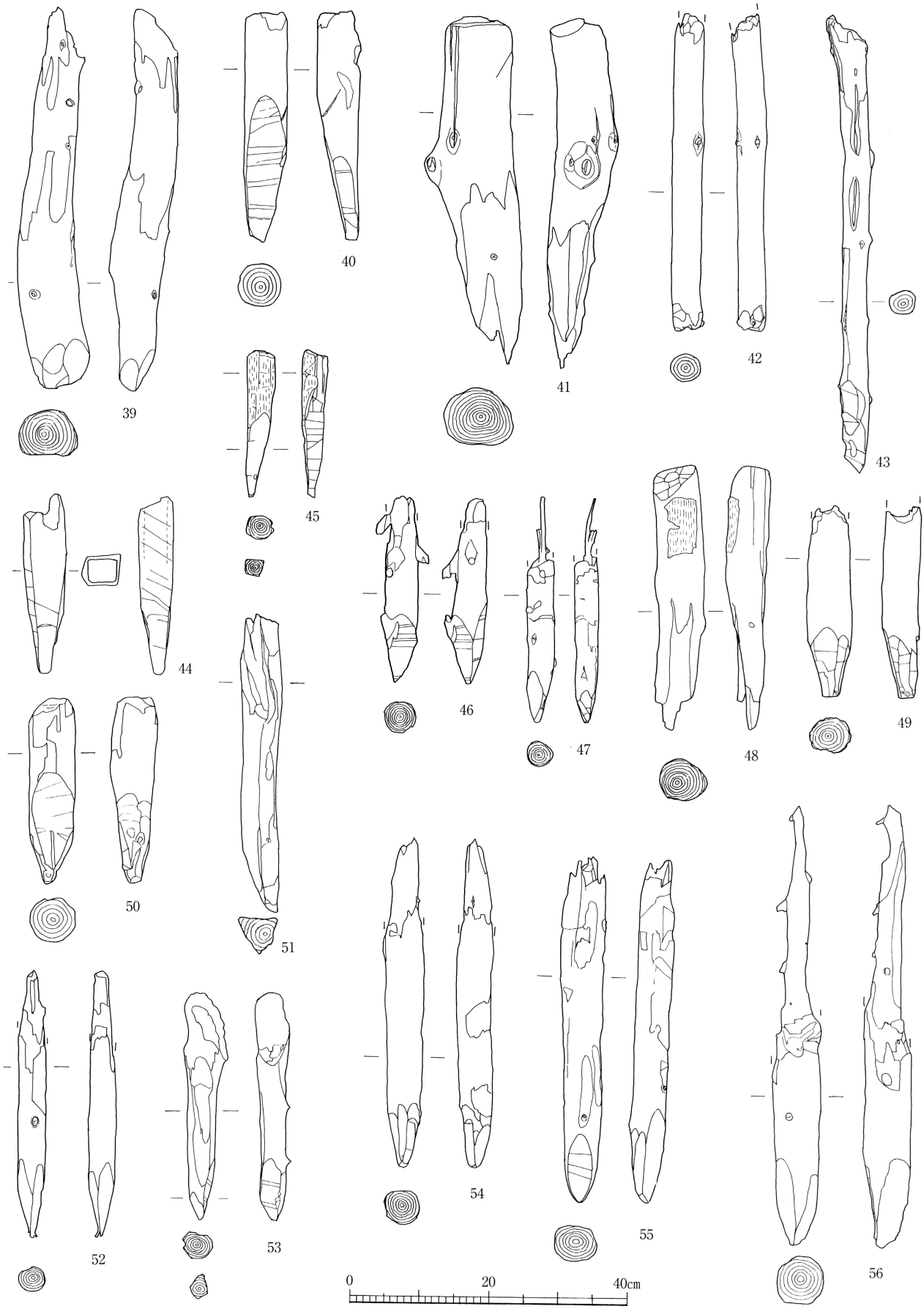
第33図　鍛冶関連遺物（1：3）



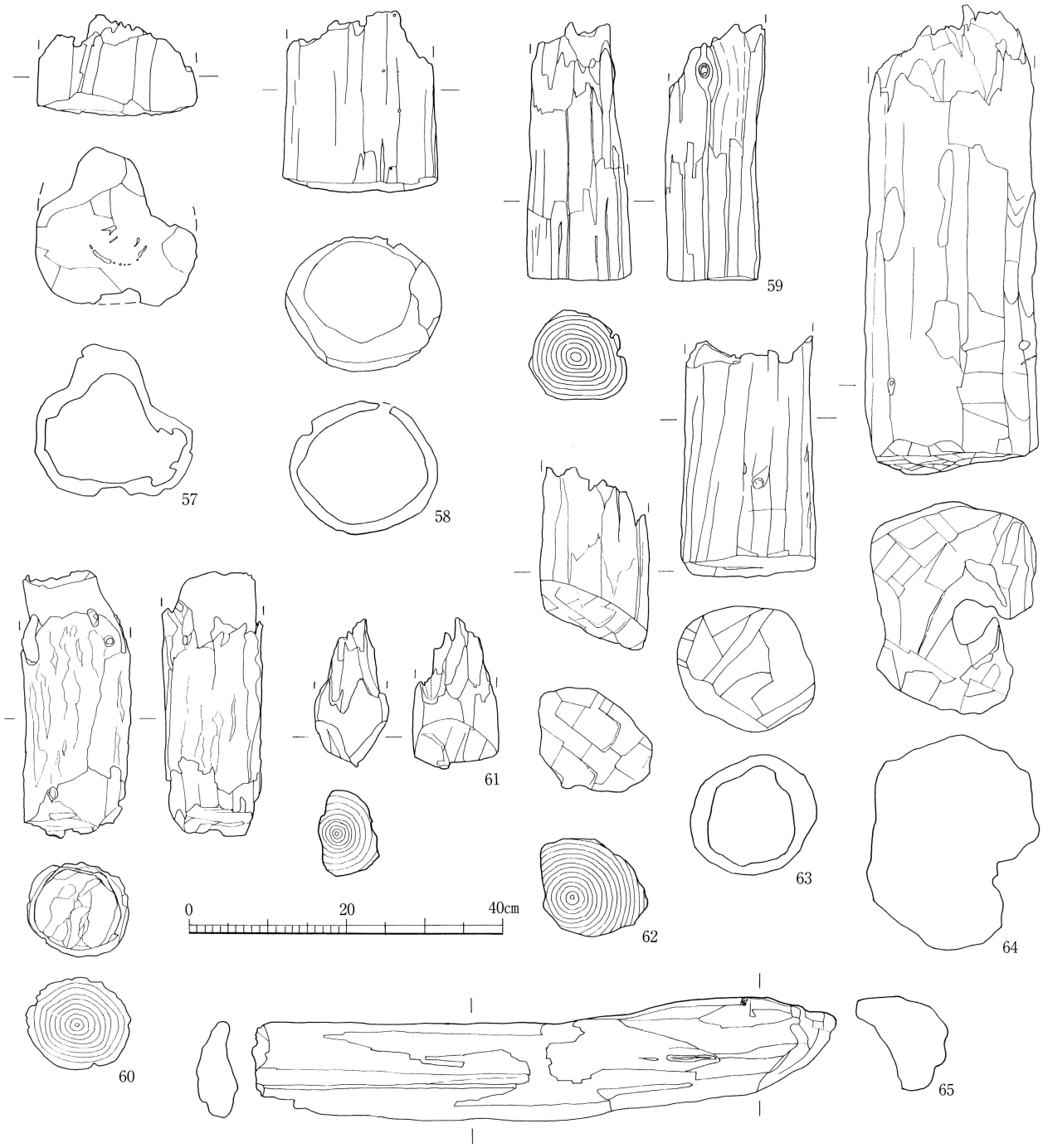
第34図　木製品(1)（1：4、1：8） SD13（1・2）SD05（3）SD07（4・5・7・8）SA05掘方2（18）他包含層



第35図　木製品(2)（1：4）　SD07（19～22・26）SE02（23）杭列（31・32・36～38）他包含層

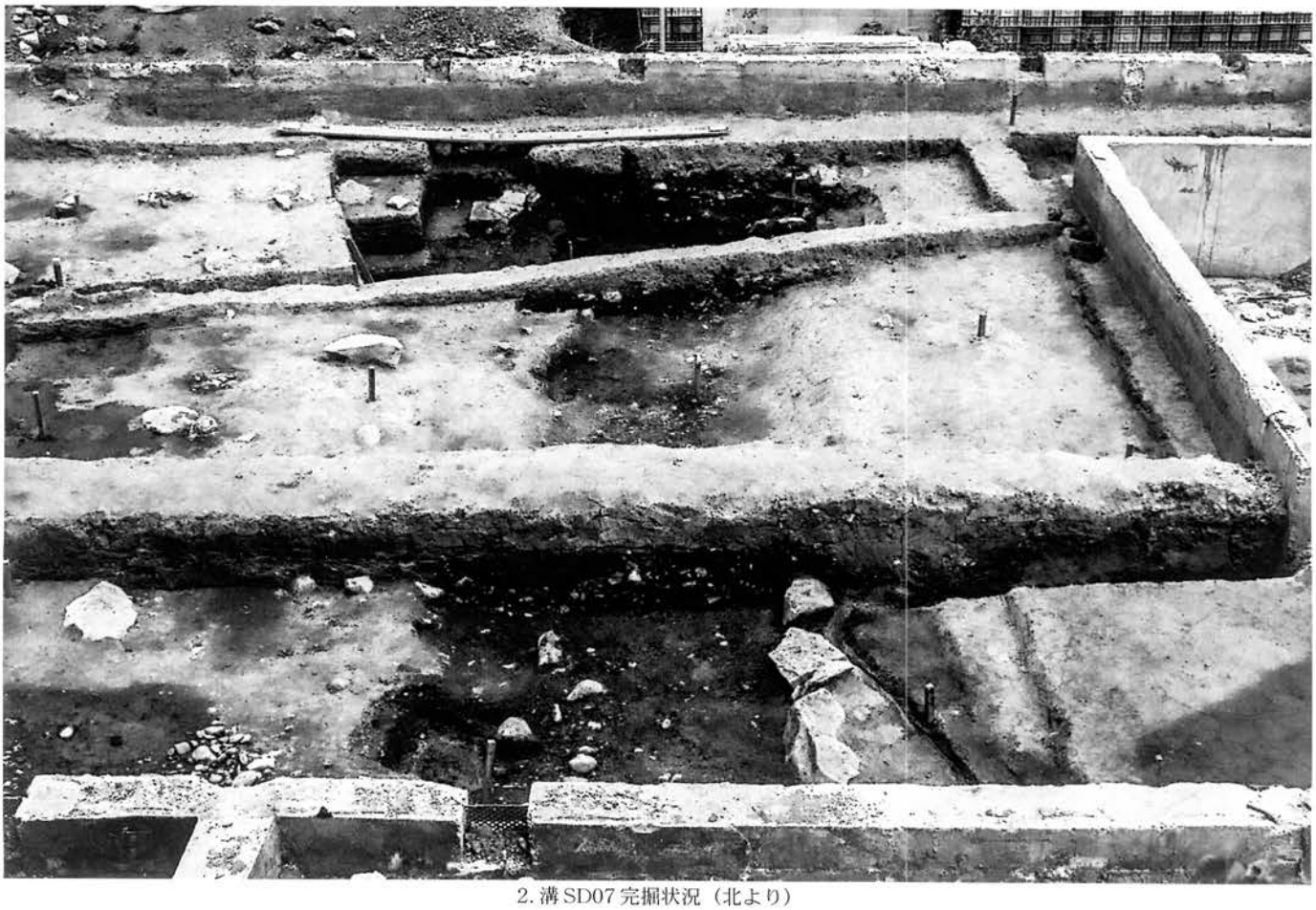


第36図　木製品(3)（1：8）　杭列（39～43・45・47・50・53～56）他包含層



第37図　木製品(4)（1：8）　SA05掘方1（57）掘方2（58）SB08掘方1（62）P.46（63）杭列（59・61・64）他包含層

1. 溝 SD07 検出状況（北より）

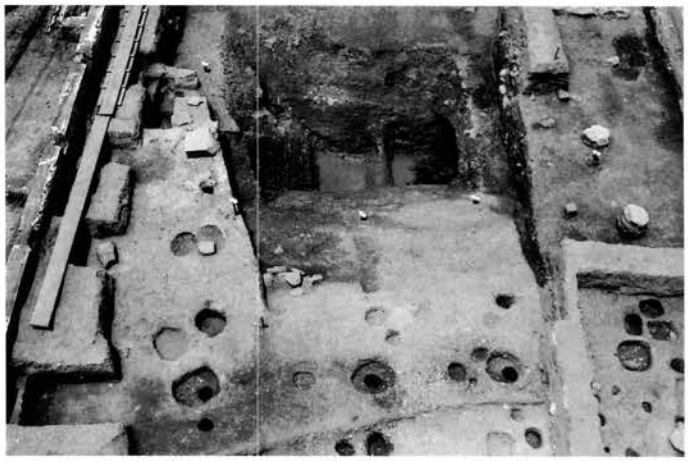


2. 溝 SD07 完掘状況（北より）

1. 再建福正寺跡全景（西より、上方に妙福寺参道と冠木門）

2. 礎石建物SB07（南より）

1. 東堀 SD05 と柱穴群（西より）



2. 東堀 SD05 と障子堀と柵列 SA05（東より）

3. 東堀 SD05・柵列 SA05（南より）

4. 東堀 SD05（東より）

5. 柵列 SA05・掘立柱建物群（南より）

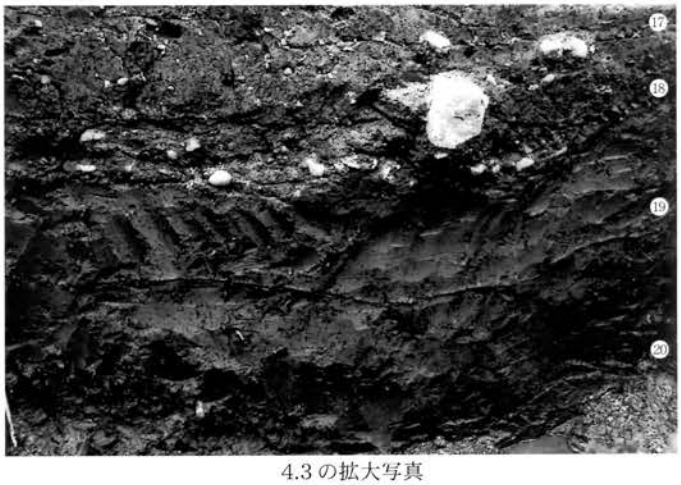
6. 柵列 SA05 掘方 2 と柵痕跡

7. 柵列 SA05 掘方 2 と越中瀬戸（中央下）

1. 溝 SD07 護岸用石組

2. 溝 SD07・杭列A

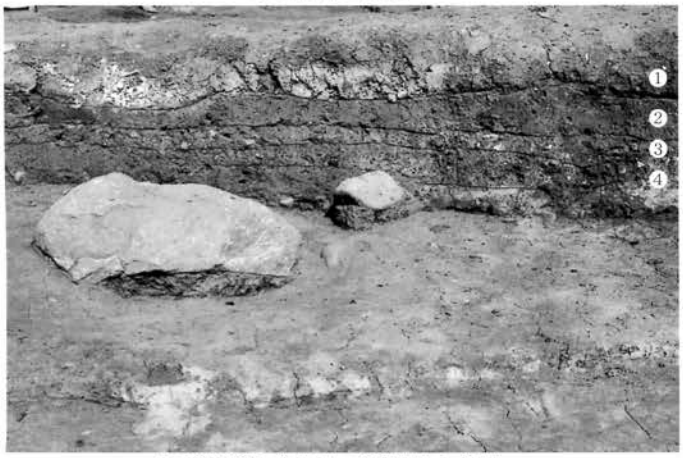
3.17・18・19 層間の不連続面



4.3 の拡大写真

5.17 層中の礫層

6.5 の拡大写真



7. 再建福生寺礎石・整地層と上位層

8. 犂と鍬の出土状態

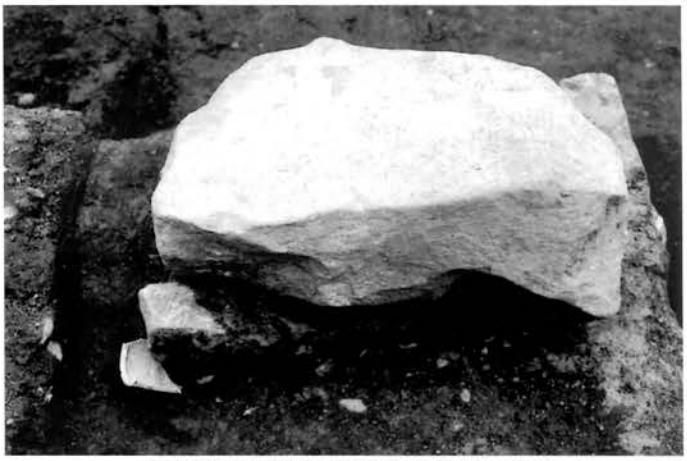
1.SX18 上層

2.SX18 下層

3.SX32

4.SX23・24・28・29・42

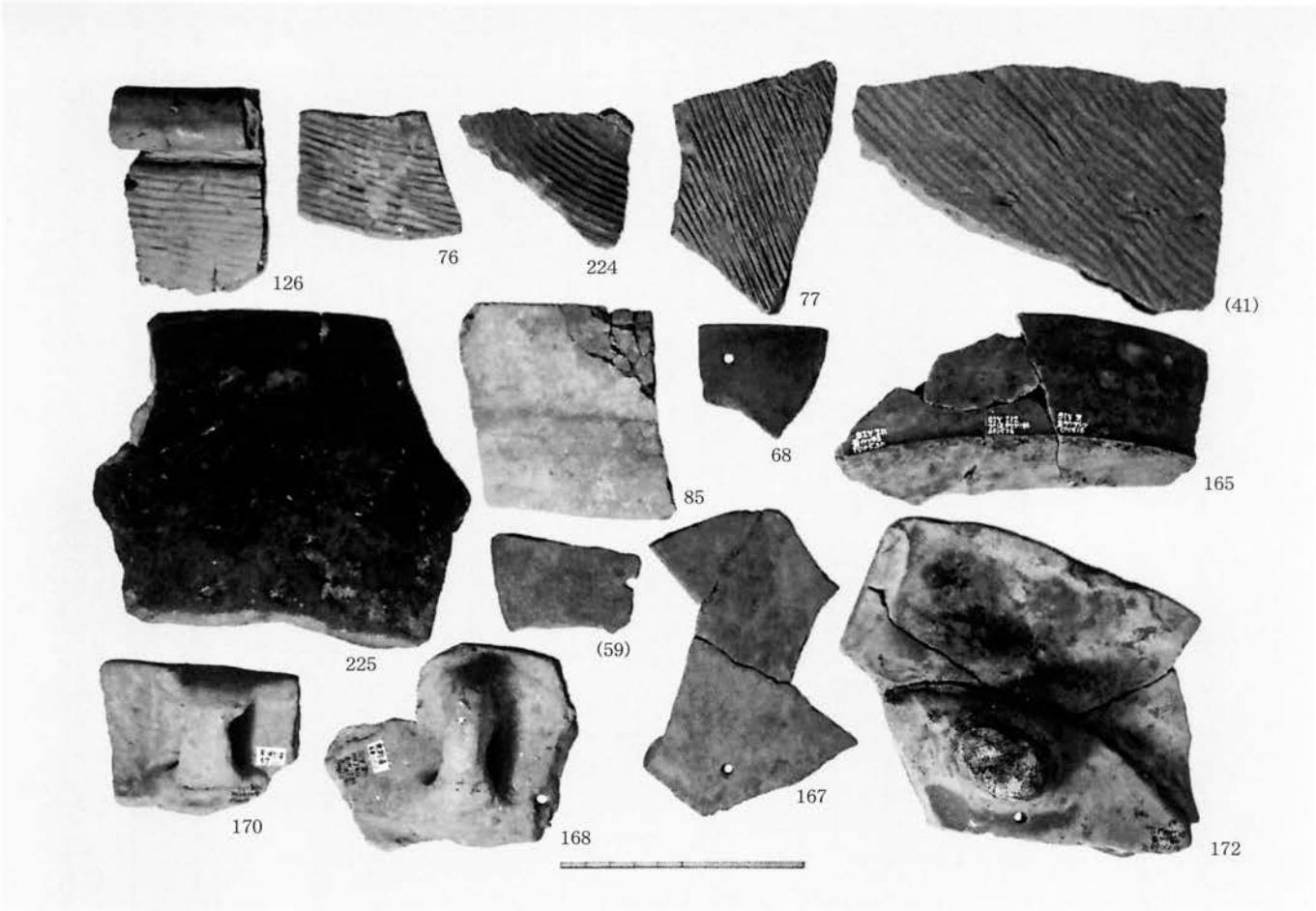
5. 再建福正寺整地層内の肥前陶磁（22）



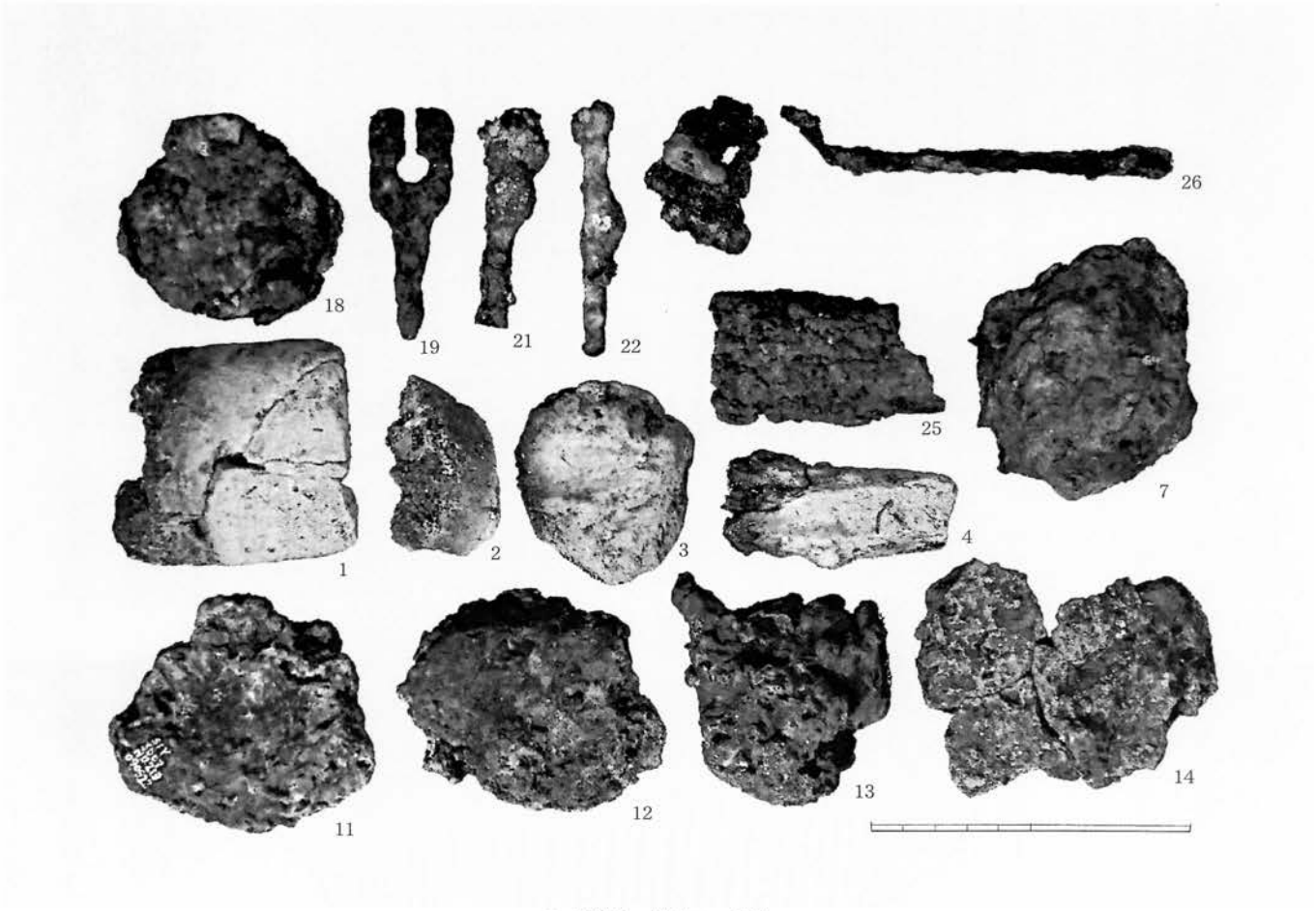
6. 再建福正寺整地層内の地方窯香炉（139）

7. 再建福正寺整地層内の地方窯製品（161）

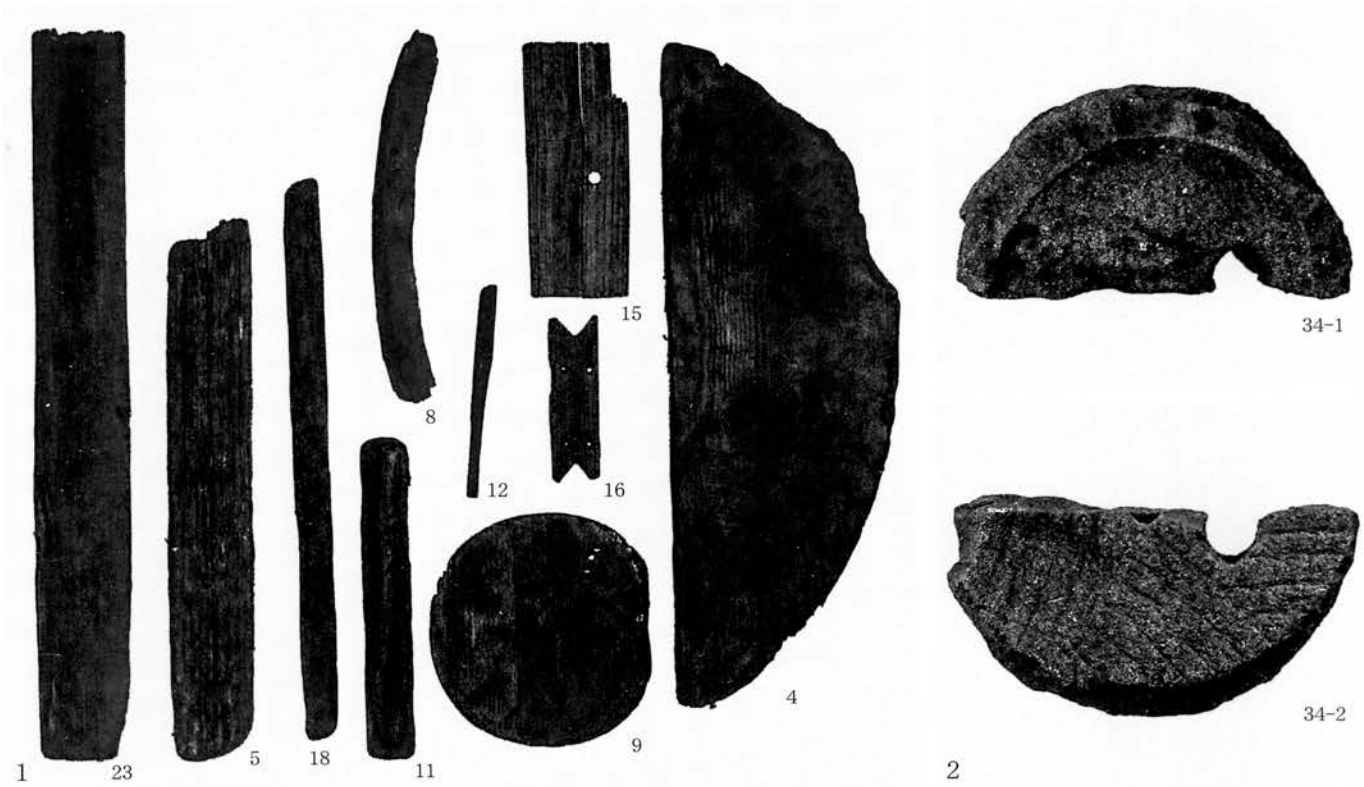
8. ピット（掘方）46 と柱痕

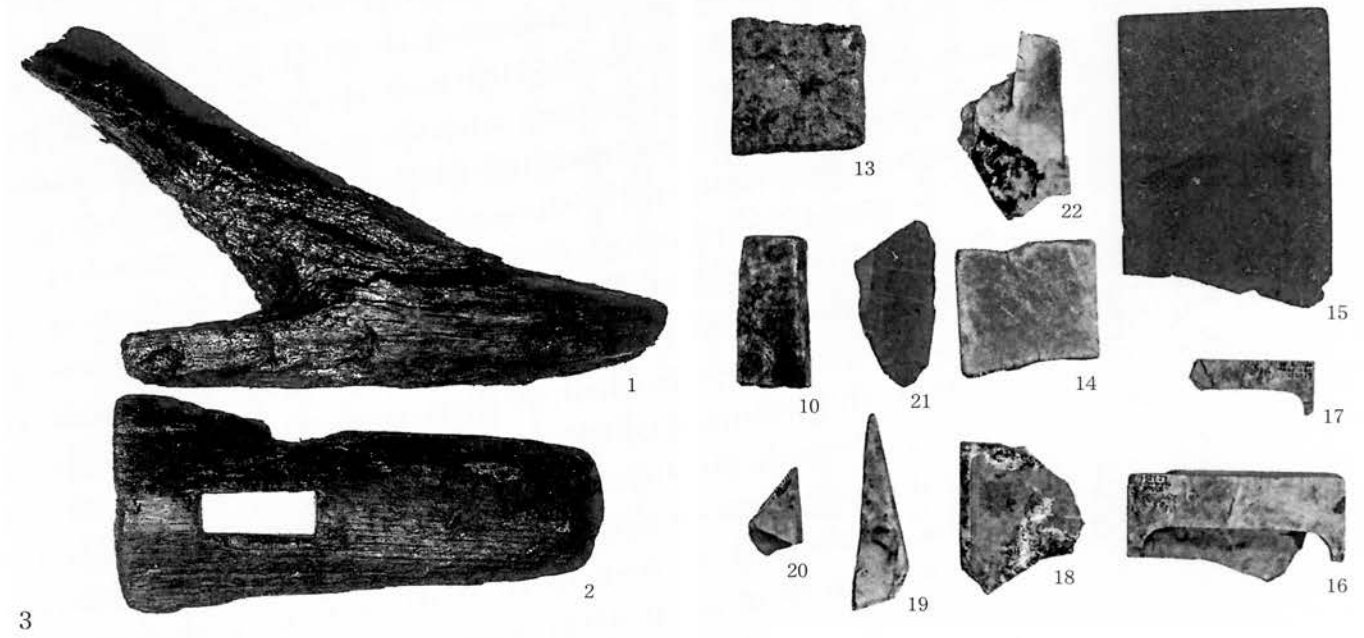


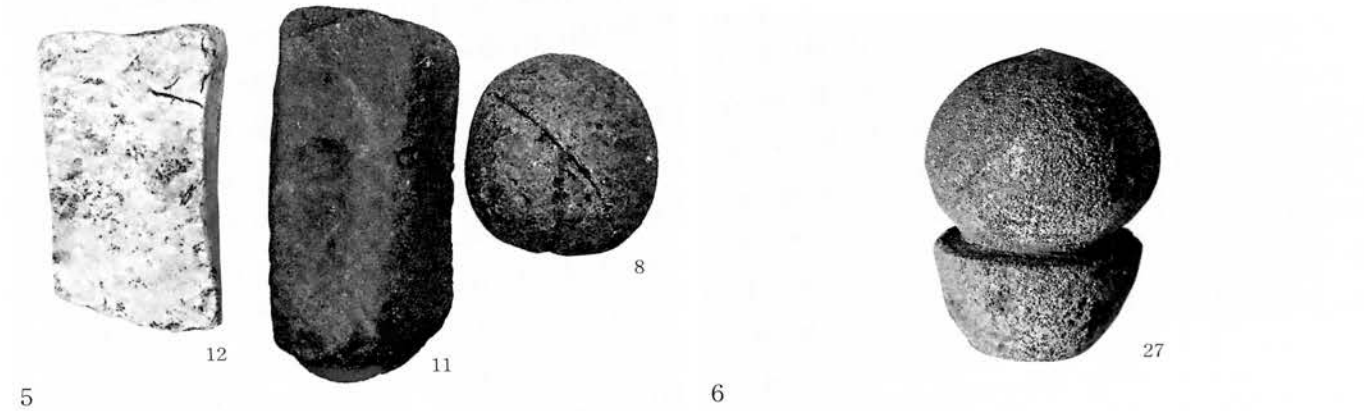
1. 珠洲・内耳鍋・焙烙・火鉢



2. 鉄製品・鞴羽口・鉄滓







1. 木製品（曲物ほか） 2. 粉挽き臼 3. 長床犂・鍬 4. 石硯・石盤 5. 砥石・磨石 6. 五輪塔

（伝）願　生　寺　跡

例言

1．本書は「中山間地域等直接支払い事業ため池造成」に伴う「(伝) 願生寺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．使用した地図は国土地理院発行の25,000分の１（使用許可基準範囲内)、飯綱町全図2,500分の１をもとにした。

3．発掘調査の測量は簡易遣り方実測法で実施した。なお国家座標は世界測地系である。

4．発掘調査及び報告書作成にあたって以下に業務委託または協力を得た（敬称略)。

・飯綱町中山間地域等直接支払い事業上平出支部長　原田善美

・測量　(株) 共栄測量設計社

・人骨鑑定　京都大学名誉教授茂原信生

・調査地隣地出土五輪塔撮影　高野智彦（所有者)

5．報告書作成にかかる作業分担は下記のとおりである。

遺物整理・注記－峯山真由美　　石器実測・トレース－小柳義男　　土器ほか実測－横山かよ子

土器トレース－富岡鹿子　　遺構図トレース・レイアウト－横山・富岡・柳澤まち子

6．執筆は第１～３章は横山が第４章は笹澤浩が分担した。

7．本書の編集は横山が行い、笹澤の校閲を得た。

8．遺跡の記録類、出土遺物は飯綱町教育委員会が保管している。

凡例

1．遺跡名は「(伝) 願生寺跡」とし、記号は「GS」とした。これは牟礼村遺跡詳細分布調査報告書（2000）記載「願生寺跡」名の変更に伴うものである。

2．遺構記号は以下のとおりである。

SA：柵列　　SB：掘立柱建物　　SK：土坑

3．遺構・遺物の実測図の縮尺は概ね下記のとおりである。

全体図１：200　掘立柱建物・柵列１：80　土坑１：40　火葬施設１：20　火葬墓１：40

石器１：２・１：３　　土器１：４　　土器拓影１：３　　砥石１：３　とした。

4．遺構実測図において転石帯、焼土、炭化物、灰の検出部分はアミ掛けで表した。

5．遺物実測図において須恵器、珠洲の断面を黒塗り、黒色土器の内面、灰釉陶器の断面をアミ掛けとした。

目　次

例言
凡例
目次
第１章　調査の概要 …… 99
　第１節　調査に至る経緯 …… 99
　　１．　調査の目的と調査に至る経緯 …… 99
　　２．　調査体制 …… 99
　第２節　調査の方法 …… 100
　　１．　調査の方法 …… 100
　　２．　基本土層 …… 100
　　３．　調査日誌（抄） …… 100
第２章　遺跡の環境 …… 102
　第１節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 102
　　１．　遺跡の位置 …… 102
　　２．　歴史的環境 …… 103
第３章　遺構と遺物 …… 105
　第１節　遺構 …… 105
　　１．　遺構の種類と分布 …… 105
　　２．　古代の遺構 …… 105
　　土坑 SK01・土坑 SK02・土坑 SK03・ピット群
　　３．　中世の遺構 …… 105
　（１）掘立柱建物 SB01　（２）柵列 SA01　（３）火葬施設 SK06　（４）火葬墓 SK04
　第２節　遺物 …… 107
　　１．　縄文時代の遺物 …… 107
　　２．　古代の遺物 …… 107
　　３．　中世の遺物 …… 107
第４章　成果と課題 …… 108
　　１．　火葬墓と火葬施設 …… 108
　　２．　善光寺平の中世火葬墓 …… 108
　　３．　願生寺との関係 …… 109

引用・参考文献
図版
写真図版
あとがき

図目次

第１図　グリッド設定図…… 101
第２図　（伝）願生寺跡位置と周辺の遺跡 …… 102
第３図　地形図…… 104
第４図　発掘全体図…… 111
第５図　掘立柱建物 SB01、柵列 SA01 …… 112
第６図　土層図…… 112
第７図　火葬施設 SK06発掘図 …… 113
第８図　土坑 SK01・SK05・SK02・SK07、火葬墓 SK04 …… 114
第９図　出土遺物…… 114

写真図版目次

PL１　１．遺跡遠景（東より）　２．調査区全景（北より）
PL２　１．掘立柱建物 SB01・柵列 SA01（北より）　２．火葬墓 SK04（北より）　３．火葬施設 SK06（北より）
４．土坑 SK02（東より）　５．火葬施設 SK06（骨出土状態）

挿入写真１　遺跡近景（東より） …… 104
挿入写真２　調査地隣地出土五輪塔（高野智彦氏所有） …… 107

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１．調査の目的と調査に至る経緯

平成21年度中山間地域等直接支払い事業により、飯綱町大字平出字上平出1764－２番地において農業用ため池造成を行う旨、飯綱町上平出支部から飯綱町教育委員会に遺跡照会があった。この場所は遺跡の概要がわかっていないまでもまさしく願生寺跡とされている場所であることから９月18日に試掘調査を実施した。その結果土師質土器を伴った小穴が検出され、本調査を実施することとなった。

２．調査体制

（１）発掘調査（平成21年10月１日～11月20日）

調査主体者　飯綱町教育委員会教育長　相澤　壽

事務局　教育次長　長澤照和

生涯学習担当企画員　梨本克裕　生涯学習担当主査　小山丈夫

産業建設課主査　久保田和祐

調査団長　飯綱町埋蔵文化財調査整理特別指導員　笹澤　浩

調査担当者　飯綱町埋蔵文化財調査整理指導員　横山かよ子

調査補助　飯綱町埋蔵文化財調査資料整理員　高山いず美

発掘調査協力者　小林はる江　小林美枝子　原田敦子　原田光子　平井利幸　山科清実

（２）整理作業（平成24年）

飯綱町埋蔵文化財調査整理特別指導員　笹澤　浩

飯綱町埋蔵文化財調査資料整理指導員　横山かよ子

飯綱町埋蔵文化財調査資料整理員　峯山真由美

第２節　調査の方法

１．調査の方法

遺跡範囲周囲の地区割りを任意に設定した北西隅Ｘ＝80,591、Ｙ＝－23,591を起点として大々、大、小地区に設定した。Ⅰ～Ⅳ地区の大々地区（200×200m）に区画しさらに大々地区をＡ～Ｙの25区画（40×40m）して大地区とした。その大地区を40区画（２×２m）し、小地区（グリッド）とした。小地区は起点を北西隅として南北に１～20、東西にＡ～Ｔの記号を付した。基準杭設定は業者委託（(株）共栄測量設計社）とし東西方向に２点南北方向に３点を設置した。それらを基準としてグリッド杭を設定した。よって、調査地はIJ・IOの両区にまたがる。尚、BMはＸ＝80,506　Ｙ＝－23,426（世界測地系)、Ｈ＝623.219mである。遺構は基準杭をもとに簡易遣り方で測量した。転石帯部分についてはトレンチ調査とし、それ以外の巨石などは移動可能な限り石下部を調査した。

２．基本土層

月見川の一支流左岸南北方向の山腹一帯には小規模な扇状地が並ぶいわば複合扇状地である。各扇状地は浅い谷で区切られ一支流の侵食面とは段差となり、各小扇状地はなだらかに傾斜をした舌状台地の観を見せる。(伝)願生寺跡はその扇状地末端にある。

基本土層はⅠ層～Ⅵ層からなる。Ⅰ層は表土で20cm、Ⅱ層は黒色土で14cm、Ⅲ層は黒褐色粒子を含む黒色土で30cm前後、Ⅳ層は漆黒色土で15cm前後であるが扇端部は厚くなる（厚さ未確認)。Ⅴ層は黄褐色ブロックを含む漸移層でⅥ層は地山である黄褐色粘質土（ローム層）である。

小扇状地の中央部分は転石帯があり径2m前後の石塊とともに多量の安山岩の角礫からなる礫層がある（F～M、18～20)。上方からの押し出しによるもので、基盤層にも場所により角礫を含む。この転石帯の北側はⅣ層（漆黒色土）が台地末端ほど厚く堆積し、大部分の遺構がここに集中する。

扇状地の現状はこうした角礫を乱積した石垣や集石を等高線に沿って組み、３～４段の平坦部を造作し、今日果樹園としている。しかし調査の結果では、平坦部はゆるく傾斜し整地はほとんど実施してない。調査地はその平坦部の最下段であり、２段上方の平坦部で１組の五輪塔が出土したという（矢野恒雄1997)。

３．調査日誌（抄）

平成21年（2009)

10月１日（木）～４日（日）表土剥ぎ（東南～西北方向)。

10月５日（月）発会式。調査地北側から調査開始。グリッド設定および杭打ち。

10月６日（火）西側検出（I・J列)。ピットが11基検出。土師器、黒色土器、須恵器甕片など少量と砥石出土。

10月７日（水）調査地南半分の転石帯にトレンチ１、トレンチ４を設定し、重機により表土剥ぎとグリッド設定。トレンチ４は地山までの表土は浅い。台地先端・N列調査範囲を拡大、重機で表土下を掘り下げる。

10月９日（金）礫群下層の検出。グリッド杭の補充設置。矢野恒雄氏来訪。

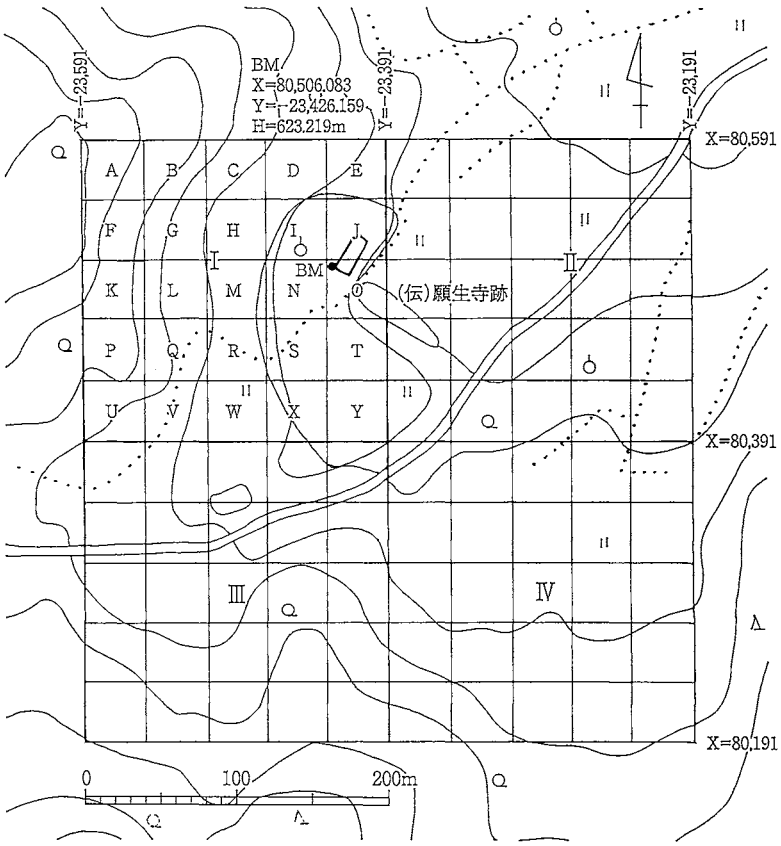
10月13日（火）I～L（12～15）M～N（14～15）の遺構検出。

10月16日（金）トレンチ３の南北の土層調査。

10月20日（火）精査L～N（12～16）、P.21～P.23、P.25平面実測。火葬施設に長軸・短軸に十字にサブトレンチを設定し掘り下げる。

10月21日（水）ピット掘り下げ。矢野恒雄氏来訪。

10月22日（木）G（15～17）の調査範囲を拡張しP.40～42を精査。P.25（SK05）、土坑SK01を掘り下げ。火葬施設のプラン精査。骨・炭・灰を残して掘り下げる。ベルトの土層観察。P.47を掘り下げる。



第１図　グリッド設定図（1：5,000）

10月23日（金）ピット掘り下げと写真撮影。火葬施設サブトレンチ土層図作成。

10月28日（水）SK01の土層図、平面図作成。

10月30日（金）トレンチ３拡張部分精査。L～N・12～16検出。

11月２日（月）トレンチ３拡張部分精査、写真撮影。火葬施設平面図作成。L～M・12～15遺構検出。

11月４日（水）火葬施設の人骨取り上げ。P.55、P.58掘り下げ。

11月６日（金）火葬施設土層図作成後、掘り下げ。L～M・12～15遺構検出。SK04土層図作成。

11月７日（土）SK02土層図作成。L～M・12～15遺構検出。清掃、全体写真撮影。SK04掘り下げ。

11月９日（月）大石を除き下層を観察。柱穴検出作業、I（17～18）。平面図I～N・14～16作成。縮尺１/20。SK04清掃、写真撮影。

11月13日（金）・15日（日）調査範囲南北壁・東西壁の土層観察と写真撮影。

11月16日（月）南北東西の土層図作成。P.46を半割し埋土の観察と作図。

11月17日（火）降雨。地形50cmコンタ測量。柱穴半割。

11月18日（水）全体図作成。掘立柱建物の新たな柱穴検出作業G～I・12～17。

11月19日（木）掘立柱建物の新たな柱穴検出作業G～I・12～17。新しいピットP.66～70を全体図に記録。半割したピットP.09・P.11・P.14の断面図作成。

11月20日（金）最終確認。調査終了。

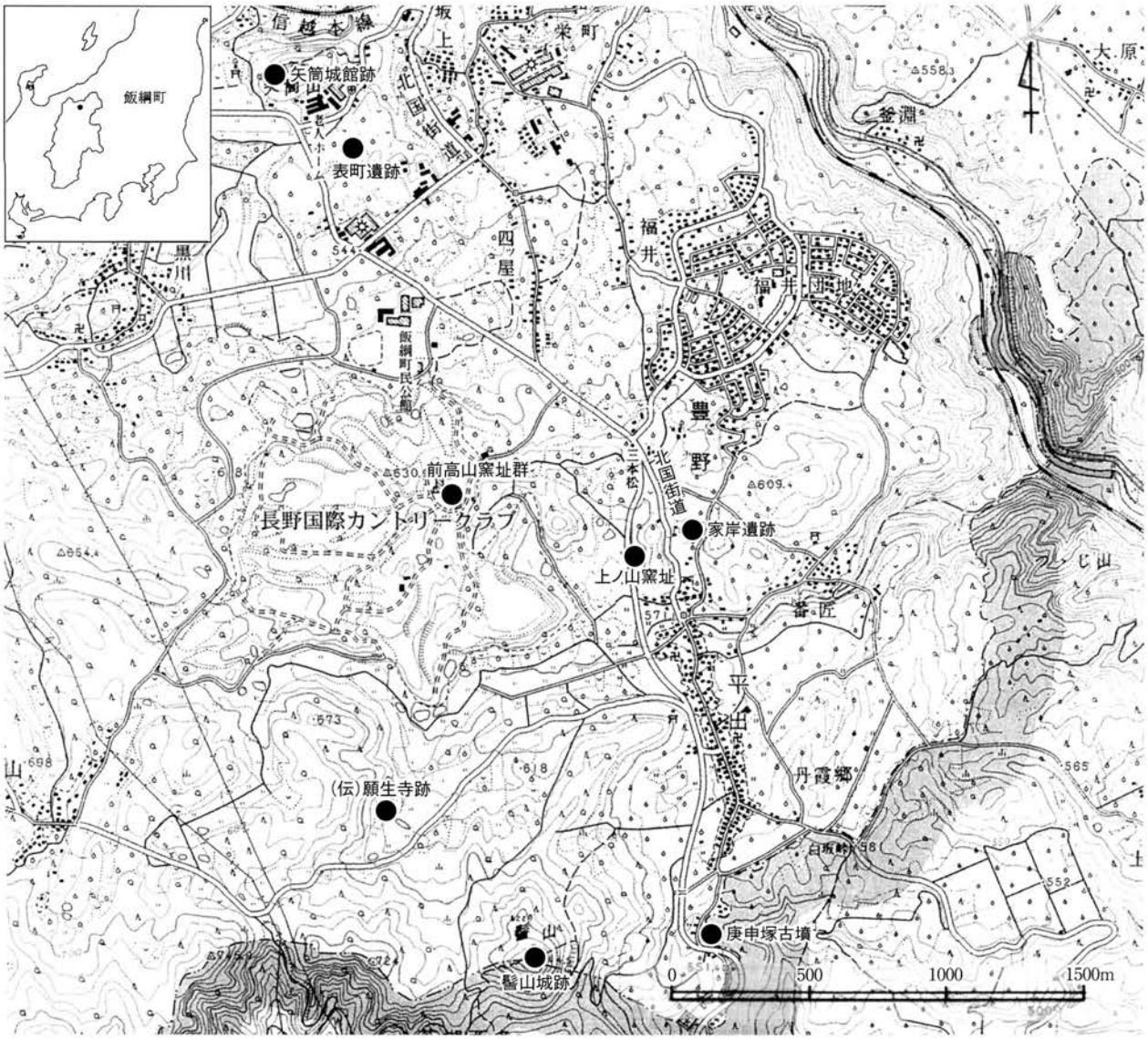
第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

（伝）願生寺跡は長野県上水内郡飯綱町大字平出字上平出にある。

平出地籍は飯綱町南端にあり、髻山山系で長野市若槻と、豊野丘陵で豊野町に接し、髻山境を水源とする月見川が作った浅い谷間の平坦地とその背後の山境からなる。（伝）願生寺跡は月見川支流の左岸に開折された山腹上に立地する。月見川自体は背後の山境が小さいために水量も少ない小河川である。現在この水系沿いの谷地地形には棚田利用の水田耕作が、そして周辺の山腹にはりんごや桃などの果樹栽培が行われ、桃栽培による丹霞郷



第２図　（伝）願生寺跡位置と周辺の遺跡（1：25,000）

は春の景勝地となっている。しかし月見川の用水だけではこの地域の農業経営には不足のため、ため池が平出地籍だけでも40ヶ所にも及ぶ。今回調査の起因となったため池造成もこうしたこの地域特有の農業経営に起因するものである。

２．歴史的環境

平出は北国街道沿いに発達した集落であり、善光寺平から越後へ抜ける交通路上の要地のひとつである。古代には東山道から分岐し、越後の国府に抜けるいわゆる延喜の官道が通り、中世では矢筒城下（表町遺跡）を経て平出地籍を通り、白坂峠から豊野宿を経て長沼城に至るルートから、江戸時代以降は若槻を経て善光寺に至る北国街道が整備されるに及んで平出集落は一層の発展を遂げる。

このように平出地籍は信越間の交通の要地として地域史形成に深い関わりがあるが、これは先に述べた平出地籍の位置と地形が深く関わっている。

平出地籍の遺跡は少なからずこの地域の性格を反映している。５世紀代のこの地方唯一の前方後円墳である庚申塚古墳は叩き目文を持つ埴輪を配置していることで著明である（小柳1994）が立地位置が峠の位置にあることでも注目される。また善光寺平古代窯業の一大生産地帯である髻山古窯址群があり、前高山古窯址支群（笹澤・原田・佐藤・小林1986)、上ノ山窯址（小柳1992)、家岸遺跡（横山1998）がある。これらの窯で生産された須恵器は延喜の官道を下り善光寺平へと供給されたのであろう。

戦国期における髻山城（矢野1997）もまた甲越抗争の中で髻山山頂に構築された山城で、平出地籍に所在する意義もこうした視野のなかで理解できる。

（伝）願生寺跡南東にそびえる髻山は南側と東側の斜面は急峻であり、自然の要害となっている。山頂は長野市と境を分け、本丸から南は長野市地籍となる。飯綱町地籍の北側は緩やかな斜面となり、竪堀、横堀の遺構が確認できる。この髻山城は16世紀中頃の信濃の領地をめぐっての武田氏・上杉氏の攻防に利用された。髻山の名前が出てくる文書に『岩船文書』（『信濃史料』12巻）がある。それには

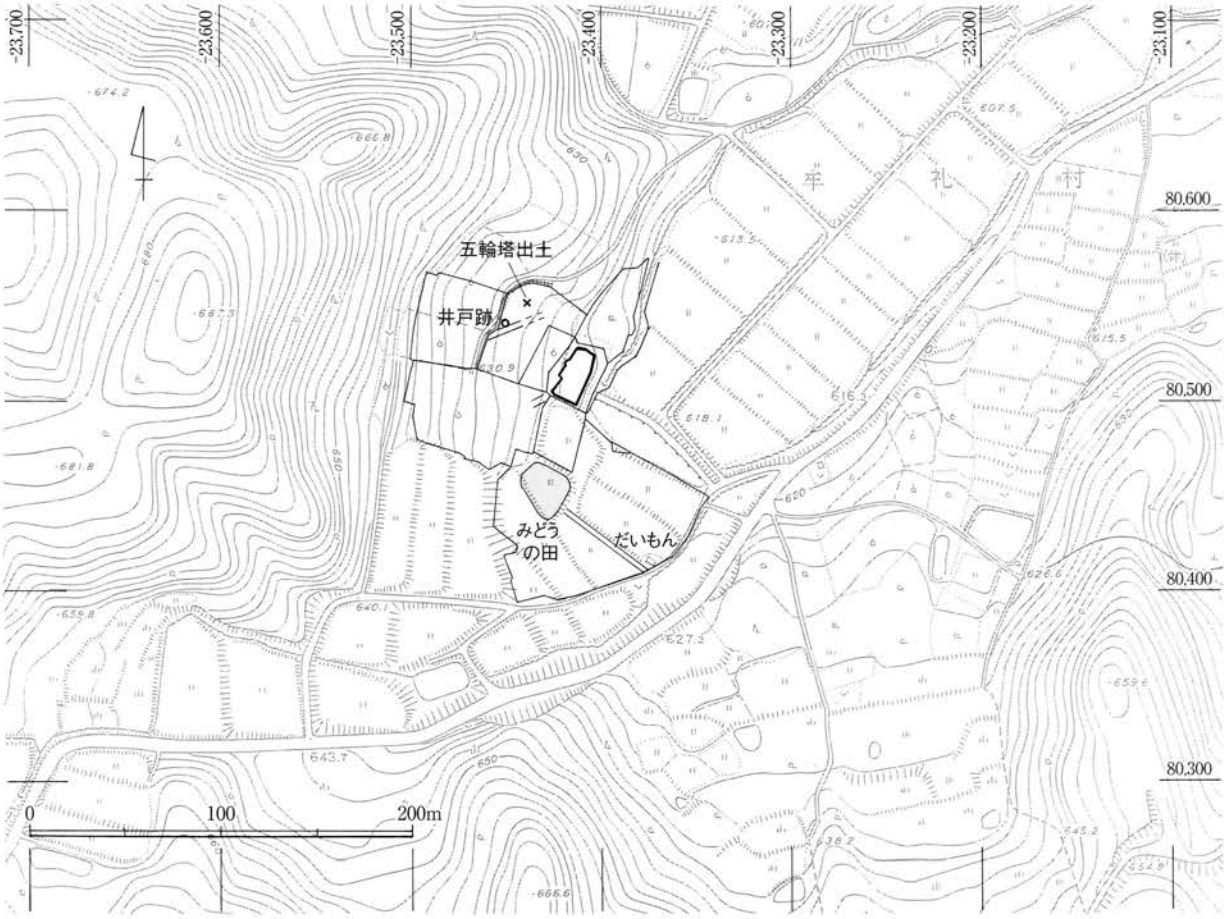
「永禄七年九月五日、直江実綱、堀江宗親、・岩船長忠ヲシテ、武田信玄の軍に備ヘシメ、併せて水内郡旭口等ノ敵情ヲ探リ、之ヲ報ゼシム…敵もとゝり山江小旗四五本二而毎日致武具由候…」とある。これは直江実綱が堀江宗新と岩船長忠を武田軍に備え、水内郡の敵情を通報させた文書であり、武田氏の利用が確認でき、それまでの髻山城主は上杉氏と関係深い人物であったことがわかる。

髻山城主については『大高山願生寺（平出願生寺直系寺、現新潟県新井市真宗大谷派願生寺）年歴』に「河中島合戦の時、八世祐賢は法師武即平出入道と名乗り、髻山城主として手兵を率い上杉軍に属し戦功を樹て各種の恩賞を受け、謙信の望みにより髻山城を譲り黒川袖ノ山（東黒川袖組願生寺跡あり）に移り」との記述があり、ここから上杉謙信以前の城主は願生寺であると矢野恒雄氏は推考している（矢野1997)。

平出の名の初出は寺伝では牟礼本町の證念寺蔵の『方便法身尊形』の裏書に「実如　月日　坂東　信州　□□郡　平出願生寺　願主祐賢」とあり、永正年間（1504～1520）か、大永年間（1521～1527）のことである。文献上では、天正10年（1582）上杉景勝朱印状案知行方之覚で「百貫文嶋津領平出」とある（1969『信濃史料』補遺巻上）のが最初である。

地元に伝わる地名伝承には調査地の「寺屋敷」以外に「みどうの田（御堂の田)」「だいもん（大門)」の地名がある。これはいいづな歴史ふれあい館の小山丈夫氏が、発掘調査終了後、地元の方から調査地の南方に隣接した棚田の一角を「みどうの田」と呼び、平出－袖之山間の道路に至る直線的な農道を「だいもん」と呼んでいるという伝承がある旨、教示を受けたものである。調査地の「寺屋敷」地名以外に新たに「みどうの田（御堂の

田)」「だいもん（大門)」地名が加わったことになる（第３図)。



第３図　地形図（1：4,000）

挿入写真１　遺跡近景（東より）

第３章　遺構と遺物

第１節　遺構

１．遺構の種類と分布

調査地は西から東にかけたゆるやかな舌状台地にあり、先端は崖となる。調査範囲は東西15m 南北20m の300m^{2}と転石帯内のトレンチ１～４である。検出された遺構は掘立柱建物と柵列各１基、火葬施設と火葬墓各１基、少数の土坑（SK01～07）にこれも少数のピットである。各遺構は転石帯よりも北側一帯に散在していた。ただし火葬墓は転石帯の中に認められた。各遺構は第Ⅲ層の黒色土で検出された。埋土内に地山である黄褐色粘質土の粒子やブロックを含むことにより検出した。

２．古代の遺構（第８図）

土坑 SK01　台地東端に検出された平面円形で径128cm、底径75cm の土坑である。壁はほぼ垂直で深さ105cm である。井戸跡とも思われるが、台地上では湧水はこの程度の深さでは求められないし、別の機能を考えなければならない。埋土内から土師器甕片が４点出土した。

土坑 SK02　調査区中央西端の最高所にある。SK02は不定形な長径77cm 深さ30cm の土坑で土坑底に10数個の角礫がある。さらに同規模の SK07がある。

土坑 SK03　調査区東端に検出された。長径75cm、深さ15cm の不定形の土坑である。

ピット群　調査区全域に小規模なピットが散在的に認められた。大多数は中世と思われるが細部は不明である。

３．中世の遺構

（１）掘立柱建物 SB01（第５図、PL２）

調査地中央北寄りの緩傾斜地にある。１×３間で主軸は N18°E で等高線上にある。桁行5.8、梁行3m で、中世の遺構である。深さは60cm 前後で埋土は黒色土で黄褐色粘質土粒を含むか漆黒色土である。柵列 SA01を SB01掘方１（P.52）が切る。掘方７（P.53）埋土からカワラケの小片が、掘方５（P.55）埋土から古代の黒色土器坏片が出土した。掘方の形状および出土遺物から中世の遺構である。

（２）柵列 SA01（第５図、PL２）

掘立柱建物 SB01と一部重複し、掘方は楕円形で径70cm 深さ30cm である。埋土は黄褐色粘質土粒子やブロックを含み黒色土からなる柱痕跡が認められる。試掘調査時から存在が確認されており、本調査でも精査したが掘立柱建物とする掘方は不明であり、柵列と思われるが、その構造などは明らかにし得なかった。SA01掘方１（P.52）は SB01掘方１と切り合い SB01が新しく、近接する P.17で土師器鉢が出土するなどから中世であろう。主軸は N31°E で掘方間隔は2.1m で２間分が認められた。ただし同一線上に P.46があるが P.14との間隔が4.6m あり、その間に掘方は認められなかった。よって P.46は別に考えねばならないものと思われる。

（３）火葬施設 SK06（第７図、PL２）

調査区の中ではもっとも東寄りの崖に近い部分でⅡ層下部で検出された。長方形土坑で120×70cm、深さ20cm である。等高線に沿って南北方向に主軸がある（N0°S）。土坑は黄褐色粘質土（Ⅴ層）を掘窪めており、

壁面及び床面と煙道部分は著しく焼け壁では厚さ4cmに達していた。煙道は土坑中央の床面を幅20cm深さ14cm、長辺に直交して掘り窪め、さらに東壁を貫いて壁外60cmまで設けている。土坑埋土と床面上には焼けた人骨片、焼土、炭、灰が認められた。骨片の中には左側肩甲骨を含むが個体数は不明である。上田典男氏が指摘するとおり、火葬の場であり、火葬墓とするにはさらなる検討が必要であり（上田1993)、本報告でも上田氏の提言を受け火葬所と火葬墓とは区別して使用している。こうした火葬施設は善光寺平や松本平の中世墓に広くみとめられるが、本例によって鳥居川水系でも初めて検出されたことになる。

（４）火葬墓SK04（第８図、PL２）

転石帯にいれたトレンチ３内に検出した。転石帯の一角に一部転石をぬいて設けられた土坑内に焼けた人骨砕片と炭、焼土を埋納した中世墓である。土坑は不定形で長径120cm、深さ40cmであり、壁・床には焼けた痕跡は認められなかった。

第２節　遺物

調査地の北東域のⅡ、Ⅲ層及び掘立柱建物、柵列、土坑SK01埋土内から出土した。縄文時代早期の山形押型文土器１、掻器２、平安時代の土師器甕、黒色土器坏、灰釉陶器光ヶ丘１号窯期の碗、中世の土師器皿（カワラケ）、内耳鍋底部、土師器鉢底部片、珠洲・瓦質の擂鉢、鉢と砥石がある。

挿入写真２　調査地隣地出土五輪塔（高野智彦氏所有）

１．縄文時代の遺物（第９図）

山形押型文土器（２）１片が出土した。厚さ８㎜で胎土内に風化した長石粒を含む。石器は頁岩製の大型掻器（１）と黒曜石製の掻器（３）がある。大型掻器は全長13.7cmで側辺に僅かに調整痕がある。以上は押形文土器に伴う石器であろう。他に黒曜石製の剥片１点がある。

２．古代の遺物（第９図）

平安時代の土師器・黒色土器・須恵器と灰釉陶器がある。いずれも小破片で総数は78点である。坏類は土師器で総数35点あり、そのうち20点が黒色土器である。甕は煮沸用の土師器甕片38点と貯蔵用の須恵器甕片３点の計41点である。土師器甕は叩き目のある北信型（７・８）を主に北武蔵型・小型甕が少数であり、須恵器甕（９・11・12）では内面に青海波文をとどめる。灰釉陶器は手付瓶（６）と碗の各１点がある。碗の見込みに刷毛目痕をとどめるところから手付瓶とも東濃系の光ヶ丘１号窯期のものと思われる。微細な破片が多く、詳細は不明であるが出土資料を見る限り須恵器坏を欠くこと、黒色土器坏が多数を占めること、多様な土師器甕と灰釉陶器などから９世紀後半以降の土器類である。月見川沿いの谷水田を開拓した人々の居住地の一角が遺跡内にあると思われるが、周辺部にある前高山古窯址群との関係も注意しなければならない。

３．中世の遺物（第９図）

土師器皿（カワラケ）４点（13・14）、内耳鍋６点（16）、瓦質土器擂鉢１点（10）、鉢２点（15・17）とⅤ期の珠洲甕（壺）１点（11）、器種不明の土師器底部片１点（18）と裾花凝灰岩製の砥石１点（20）がある。資料は細片のため詳細は不明であるが、瓦質土器や珠洲から15世紀後半から16世紀代の中世後期の戦国期のものであろう。18は底径22.5cmの大型器種で器壁は2.2cmと厚く器面はユビでナデ整形している。体部立ち上がり部に一条の粘土帯を雑に貼り付け、指でナデている。底部は体部器壁に比較して薄く、底部外面に離れ砂が付着している。胎土には雲母を含ませるなど底部の属性とともに内耳鍋と共通する。鍋としてとらえておく。鉢（15）は口縁部片で端部は内傾し、頸部で僅かに外へ張り出す。巻き上げロクロ成形である。

第４章　成果と課題

１．火葬墓と火葬施設

（伝）願生寺跡からは発掘調査の結果、縄文時代早期の押型文土器と石器、平安時代の土器片と中世の遺構と遺物が得られた。縄文時代や平安時代では遺物はごく少量であり遺構も少ない所から遺跡の中心地からははずれたものと思われるが、小規模台地上の遺跡例を新たに加えることができ大きな成果のひとつであるが、ここでは遺跡名にもあるとおり中世の遺構・遺物から願生寺について検討を試みる。

検出された中世の遺構は１×３間の掘立柱建物１棟と柵列１基、火葬施設（火葬土坑）と火葬墓各１基である。他に少数のピットや土坑などがある。すでに述べたとおり、これらは中世後期、15世紀後半から16世紀代のものである。ピットからは鍋と思われる土師器底部が出土している。他に包含層出土資料ではあるが、土師器皿（カワラケ）、内耳鍋、瓦質土器の擂鉢、珠洲Ｖ期の甕片があり、遺構の時期を示すものである。

遺構は調査地の台地中央の転石帯北側に１棟の掘立柱建物と柵列が重複し、崖寄りの台地先端に火葬施設がその南寄り転石帯の中に火葬墓がある。転石帯は押し出しによる大小転石の集積からなりその切れた空間に１基の火葬墓を設置していた。転石には径2m を越える大石も含まれ、それ故にこの部分の調査はトレンチ調査で終わったが、大石の間にも火葬墓がさらに設置されていた可能性がある。山形県立石寺の山内の岩窟における供養塔と納骨（望月1976）を連想させる。あるいは中野市西山中世墓地（檀原2010）などに見られる集石と同様に転石を賽の河原に見たてた地蔵信仰と関係があるものと思われる。納骨と墓地とは厳密には区別して考えねばならぬが、これらも含めて検討する上で転石帯内の火葬墓の在り方は今後注意してゆかなければならない課題と思われる。その意味でも転石帯内の調査をいま少し続けるべきであったと反省をしなければならない。

調査地の３段上方の平場状の畑地では五輪塔１組が出土している。火葬墓からは水平距離で60m、高低差は10m である。五輪塔は４石でそろいであるが組合せが正しいかどうかは疑問である。地下にはまだ埋まっているとのことであるが未確認である。現在別地に移転されている。いずれにしても発見者の言葉からは相当数の五輪塔があることによって遺跡一帯は善光寺平に多い五輪塔を伴なう火葬墓であることが想定される。以下この点を発掘例をもとに検証する。

２．善光寺平の中世火葬墓

善光寺平の中世墓は長野市松原遺跡（上田・贄田2000）に端的に示される。中世集落内の土坑墓主体の土葬墓群に対して背後の山腹（山麓斜面）には、階段状に整地されたテラス上に火葬骨を有機質または少数の珠洲の蔵骨器に入れて埋納した火葬墓とそれにそわせた多数の五輪塔群からなるもので、きわだった対称を見せている。両者には、少数ではあるが火葬施設が伴なう。平地における五輪塔を伴なわない土坑墓群はかつて千曲市城ノ内遺跡で調査した（笹澤・岡田1969）が、墓群としての調査例は意外と少ない。

善光寺平で調査された中世墓を立地及び墓の様相から以下に分類する。五輪塔を伴なう火葬墓群をＡ、松原遺跡や城ノ内遺跡の五輪塔を伴なわない平地の中世墓をＢ、中野市建応寺遺跡（檀原2010）など寺院内の墓をＣとすれば、善光寺平の調査された中世墓の多くはＡである。Ａは山麓にある坂城町観音平経塚（若林1999）、中野市対面所（中島1998）、西山中世墓址、清水山中世墓址（中野市教育委員会1994、檀原2010）などＡ1と、長野市三才遺跡（上田1998）のように平地にあるＡ2がある。Ａ1には経塚と一体である観音平経塚の中世墓や板碑が伴なう清水山中世墓などの相異もある。平地にあるＡ2型は掘立柱建物からなる集落域の一角にあり、調査例

は意外と少ないが中野市吉田五里原遺跡がこの例である（檀原2010・吉原2011）。このほか小布施町玄照寺・飯田氏居館遺跡（土屋・中島・鶴田1997）や飯綱町表町遺跡（笹澤・原田・小柳2014）などのように当初の設置地を離れ、井戸や流路の石組、上水施設などの用材に転用され、本来の墓が付近に想定される例、五輪塔出土地や各地に残る「五輪」地名などを加えたならば中世墓はさまざまな形態が予想される。特に善光寺境内地（宿野2000）や善光寺背後の花崗平など（小山2000）の五輪塔や宝篋印塔・板碑などの供養塔出土を加えると中世の葬送儀礼に係わる考古学資料は多様であり、善光寺信仰も含めたさまざまな視点からの検討が必要であり、中世墓も地域・時間、そして寺院や宗派の影響も含めて多角的に検討が必要である。特に五輪塔を伴なう火葬墓群は例えば檀原氏は中野市内の発掘資料をもとに造墓集団の階層について考古学資料を個々に検討し、そこに国人層の関与を想定している（檀原2010）。坂城町観音平経塚や中野市対面所遺跡の報文中にはその造墓立地から北信の有力国人村上氏や替佐城との関係もふれている。五輪塔などの中世の石塔類の製作とその建立には多大な労力と思想的背景を考えねばならず、石塔類の生産集団や寺院の存在を無視しては成立しえないからである。（伝）願生寺跡は山腹上の高台にあるA1型の中世墓となる。しかし五輪塔出土地点と火葬墓・火葬施設が検出された調査地の間が全く不明であり、火葬墓に五輪塔が伴なわないなどの相違もあるが、Ａ型のバラエティーとしてここではとらえておく。

３．願生寺との関係

「願生寺跡」とした埋蔵文化財包蔵地（牟礼村教委2000）の根拠は矢野恒雄氏の『牟礼村誌』の記載にもとづき、骨子は私見を加えてふれれば以下の３点である。

１点目は飯綱町證念寺所蔵の「方便法身尊形」の裏書「実如　月日　坂東　信州□□郡　平出願生寺　願主祐賢」と妙高市新井除戸真宗大谷派願生寺の「大高山願生寺年歴」を基本史料としている（矢野1997）。両史料がいつ書かれたか不明であり云わば「寺伝」と云うべき史料と思われる。

２点目は願生寺と（伝）願生寺跡の南方にある山城髻山城との関係である。髻山城は甲越の争いの中で上杉方の前戦基地として、川中島の戦いにおいて上杉方の山城として重要な役割を荷っていたが、矢野氏はこれより前は「大高山願生寺年歴」の記載による「八世祐賢は法師武即平出入道と名乗り、髻山城主として手勢を率い上杉軍に属し戦功をたてた」とある記載により、願生寺が城主であり、位置的関係から調査地を比定地としたのである。これについては遠藤公洋氏が髻山城の構造上の分析を通して、上杉方が構築したと云う見解（遠藤2009）によれば、矢野氏の見解と異なって来る。髻山城がいつ作られたかに係わって来るのである。つまり遠藤説に従えば、上杉方の築城ということになるが、築城時期の問題は究極には発掘調査によらなければならない。むしろ、ここでは「寺伝」によるとは云え願生寺が一向宗寺院として、平出の地にあり、上杉方の一大武力として存在していたことである。北信地方の一向宗寺院が「芋川の乱」で大きな役割をはたしたことは池上裕子氏（1998）や小山丈夫氏（2000）がふれているし、筆者も両説を引用しながら本書前編第５章でふれた。

（３）点目は「寺屋敷」などの地名、北国街道成立前の古道や古地形、平出集落との関係、とくに調査地における五輪塔の出土地については「寺屋敷」の地名とともに願生寺比定について大きな根拠としていた。

以上矢野恒雄氏の説を中心に願生寺に係わる事項について述べて来たが、発掘調査では寺院跡は検出されず、願生寺比定地は中世墓域であることが明らかとなった。墓域が寺院内に設置されるのは江戸幕府の寺講制度（檀家制度）によるものである。中世社会では僧侶やごく一部の上層国人層などで、一般的ではない。もっとも北信地方では中世寺院の発掘調査例がほとんどないので、今後の課題であるが、五輪塔が出土したから、それを持って供養地とすることはできても、墓地とすることはできないし、供養塔・墓地と寺院との三者関係は短絡的に結

び付けられるものではない。

最後に地元の伝承としてある「みどうの田（御堂の田）」「だいもん（大門）」についてふれる。いずれも調査地に近い平出から袖之山方面に向う道路沿いの棚田の一角にある。「大高山願生寺年歴」には八世祐賢の性格が上杉方の武将としての側面が強く記載されており、恐らく願生寺は堀で防御された施設が考えられ、この点からも台地上にある調査地ではなく、髻山北麓の月見川支流沿いの「みどうの田（御堂の田）」伝承地が願生寺跡比定地としては最有力地となり、調査地が願生寺と係わりのある中世墓地となる。掘立柱建物跡は火葬に係わる施設であるかも知れない。

今次調査によって願生寺や髻山城に係る資料が得られたことは最大の成果のひとつであり、不確定要素が多いものの、城館的性格が強いと考える願生寺と恐らく一体と考えられる墓域の調査例は数少ない中世史解明に新たな資料が加えられたことになる。

引用・参考文献

池上裕子　1998「戦国期北信の武士と上杉氏の支配」『史誌研究ながの』第５号

上田典男　1993「長野県における中世の『火葬施設』をめぐって」『帝京大学山梨文化財研究第』16号

上田典男・贄田　明　2000「中世以降の調査」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書６―長野市内その４―松原遺跡　古代・中世　本文編』長野県埋蔵文化財センター

上田　真　1998「浅川扇状地遺跡群三才遺跡」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書５　長野市内その２』長野県埋文センター

遠藤公洋　2009「髻大城と長野県北部の城館遺構―横堀遺構に着目した再評価の視点―」『市誌研究ながの』第16号

遠藤公洋　2013「髻山城」『長野県の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版

小柳義男　1992『平出遺跡群発掘調査報告書』牟礼村教委

小柳義男　1994『庚申塚古墳発掘調査報告書』牟礼村教委

小山丈夫　2000「石造文化財」『長野市誌　第二巻　歴史編　原始・古代』

小山丈夫　2000「戦国時代の太田荘」『豊野町の歴史　豊野町誌２』豊野町誌刊行委員会

笹澤　浩・原田勝美・佐藤慶二・小林　孚　1986『前高山窯跡群』牟礼村教委

笹澤　浩・岡田正彦　1969「更埴市城ノ内遺跡」『信濃考古』No.27　長野県考古学会

信濃史料刊行会　1956『信濃史料』第12巻

信濃史料刊行会　1969『信濃史料』補遺巻上

宿野隆史　2000「大本願明照殿地点の調査概要」『長野遺跡群・元善町遺跡・善光寺門前町跡（２）』長野市教委

檀原長則　2010「中野市の中世墓趾と関連する遺跡」『考古学からみた高社山周辺の歴史』しなのき書房

土屋　積・中島英子・鶴田典昭　1997「飯田古屋敷遺跡」「玄照寺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13―小布施町内・中野市内その１・その２―』長野県埋蔵文化財センター

鶴田典昭　1997「牛出古窯遺跡―中世以降の遺構と遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13―小布施町内・中野市内その１・その２―』長野県埋蔵文化財センター

中島英子　1998「対面所遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14―中野市内その３・豊田村内―』長野県埋蔵文化財センター

中野市教委　1994『清水山古窯跡発掘調査報告書』

牟礼村教委　2000『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』

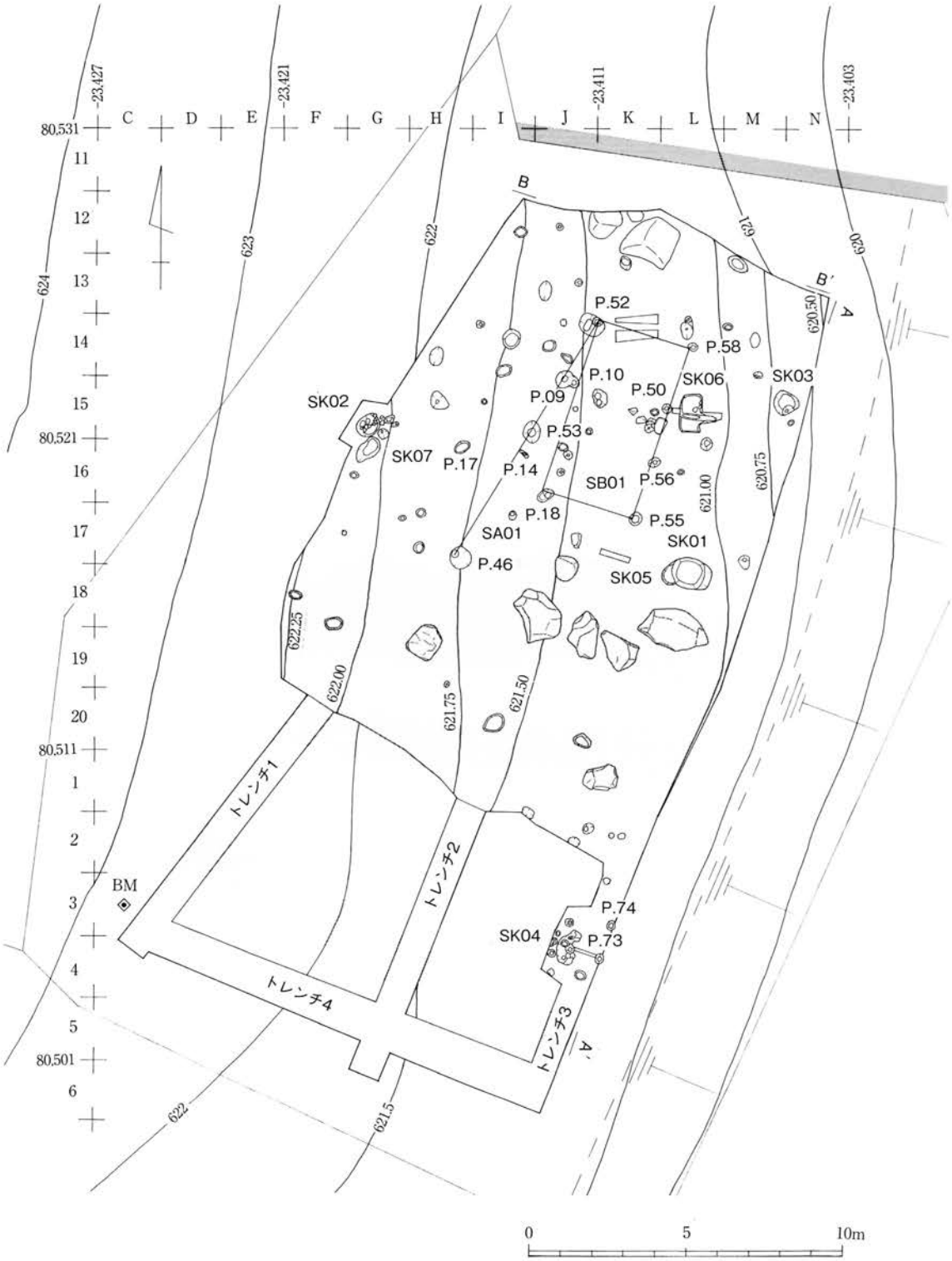
望月董弘　1976「仏教の遺跡と遺物―遺跡」『新版仏教考古学講座　第一巻　総説』雄山閣

矢野恒雄ほか　1997『牟礼村誌』牟礼村

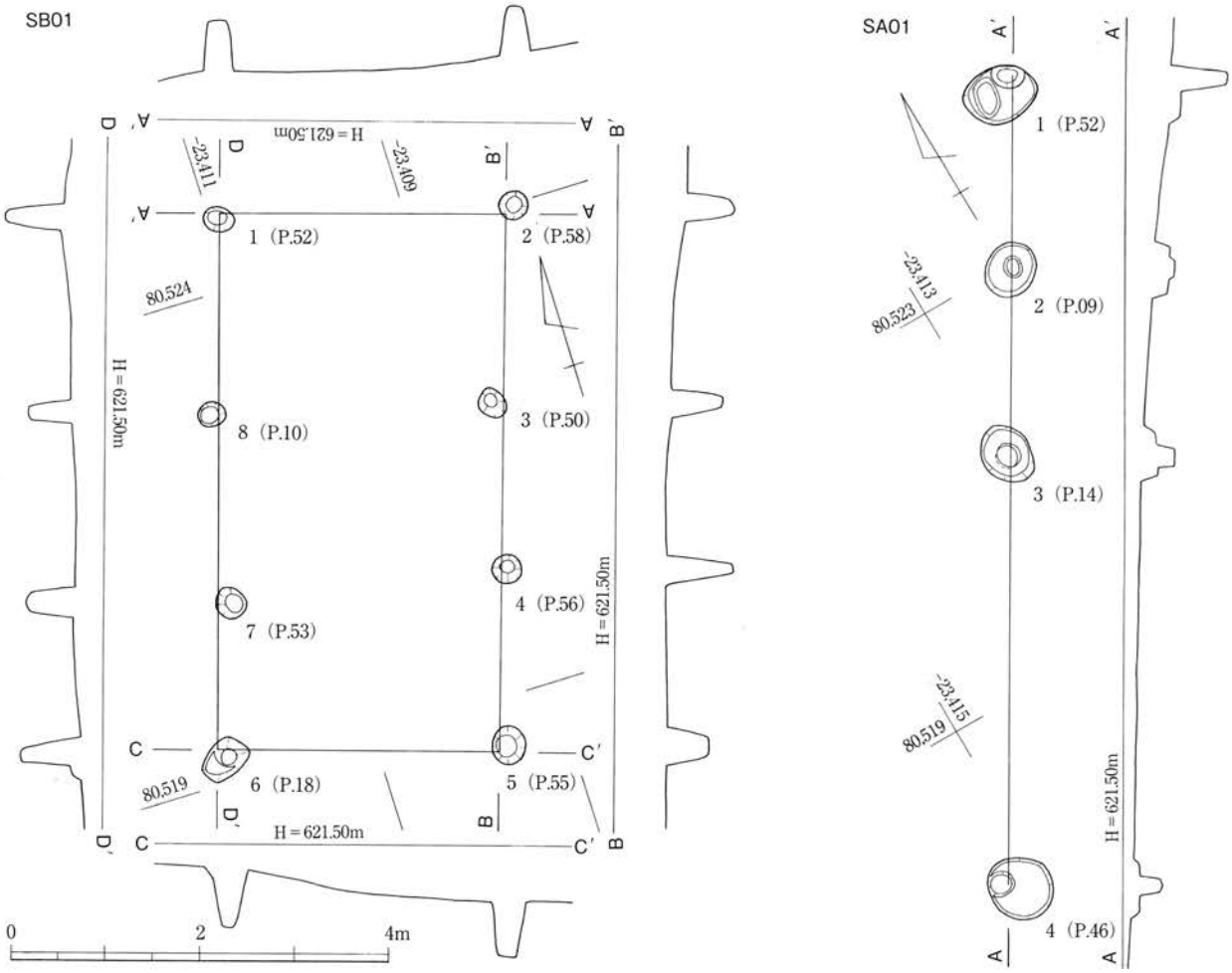
横山かよ子　1998『家岸遺跡』牟礼村教委

吉原佳市　2011『五里原遺跡・吉田宮脇遺跡―市道吉田西条線築造工事に伴なう発掘調査報告書』中野市教委

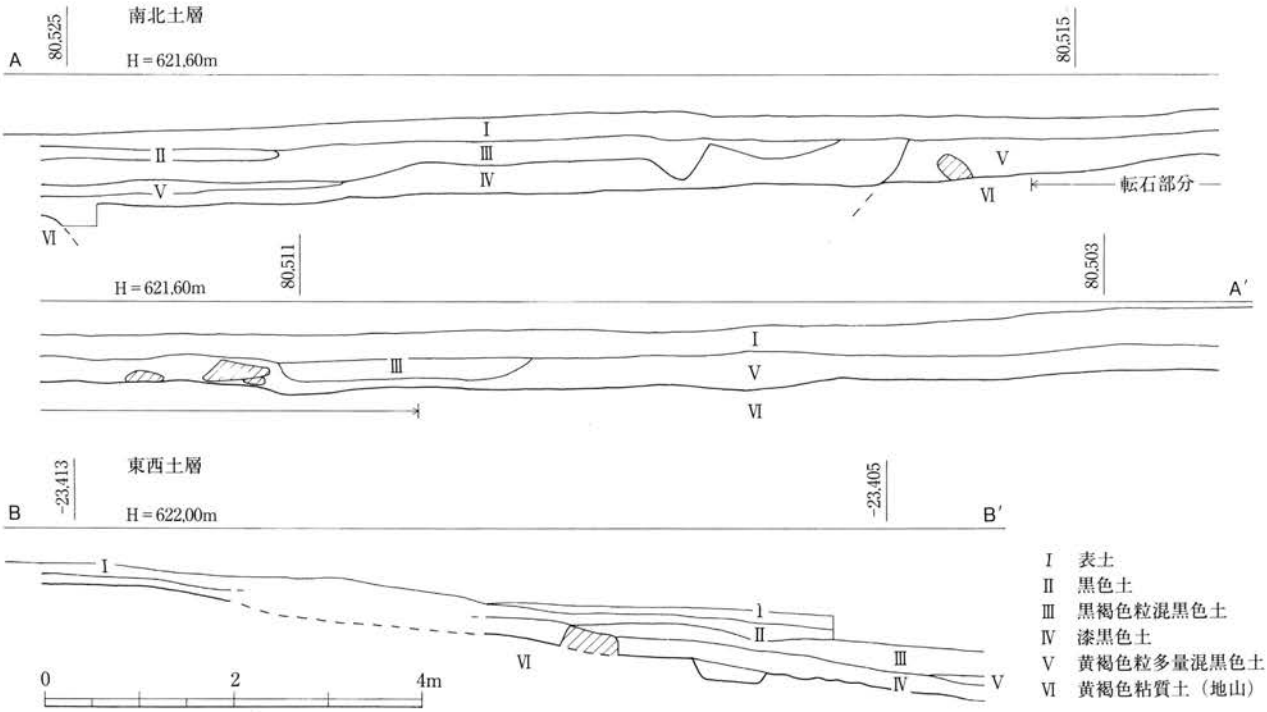
若林　卓　1999「観音平経塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』長野県埋蔵文化財センター



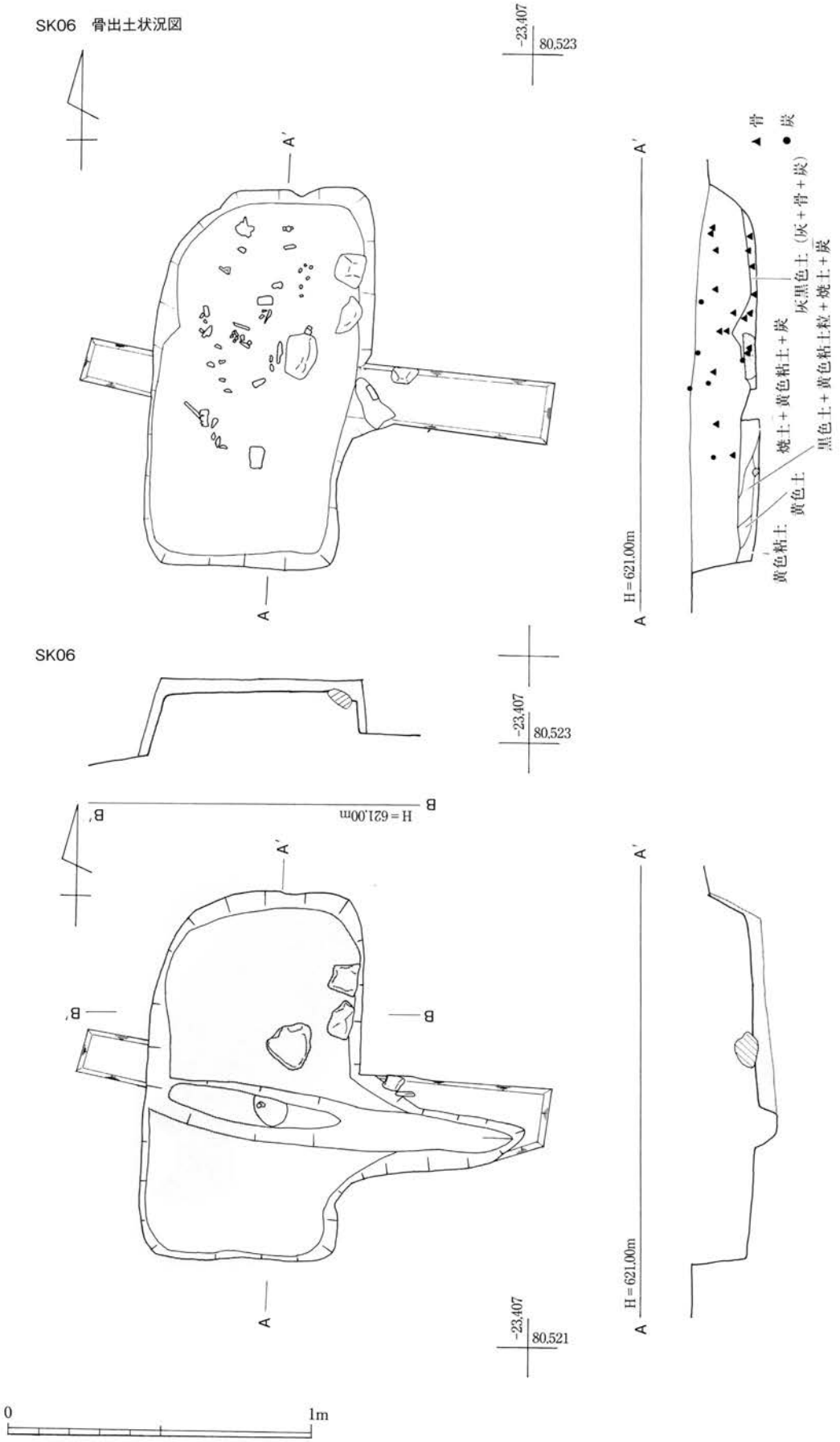
第４図　発掘全体図（1：200）



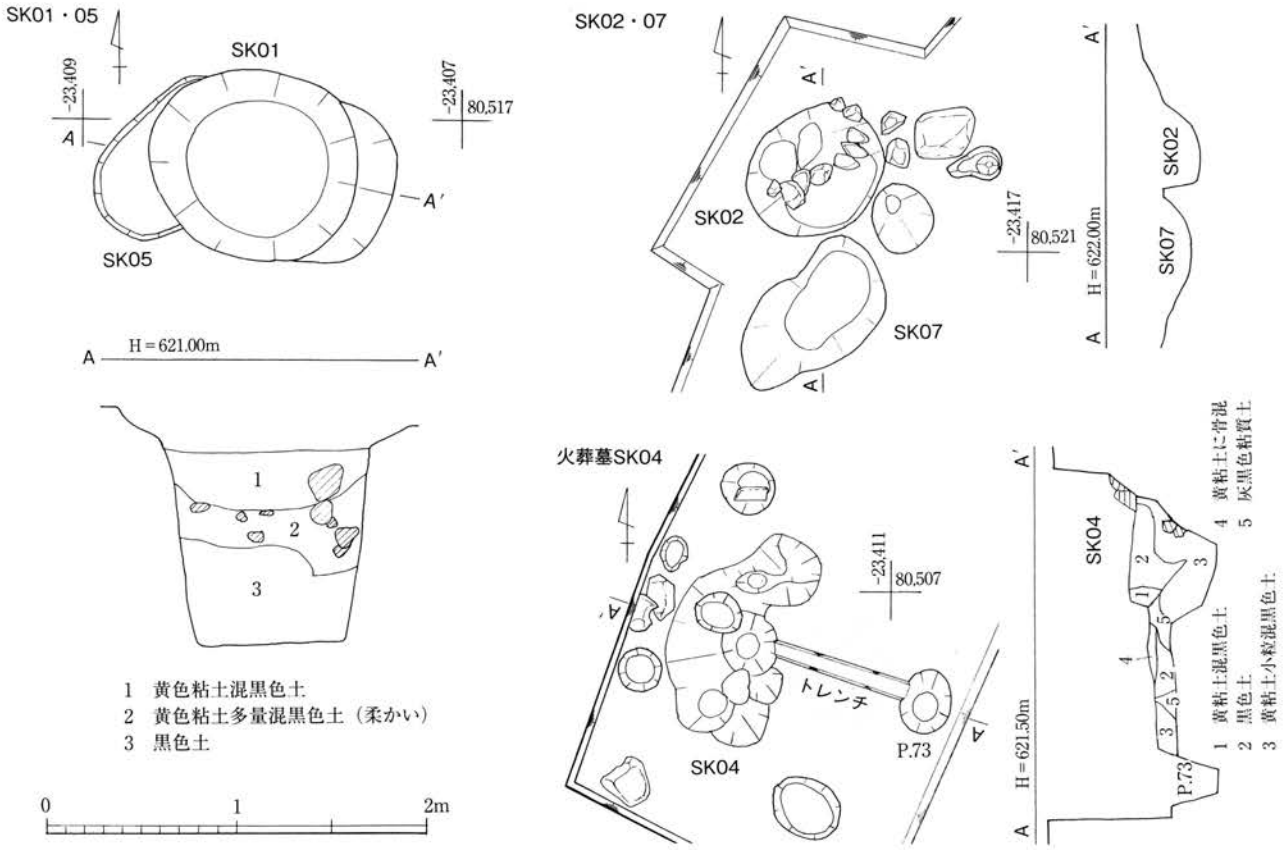
第５図　掘立柱建物 SB01、柵列 SA01（1：80）



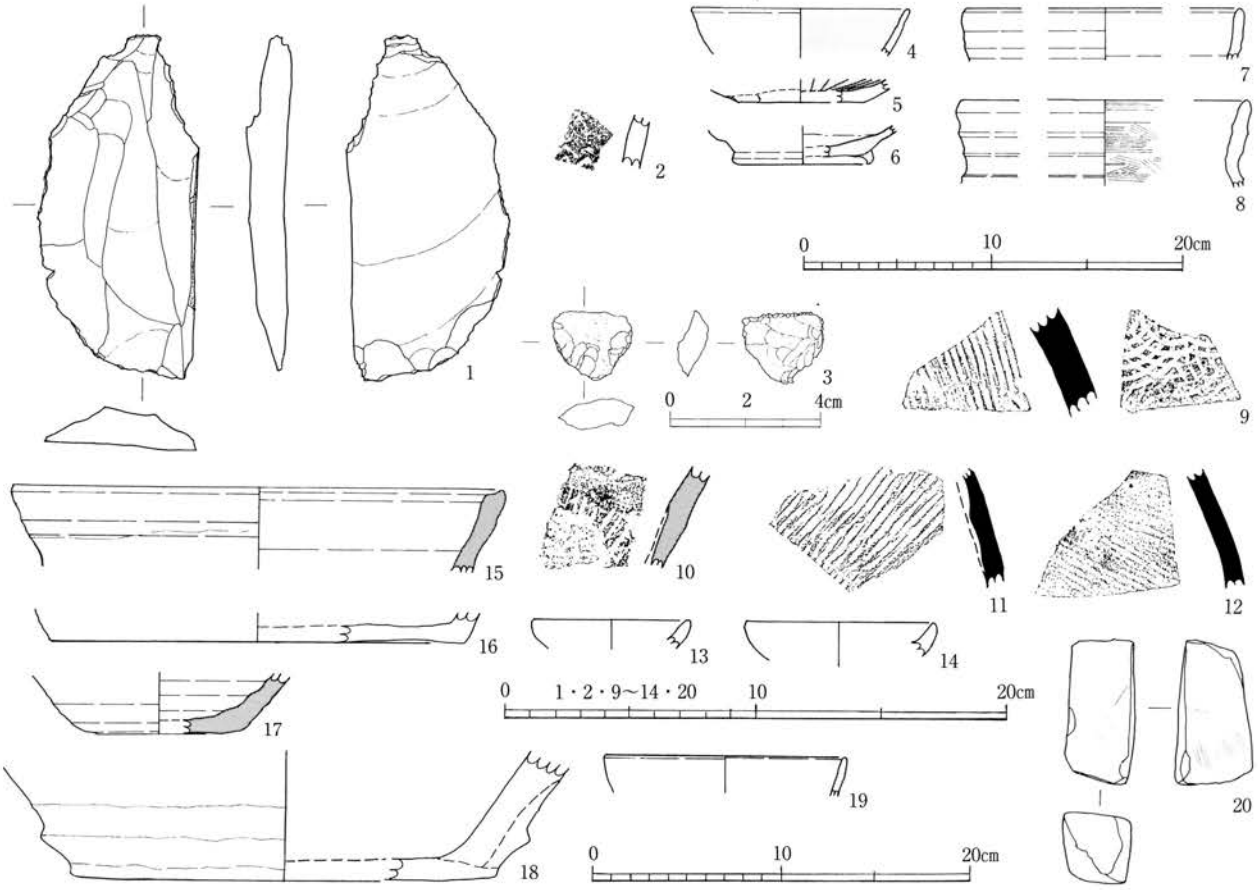
第６図　土層図（1：80）



第７図　火葬施設 SK06発掘図（1：20）



第8図　土坑 SK01・SK05・SK02・SK07、火葬墓 SK04



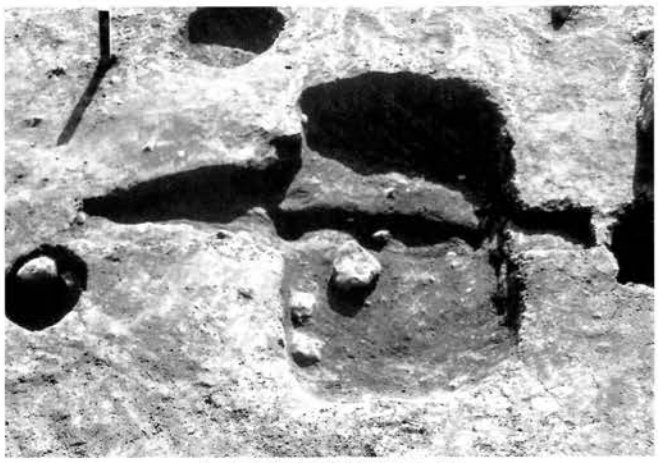
第9図　出土遺物（1：3、1：2、1：4）

1. 遺跡遠景（東より）

2. 調査区全景（北より）

1. 掘立柱建物SB01・ 柵列SA01（北より）

2. 火葬墓SK04（北より）



3. 火葬施設SK06（北より）

4. 土坑SK02（東より）

5. 火葬施設SK06（骨出土状態）

あとがき

平成21年度に飯綱町内で発掘調査を担当した表町遺跡に続いて、芋川氏館跡（第４次）と（伝）願生寺跡について報告書を刊行することができた。いずれも中世から近世または近代に渡る遺跡であり、同時代史料がほとんどなく、云はば伝承によって語られてきた遺跡である。発掘調査では伝承は底辺に置くものの、考古学上の調査を重視した。しかし、芋川氏館跡の上層遺構である再建福正寺については、明治12年前後の３点の史料をほぼ同時代史料として、調査の成果に活用した。史料を利用するにあたっては、いいづな歴史ふれあい館の小柳義男・小山丈夫両氏の助言を受けた。お二人には他にもいくつかの教示を受けた。

発掘調査では検出した遺構の年代比定が欠かせない。木簡などの文字資料が出土すればかなり有益であるが、ほとんどの場合こうした資料に恵まれることはまずないので、多くの場合に指標となる土器などを使用する。表町遺跡や芋川氏館跡の溝や堀など厚い堆積層では層位ごとに出土する遺物とくに陶磁器から、各層の年代比定を行うことは、文献との対比においても必修事項である。特に戦国期から現代まで、多様な土地利用の歴史を刻む芋川氏館跡では、地域史を明らかにする上で極めて有効であり、本報告中にその成果を示した。芋川氏館跡では、一定量の陶磁器に恵まれ、文献と併用して、整地層を含む土層の年代比定をおこなった。肥前陶磁を含む広域流通の陶磁器などは窯跡資料を中心に、一型式30年前後の編年が樹立され、ほぼ全国規模で採用できる。よって、陶磁器の鑑定を長野県埋文センターの市川隆之氏に依頼した。本報告の遺構などの年代比定は市川氏の協力があってのことである。ただし、発掘調査では可能な限り層位を重視し、必要に応じてレベルも含めて取り上げたが、複雑な低湿特有の土層と、たび重なる土地利用もあって、一部に不徹底となり、除外した資料もある。また図面及び観察表作成も、出土状態の検討などとともに行ったため、結果として不徹底となった。再度再構成するにしても、染付などの表現を優先として紙焼きによる旧印刷法を採用したため、それもかなわず、不統一となった。いずれにしても、出土状態とその記録化には相当の作業量となった。現在三次元測量による遺物の出土状態の記録化を佐久市教育委員会や長野県埋文センターなどで実施し成果をあげているので、多層にわたり遺物が出土する調査ではこうした調査法も必要かと思われるが、この場合にも、出土状態の検討は不可欠である。どちらにせよ結論を導くまでには遺物の図化も含めて気の遠くなるような作業量を必要とする。

こうして、表町遺跡では矢筒城下である「まぼろしの表町」を、（伝）願生寺跡では、鳥居川水系ではじめて中世の火葬施設と墓群を明らかにしえた。芋川氏館跡では前回調査の成果と併せて、芋川氏館の規模が確定し、堀のすべてが県内では全例のない障子堀であることがほぼわかった。芋川氏の館防衛が並々ならぬものであったことが知られる。それは甲越の抗争のなかでとった芋川氏の対応策である。同様に今回初めて柵列が検出された。１点の越中瀬戸小皿の出土によって、設置時期が定まり、思いもかけずに、中世から近世過渡期の徳川と上杉抗争の一端を知ることとなり、併せて芋川氏と妙福寺の密接な関係も知ることとなった。また、跡地に建てられた福正寺関連では善光寺地震の関与が考古学的にも実証された。

かように今次調査によって、今まで伝承や史料の一部でしかなかった飯綱町の中世以降の地域史がおぼろげではあるが明らかとなった。

報告書作成にあたり、考古学・歴史学・建築史・民俗学・保存科学・植物学など多くの研究者、平出・田中地区など地元の皆さん、妙福寺住職中殿秀靖氏、研究調査機関や工事施工業者などと、なによりも発掘調査や整理作業に従事した皆さん、時間のかかる印刷方法を採用して下さった（株）信毎書籍の小山義広氏と忍耐強くサポートしてくださった事務局のみなさんに深く感謝申し上げる。

（笹澤　浩）

報告書抄録

書名	芋川氏館跡(第４次)・(伝)願生寺跡
副書名	芋川氏館跡――飯綱町芋川田中公会堂建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
	(伝)願生寺跡――中山間地域等直接支払い事業ため池造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	
編著者名	芋川氏館跡――笹澤　浩　　原田勝美
	(伝)願生寺跡――笹澤　浩　　横山かよ子
編集機関	飯綱町教育委員会
所在地	〒389-1293　長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1　TEL026-253-2511
発行年月日	2014(平成26)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
芋川氏館跡(いもがわしやかたあと)	長野県上水内郡飯綱町大字芋川字中峯前田(ながのけんかみみのちぐんいいづなまちおおあざいもがわあざなかみねまえだ)	20590		36° 46′ 28″	138° 15′ 18″	20090413 ～ 20090630	518.6㎡	公会堂建設
(伝)願生寺跡(でんがんしょうじあと)	長野県上水内郡飯綱町大字平出字上平出1764番地(ながのけんかみみのちぐんいいづなまちおおあざひらいであざかみひらいでばんち)	20590		36° 43′ 31″	138° 14′ 04″	20091001 ～ 20091120	340㎡	ため池造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芋川氏館跡	館跡	古代～近代	芋川氏館跡 東堀－障子堀 柵列 掘立柱建物 井戸 福正寺跡 整地層－第１次・第２次 礎石建物跡 溝　杭列　土坑 その他 杭列、ピット群、廃棄土坑	須恵器・土師器・灰釉陶器 輸入陶磁器 　青磁・白磁・青花 国産陶磁器(15c～近世) 　古瀬戸 瀬戸美濃 肥前 越中瀬戸 　萩 京 常滑 　地方窯 赤塩焼 中世須恵器・珠洲 在地産土器－土師器皿(カワラケ) 内耳鍋 焙烙 火舎 瓦－桟瓦 丸瓦 鬼瓦 石製品－粉挽臼 石鉢 凹石 砥石 五輪塔 建築石材 石筆 石板 石硯 金属製品－小柄 鎹 釘 馬具 金銅製品 銅製品 煙管 耳掻 玩具 銭貨(寛永通宝・熙寧元宝・永楽通宝) 木製品－漆器 長床犂 鍬 曲物 木製硯 杭 鍛冶関連－羽口 鉄滓　砥石	・古代の集落域 ・障子堀、柵列 ・肥前陶器Ⅰ期からの搬入(胎土目積・砂目積) ・越中瀬戸(Ⅰ期)の小皿(柵列の年代比定) ・赤塩焼 ・内耳鍋・焙烙 ・長床犂(一木造り)

要約	・芋川氏館跡は今次調査で東堀の位置が確定し、規模とともにすべてが障子堀で囲まれていたことにより、甲越抗争の中で国境地帯にいる国人芋川氏の性格を知る資料であるとともに東堀外縁に併置された柵列は中世から近世にかけた政治的動向を反映した遺構として注目される。 ・館跡の上層遺構である福正寺跡は善光寺地震で破壊後再建された寺院であるが、寺院や廃寺跡後も含めて土地利用の歴史が明らかとなったことは発掘調査の成果として特筆される。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
(伝)願生寺跡	集落跡	縄文時代		押型文土器・石器	
		平安時代		土師器・須恵器・内黒土器・灰釉陶器	
		中世	掘立柱建物址 柵列、火葬施設、火葬墓	内耳土器・カワラケ・珠洲・瓦質土器・砥石	

要約	・願生寺跡は未検出。しかし、これと関係すると思われる中世墓の一部を検出。願生寺は砦山城と関係があり、芋川氏館跡などとともに甲越抗争史解明の一資料となるものである。

芋川氏館跡（第4次）・（伝）願生寺跡

発行日　平成26年３月31日

発　行　飯綱町教育委員会
上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1

印　刷　信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野市西和田1-30-3